観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入
電　話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一　部　70円

大衆能は6月20日
能楽協会名古屋支部主催
62年度演能日程

能楽協会名古屋支部主催による昭和六十二年度の演能日程、および内容は次のとおりである。なお大衆能は文化講堂で開催、また毎年八月の第一土曜日に行われる名古屋薪能は、本年は八月第二土曜日に催される。

・三月十四日（土）「二部制狂言会」名古屋市芸術創造センター
・六月五日（金）「熱田まつり奉納能」、能三番、狂言、囃子、番ほか仕舞
・六月二十日（土）「大衆能」愛知県文化講堂で開催。能三番、狂言、囃子、仕舞。
・八月八日（土）「名古屋薪能」熱田神宮神楽殿前・特設舞台、能三番、狂言、囃子、仕舞。
・十二月六日（日）「歳末助け合い協賛能」観世、宝生、金剛、喜多流による能四番、狂言、金春流仕舞など。

このほか、愛知県芸術祭に参加公演する。日程は未定。

日本芸術院会員に
笛方　藤田大五郎氏

能楽笛方・藤田大五郎氏は、このたび日本芸術院会員に選任された。

氏は大正四年生れ、大正十五年十二世一噌又六郎に入門師事、昭和四年初舞台、三十一年芸術祭奨励賞、四十六年芸術祭大賞。東京芸術大学音楽部邦楽科非常勤講師能楽三役養成会教務を歴任。四十六年重要無形文化財保持者（人間国宝）。社団法人能楽協会理事、日本能楽会理事を歴任。

3日支部謡初式
能楽殿施設の増改修が検討課題に

能楽協会名古屋支部は一月三日午前十一時から恒例の新年謡初会を熱田神宮能楽殿で挙行。支部所属楽師約五十人が参集。内藤支部長の発声で〝四海波〟を謡い、昭和六十二年の新春を祝した。

ひきつづき、楽屋で内藤支部長、塙谷晴男総務部長の新役員紹介があり、さっについで、能楽協会および支部関係の報告が行われた。

報告事項の中では、愛知県が建設計画中の名古屋・栄の新文化会館に能楽堂を設置するよう名古屋支部として昨年十月陳情を行っていたが、すでに設計の段階に入っており、この要望は受け入れなかった。一方、熱田神宮能楽殿の諸施設、設備の増改築として、楽屋施設、見所の拡充、ロビーの拡大洗面所の改築などが求められ、自力での増改修が必要であり、資金造成の必要が強調され、協会名古屋支部の活動に一層の協力が要請された。

大阪文化功労市民表彰
観世流　山本勝一師受賞

観世流シテ方・山本勝一師はこのたび大阪文化功労・市民表彰を受賞、十一月二十五日大島大阪市長臨席のもとに表彰式が挙行された。

山本氏の受賞理由は、能楽の研さんと重厚なる芸風および後継者の育成等、能楽界にもたらせた数多くの功績によるものである。ちなみに大阪文化功労の受賞は、文筆、画壇、舞踊、邦楽、洋楽等各界の十一名の方々である。写真は表彰状をうける山本勝一氏。（写真・三宅晟介氏提供）

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔1月〕
15日（祝）名古屋清韻会能（来場歓迎）（番組⑥面）
18日（日）正風会20周年記念大会（来場歓迎）（番組⑥面）

〔2月〕
1日（日）宝生会定式能（有料）（番組⑥面）
8日（日）観世会定式能（有料）（番組⑥面）
15日（日）九皐会定期能（有料）
21日（土）青陽会定期能（有料）
22日（日）春蔵会大会（来場歓迎）

〔3月〕
8日（日）名雅会（来場歓迎）
15日（日）名古屋梅猶会（有料）
21日（祭）桐葉会（来場歓迎）
22日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）
29日（日）壷泉会（来場歓迎）

〔4月〕
12日（日）観世会定式能（有料）
18日（土）青陽会定期能（有料）
19日（日）邦謡会（来場歓迎）
25日（土）名古屋猶風会（来場歓迎）
29日（祭）幸友会春の会（来場歓迎）

〔5月〕
3日（祭）芳扇会（来場歓迎）
5日（祭）名古屋巽会（来場歓迎）
9日（土）野村四郎の会（有料）
16日（土）名古屋九皐会（有料）
17日（日）やるまい会（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

中日名匠鑑賞能
3月28日　中日劇場
観世流能3番を上演

「中日名匠鑑賞能」（中日新聞本社主催）は、三月二十八日（土）名古屋・栄の中日劇場で能三番が上演される。

能「小督」替装東（梅若盛義）「花筐」笹之伝（観世元正）「大江山」替之型（観世元昭）狂言「棒しばり」（茂山千五郎）午後一時開演。

62年1月・2月　放送予定

〔1月〕
18日（日）宝生流「野守」近藤礼
25日（日）観世流「春日竜神」浦田保利

◆NHK教育テレビ（午前9時～10時）
1月15日（祝）狂言「宗論」野村万作・茂山千五郎（NHK能楽鑑賞会から）

〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
1日（日）金春流「海人」金春欣三
8日（日）観世流「弱法師」観世銕之丞
15日（日）宝生流「安宅」大坪十喜雄
22日（日）観世流「知章」「花月」五木田武計　遠藤六郎

◆NHK教育テレビ（午前9時～10時30分）
2月11日（祝）能「船弁慶」重キ前後替・早装東シテ観世元昭、ワキ森茂好

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

謹賀新年

熱田神宮能楽殿運営委員会

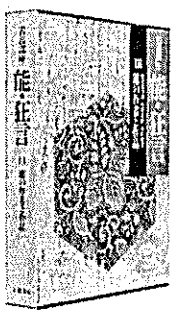
委員長　熱田神宮権宮司　長谷晴男
委員　熱田神宮総務部長　岡地幸男
同　熱田神宮財務部長　竹内正憲
同　岡谷不動産株式会社取締役支配人　松井清
同　月見ケ丘開発株式会社社長　髙橋半次郎
同　シテ方　観世流　柴田初太郎
同　シテ方　観世流　殿島修二
同　太鼓方　観世流　鬼頭八郎
同　狂言方　和泉流　井上松次郎
同　ワキ方　高安流　西村欽也
同　シテ方　宝生流　内藤泰二
同　シテ方　観世流　梅田邦久
同　小鼓方　幸清流　福井啓次郎
同　笛方　藤田流　藤田六郎兵衛
同　大鼓方　大倉流　筧鉱一

岩波講座
能・狂言
全七巻・別巻一
横道萬里雄・小山弘志・表章編

この半世紀の研究成果を集成して
能と狂言の全体像を明らかにする

近年急速に進展している能楽研究の成果を、その中枢を担ってきた諸先生方の共同研究によって集大成しつつ、さまざまな面から光を当てて能と狂言の全体像を照らしだし、能楽全般にわたる基礎知識を提供する戦後初めての総合講座。能楽の歴史や台本研究の最新の成果を示すとともに、現代に生きる芸能として、演劇・音楽などの面からも十分に本質を解明する。また現行曲の大半について、その舞台の姿・特色を明らかにした鑑賞案内にも二巻をあてた。

第一回＊発売
III 能の作者と作品
横道萬里雄・西野春雄・羽田昶著
三九四頁・定価三四〇〇円
能本を形づくる諸要素を分析・概観し、観阿弥以前の古作から世阿弥・禅竹・信光等を経て現代に至る能作の流れを、時代別・作者別に解明する。



【続刊】
I 能楽の歴史　II 能楽の伝書と芸論　IV 能の構造と技法　V 狂言の世界　VI 能鑑賞案内　VII 狂言鑑賞案内　別巻 能楽図説

予約募集（申込締切）3月31日
▼本講座は全巻予約申し込みの方にのみお頒ちいたします（内容見本進呈）
▼第二回・第I巻は3月25日発売。A5判変型・上製函入・平均三六〇頁
東京都千代田区一ツ橋二-五-五
〒101 振替（東京）六-二六二四〇
岩波書店

青雅日記 ㊽

来る年

えと文　二井栄逸

一月一日

一九八七年が爽やかに明けわたった。

ぎんねずみの空に虹色の光芒を放って静かにのぼる初日を仰いで、人々は今年こそは、と、意欲をもやす。

今年も人々は未知の世界を追い、理想の世界をめざして、二度とめぐってこない新しい節目のスタートラインに立ったことであろう。

行く年を心置きなく送って、今年は志摩の海辺の宿で来る年を迎えた。

潮騒と軒を打つ風の音、海面にはところどころ波がしらが立っていたが、爽やかな良い元朝である。

太平洋を背に島（答島）は、長く裾を引いて海面に浮んでいる。海は濃い藍色で占められているが、島の手前あたりから一幅ずっと遠くまであじさい色になった。

潮騒をききながら海をながめていたら、伝承の重々しさと、きびしさが心の中にずしんと深く落ちてきた。

喜多流が今年で丁度建流四百年になるのも奇しきえにしである。

喜多流の流祖である北七太夫長能は武士であったが、申楽能の天才とまで謳われた大夫でもあって、七大夫の名は豊臣秀吉によってつけられた由緒ある名である。

幼名は亀丸と呼ばれていたが大阪城内の演能の節、豊臣秀吉の前で「羽衣」を演じ、

〃まだ七つか、七つにしてもなんと大夫だ〃

と、秀吉を驚かせ、その言葉からほどなく七つの大夫、としてひろまり、七太夫となった。

喜多流建流の年は秀吉の前で羽衣を演じた年と定めてある。

建流四百年の推移は次のようである。

初代　七太夫長能
第二世　十太夫当能
第三世　七太夫宗能
第四世　七太夫長寛
第五世　十太夫長経
第六世　七太夫成能
第七世　十太夫定能
第八世　十太夫親能
第九世　七太夫古能
第一〇世　十太夫盈親
第十一世　七太夫長景
第十二世　六平太能勢
第十三世　勝吉
第十四世　六平太能心
第十五世　実
第十六世六平太（長世）（現）

北政所の近習であった流祖・七太夫は、ねねの願いをうけて大阪城を脱出、真田幸村、片桐且元、柳生宗矩、坂崎出羽守、毛利勝元らと、激動の青春の日々を送ったが、その史実にまつわるドラマを北七太夫夏の陣として今度NHKエンタープライズ部長・柳沢新治氏が歴史小説を出版された。

これも建流四百年を迎えた喜多流との奇しき因縁と言わざるを得ない。

能「俊寛」を上演

東海、北陸4県で開催

世阿弥「俊寛」（野口敦弘）狂言（シテ野村万作）謡（謡・藤井徳三、太鼓は小寺俊三、鬼頭喜太郎両氏が交替で勤める）

謹賀新年

観世元正
東京都渋谷区恵比寿南一―二十一―十四

社団法人 鐄仙会
観世雅雪
観世鐄之亟
観世栄夫
観世暁夫
〒107 東京都港区南青山四―二一―二九

中日文化センター特別教室
観昭会
昭門会
観世元昭

財団法人 梅若研能会
橘香会
梅若万三郎

幽謡会
片山九郎右衛門
井上嘉久

幽花会
片山慶次郎
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一 電話 四九二―五三〇二番

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文藏
大阪市東区上町二番地

梅猶会
猶諷会
梅若盛義

山本観衛会
山本勝一
〒540 大阪市東区徳井町一丁目二〇 電話〇六（九四二）四〇七〇番

名古屋淡交会
橋岡慈観
稲沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方 電話〈〇五八七〉㉜三三八八番

鳳鳴会
武田志房

久田観正会
久田徹二
大倉流小鼓 松月会 久田舜一郎

藤井久雄
徳三
楽人
完治
神戸市中央区熊内町二―一―二〇 電話（三二一）五一四四番

武田謡楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

名古屋観世九皐会
観世喜之
有賀滋子
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙
高橋瞭一
宮本正彦

財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三―五―十三 電話（〇四六七）㉒五五五七

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三 電話 八三二―三一八五 西宮市甲陽園目神山町一の一七八 電話（〇七九八）八八〇二番

松和会
中村和男
〒36 各務原市那加桜町2丁目15番地 電話〈〇五八三〉㉜二七九四番

邦謡会
梅田邦久
須部清甫
沢一政
今沢美和
本田勲
安藤勝朗
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五 電話〈〇五二〉（八四一）四六三三番

山本眞賀
豊中市本町六丁目一〇―六

初陽会
武田宗和

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五 山田紀子方

竹翠会 若松宏守
〒662 西宮市平松町四―九 電話（〇七九八）二三―〇六〇一

大西智久
〒560 豊中市北桜塚2―10―3

毎日文化センター
謡曲教室
風韻会
殿島修二

一謡会 河村鉦二
叶石会 河村総一郎
河村大
名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話（〇五二）（八四六）〇八〇八

佐野正治
〒921 金沢市泉野町四丁目十二―十四

能「俊寛」を上演

東海、北陸4県で開催 62年度青少年芸術劇場

昭和六十二年度文化庁主催の巡回公演として青少年芸術劇場公演は、今夏七月、八月にわたり、北陸地方を中心に四公演が行われる。

▽七月三十一日（金）福井県・福井市文化会館

▽八月一日（土）岐阜県・高山市民会館

▽八月二日（日）三重県・名張市青少年センター

▽八月四日（火）静岡県・富士宮市民文化会館

演目は、能「俊寛」（シテ観世銕之丞）、狂言「柑子」（佐藤友彦、井上礼之助）

観能独語

哀れさと華麗さと 壺泉会の「善知鳥」に寄せて

昨年十二月十四日、熱田で壺泉会能を見ました。泉嘉夫が「善知鳥」を熱演しました。

この曲、最近あちこちで上演され、一種の人気曲になった観があります。この暗い、陰惨な救いのないドラマがどうして流行するのか。流行というのは伝染病のようなもので、原因はわからないことが多いのですが、強いて云えばこの曲の暗さ、救いのなさに、却ってリアルに近代感覚に訴えかけるものがあるからではないでしょうか。主人公が高貴な女性ではなく、下賤な猟師、最底辺の賤民であるところも面白い。積極的な能役者が、意欲をそそられるのも無理はないでしょう。

しかし見る方の側からすれば演者が力むほど面白い能ではないようです。それだけに難しい能かも知れません。後半のクセカケリ、キリのあたりが、見どころ、演どころとされていますが、ここで急にハリキッても、ちょっと手遅れの感がしないでもない。技巧本位の面白さだけを楽しむのなら、それでいいですが、実はそれまでの段どりがむつかしい。下手をするとだれます。私はカケリよりも、前場のシテとワキの出合いと別れの方に興味があります。というよりも、ここが一曲中最も情趣の深い場面ではないかと思います。

老人の幽霊が旅僧に外の浜の我が家をたずねて、蓑、笠を手向けてくれとたのむ。片袖をちぎって身のあかしとして渡し、立ち去る僧を見送って幾度となく泣きます。彼はどうして泣くのでしょうか。遠い妻子への愛着か、殺した鳥類、特にうとう・やすかたへの哀みか、またはわが身の業の深さへの悔恨か、おそらくはそれらが一つになって、老人を泣かすのでしょう。これは後場での告白で明らかになることで、ここでは明らかにされていませんが、この老人の嘆きが一様の涙ではないことだけはわかります。また、わからさねばなりますまい。私が度々見た「善知鳥」の所演では、この嘆きの深さが十分に表現されているとは思えませんでした。見所の多くも、テキストを読み舞台も見て、ストーリーがわかり過ぎているだけに、案外この場を軽く見過ごしていられるのではありませんか。

この場面を強く印象づけるためには、シテは蓑放れから身体中に、涙をいっぱいためていなければなりますまい。坂元雪鳥は、別れる時の、同時に後向きになる二人の姿勢、角度にまで注文をつけていたように記憶しますが、ワキの僧も簡単に片袖を受取るだけでなく、意味ありげな老人の言動に、それと察するまでもなくとも、胸打たれるものがなければなりますまい。それでこそこの場は生き、見所の感動をもさそうのです。私が見た範囲では、故桜間道雄が、晩年東京の宝生能楽堂で見せた「善知鳥」が、この場の情趣を生かし切った唯一の好演でした。

カケリ、キリは誰しも注目するところです。眠っていた見所も目を覚まして緊張します。シテ方はもちろん、ここぞとばかり腕をふるいますが、多くの場合、大同小異の気がします。たしかに絢爛たる型の連続です。ある評者は「面白く美しい」といいましたが、それだけに演者にはやり甲斐があるのでしょう。しかし、面白く美しいだけではダメなのであって、陰惨なドラマの終末は、あくまで暗く悲しく痛ましいピリオドが打たれねばなりません（宝塚のフィナーレとは違います）

面白く美しい型が闇の中にきらめく閃光のように次々に消えたあとは、一層強く闇の深さがきわ立つようでなければなりますまい。凡手のよくするところではないと思いますが、哀れで静かな序曲の別れと、終局の恐るべき華麗さと、この対照の妙が「善知鳥」の生命とはいえないでしょうか。

こんどの舞台について、ひと言書きそえますと、泉としてはさきに大阪大槻能楽堂で見せた「野宮」の方がよかったと思います。そこでは彼の個性と主張がよりハッキリとうかがえたように思いますので。（M）

『野村万作）二調（謡・藤井雅三、太鼓は小寺俊三、鬼頭喜太郎両氏が交替で勤める）

青陽会初回2月11日

青陽会の昭和六十二年度第一回は、二月二十一日（土）熱田神宮能楽殿で開催される。

能「実盛」（シテ梅田邦久）「百万」（シテ今沢美和）「鞍馬天狗」シ（テ高橋眞一）狂言「柑子」（佐藤友彦、井上礼之助）

これも建流四百年を迎えた誇多流との寄しき因縁と言わざるを得ない。

謹賀新年

誠交会　奥善助　東京都世田谷区三軒茶屋二―一〇―二二　電話（〇三）四二二―二六三七番

大垣浦声会　稽古場　大垣市竹島町善念寺　住所　京都市左京区下鴨芝本町五八　浦田保利

名古屋修諷会　梅若修一

名古屋観生会　野村四郎　東京都杉並区永福四―三〇―一〇　電話〈〇三〉三二一―五一二九　名古屋稽古場　名古屋市千種区日和町四ノ一〇　小嶋方　電話七五一―一八八〇番

上田観正会能楽堂　上田観正会　上田貴弘　神戸市長田区大塚町二丁目一ノ一四　電話〈〇七八〉六九一―五四四九番

洗心会　奥村富久子　〒606　京都市左京区永観堂西町二〇　電話〇五（七七一）〇七六七番

笙月会　中川雅章　長浜市地福寺町八ノ二九　電話〈〇五二〉〇六三〇番

春鶯会　梅若善高　豊中市新千里南町三丁目18―12　電話（〇六）八三一―七八五四

井上嘉久　〒603　京都市北区紫野下鳥田町六

武田志房

久田観世会　久田舜一郎　徹二　大倉流小鼓松月会　久田舜一郎　都諷会　前野都子　松謡会　松山幸親　〒462　名古屋市北区東水切町四ノ四三　電話〈〇五二〉九八一―三六四三番

水雲会　水藤元三

下田雄三　大阪市東区高麗橋五三　雄諷会中部地区連合会　名古屋和諷会　一宮竹石会　岐阜花諷会　下呂雄諷会　萩原雄諷会　高山雄諷会　倭文之屋社中

松音会　泉泰孝　東京都杉並区宮前四―一九―四　電話〇三（三三二）八二八〇番

芳韻会　稲生芳雄　半田市船入町三十一　電話〇五六九㉑〇八一五

猶恵会　熊沢恵美子　名古屋市名東区平和ケ丘3―76　日車マンション四〇四

加賀敏彦　名古屋市守山区森孝新田字乙98の44　電話〈〇五二〉（七七一）八九四五番

中日文化センター　謡曲・仕舞教室　名古屋（栄）岐阜・四日市

翠謡会　生駒里翠　名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503　電話〈〇五二〉七〇三―五七一七番

名古屋市昭和区山里町一〇三　電話八三二―三一八五　西宮市甲陽園目神山町一の一七八　電話八〇七九八〇㉗二四五八

松和会　中村稲男　各務原市那加桜町2丁目15番地　電話〈〇五八三〉㉜二七九四番

重陽会　菊池重郷　犬山市犬山字相生五九―一六　電話〈〇五六八〉㉑四五〇一番

緑名会　田中武　〒488　尾張旭市城山町三ッ池六一九八　電話〈〇五六一五〉③三三〇四番

幸謡会　近藤幸江　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話〈〇五六四〉㉑二五二九

清諷会　今村嘉勇　岩倉市東新町下境52―401　電話〈〇五八七〉㉗七二三八

観修会　祖父江修一　多治見市日ノ出町2丁目　電話〈〇五七二〉㉓三六五六

宝生英雄　宝生英照

名古屋巽会　辰巳孝

雙雲会（たいうんかい）　内藤泰二

倉本雅　神戸市東灘区田中町一―13―26　本山アーバンライフ四〇一号　電話〇七八（四四一）五四六五番

河村大　名古屋市昭和区前山町一丁目二三　（〒466）

佐野正治　〒931　金沢市泉野町四丁目十二―十四

佐野由於　〒141　東京都品川区大崎五丁目一の四　五反田南ハイツ一〇〇三

正風会　衣斐正宜

衣斐正宜後援会　〒466　名古屋市昭和区御器所3―23―19　御器所パークマンション802号

宝生流嘉宝会　鬼頭嘉男　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

吉田俊彦

司宝会　佐藤耕司　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅二三〇　電話〈〇五二〉七三七二

金剛厳　金剛永謹

豊嶋能の会　豊嶋春会　豊嶋三千春

菊扇会　後援会　廣田泰三　泰能

春夏秋冬

―伝統の佳味、新運動の深浅―

日本の独自の芸術において、美と非美、芸術と非芸術とを分つものは、結局それ（注、無心の境地、芸術への専心が絶対者の帰依に等しい境地の有無、世阿弥の万能箱一心、無心無風の位の存否）なのである（〈日本の芸術についての一視点〉、哲学者谷川徹三）

きびしい伝統を守って来ている芸術〈能〉の世界にも新しい境をきりひらく可能性が考えられないではない。それを現実の問題として考えさせられたことがある（以下中略、「真の会」のギリシャ悲劇「アガメムノン」についての考察）。しかしそうなると前の世界が動の世界になってしまう（〈能の美しさ〉、同氏）

× × ×

六十一年の回顧。

名古屋は例年のように多事多彩であった。しかし六十年の春頃から今までとはちがう感触を持った。それは〈熱田〉以外の新運動である。いや〈熱田〉でも新作・雪女（梅田邦久、昭六〇）、能による舞台詩・半獣神の午後（木村太郎詩、泉嘉夫作曲作舞、シテ大槻文蔵、同）や邦楽対談があったが、〈熱田〉の外で広い分野の〈新運動〉が行われた。新様式以外に賛助・解説・鑑賞（ハヤシ）・放送（後記）、夜能など。これらには各方面の好意と援助があったと思う。しかし私には一長一短の感を強く持った。即効を求めるのは早急であろうし、ゆっくりとした態度も必要であろう。しかもそう思いながらも、その視点に一抹の不安と危惧をいだかざるを得ない。

例えば隅田川・善知鳥（梅田邦久、前曲は昭六〇）・安達原・半蔀（久田徹二、同）・釣狐（野村又三郎）の新様式がそうである。片や能の解説はよいと思った。「[illegible]」（茂山千之丞・千五郎）おもしろく、又彦市ばなしを正義氏が結びを大きくおさめてよし。松脂は珍し。

付、千五郎氏は六十一年度観世寿夫賞をうけられる。

× × ×

名古屋勢では、内藤泰二氏の山姥が六十年の実盛に続いて好演、能頭におきたい。梅田邦久氏の三曲独吟はきかず。狂言の方は姨捨の語り（井上松次郎）が最高。三人片輪（又三郎・井上礼之助・松次郎・佐藤友彦）・栗焼（大野弘之・友彦）・墨塗（松・弘・井上祐一）など印象に残る。近年共同社・やるまい会・和泉会の三つの会に鶴舞座狂言会が加わって四者併存、愛好者の会も大蔵なごや会・和泉流合同狂言会・也留舞会に鶴舞座研究会の四者併立となる。狂言界も多彩になる。

一中心である「能と狂言に親しむ会」（梅田邦久・藤田六郎兵衛主宰）とは新運動と古典鑑賞の両方を目指すらしいけれど今はあの双頭の鷲よりもむしろ古典（古曲）一途にその紹介、またシテ方五流の能の上演など名古屋を豊かにする運動に専一であることが大切なのではないか。古典の約束と深さに謙虚であることをよくよくわきまえていただきたい。東西の間で目まぐるしい試演の吹きだまりに名古屋をさせたくない。戦後二度目の充実を崩したくない。もちろんそこには欠けたところもあるにはあるが。

それが新時代に際会して様変り、多様性を帯びて変貌しようとしている。万事杞憂ならばよい。

六十二年のよき展開に期待大

× × ×

昨年は宝生流が宝生九郎氏十三回忌追善能と名古屋宝生会三十周年記念能を催す。宝生英雄氏は追善に姨捨を手向け、記念能には小鍛冶・前を舞う。英雄氏の姨捨は東京・大阪・名古屋・金沢の四舞台で舞われた由。

狂言では野村又三郎氏受賞記念に釣狐を演じ、和泉会では和泉元弥君の文部大臣特別表彰記念の狂言会を開いて嵐山の替問（かえあい）に家元元秀親子四人が出演する。めでたし。

× × ×

演能は、観世喜之氏の活躍が目立つ。清経・恋之音取、杜若半蔀など。それと巻絹（観世元正、元正氏の素謡正尊はきかず）・小鍛冶（観世元昭）・三井寺（観世銕之丞）・井筒（片山九郎右衛門）・姨捨（先述、宝生英雄）・紅葉狩（金春晃実〈てるちか〉）など佳演に挙げたい（船弁慶・武田志房〈ゆきふさ〉は期待したがみず）。観世清和氏は堅実な邯鄲よりも凛々しく清純な千寿を。宝生英照氏は清経・音取を平家の公達らしく着実に舞った。なお姨捨と清経音取は名古屋宝生会の大きな記録となろう。

狂言は磁石（大蔵弥太郎）・蝸牛（茂山千五郎）・朝比奈（茂山千之丞）・千五郎）・千五郎氏の三曲独吟はきかず。狂言の方は姨捨の語り（井上松次郎）が最高。三人片輪（又三郎・井上礼之助・松次郎・佐藤友彦）・墨塗（松・弘・井上祐一）など印象に残る。近年共同社・やるまい会・和泉会の三つの会に鶴舞座狂言会が加わって四者併存、愛好者の会も大蔵なごや会・和泉流合同狂言会・也留舞会に鶴舞座研究会の四者併立となる。狂言界も多彩になる。

因みに佐藤秀雄氏（友彦氏亡父）追善狂言会が盛大に行われた。また野村信行君は（又三郎息）元正氏の翁で三番叟を披く（東京は銕之丞・翁で）。

共同社に少しく触れたいが別記。

× × ×

放送・NHK。十二月勧進帳独吟（野口兼資氏、正月三日のFMで再放送）が圧巻。従来と企画が少しく変って幅の広さができた。「能の現状」（増田正造）は二回に、また狂言も取り上げてほしかった。橋弁慶（金剛永謹〈ひさのり〉）。湯谷（粟谷新太郎）・道成寺（橋岡久馬）はよかったし、茂山千作・喜多実両氏をしのぶ放送（以上テレビ）もゆかし。「YOU・いま古典芸能がおもしろい」（藤田六郎兵衛・ゲスト、十二月）は低調。紙幅の都合で本のことは次号で。

（野村広二）

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話(052)111-3137

◆霜月の舞台から◆

一山が締った（一時間35分内狂言27分）。

「悪太郎」　シテ悪太郎（松次郎）が幕を放れた途端に拍手

金剛流
周星会・名古屋
周星会・岐阜
吉川周子
名古屋市千種区西崎町三―六
電話〈(052)〉七六一―二二五七

金春信高
金春安明
〒167 東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話〇三（三三一）二五七一番

金春欣三
東京都杉並区成田東四丁目35―20
電話〇三（三一五）七三八二番

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三八六）二六四一番

春敲会
金春晃実
廣瀬瑞弘
〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三―二四
電話〇五二―八四一―四七四五

名古屋金春会
林鉄郎
近藤修彦
渡部道三

喜多実
東京都練馬区中村南[illegible]
電話〇九八〇〇七七二

桂

大阪喜多会
和調会
和島富太郎
〒665 宝塚市宝梅一丁目12―1
電話（〇七九七）(71)八六三〇

伊勢金春会
中村富次
伊勢市宮町一―一四―一七
電話〈(0596)〉(28)二四五六番

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電話（〇五九八）二三―〇二一六

長田驍後援会
〒514-22 津市高野尾町三三五―四六
電話〈(059)〉(36)〇六九七番

喜多流
山本才
大和郡山市新町一一一九
奈良高専矢田宿舎二六
電話〈(0743)〉(6)一五九〇番

高安会
西村欽也
高安勝久
飯富雅介
杉江元

福王茂十郎
〒662 西宮市名次町六番十二号
電話〈(0798)〉(25)〇七七二

前川光隆
前川光長

宝生閑
〒176 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話 〇三（九七二）七二三〇
〇三（九五五）四七九五

京都・高安流
岡次郎右衛門

瞳好会
森茂好
森常好
〒151 東京都渋谷区代々木四―三八―二
電話（〇三）370―4609

豊嶋七郎
〒271 松戸市下矢切五五―五
電話（〇四七三）(62)一九八二

高安流岡同門会
清水利宣
高坂康弘
森晴蔵
北野三郎
塩田耕三
中村山湖舟
伊藤川久
清水利蔵
谷口雅信
谷田宗一朗
〒603 京都市北区衣笠西道町31―7
電話〈(075)〈[illegible]〉〈[illegible]〉〈[illegible]〉

江崎正左衛門
電話(0959)三四―〇七二五

江崎金治郎
電話(0959)三五―九七一一
〒670 姫路市飯田二五〇ノ二

九州高安流同人会
飯富徹
飯富良人
大山要二郎
山崎悛輔
横田富生

龍吟会
藤田六郎兵衛
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号
電話（〇五二）五七一―五七六三

森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

森本重一

幸圓次郎
〒164 東京都中野区中央四―四七―一一
電話（三八一）九四一三番

幸義太郎
〒116 東京都中野区丸山二―二四
都営丸山アパート一号三二〇号
電話（三三七）五六七二番

野中正和
〒174 東京都板橋区宮本町五七―一
第一宮本寮
電話（五五八）八四二七番

幸友会
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原冨司忠

狂言やるまい会

葵心庵舞台

◆霜月の舞台から◆

「観世会」と「名古屋和泉会別会」

竹尾邦太郎

「井筒」 シテ九郎右衛門。作物の井桁は丈に高低二様あるが、低いのを用いた。前場、問答から掛合にワキ僧（関）の関心をそそりながら時にアシライ時にツメて初問、〽在原寺の跡古りて、の返シに数歩出ると、〽これこそ、と井戸を見ながら更に進び、〽一叢すすき、で一足引き、離れてしみじみ井戸を見詰めると、〽草茫々として露深々、とワキ正から正面へぐるりと辺りを見ながら、〽跡なつかしき気色かなと常座に戻る。かつての遊びの庭を懐古するところ、地（慶次郎ら）と相俟つてしっとりとした雰囲気が上々だった。

後シテは初冠・紅地縫箔腰巻・紫長絹で太刀は佩かない。序ノ舞の途中袖を被き遠くを見るのは、気持をうちに凝縮し業平との一体感を念じることではなかろうか。舞の後、〽寺井に澄める、と遠くから井戸を窺い、〽月やあらぬ、と井戸の前を廻って大小前へゆき、〽筒井筒、とまた井戸の方に行きかけて左袖巻き、右手扇つまんで翳し、〽生ひに、と袖を下し、〽生ひにけるぞや、と一足引き、〽さながら、とスミへ行き、〽昔男の冠直衣は、と右手扇高々と翳して井戸の前を正中へゆき、大小前で正に直スとするすると井戸へ出て、〽業平の面影、と左肘を井桁にかけ膝をついて、〽見ればなつかしや、と、じっと見込み、〽我ながら、と退って左袖で顔を隠し、〽亡婦、とワキ正近く廻って正に直シ、〽凋める花の、と両袖合せて扇を面に重ね、膝をついたしおらしさはえも言われなかった（1時間59分）。

「蝸牛」 疲れて休らう場所を求めていたシテ山伏（千五郎）。恰好の場所を見つけたとみるや、「大きな藪がある」、と言いも敢えず、数珠を鷲掴みに懐中するや、藪の中へ飛び込み横臥の気合は何やら「邯鄲」の飛び込みにも似て、千五郎の茶目ッ気を感じたのは辭目か。一方、主の命でかたつむりを探す太郎冠者（正義）、藪の中で頭の黒いを見ての山伏との問答。「かたつむりドノではござらぬか。」、「ナンジャ、かたつむり……」、問答の間（ま）と科白を刻んでゆく小気味のよいテンポは千五郎生来のものと思わせる程で強烈に惹きつける。挙句は冷静な主も「デンデンムシムシ」、見所も能楽殿を出れば「デンデンムシムシ」と相成る次第（26分）。

「邯鄲」 シテ清和。子方（大江泰正）の舞に触発されたかに舞う台上の楽の大らかさ。空下りは右手で地前の柱を持ち右足吊り上げ、頭を振って猩々のようにイヤイヤをしたのが珍らしかった。小手先の技術を排し、身体を充分に利かせた大胆な飛び込みも鮮やか、若さの特権である力漲る清々しい盧生であった。夢醒めた後も思い煩う様子はなかった（1時間25分・11月9日・観世会）。

「嵐山・猿聟」 正先に時ならぬ桜の立木が出て舞台が華やぐ。小書猿聟が独立して演じられることはままあるが、能の替間としては珍らしく、一曲の中でどれ程の効果があるものか期待して見たが、狂言が突出した印象拭いきれなかった。元弥が大役太郎冠者狼を伸び伸びと演じていたのが収穫。狂言に攫われて後シテ蔵王権現（政二）・子守（幸親）・勝手（都子）ら損な役廻りだが、皆確りしていて気持がよかった。地は少々ふらついたがキリ地は良好、ワキは珍らしく脇宝生鏑木岑男で、一曲が締った（1時間35分内狂言27分）。

「悪太郎」 シテ悪太郎（松次郎）が幕を放れた途端に拍手がぱらぱらとあったが、近頃珍らしく初（うぶ）なこと、と微笑んでも居られず、機先を制せられてすっと曲に入り込めないもどかしさ。

さて、盃を重ねる毎にくどくなる悪太郎を持て余し、アド伯父（礼之助）が、困惑する前場と、酔臥のうちに剃髪されて無常感を託ちながら仏道修業に入るという後場のペーソスが程よく調和してしんみりさせた（38分）。

「朝日奈」 シテは先頃文部大臣特別表彰を受けた元弥。家元嫡男の宿命か、首が据わらないうちからの舞台数の多さは驚く程。これが帝王学なのかも知れないが少々痛々しい。しかし七ツ道具を背負い白装束の元弥凛々として役に候まる。アド又三郎、貴メは素より、杖に跨り跳び廻るはしゃぎ様、更には語りにシテが拍子を踏む反動でのけ反ったりの闊歩にあるまじき軽味で巧妙にシテに絡み、元弥もよく応酬してお伽噺の世界を清新に表わし愉快だった。ただ後見を差し置き地頭の宗家の後見代行は、その心情はさて置き頂けない（33分）。

「松脂」 稀曲。和泉流現行曲完演を目指す宗家元秀の執念か、熱演ではあったが祝言だけのもの、さほど内容があるわけではない。ただシテの装束が面白い。黒頭・白鉢巻・面見德・厚板（紅入亀甲繋文様）・白地黒丸紋尽狂言括袴・紫地袷法被（袖を内側に折り曲げる）に障泥（あおり・熊の毛皮を敷いたような盾状の奇天烈な物で松の表皮のつもり）を両肩に載せて持ち、羽ばたくようにしたりする。

嘉例の松囃子に松脂を囃すと大仰な松脂ノ精が誘われ出て目出度い松の謂れを語り、カケリを舞って長久を寿ぐ。元秀の騒々しい程の賑々しさが大勢物の脇狂言にはぴたりだった（27分・11月24日・和泉会別会）。

桂会　後藤孝一郎

大倉正之助　〒161 東京都新宿区下落合二一一四一一五ノC

大倉源次郎　〒564 大阪府吹田市江坂町五—一七—二

瀬尾乃武　〒171 東京都豊島区西池袋—30—10—305

亀井俊一　忠雄　保雄　実

谷口正喜　京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

筧鉱一

吉田定男

中村喜彦　〒602 京都市上京区智恵光院今出川上ル一〇六　電話〇七五（四三）七八二一番

飯島佐之六　〒920 金沢市香林坊2—8—8

前川光隆　前川光長　名古屋稽古場　京都市右京区御室芝橋町一の六　名古屋市東区葵一—25—1　ニッシンビル六階六〇二号室　電話九三五—一〇一〇番

長生会　鬼頭八郎　喜太郎　好信　大鼓方　鬼頭英二　愛知県中島郡平和町城西　電話（〇五六七）⑥一九六〇番

助川竜夫

名古屋和泉会　大垣狂言の会　和泉元秀

狂言共同社

大蔵狂言会　大蔵彌太郎　基嗣　基義　〒215 川崎市麻生区岡上四三八—一　電話〇四四（九八七）一一八七番

茂山忠三郎　〒606 京都市左京区北白川大堂町47—1　電話〇七五（七〇一）二〇一一番

狂言やるまい会　野村又三郎　〒460 名古屋市中区正木二丁目16—25　電話（三三一）七五五三番

善竹忠一郎　神戸市東灘区御影町郡家大蔵二一

能楽講座　能と狂言に親しむ会　梅田邦久　藤田六郎兵衛

朝日カルチャーセンター　囃子教室　小鼓　後藤孝一郎　丸栄スカイル10階

演能写真　ウシマド写真工房　〒602 京都市上京区北野上七軒　電話〇五二（四六二）一三四一番

栄能楽舞台　名古屋市中区栄五—四—一二　電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台　加納保一　名古屋市昭和区滝川町四七—八三　電話（八三二）七〇〇一番

谷田宗二朗　〒603 京都市北区衣笠街道町31—7　電話（四八一）四〇三一

福井良治

柳原冨司忠

葵心庵舞台　尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二　電話　〇五六一五③二三六番　能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

ビデオ撮影　西川企画　名古屋営業所　名古屋市西区名駅2—20—3輪の内荘　小椋方　電話（〇五二）五七一—五八一六　〒500 岐阜市北野町20—2　電話〇五八二③九八六九番

能楽の友社　同人一同

〔おことわり〕 年賀広告の掲載につきましては紙面の都合上、掲載は順不同ですのでご理解賜りますようおねがいいたします。

喪中につき年賀欠礼いたします

上田拓司

廣田陛一

廣田幸稔

廣田後援会

茂山千五郎　茂山正義　茂山真吾　茂山千三郎　京都市上京区中筋通り石薬師上ル

名古屋清韻会能

昭和六十二年一月十五日(祭)十時始
熱田神宮能楽殿

素謡
神歌 鈴木明
高砂 鈴木明 千歳 高橋宗司 高橋宗司
二人静 阿部タマ 富田初子 中垣こう地 水野毛利眼部 隆子 絹子 菊枝誠子
（クセの前半を省き、シテ〜年も経ぬ、から謡い、ロンギを省く） 此島とし子 戸田栗田 志方つね子 伊藤るり子 水谷よしゑ 緒方陽子
シテ〜唐土の、から謡う） 富田貞子 小笠原敦子 岩田扶巳子 森清子
玉鬘 高木あき子 鈴木芳子 地 平田泰子 田中照子 柴田なみ子 坪田玉枝 船橋昌子 岩田林子 浅野澄子 部芳子 中村喜久子 武山喜久子 とよ子 幸子
（クセの前半を省き、シテ〜年も経ぬ、から謡い、ロンギを省く）

仕舞 加茂 巻 絹キリ 衣キリ 玉羽 猩々 鬘 小川記句子 吉田八重子 船戸定子 長尾洋子 鼓寿津
連吟 駒之段 加藤千一 増谷和夫 加野昭二郎 原博彦

蝉丸 北原良一郎 伊藤晏義 高田武雄 地謡 佐久間美親 福間克彦 富士道周明 福間昌作 浮貝釣一

仕舞 雲林院 巻 知盛 笹之段 葵上 山田欣也 福間克彦 長島みつこ 柳原富貴子 吉田定男 福井啓次郎 森本重一

舞囃子 班女 伊藤敏子
通小町 池田忠三 吉田定男 後藤孝一郎
野宮 守部啓子 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
唐船 鬼頭貴代子 合掌留 殿島満里子 笠鉦一 後藤嘉津幸 鬼頭喜太郎 西部恵司
葛城 飯富雅介 西村欽也 吉田定男 後藤孝一郎 助川竜夫 藤田六郎兵衛
能 大和舞 杉江元 大野弘之 高田みね子 奥村久枝 佐藤アヤ子 古井佐季 渡辺節子 殿島博子
東北口キリ 江柳クセ 遊段 雨之 邯郸守 笠鉦一 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
杜若 池田美知子
藤戸 御牧紀代 桑原信夫 笠鉦一 福井啓次郎 森本重一
天鼓 冨士道周明 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
難波 後藤嘉津幸 吉田定男 鬼頭喜太郎 西部恵司

番外仕舞 西行桜 大槻秀夫
祝言 淡路 大槻文蔵

〔御来場歓迎〕 主催 名古屋清韻会 補導 大槻秀夫

正風会大会

一月十八日(日)午前九時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 胡蝶 三和克子
小督 西嶋祐美子
絹キリ 富田雅子
巻 熊野浦野純子
三輪キリ 夫馬いずみ
蝉丸 田島浩美 紅葉狩 吉野靖子

素謡 小督 竹内銑治 宇野洋平 渡辺与作 徳嶋保昌
望月 田島雅洋 塚原義久 吉野淳夫 本多二郎
唐船 平松昌彦 沢村雅利 小林光由 竹内繁
舞囃子 竹生島 平田正文 清水克子 石坂浩一 衣斐智 鬼頭喜太郎 福井啓次郎 西部恵司
鞍馬天狗 池田環 衣斐郷志 鬼頭英二 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 西部恵司

素謡 源氏供養 松野芳樹 長谷川正嗣
道盛 大橋清 岡島裕 川島正男
番囃子

仕舞 敦盛 岩船 葵上 内田栄一 安野歩 杉浦三郎 笠鉦一 福井良久 鬼頭喜太郎 森本重一

舞囃子 養老 竹内淳一 鬼頭英二 柳原富司忠
花月 後藤新治 笠鉦一 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
海人 後藤恒子 鬼頭英二 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

素謡 三山 今井すゝ 青木松枝 今井貞一

能 半部 松田よし子 西村欽也 笠鉦一 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

連吟 鶴飼 大前数美 平田正文 中山真祥
鶴亀 金城学院大学OG遊子会

舞囃子 羽衣 榎原知治 鬼頭英二 柳原富司忠
玉葛 浦野正二 笠鉦一 福井啓次郎 西部恵司

仕舞 鶴亀 後藤鎮子
松風 伊藤二葉
杜若キリ 柳原芳房 三山
鳥追 中埜恵生 野守

松虫 杉石昭子 笠鉦一 福井啓次郎 檀原易子 福井啓次郎 知治 藤田六郎兵衛
女郎花 檀原易子 福井啓次郎 知治 西部恵司

高砂

衣斐正宣
高安勝久 杉江元 鬼頭英二 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

主催 正風会 衣斐正宣

〔御来場歓迎〕

名古屋宝生会定式能

二月一日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 吉田俊彦 稲川寿一
竹生島 高安勝久 杉江元 飯富雅介 柳原富司忠 河村真之介 森本重一 鬼頭喜太郎
間 佐藤友彦
後見 玉井 戸田和博祐 河野邦男 舟津正雄 高田真六 地謡 門原利光 竹腰衣斐 馬糞富四夫 正宣 鈴木義久 勝一
仕舞 弓八幡 馬糞富四夫
羽衣 クセ 倉本雅 地謡 竹腰勝一 佐藤 鬼頭嘉男 辰巳孝 耕司
鞍馬天狗 衣斐正宣
内藤泰二
采女 飯富雅介 吉田定男 後藤孝一郎 鹿取希世
間 井上松次郎
寝音曲 佐藤耕司 吉田智彦 辰巳孝
狂言 大野弘之 井上松次郎
善知鳥 西村欽也 笠鉦一 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
間 井上礼之助
後見 内藤泰二 吉田俊彦 地謡 水野久仁雄 後藤明 馬糞富四夫 鬼頭嘉男 衣斐正宣 稲川寿一 井上茂兵衛 根並文男
白髭 ツレ 武田宗和 天女 観世芳宏 竜神 観世芳伸 観世元昭 飯富雅介 西村欽也 笠鉦一 杉江元 久田舜一郎 助川鼎夫 藤田六郎兵衛

附祝言
〔有料〕 主催 名古屋宝生会

観世会定式能（初回）

二月八日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能 佐藤友彦
間 後見 浅見重好 武田志房 地謡 松山幸親 今村嘉勇 高橋瞭一 小島英一 中村和男 藤井徳三 杉浦元三郎 梅田邦久
狂言 井上礼之助 大野弘之
後見 佐藤友彦

素袍落 井上松次郎

仕舞 巻絹キリ 藤井徳三
梅クセ 片山九郎右衛門 地謡 本田重好 浅見重好 武田志房 須部甫
春日竜神 杉浦元三郎

能 藤井完治 観世元正
上 指股雅之助 広谷和夫 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
間 井上松次郎
後見 武田宗和 杉浦元三郎 地謡 祖父江修一 清沢一政 武田邦弘 井徳三 加賀敏彦 片山九郎右衛門 梅田邦久 中川雅章
（終了 四時半頃）

葵

附祝言 主催 名古屋観世会

※初回に限り、当日券は発売致しておりません

明けまして おめでとう ございます
新しい視力の世界を拓く、玉水屋のサービスをご利用下さい。
営業 10時〜6時
定休 水曜日
メガネの玉水屋
なごや・栄交差点北西角 ☎961-1826(代)

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

◆能と狂言に親しむ会公演◆

能「松風」と「砧」

3月18・19日 芸創センターで

観世流梅田邦久師、藤田流笛方・藤田六郎兵衛師が主宰する「能と狂言に親しむ会」は、これまで多彩な企画活動と演能で、幅広い愛好者に親しまれてきているが、きたる三月十八日（水）、十九日（木）の二日間にわたり「親しむ会・芸創公演ろうそく能」を開催する。

演目は、十八日が「松風」見留（シテ片山九郎右衛門）、十九日は「砧」梓之出（シテ観世銕之丞）で、最も人気のある名曲をとりあげ、親しむ会にふさわしい公演。

会場は名古屋市東区葵・名古屋市芸術創造センター。入場料は三千円。

三月十八日（水）午後六時半始
仕舞「忠度」（梅田邦久）
「松風」見留（シテ片山九郎右衛門、ツレ片山清司、ワキ西村欽也、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河村総一郎、間・野村又三郎
後見・武田欣司、青木道喜、地謡・梅田邦久、橋本雅夫、橋本礒道、河村和重、清沢一政、祖父江修一）
三月十九日（木）午後一時始
仕舞「百萬」（梅田邦久）
能「砧」梓之出（シテ観世銕之丞、ツレ片山清司、ワキ西村欽也、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村大、太鼓・助川治、間・佐藤友彦
後見・武田欣司、青木道喜、地謡・梅田邦久、橋本雅夫、橋本礒道、河村和重、祖父江修一、清沢一政）

入場券は中日ビル・三越・松坂屋・名鉄各プレイガイド、熱田神宮能楽殿および出演楽師。

問い合わせは能と狂言に親しむ会（名古屋市西区幅下2—10—9 藤田六郎兵衛方 電話〇五二—八三七一—五七六三）

国立能楽堂で邦謡会能

邦謡会（梅田邦久師）は、二月十一日、東京・国立能楽堂で第九回邦謡会能を公演。

能「定家」（シテ梅田邦久、ワキ宝生閑、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曽和正博、大鼓・柿原崇志、間・三宅右近、地謡・観世銕之丞 山本順之ほか）
狂言「仏師」（野村又三郎、三宅右近）
能「天鼓」（シテ片山九郎右衛門、ワキ宝生閑、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・上田悟、間・野村又三郎、地謡・梅田邦久、櫨本雅夫ほか）
仕舞「嵐山」（河村和重）「笹之段」（味方健）「春日竜神」（武田邦弘）
仕舞「屋島」（片山清司）「弱法師」（観世銕之丞）「野守」（観世暁夫）

62年度第一回 能楽講座

3月3日　教育館

能と狂言に親しむ会では、六十二年度第一回「能楽講座」としてテーマに芸創センター公演の「松風」「砧」をとりあげ、きたる三月三日（火）名古屋・栄三の教育館講堂で開催する。

昼の部午後二時より、夜の部午後六時より（いずれも約一時間半）

なお同会では、今年度から年会費六千五百円、学生券五千円の年会員制度を基本として会員証を発行する。

年会員申込みには、前述の芸創センター公演の十八、十九日のいずれかに招待される。（なお芸創公演は一回ずつ見学の臨時券は会員にかぎり二千五百円）

◈ 演能カレンダー ◈
（熱田神宮能楽殿）

〔2月〕
15日（日）九皐会定期能（有料）（番組①面）
21日（土）青陽会定期能（有料）（番組②面）
22日（日）春敲能（来場歓迎）（番組③面）

〔3月〕
8日（日）名雅会15周年記念会（来場歓迎）（番組②面）
15日（日）名古屋梅園会能（有料）（番番③面）
21日（祭）名古屋桐葉会創立25周年記念能楽囃子大会（来場歓迎）（番組③面）
22日（日）大蔵狂言会なごや会（来場歓迎）（番組④面）
29日（日）壺泉会（来場歓迎）

〔4月〕
12日（日）観世会定式能（有料）
18日（土）青陽会定期能（有料）
19日（日）邦謡会（来場歓迎）
25日（土）名古屋猶風会（来場歓迎）
29日（祭）幸友会春の会（来場歓迎）

〔5月〕
3日（祭）芳扇会（来場歓迎）
5日（祭）名古屋巽会（来場歓迎）
9日（土）野村四郎の会（有料）
16日（土）名古屋九皐会定期能（有料）
17日（日）やるまい会（有料）
24日（日）名古屋観衛会大会（来場歓迎）
30日（土）朋輪会大会（来場歓迎）
31日（日）下田雄三中部地区連合会大会（来場歓迎）

〔6月〕
5日（金）熱田祭奉納能（来場歓迎）
6日（土）一輪会・叶石会大会（来場歓迎）
7日（日）清韻会能（有料）
14日（日）観世会定式能（有料）
21日（日）宝生会定式能（有料）
28日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋観世九皐会 定期能予定番組

名古屋観世九皐会（会主観世喜之師）の昭和六十二年度定例能会は、二月十五日（日）の初回（番組①面）に始まり、年四回演能が行われる。

第二回以降の予定番組は次のとおり。

◉第二回　五月十六日（土）午後一時始
素謡「藤戸」小島芳雄、小林喜久、ワキツレ宮本正彦
能「楊貴妃」高橋瞭一
舞囃子「海士」（寵）吉田妙
能「善知鳥」観世喜之、ツレ中所宜夫

◉第三回　七月五日（日）午前十一時始
素謡「井筒」五木田武計、五木田三郎
能「班女」高木美智子
能「天鼓」（弄鼓之舞）観世喜之

◉納会　九月十九日（土）午後一時半始
素謡「通小町」佐々木勝輝、ツレ中所宜夫、ワキ高橋瞭一
能「菊慈童」加藤保彦
能「船弁慶」（前後ノ替）観世喜之、子方後藤邦泰

毎回狂言、仕舞を予定。
会費　全自由席一万六千円（四回分一名）
事務所＝名古屋市南区元塩町一—一—一七、加藤保彦方、電話〇五二—六一—三六五九

宝生流全曲 袖珍一番本

わんや書店が刊行

わんや書店では、このたび「宝生流全曲袖珍一番本」として、小型謡本を刊行する。

今回の袖珍本は、とくに手造りによる念入りな造本で長年の使用に耐え得る仕様になっており、当面五百部の限定で早目の申し込みがのぞまれている。全百八十一冊。

予約は一時払（十五万円）毎回払（十冊ずつ毎回九千八百円）である。

名古屋観世九皐会定期能（初回）

二月十五日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　高砂　宮本正彦　青木武弘　加藤保彦
能　巴　駒瀬直也　飯冨雅介　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一　間　井上礼之助
狂言　不見不聞　野村又三郎　大矢高義　佐藤友彦
難波　高木美智子　笹ノ段　五木田武計
仕舞　笠ノ段　高橋瞭一　花月　佐々木勝輝
東北　吉田妙　野守　五木田三郎
観世喜之
能　西行桜　西村欽也　高安勝久　飯冨雅介　杉江元　福井啓次郎　筧鉱一　鬼頭喜太郎　鹿取希世　間　井上松次郎
附祝言

主催　名古屋観世九皐会
事務所　457 名古屋市南区元塩町一—一—一七（加藤保彦方）
TEL〇五二（六一一）三六五九
〔有料〕
会員券四回分一万六千円

能楽（三役）研修生募集

国立劇場と日本能楽会・能楽協会は協力して、能楽三役（ワキ・囃子・狂言）の後継者を養成するため、ただいま左のとおり研修生（二期生）を募集しています。

研修目的　将来能楽三役（ワキ・囃子・狂言）になるための基礎教育を行います。

応募資格　中学校卒業以上、原則として二十五歳未満の者。（昭和六十二年三月三十一日現在）

募集人員　約二十名。

募集期間　昭和六十二年四月二十五日まで。

選考　五月上旬に、国立能楽堂で簡単な試験と面接および健康診断を行う予定です。

研修期間　昭和六十二年五月下旬から昭和六十五年三月末日までの約三年間。（全日制）
ただし、研修開始後六ケ月以内に能楽師としての適性審査を行い、正式に合格者を決定し、専攻する役を決めます。また、研修修了後は日本能楽会会員に師事することになります。

研修時間　原則として、月曜日から金曜日までの毎日午前十時三十分から午後五時三十分まで。

その他　受講料は無料です。奨励金制度等の特典があります。

問合せ先　応募手続き等については、左記にお問い合わせください。

〒151　東京都渋谷区千駄ケ谷四丁目十八番一号
国立能楽堂・養成係
電話東京〇三（四二三）一三三一（代表）

国立劇場では、歌舞伎音楽（鳴物・竹本）研修生、文楽（太夫・三味線・人形）研修生を募集しています。
募集期間　昭和六十二年四月二十五日まで。
問合せ先
歌舞伎音楽研修生
〒102　東京都千代田区隼町四丁目一番
国立劇場調査養成課
電話　東京〇三（二六五）七四一一
文楽研修生
〒543　大阪市南区日本橋一丁目十二番十号
文楽劇場調査養成課
電話　大阪〇六（二一二）二五三一

青雅日記 ㊾

七草粥

えと文　二井栄逸

一月七日

そうそう、今日は稽古始めになるんだと、スカイルのエレベーターの中で思いながら、ふと、今日は若菜の節句だということに気がつきました。若菜の節句日であるならば、二人静の稽古にすればよかったのに、と思いました。カリキュラムは六浦になっています。月の事を考えずに予定表を教務主任にわたしてしまった私のミスです。

古え、吉野勝手神社の神供にするため、神官が菜摘川のほとりに里の女どもを集め、若菜をつませたのも正月七日でした。

若菜は、春の七草の総称で、昔の歌にもありますように、「せりなずな御形はこべら仏の座、すずなすずしろこれぞ七種」の草々です。

この七草で炊いた粥を七草粥といいます。私の家でも祖母の時代には、毎年七草粥を食べました。

古くから伝わる七草粥は、前日つんだ七草をきざみ炊き上げるのです。この風習のおこりは平安朝の初期で醍醐天皇延喜十一年（九一一）正月七日に後院より天皇に献上したのが始めであると、ものの本で読んだことがあります。

今日の教室は、畳の香りも常の時より爽かな気がしますし、舞台も光り輝いて見えます。打つ拍子盤の音もさえかえっています。

子供の頃、はき清められた座敷で、あのさみどりのあつあつのお粥をすすったことを思い出していたからでしょうか。

祖母は、昔の言い伝えをよく守って生活の節目にしていたようで正月七日になると、七草粥をたいてみんなに食べさせたことを覚えています。床の間の前に置いた、まないたの上で、吉方（えほう）に向い、まな箸（まなばし）、わらの鍋づかみを側に七草をたたいていました。

ななくさなずな
唐土の鳥と
日本の鳥と
渡らぬさきに
ななくさなずな
手に摘み入れて……

七草の名前も時代と共にかわってゆきました。御形（ごぎょう）はははこぐさ。ほとけの座はたびらこ。すずしろは大根。すずなは青菜又は蕪、なずなはべんべんぐさのことでそれぞれ別称です。

どの草々も寒い冬に耐え、雪の下に春の光を待ちわびて芽立つ、強い精気がみたぎっている気がしますし、七草に共通していることは、どの草も濃いみどり色をしていて、いわゆる緑色野菜の一種であるということです。多くの栄養をもつ七草を、若菜の節句に食べるならわしをつくった古代人の生活の知恵は素晴らしいことだと思います。

青陽会定式能（第131期 第1回）

二月二十一日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能 実盛
敦盛　今村嘉勇
仕舞 東国　北条清沢一政　地謡 前野郁子
郡山　松山幸親　生駒近藤幸江　里翠都子
梅田邦久
間 西村飲也　飯冨雅介　杉江元
井上礼之助
後見 高橋暎一　中川雅章　地謡 本田勲　今村嘉勇　須部甫　加藤保彦　武田邦弘　小野祖父江修一　清沢一政　玉木孝男　高橋暎一　松山幸親

難波
林院月キリ　仕舞 雲花金　近藤幸江　クセ 前野郁子　本田勲　地謡 須部甫　札 高橋暎一

能 百万
于方 河村和貴　今沢美和
高安勝久　福井啓次郎　池田鉱一　西部茂
佐藤友彦
後見 生駒梅田　里翠　地謡 玉木孝男　馬場信至　前野郁子　近藤幸江
間 高橋暎一　飯冨雅介　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭希世　鹿取希世
井上松次郎　大野弘之

狂言 柑子
花見 鬼頭貴子　花見 鬼頭伸幸　花見 伊藤幸裕　牛若 長田明恵

仕舞 弱法師
玉之段　武田邦弘　小島一英　地謡 須部甫　松山幸親　武田邦弘　加賀敏彦　小島一英　保彦
今村嘉勇　梅田邦久

能 鞍馬天狗
飯冨雅介　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取希世　鬼頭希世
井上松次郎　大野弘之

附言
後見 今沢美和　小島一英　地謡 馬場信至　中村和男　松山幸親　本田勲　祖父江修一　清沢一政　加賀敏彦　雅章

〔当日券三千円〕（文化財保護法適用）主催 青陽会

春敲能

二月二十二日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

半能 天鼓
内藤泰二
番外 仕舞 高砂　西村飲也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
旅　衣斐正宣
東北　東川光夫
鞍馬天狗　渡辺他賀男　宝生英照

ほか舞囃子、連吟、仕舞等
主催 春敲会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二—三四四九

名雅会十五周年記念会

三月八日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

〔御来場歓迎〕

素謡 神歌
吉野和雄　千才　古橋佳和

素謡 鶴亀
鹿島とも子　今井肇

通小町
内田清志　藤井昭道　鶴森昭雄　伊藤義郎

葵上
高木守　加藤哲也　吉野和雄

仕舞 高砂
笠之段　野村昌宏　内田清志
鞍馬天狗

連吟 羽衣
車戸博子　国枝政子　岩佐敏子　渡部みさを　吉田あきゑ　側島秀子　栗田はな　本田富子

仕舞 舞
菩提樹　安田範之　渡辺守　野守　大石原彦

素謡 求塚
林宏一　頼朝道彦　野村昌宏　地謡 中川雅章　古橋正士　武田宗和　小島一英

連吟 社若
吉村千代子　松岡記久子　浅野傳文子　猪野間たづゑ　酒井たま子　内田志き

連吟 田村
駒月正覚　野寺茂　西川和幸　平野政八　梶信　子安勇　山田善晴

素謡 木曾
ツレ 鶴森昭雄　ツレ 林宏一　義仲 今井肇　池田古橋佳和　服部吉金　地謡 祖父江修一　武田宗和　志房　久田徹二

連吟 阿漕
黒木利夫　二村誠治　田口奥田　中島孫寿　牧野中　山下守彦　桂川正之　伝九郎　梶太郎　桂川敬遠

仕舞 難波　真野澄

〔名古屋市無形民俗文化財保護法適用〕

名古屋 梅猶会能楽会

三月十五日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

連吟 天鼓
野村明三　今井郁男　細江富央　日下部義彦　岡崎信男　熊松村　桂川弘市　野村政一　今井久　島倉光次　英人

仕舞 屋島
節クセ　須田司郎
輪　上田久雄
半蔀　安田一男
鉄輪
山姥キリ

舞囃子 養老
五段　井口賀恵　河村真之介　柳原冨司忠　西部恵司　鬼頭喜太郎

経正
島香代子　河村真之介　柳原冨司忠　西部恵司　鬼頭喜太郎

融
伊藤栄子　河村真之介　柳原冨司忠　西部恵司　鬼頭喜太郎

素謡 道成寺
横井啓三　小藪義郎　地謡 中川雅章　武田宗和　古橋正士　武田志房
二村正

間 野村又三郎

仕舞 蝉丸
山口正男　月キリ 二村正　飼キリ 小沢雅弘

連吟 鐘之段
菅野弘雄　梶家豊次　望月三川　大埜間寿雄　鉱平　修

番外 仕舞 弱法師
武田志房

舞囃子 小督
幅敏明　河村真之介　柳原冨司忠　西部恵司

野宮
浅井一元　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
拝留

砧
伊藤キクエ　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
アト 井口賀恵
子方 加藤万由子

素謡 望月
吉富ゆゑ　阿部毅　地謡 久田徹二　武田宗和　武田志房　小島一英
間 野村又三郎

仕舞 玉之段
長谷川京子

連吟 半蔀
岩城ユキ　鈴木容子　宮川美代子　野崎博子

舞囃子 藤戸
木本仁之　大坪重遠　松井弘　山森清　柳一　正直　長谷川　島　村上　華男

舞囃子 葛城
山本一　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
大和舞

頼政
大野照子　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

紅葉狩
急之舞　山崎佐東子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

番外 仕舞 岩船
中川雅章
（終了予定 午後五時半）

〔御来場歓迎・入場無料〕

主催 中川雅章
長浜市地福寺町八丁二九

山本定期能

62年度上半期演能

熊坂　東美智子　河村大　渋谷倫子　後藤孝一郎　杉市和
山本泉　小林富美子

能 巻絹
西村欽也　兎鉱一　松久鉱子　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

◆61年度大阪文化祭賞

観世流シテ方　浦田　保利氏
観世流シテ方　杉浦元三郎氏
大倉流小鼓方　大倉源次郎氏

昭和六十一年度の大阪文化祭賞の「能・狂言」部門で、観世流・浦田保利氏は「景清」松門ノ応答・小返し（浦田能・十月十八日大槻能楽堂）の舞台成果で、観世流・杉浦元三郎氏は「清経」（大阪能楽観賞会十月七日公演）で本賞を受賞、大倉流小鼓方・大倉源次郎氏は山本博通・河村信重独立披露能（十一月二十九日・山本能楽堂）における「田村」の囃子の成果で奨励賞を受賞。一月十二日大阪キャッスルホテルで授賞式が行われた。

第5回京都府文化賞

狂言　大蔵流　茂山千五郎氏
金剛流シテ方　金剛　永謹氏

京都府における文化の振興、向上に寄与した人に贈られる京都府文化賞の功労者として、狂言大蔵流・茂山千五郎氏が受賞した。また新人賞に金剛流シテ方・金剛永謹氏が選ばれた。金剛永謹氏は、とくに海外への日本文化の紹介と普及に意欲的にとり組み、「金剛流北米・カナダ公演」（昭和五十九年）で団長をつとめ「ヴァチカン・イタリア公演（昭和五十九年）で副団長、さらに昭和六十年には「スペイン公演」で団長をつとめ将来を嘱望されている。

山本定期能

62年度上半期演能

山本定期能楽会の六十二年度上半期演能は、一月十一日初回、二月八日の第二回につづき、四月四日、六月十四日に行われる。

・四月四日（土）十二時半始
能「雨月」（山本真賀）「杜若」恋之舞（宇治田正子）「藤戸」（波多野晋）

・六月十四日（日）十二時半始
能「清経」替之型（千崎隆一）「源氏供養」舞入（山本勝一）「舎利」（河村信重）

一般券三千五百円、学生券二千円。

信玄袋

—年末年始、放送と本—

私の六十二年の元旦は東北の放送（NHK・R、以下NHK略）から。シテ観世元正氏にワキは同元昭氏。同曲の笛は藤田六郎兵衛氏が勤める。正月の東北はめでたく、さぞかし六郎兵衛氏も演奏者として古典のよさに感銘深かったことであろう。因みにテレビの二人袴（二日、和泉流、ほかに大蔵流蝸牛）に井上松次郎氏（男）。当地方は右の二人が正月の出勤。

さてRの五流謡曲がなくなることは十二月でお伝えしたが、その代り東北に二日は狂言二題、三日は野口兼資・梅若六郎・桜間弓川・観世華雪（珍し、先代山本東次郎も）の諸氏の放送に智恵子抄（観世寿夫、以上故人、同静夫＜現銕之丞＞。各曲囃子方の役者名は省く。兼資氏は独吟）の再放送。

テレビは元旦が高砂を金春信高氏（後見に金春晃実氏）、二日狂言二番、三日観世流の二人静。FMもテレビも佳演が続いた。なお二人静（梅若恭行氏）のツレ梅若靖記氏の姿と動きが印象に残った一つ。そして宝生・金剛・喜多三流の謡はきけず。さみし。新春のことととて、一月と二月はじめの謡曲放送（FMとテレビ）に小さな配慮と才覚を払ってほしかった。

また一年の能（謡曲）は翁（神歌）で始まることも忘れてはなるまい。

× × ×

一月十五日の放送は狂言・宗論で、茂山千五郎・野村万作両氏の共演。引き締ったなかに笑いをこめた佳さがなかなか見事。感銘深かった（六一年NHK古典芸能鑑賞会）。二月十一日は観世元昭氏の船弁慶（同）。期待したい。

× × ×

本。

数多いので番号を付けて進めたく、紙幅を越えるときは次号にまわしたい。

1、よみがえる喜多六平太・宗家継承—破格の能楽師喜多長世。東京新聞、一・二八、演劇芸能欄。橋岡久馬氏の「道成寺」（昨年二・六掲載）以来の二頁にわたる大きな記事。めでたく、明るく、楽し。長世氏の近影と石橋（後シテ）の写真のる。なお翌二九日の「二月の能・狂言（東京）」に「翁」の写真（長世氏、二月の式楽上演）を掲げて、新六平太氏の門出を祝う。

2、能楽秘話・北七太夫夏の陣・柳沢新治。

うぐいす色の表紙は喜多家紋散らし扇で飾られ（よく分らない）、書物の題名を記した頁には始祖の署名と花押（かおう）が載る。貴重。なおカバーはあの景清の面が刷り込まれている。終りを喜多長世氏で結ぶ。

十七・八頁に、七太夫と金剛座のこと、他流の現状、能への傾斜、武士としての本懐などがうまく書かれている。そのほか二・三能に関する箇所あり。長世氏の文章の前に流の面像を添える。六一年十二月、東洋書院。著者はNHKエンタプライズ部長PD、「能楽放送うらばなし」を能楽タイムズに毎号執筆。受贈。

付、喜多流は昨六一年が建流四百年の年に当る。

3、青雅日記・来る年。二井栄逸（喜多流・日本画家）。第68回。同流の歴史を。能楽の友一月。

× × ×

4、歌舞随脳記に於ける禅竹の苦悩・広瀬瑞弘（よしひろ、名古屋金春流）。上・下。金春月報六一・十—十一月。能芸に対する年来の疑念を去って能芸師金春流と喝破する精神過程を述べる。

5、太郎冠者が参る・佐藤友彦。毎日新聞（名古屋）。毎週月曜日、十二回、六一・九・二九第一回。一回読み切りで狂言の全体像を目指す。＜能狂言界昨今＞では じまる。

6、「芸どころ」の精気不十分—名古屋の演劇界今昔・藤野義雄（前・御園座演劇図書館長、現在東京在住）。広い視野と高い見識。芸どころの用語・御園座のミニ歴史、必読。文中能・狂言については「いまやもう命脈を保っているにすぎないのではないか」と悲観的である。朝日、文化欄、六一・十二・六。

× × ×

金剛巌氏の能の話。

「ビッグインタビュ・金剛巌」きき手・小泉康夫、撮影・安間重明。「オール関西」六一・十二月号。同社発行（大阪）。

金剛さんが先代家元（父上）愛用の女面・孫次郎にみ入る大型写真（二頁大）ではじまる。雪月花の面のこと、戦後の勉強（演能）、二十六歳で家元、伝書の深さ、演能の曲数、三老女のことなど。座右の銘（好きな世阿弥のことば）「初心忘るべからず」・現代と能にも触れらる。閑雅な能芸の話と優雅な写真集。佳篇。受贈。

× × ×

催し。日展。森田茂画伯の黒川能の今年の出品は＜天女＞。中日、愛知県美術館。一—二月。

（野村広二）

名古屋梅猶会能楽会

三月十五日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能　弱法師
熊沢恵美子
飯冨　雅介　吉田　定男
後藤孝一郎　鹿取　希世
間　佐藤　友彦

仕舞　田村　晃一　岡田　晃一
後見　井戸　和男　梅若　善高
嵐山　池内幸三郎　地謡　寺岡　佐子
梅若　盛彦　梅若　基徳　梅若　盛義
橋本　雅一　小沢　清一　池内光之助
菊池　重郷　岡田　朗詠　仲村　勇
井戸　和男

能　江口
西村　欽也　飯冨　雅介
杉江　元　柳原冨司恵　河村総一郎
間　井上松次郎　藤田六郎兵衛
後見　池内幸三郎　梅若　善久
岡田　朗詠　橋本　雅一　寺岡　佐子
地謡　仲村　菊池　重郷　池内光之助
梅若　盛義　岡田　晃一　井戸　和男

狂言　二千石
仕舞　花月　井上礼之助　佐藤　友彦
網之段　井戸　和男　井上　生香
山姥　池内光之助　地謡　橋本　雅一
岡田　晃一　池内幸三郎
熊沢恵美子

附祝言
〔有料〕　主催　名古屋梅猶会
◎会員券　五、〇〇〇円（全席自由席）
◎会員券申込先　能楽殿・出演楽師・梅若会事務所
熊沢恵美子方（〇五二—七八二—六九七三）

能　玄象
高安　勝久　笠　鉱一
杉江　元　福井啓次郎　助川　龍夫
間　大野　弘之　藤田六郎兵衛

金春流太鼓　名古屋桐葉会創立二十五周年
記念能楽囃子大会

三月二十一日（祭日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番外　独鼓　金　松　木村　ひで　笠　鉱一　越智　明子
舞囃子　老　武田　邦弘　前川　光長　福井啓次郎　杉山　市和
養老　竹中　洋子　曽和　正博　河村　大　早田サチ子
羽衣　渡辺　郁子　吉田　定男　水浦　磨智子
郡鄙　長島みつ子　後藤孝一郎　鹿取　希世
塩小　門脇　千鶴　笠　鉱一　細野　三千代
曽和　鉱一　鹿取　希世　玉井八重子
吉田　定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
福井啓次郎　岡　基子
小川記句子　鹿取　希世

能　巻絹
山本　泉　小林富美子　西村　欽也　笠　鉱一
福井啓次郎　松久　祐子
間　野村　信行　藤田六郎兵衛

後見　水藤　元三　松山　幸親
梅田　邦久　須部　清沢　祖父江　修一
地謡　須部　清沢　一政　甫　片山　慶次郎　武田　邦弘
青木　道喜　河村　和重

番外　一調　山姥　辰巳　孝　前川　光隆
（剛）高砂　リベッカ・ティール　笠　鉱一　猪瀬　孝
後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
三輪　村中恵美子　吉田　定男　山村　市和
後藤孝一郎　杉山　幸
雲林院　青木　美子　河村　大　杉山ヒサノ
福井啓次郎　鹿取　希世
胡蝶　小瀬古喜代子　吉田　定男　二木　邸子
後藤孝一郎　鹿取　希世
（剛）船弁慶　羽多野良子　笠　鉱一　西脇　和子
福井啓次郎　鹿取　希世
猩々乱　梅田　邦久　河村　大　半田　智子
後藤孝一郎　杉　市和

一調　一管　葛城　辰巳　孝　平河　和子
藤田六郎兵衛

能　杜若
徳田　文代　西村　欽也　吉田　定男　石田　紀子
後藤孝一郎　鹿取　希世
後見　前野　邸子　松山　幸親　青木　道喜
片山慶次郎　地謡　祖父江　修一　武田　邦弘
須部　清沢　甫　梅田　邦久
清沢　一政　河村　和重

番外　別習　一調　難波　片山慶次郎　金春惣右衛門
舞囃子　西王母　忍田チヨ子　吉田　定男　小林富美子
曽和　正博　藤田六郎兵衛
龍田　近藤とき子　吉田　すま子　河村　大
曽和　正博　藤田六郎兵衛
菊慈童　二木　邸子　吉田　定男　相川　和美
曽和　正博　杉　市和
須磨源氏　松久　祐子　河村　大　小田　朋子
福井啓次郎　杉　市和
野守　半田　智子　吉田　定男　山崎美知子
福井啓次郎　杉　市和
一調　船弁慶　片山慶次郎　大塚　香代

半能（剛）天鼓　西脇　和子　飯冨　雅介　河村　大　羽多野良子
曽和　正博　杉　市和
後見　豊鶴三千春　東田　康文　都丸　勇
広田　泰能　地謡　松野　洋樹　宇高　通成
田中　敏文　重本　昌三
竹市　幸司　片山　紳弘

舞囃子　吉野天人　佐分　房子　笠　鉱一　徳田　文代
福井啓次郎　鹿取　希世
海士　野口千鶴子　笠　鉱一　角谷　美江子
曽和　正博　鹿取　希世
鶴亀　伊集院瑤子　河村　大　瀬戸　義文
福井啓次郎　鹿取　希世
遊行柳　深川寿美子　笠　鉱一　松村　美千子
後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
玄象　江川恵美子　河村　大　羽村　幸子
曽和　正博　藤田六郎兵衛
岩船　宮川　千尋　吉田　定男　山川　雅子
曽和　正博　杉　市和

（終了　六時三十分頃）

主催　名古屋桐葉会　前川光隆　前川光長

◆梅見月の舞台から（その一）

「宝生会」

竹尾邦太郎

「竹生島」真面目な舞台は好感が持てたが前は金殿に緊張が裏目に出た。舟の乗降の抜き足の心許無さや、シテ寿一の棹持つ手が刀を引っ摑んでいるような武骨さ、などである。また俗に屋台骨が揺らぐ、と言うが、他ならぬ神殿の歪は見た目も悪く無頓着に過ぎる。

後ツレ天女（俊彦）は濃紫色の長絹に白大口。小振りな長絹（子方用か）は袖あしらいが忙しくなく見えて天女のたゆとう気分に遜く損。後シテは三ノ松でキッと面を切り、一旦幕に退って加速をつけるように一ノ松に出た。波を蹴立てるスピード感、舞台に入ってからの働キの爽快は脳能らしく清々しかった（1時間10分）

「采女」シテ泰二。面若女、紅白段唐織は秋の草花だったが早春の能には如何か。

初同でのシテのそぞろ歩く風情は、大小前へ鶯の高嶺、と薄く空を見、へ藤の花咲きて、と右にアシラウ辺りの情感に泰二好演。しかしワキ（雅介）との掛合で、ワキが誤って、へ桂の暦・、と取りつられてシテは、へ桂の黛、と受けたために一瞬戸惑い、地頭と後見が、へ丹花の唇、と付けたが幅狭して調子が崩れ残念。しかしすぐ立直り、へ水の月取る、と見渡す情緒は深長。

アイは居語り。十一分余の長広舌を松次郎神妙に語り、坦々としたなかに滋味あり旨い。後はワキの待謡からシテの出を誘うところ揚幕を二度もためらったのは頂けない。後シテ装束は猩沢池入水の采女の霊に相応しく、枝垂柳と据に銀杏散シ文様緑色長絹に緋大口。充分抑制された挙措から滲む慎ましさは序ノ舞にも揺曳し、つっとスミへ出て不図立ち止まる按配に思いあぐねる心情がよく出ていたキリは、へ水沼々として、と招き謡して沈み、面を隠し、立つと返シに二つ踏みトメた。（1時間54分）

「寝音曲」シテ太郎冠者弘之、アド主松次郎の催促に謡う「邯鄲」「放下僧」「羅生門」の一くさり伸々の美声は一皮剝けた印象を受けた。「某を鰯るとみえた。致し様がある」、とゆさぶるアドとの呼吸も合い、酔が小謡「貝尽し」を謡わせるのも、興がるシテの脱線とも思えて面白かった（21分）。

「善知鳥」シテ孝。呼掛からワキ旅僧・欽也との掛合にシテ柱際まで進む。形見に左袖引き千切るところ、我身を切り裂くような悲痛ありありと、それだけに形見に想いを託す感概はついに顔を埋めてシオル辺り、将にへ涙を添へて旅衣、織細な描写に面目を見せた。

後シテは前半身を固くして身じろぎもせず千代童が、は左手二三度空を泳ぐだけで子は遠く隔たり虚しさ一入。お目当てのカケリは へうたうううう、と哀調長く引き招ってから正先の笠を虚空に一つ打ち、一転二ノ松に抜けると再びゆっくりシテ柱際に戻り、左手頭を取ると勾欄に寄って笠を見込んだのは狙いをつける気合。そして亦正先に進み鋭く笠を二つ打つが徒らに空を切るだけ、足拍子二つは地団駄の如くであった。総じて後シテ後半はキレの良い技の鮮烈な型が目覚しく、この能の陰惨さを薄めた嫌無きにしもあらず、冥え冥えと冷たい印象であった（1時間8分・2月1日・宝生会）。

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話(052)1137

重要無形文化財
中日名匠鑑匠能

三月二十八日（土）午後一時開演
名古屋・栄　中日劇場

能 **小督**
梅田邦久　小島一英　梅若盛義
間　西村欽也　柿原崇志　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
替装束
野村又三郎　今村嘉勇　菊地重郷　高橋瞭一　藤井武久　田中徳三　勝田敏房　海老登武　角田宗徹　武田寛次朗　武田邦弘
後見　武田宗和　坂井音重
地謡　久田徹二　武田志房　須田徹二　武田久田　辺田宗志　哲久和　部重

仕舞
高田村砂角寛次朗　キリ坂井音重
玉　鬘　熊坂　藤井徳三　関根祥六
地謡

能 **花筐**
子方　坂井音晴　ツレ　観世清和　観世元正
森茂常好　苗加登久治　柿原崇志　福井啓次郎　森田光春
小野豊

狂言 **棒縛**
後見　武田文志　片山九郎右衛門　地謡
茂山千五郎　茂山千之丞　茂山あきら　後見　茂山千三郎
嵐山　武田宗和　羽衣　キリ武田志房　地謡
柏崎　道行片山慶次郎
藤戸　片山九郎右衛門
中村和男　加藤保彦　川賀敏彦　竹前雅章　関根祥六　坂井音重　武田宗和　小島一英　角寛次朗　治房　武田
水藤元三　武田邦弘　坂井音重　梅田邦久　岡本房雄

能 **大江山**
子方　武田文志　子方　武田宗典　観世元昭
森茂常好　苗加登久治　小野豊男　平木豊
替之型
後見　観世清和　関根祥六
地謡
茂山千五郎　茂山真吾　松山幸親　本田勲　清沢一政　祖父江修一　竹前治房
河村総一郎　後藤孝一郎　小寺俊三　森田光春
武田邦弘　藤井徳三　片山九郎右衛門　片山慶次郎　梅田邦久

特別席　九千円
A席　七千五百円
B席　六千円
C席　四千円（全指定席）

主催　中日新聞本社
後援　文化庁

第17回 大蔵狂言会なごや会

三月二十二日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

重　重喜　丹羽良之
喜　重喜　丹羽節
茶　出家　菜
壺　すっぱ樽本道子　目代カーンテモテ　旅の者立川一枝
悪　悪坊　牛田敏明　宿の亭主　出口茂雄　出家　渡辺茂
舟　舟船　太郎冠者鬼頭正明　主人　紅谷与一
子　盗人　盗人松川佳澄　女久松　往子　主人　出口茂生

ほか東京、関西、伊勢の大蔵会員出演。

〔御来場歓迎〕

主催　大蔵狂言会なごや会
事務所　名古屋市西区白菊町3丁目33　丹羽節方

62年2月・3月 放送予定

〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
15日（日）宝生流「安宅」大坪十喜雄
22日（日）観世流「知章」五木田武計
「花月」遠藤六郎

〔3月〕
1日（日）観世流（復曲）「北条」観世元昭
8日（日）金剛流「忠度」豊嶋訓三
15日（日）喜多流「屋島」粟谷菊生
22日（日）狂言「宗論」野村万作　茂山千五郎
29日（日）金春流（新作）「奥の細道」桜間金太郎

◆NHK教育テレビ（午前9時）
3月21日（祝）①能楽界の話題から
喜多流宗家継承、英語能「漂炎」、千鳥の面箱と翁面の歴史的対面ほか
②能「隅田川」（再）梅若六郎ほか

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

ビデオ「名人の面影」全五巻 秘蔵記録公開

NHKサービスセンター刊行

財団法人NHKサービスセンター（東京都渋谷区宇田川町四一一）は、NHK能楽特選「名人の面影」ビデオを新発売する。

今回第一期発売は全五巻、収録された映像群は、いわば〝幻の記録〟ともいわれる秘蔵の記録で、明治、大正、昭和の三代にわたる今は亡き名人たちの幽玄・華麗な至芸が映され「後生に残る文化遺産」（NHKサービスセンター）といっても過言ではない。

◎第一巻（55分）狂言「三笠山」舞囃子「松風」シテ梅若万三郎（昭和十三年）能「鞍馬天狗」シテ梅若実（昭和三十三年）

◎第二巻（モノクロ三十二分）能「葵上」シテ桜間金太郎（弓川）ワキ宝生新（昭和十年）

◎第三巻（モノクロ五十七分）能「羽衣」シテ野口兼資、ワキ松本謙三（昭和二十七年）

◎第四巻（モノクロ三十六分）舞囃子「清経」シテ喜多六平太（昭和三十七年）能「景清」シテ喜多六平太（昭和三十三年）

◎第五巻（モノクロ三十六分）狂言「木六駄」シテ山本東次郎（昭和三十八年）

定価各二万五千円。VHSとβ式の二種類発売。

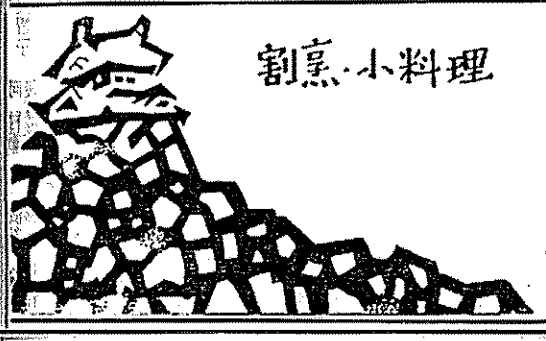
能楽（三役）研修生募集

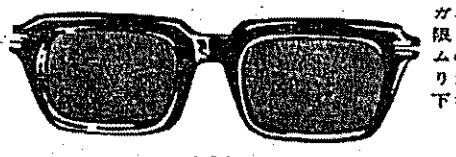
後継者養成の三年間教育

番組は次のとおり、〔昼の部〕「三番叟」三番叟・佐藤友彦、面箱・佐藤融、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎

があるが、全国の世阿弥ブームに乗り三年前から再び灯がつき始め新しい小浜漁港の誕生も運動に拍車をかけた。小浜市当局も積極的

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作　ビデオプロダクション　西川企画
記録ビデオ撮影
名古屋営業所　名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　TEL（052）571—5816
岐阜市北野町20—2　TEL（0582）63—9869


割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）
電話 241—0248

■生きた設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。
■ビス一本にも全神経を集中する日進堂
メガネ店の技術をささえるもの——それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。
■徹底した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。
定休日　毎週木曜日

正しいメガネで しあわせを……
NIZZOO　メガネの日進堂
◉駐車場完備　名古屋市西区那古野2-20-23（円頓寺本町）
〒451　TEL（571）6181—3

CBC ニュースワイド5 CBCテレビ
「こんばんわ」で始まる地元のニュース番組（月～土）18：00～18：30（日）17：00～17：30

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話（731）7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

青少年のための芸術劇場
「狂言」公演
能楽協会名古屋支部主催

能楽協会名古屋支部、名古屋市文化振興事業団、名古屋市教育委員会主催の「青少年のための芸術劇場・狂言」は、三月十四日、名古屋市芸術創造センターで昼・夜の二部制で開催。

番組は次のとおり。

〔昼の部〕「三番叟」　三番叟・佐藤友彦、面箱・佐藤融、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、福井良久、福井良治、大鼓・筧鉱一

「佐渡狐」野村又三郎、野村信行、井上松次郎

「附子」井上松次郎、井上礼之助、大野弘之

〔夜の部〕「三番叟」　三番叟・野村信行、面箱・大矢高義、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、柳原冨司忠、後藤嘉津幸、大鼓・河村総一郎

「萩大名」井上松次郎、大野弘之、野村又三郎

「蝸牛」井上礼之助、野村又三郎、佐藤友彦

なお青少年のための芸術劇場として、三月公演は、名古屋フィルハーモニー交響楽団の交響楽（三月二十四、二十五日）関山三喜夫舞踊団のモダンダンス（三月二十八日）ほか室内楽、ミュージカルなどが上演される。

61年度芸術選奨
文部大臣新人賞
梅若紀彰氏受賞

文化庁は2月26日、昭和六十一年度の芸術選奨文部大臣賞・芸術選奨文部大臣新人賞を発表、「古典芸術部門」から観世流シテ方・梅若紀彰氏が新人賞を受賞した。

芸術選奨文部大臣賞・同新人賞は、演劇・映画・音楽・舞踊・文学・美術・古典芸術・放送・大衆芸能・評論等の10部門で顕著な業績をあげた人、また、今後を期待される人に贈られる賞で、今回で第三十七回目になる。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔3月〕
15日（日）名古屋梅猶会能　（有料）
21日（祭）名古屋桐葉会創立25周年記念能楽囃子大会　（来場歓迎）
22日（日）大蔵狂言会なごや会（来場歓迎）（番組②面）
29日（日）壺泉会大会（来場歓迎）（番組②面）

〔4月〕
12日（日）観世会定式能　（有料）（番組③面）
18日（土）青陽会定期能　（有料）（番番③面）
19日（日）邦謡会　（来場歓迎）
25日（土）名古屋猶謡会　（来場歓迎）
29日（祭）幸友会春の会　（来場歓迎）

〔5月〕
3日（祭）芳扇会　（来場歓迎）
5日（祭）名古屋謡会　（来場歓迎）
9日（土）野村四郎の会　（有料）
16日（土）名古屋九皐会定期能　（有料）
17日（日）やるまい会　（有料）
24日（日）名古屋観衛会大会　（来場歓迎）
30日（土）朔謡会大会　（来場歓迎）
31日（日）下田雄三中部地区連合会大会（来場歓迎）

〔6月〕
5日（金）熱田祭奉納能　（来場歓迎）
6日（土）一謡会・叶石会大会　（来場歓迎）
7日（日）清謡会能　（有料）
14日（日）観世会定式能　（有料）
21日（日）宝生会定式能　（有料）
28日（日）狂言也留舞会　（来場歓迎）

〔7月〕
5日（日）観世九皐会定期能　（有料）
12日（日）朝日狂言会　（有料）
19日（日）観世楽謡会　（有料）
26日（日）青陽会定期能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

小浜に世阿弥記念碑 建立
5月完成めざす
能楽愛好者の運動着々

福井県の小浜に「世阿弥船出之地」の記念碑建立の計画は、本紙六十一年十月号で報道したとおり若州世阿弥記念碑建立会（事務所小浜市堀屋敷七―一―四、井村誠一方）により、能楽愛好者、地元各界の関係者を中心として進められ、昨年末で総予算五百万円のうち二百八十余万円の募金が寄せられ、設計もでき着々準備がすすめられている。

地元の福井新聞も、この世阿弥記念碑の建立を大きく伝え「福井県では、十年前に一度企画されたが、諸般の事情で延びたいきさつがあるが、全国の世阿弥ブームに乗り三年前から再び灯がつき始め新しい小浜漁港の誕生も運動に拍車をかけた。小浜市当局も積極的に協力、建設地の提供を快諾、小浜港の一角にある台場浜公園内に建立地を決定、すでに植樹など周囲の整備は済んでおり、三月に着工五月に完成の予定」と伝えている。

工事費は五百万円、公園内にある「開港記念碑」の隣に約三十平方坪を確保、高さ一坪前後の石垣を組み、高さ二坪の自然石で「世阿弥船出之地」（仮称）と刻まれる。

記念碑建立会では、募金目標を五百万円とし、一口一万円（但し未満でも受付け）、今年五月まで募金を受付けており各界の協力をのぞんでいる。

発起人は能楽関係で三十有余人が参画し、中川福井県知事、吹田小浜市長、小堀三方町長、田中高浜町長はじめ政、財界、文化、観光、商工界、漁業界など各界各層にわたっている。

能楽関係での世話人は、武田小兵衛、武田欣司、武田邦弘および前西芳雄の各氏が当っている。

能楽（三役）研修生募集
後継者養成の三年間教育

国立劇場と日本能楽会・能楽協会は、能楽三役（ワキ・囃子・狂言）の後継者養成のため研修生（二期生）の募集を行っている。

これは、将来能楽三役になるための基礎教育を行うもので、応募資格は中学校卒業以上、原則として二十五歳未満。募集人員は二十名。募集期間はきたる四月二十五日まで、選考は五月上旬に国立能楽堂で試験と面接、健康診断が行われる。

研修期間は六十二年五月下旬から六十五年三月末日までの約三年間。（全日制）受講料は無料。奨学金制度の特典がある。

詳細問い合わせは、東京都渋谷区千駄ケ谷四丁目一八―一、国立能楽堂・養成係（電話〇三―四二三―一三三一代表）。

野村四郎名古屋公演
「羽衣」「藤戸」二番能
5月9日　熱田神宮能楽殿

観世流・野村四郎師の名古屋公演が五月九日（土）熱田神宮能楽殿で「羽衣」「藤戸」の春の曲独演二番能として開催される。

主催・中部日本放送、中日新聞社。開演午後二時。

能組は次のとおり。

能「羽衣」彩色之伝（シテ野村四郎、ワキ西村欽也、ワキツレ飯冨雅介、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・三島元太郎、地謡・観世清和、観世暁夫ほか）

狂言「萩大名」（大名・野村又三郎、茶屋・井上礼之助、太郎冠者・野村信行）

仕舞「邯鄲」（観世暁夫）「井筒」（大槻文蔵）「鞍馬天狗」（観世清和）

能「藤戸」躍跳之伝（シテ野村四郎、ワキ福王茂十郎、ワキツレ山本清、塩田重喜、間・野村又三郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、地謡・大槻文蔵、観世清和ほか）

会員券　A席（指定席）七千円　B席（自由席）五千円、C席（二階自由席）四千円。入場券は、名鉄、丸栄、三越、松坂屋、中日ビル、CBC各プレイガイド。

北国宝生能
4月4日　石川県立能楽堂

今春の北国宝生能は、四月四日（土）石川県立能楽堂で宝生宗家を迎え二部制で開催される。

〔第一部〕能「鷺」（宝生英雄）「葛城」大和舞（大坪十喜雄）狂言「縄綯」（野村万之丞）と仕舞。

〔第二部〕能「草紙洗」（佐野萬）「石橋」連獅子（宝生英照）狂言「悪太郎」（野村耕介）

金沢

能楽（三役）研修生募集

国立劇場と日本能楽会・能楽協会は協力して、能楽三役（ワキ・囃子・狂言）の後継者を養成するため、ただいま左のとおり研修生（二期生）を募集しています。

研修目的　将来能楽三役（ワキ・囃子・狂言）になるための基礎教育を行います。

応募資格　中学校卒業以上、原則として二十五歳未満の者。（昭和六十二年三月三十一日現在）

募集人員　約二十名。

募集期間　昭和六十二年四月二十五日まで。

選考　五月上旬に、国立能楽堂で簡単な試験と面接および健康診断を行う予定です。

研修期間　昭和六十二年五月下旬から昭和六十五年三月末日までの約三年間。（全日制）ただし、研修開始後六ケ月以内に能楽師としての適性審査を行い、正式に合格者を決定し、専攻する役を決めます。また、研修修了後は日本能楽会会員に師事することになります。

研修時間　原則として、月曜日から金曜日までの毎日午前十時三十分から午後五時三十分まで。

その他　受講料は無料です。奨励金制度等の特典があります。

問合せ先　応募手続き等については、左記にお問い合わせください。

〒151　東京都渋谷区千駄ケ谷四丁目十八番一号
国立能楽堂・養成係
電話東京〇三（四二三）一三三一（代表）

国立劇場では、歌舞伎音楽（鳴物・竹本）研修生、文楽（太夫・三味線・人形）研修生を募集しています。

募集期間　昭和六十二年四月二十五日まで。

問合せ先

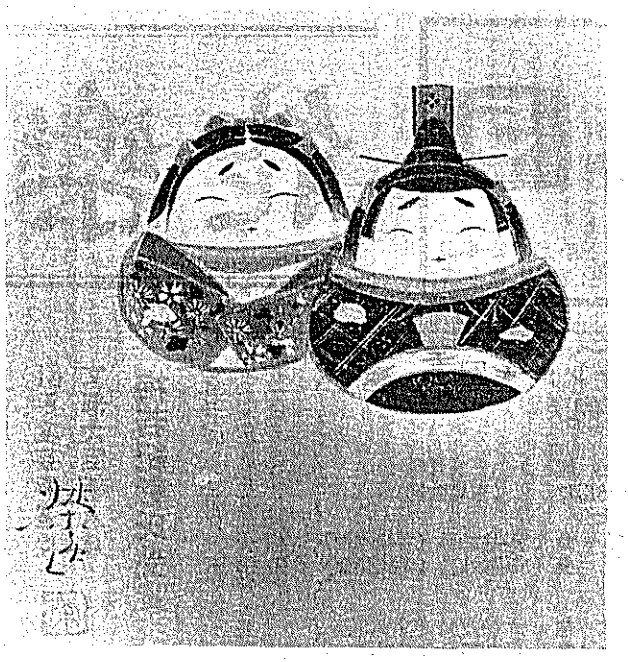
歌舞伎音楽研修生
〒102　東京都千代田区隼町四丁目一番
国立劇場調査養成課
電話　東京　〇三（二六五）七四一一

文楽研修生
〒543　大阪市南区日本橋一丁目十二番十号
文楽劇場調査養成課
電話　大阪　〇六（二一一）二五三一

春雅日記 ⑦⓪

春のあかり

えと文　二井栄逸



春の灯の　あるひは暗く　やわらかく

これは久保田万太郎の句であるが、春の灯はいかにも情緒があってよい。

雛まつりの宵等にともすあかりは、やはりゆらゆらとまたたくほんものの灯がよい。電灯や蛍光燈ではしらじらしい感がする。

昔、母は、三月三日になると、いくつものぼんぼりに灯を入れ、近所の子供達を集めていたことを想い出す。

雛は年毎にお飾りをしないと、蔵の中で泣かれるといい、人間的な感情でとりあつかわれていた。

雛の歴史は古く、平安時代に紙を原料とした立雛（紙雛）が生れ、室町時代には、座雛（人形雛）となり、江戸中期以後は、現代のような雛人形が造られるようになり、年々華美になった。

紙びなはいわば、今の雛人形の原型である。

しかし、絵にかくのには、この紙雛がよく、歴代の画家がかいている。

私は、能雛をよくかく。

男雛に初冠、紋大口、狩衣の中将姿を、女雛には、唐織着流しの小面姿を造型化して名前も能びなとし創始した。

御殿造りのひなだんに、雛がかざられ、ぼんぼりに春のあかりが入ると、雛達の贅をつくした衣装が、まばゆいばかりにきらめき、ささめき合っているように見える。

ひなまつりには、灯がつきものようである。

十年も前のことであった。

京都の大丸で個展を開いた時、祇園のすぐ近くの小路を入ったところだったと覚えているが、芦屋という古風な料亭に招かれたことがあった。

その料亭の門の前には、人力車がかざってあり、あかりがゆらゆらとゆらいでいた。驚いたことに、客は外人ばかり、それに世界の名酒がそろえてあった。料理は近江肉のステーキ。庭を見ると、植え込んだ笹の間にまたたくのはほんものの灯であった。

京都の街屋では、あかりも客を迎えるための大切な小道具として、行燈（あんどん）や、雪洞（ぼんぼり）に高級な和紙をつかい、庭の灯、廊下の灯にも四季折々の色合いを出している。

金春流・伊勢神宮奉納能

金春流の伊勢神宮奉納能は、四月五日午後一時から内宮能舞台で催される。

素謡「翁」囃子「猩々」（鬼頭尚久）能「熊野」（金春欣三）

「隅田川」上演

故橘豊秋氏追悼

大阪能楽観賞会3月公演

大阪能楽観賞会の三月演能は、故橘豊秋氏追悼公演として、三月二十四日（火）大阪能楽会館で辰己孝師の「隅田川」が上演される。

故橘豊秋氏は、大阪能楽観賞会理事、事務局長として十余年にわたり活躍され、五十六年に観賞会が観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞の原動力となり能楽の普及に努力、自らも辰己孝氏の門下として宝生流を研鑽する情熱を傾け六十一年八月四日に逝去された。

公演の番組は次のとおり。

講演「隅田川について」大阪市立大学教授、伊藤正義氏。

狂言「附子」茂山千之丞、木村正雄、茂山正義

能「隅田川」シテ辰己孝、子方・衣斐愛、ワキ中村弥三郎、ワキツレ山本清、笛・貞光義明、小鼓・曽和博朗、太鼓・河村総一郎、地謡・馬場富四夫、相原仁兵衛、衣斐正宜ほか）、午後五時半開場六時始。

問い合わせは、大阪能楽観賞会（大阪市北区曽根崎新地二―四―一四、三島ビル、電話〇六―三四一―三八四七）

広田後援会能

4月5日　金剛能楽堂

広田後援会能は、きたる四月五日（日）金剛能楽堂で催される。

能組は、仕舞「難波」（シテ広田幸稔）

能「西行桜」（シテ広田泰三、ワキ宝生閑、間・茂山千五郎、笛杉市和、小鼓・大倉源次郎、大鼓・中村富彦、太鼓・小寺俊三、地謡広田陛一ほか）

狂言「鬼ノ継子」（シテ茂山千五郎、アド茂山正義）

能「舟弁慶」（シテ広田泰能、子方・河原田慎一、ワキ森常好、間・茂山真吾、笛・杉市和、小鼓・曽和正博、大鼓・河村大、太鼓・前川光長、地謡・豊嶋三千春ほか）、午後一時三十分始。

入場券、前売券四千円、当日券四千五百円、学生券二千円。

申込みは広田後援会（電話〇七五―七八一―一八八五・三四二―七二二―九一二三）金剛能楽堂（〇七五―二二一―三〇四九）

同会は今回で六十八回の歴史を数えるが、今秋十月四日、後援会三十五周年記念公演（第一回）が予定されている。

能・オセロー上演

能シェイクスピア研究会 4月27日、国立能楽堂で

能シェイクスピア研究会（代表宗片邦義氏）は、昨年九月・青嶋ホール、十一月に醒酬荘で「能・オセロー」を発表、昭和六十一年度静岡県芸術祭奨励賞を受賞したが、きたる四月二十七日（月）東京・千駄ケ谷の国立能楽堂研修舞台で「能・オセロー」を上演する。

公演は、英語の原文のまま、謡曲の節付で演ぜられ、日本語訳のつい出台本が用意される。開演午後七時、入場料一般二千五百円、学生二千円。番組は次のとおり。

第一部、仕舞・三上紀史、宗片邦義、笛・竹内明彦「能ハムレット」より。

第二部、能・オセロー（ああ、二度ともどらぬ生命の火よ）シテ（オセロー）宗片邦義、ツレ（デズデモーナ）石田恵代、笛・鈴木省二、小鼓・竹内明彦、大鼓・柯西康仁、地謡・三上紀史ほか。

伊勢

能は、四月五日午後一時から内宮能舞台で催される。

素謡「翁」囃子「猩々」（鬼頭尚久）能「熊野」（金春欣三）

大阪

「隅田川」上演

故橘豊秋氏追悼

大阪能楽観賞会3月公演

大阪能楽観賞会の三月演能は、故橘豊秋氏追悼公演として、三月二十四日（火）大阪能楽会館で辰己孝師の「隅田川」が上演される。

故橘豊秋氏は、大阪能楽観賞会理事、事務局長として十余年にわたり活躍され、五十六年に観賞会が観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞の原動力となり能楽の普及に努力、自らも辰己孝氏の門下として宝生流を研鑽する情熱を傾け六十一年八月四日に逝去された。

公演の番組は次のとおり。

講演「隅田川について」大阪市立大学教授、伊藤正義氏。

狂言「附子」茂山千之丞、木村正雄、茂山正義

能「隅田川」シテ辰己孝、子方・衣斐愛、ワキ中村弥三郎、ワキツレ山本清、笛・貞光義明、小鼓・曽和博朗、太鼓・河村総一郎、地謡・馬場富四夫、相原仁兵衛、衣斐正宜ほか）、午後五時半開場六時始。

問い合わせは、大阪能楽観賞会（大阪市北区曽根崎新地二―四―一四、三島ビル、電話〇六―三四一―三八四七）

京都

広田後援会能

4月5日　金剛能楽堂

広田後援会能は、きたる四月五日（日）金剛能楽堂で催される。

能組は、仕舞「難波」（シテ広田幸稔）

能「西行桜」（シテ広田泰三、ワキ宝生閑、間・茂山千五郎、笛杉市和、小鼓・大倉源次郎、大鼓・中村富彦、太鼓・小寺俊三、地謡広田陛一ほか）

狂言「鬼ノ継子」（シテ茂山千五郎、アド茂山正義）

能「舟弁慶」（シテ広田泰能、子方・河原田慎一、ワキ森常好、間・茂山真吾、笛・杉市和、小鼓・曽和正博、大鼓・河村大、太鼓・前川光長、地謡・豊嶋三千春ほか）、午後一時三十分始。

入場券、前売券四千円、当日券四千五百円、学生券二千円。

申込みは広田後援会（電話〇七五―七八一―一八八五・三四二―七二二―九一二三）金剛能楽堂（〇七五―二二一―三〇四九）

同会は今回で六十八回の歴史を数えるが、今秋十月四日、後援会三十五周年記念公演（第一回）が予定されている。

62年3月・4月 放送予定

〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

15日（日）喜多流「屋島」粟谷菊生
22日（日）狂言「宗論」野村万作、茂山千五郎
29日（日）金春流（新作）「奥の細道」桜間金太郎

◎NHK教育テレビ（午前9時）

3月21日（祝）①能楽界の話題から
喜多流宗家継承、英語能「漂炎」、千鳥の面箱と翁面の歴史的対面ほか
②能「隅田川」（再）梅若六郎ほか

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

5日（日）休止
12日（日）宝生流「雲林院」渡辺三郎
19日（日）喜多流「花筐」喜多六平太
26日（日）観世流「桜川」鵜沢雅

◎NHK教育テレビ（午前9時時）

4月29日（祝）能「高砂」金春流（再放送）
金春信高、鏑木岑男ほか

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

第17回 大蔵狂言会・なごや会

三月二十二日（日）正午始

熱田神宮能楽殿

狂言組

小舞

放下僧　大蔵基嗣
貝盗し　善竹幸四郎

舟船　鬼頭正明
口真似　大蔵基誠
重喜　丹羽節

桑の弓七つに成子　中村つや、河村真理子
鴈金　小山きゆ子
雁酒　高倉昌子
餅酒　増本寿代
道明寺　森貴寛

青葉煉　大蔵基照
二九十八　村松泰子
悪坊　牛田敏明

暁の明星　喜寅栄子、大野文恵
松景清　小野加津子
塗師　岩田栞
猿掛　奥村清子

楽阿弥　柾木信栄
子盗人　松川佳澄
茶壺　立川一枝、博本道子

カーン・テモテ

海道下り三人夫　善竹玄三郎、大蔵弥太郎

（終了　午後四時五十分頃）

附祝言

〔ご入場無料〕

主催　大蔵狂言会　なごや会

事務所　名古屋市西区白菊町3―33　電話〇五二―八三二―一八五

壺泉会大会

三月二十九日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

番組

仕舞　白楽天　三島惠
井筒　加藤春枝

素謡　遊行柳　鳥居千枝子、石附宮部一三
仕舞　田村　鈴木辰夫
籠　大矢洋美

舞囃子　敦盛　嶋田都弥子、筧後藤孝一郎鉱一、鹿取希世
芦刈　大坪由紀子、筧後藤孝一郎鉱一、鹿取希世

仕舞　玉鬘　西尾静枝
葛　内藤悦子

連吟　大原御幸　大橋欣子、山野明子
ロンギ　福島雄一郎、酒井逸夫

素謡　俊寛　前川修、伊藤銈一

独調弱法師　橋本泰子
仕舞　網之段　寄田喜子
籠　戸　福井啓次郎

能　羽衣　加藤定子、杉江元、西村欽也、筧鉱一、和合之舞　飯富雅介、後藤孝一郎、鬼頭喜太郎、藤田六郎兵衛

素謡　桧垣　八神由孝代、泉泰孝

八神敦子
倉地幸子

能　熊野　西村欽也、飯富雅介、河村総一郎、福井啓次郎、藤田六郎兵衛

舞囃子　三輪　柴田うた子、吉田定男、柳原冨司忠、鬼頭喜太郎、森本重一
小袖曽我　小森辰男、吉田定男、柳原冨司忠、森本重一
五段之舞
海士　石川晴子、吉田定男、福井啓次郎、鬼頭喜太郎、藤田六郎兵衛
五段替之型

仕舞　二人静　黒田博、中村美智子
通盛

舞囃子　菊慈童　八神孝充、吉田定男、柳原冨司忠、鬼頭喜太郎、森本重一
松風　米田田鶴、河村総一郎、柳原冨司忠、藤田六郎兵衛
戯之舞
葛城　中川真澄、河村総一郎、柳原冨司忠、鬼頭喜太郎、森本重一
大和舞

狂言　膏薬煉　大矢高義、野村信行

仕舞　賀茂　泉成佳
采女　泉嘉夫
能　泉泰孝

祝言（嵐山）

〔御来場歓迎　入場無料〕

主催　壺泉会

事務所　名古屋市昭和区山里町一〇三　電話〇五二―八三二―一八五

壺泉会舞台　〒六六四　西宮市甲陽園目神山町二六―一七八　電話〇七九八―七三―二四五八

日本能楽会 能楽養成会 研究発表会

後継者養成事業を終了

社団法人日本能楽会（宝生英雄会長）および能楽養成会（広瀬信太郎会長）は、昭和二十九年から現在まで能楽の後継者養成事業を続けてきているが、三月三十一日をもって全面的に終了することになり、その研究発表会を講師の指導のもと、三月九日（月）午後二時から東京・千駄ケ谷の国立能楽堂で開催した。後援は文化庁、国立劇場、社団法人能楽協会。

〔第一部〕舞囃子「養老」（宝生）高橋亘・松田弘之・幸正昭・安福光雄・観世元則、「八島」（金春）辻井八郎・松田弘之・宮増新一郎・柿原弘和、「葛城・大和舞」（観世）関根祥人・藤田次郎・三須信吾・白坂信行・観世元則、「邯鄲」（喜多）井上雄人・藤田次郎・古賀裕巳・安福光雄・吉谷潔、「花月・羯鼓入」（観世）浅見重好・内潟慶三、三須信吾、亀井広忠、「羽衣」（宝生）飯田康貫・内潟慶三・宮増新一郎・柿原弘和・徳田宗久、「海人」（金春）高橋忍・松田弘之・古賀裕巳・内田輝幸・吉谷潔、「船弁慶・キリ」（喜多）狩野了一・内潟慶三・幸正昭・白坂信行・徳田宗久、「乱」（宝生）田崎隆三・藤田次郎・野中正和・内田輝幸・助川治。

〔第二部〕素囃子「神舞」中谷明・穂高光晴・亀井忠雄・金春惣右衛門、「獅子」藤田大五郎・鵜沢寿・安福建雄・観世元信ほかの出演。

謡の口語訳「読謡集」シリーズ

12巻で43曲を集録

〝意味が分って謡いたい〟という願いをこめた、謡の口語訳「読謡集」が神戸の尚謡発行所（神戸市兵庫区七宮町二―二一四、電話〇七八―六五二―一二〇七番）から刊行され、すでに十二巻のシリーズとしてまとまっている。

同誌は、昭和五十八年から第一巻が出され、十二巻で四十三番を集録、原文対訳で愛好者の手引として好評を博している。

著者坂元英夫氏は、謡は決してつづれ錦ではない。日本が世界に誇り得る古典文学であるとの強い信念から読謡集シリーズを刊行。「意味内容を充分に理解してこそ初めて味わい深い謡を謡うことができるのではないか」と、この口語訳の仕事に打ちこんだシリーズとして続刊を期している。

現在までに刊行された十二巻の内容は次のとおり。

〔第一巻〕（初心用上巻）「鶴亀」「橋弁慶」「吉野天人」「大仏供養」「土蜘蛛」

〔第二巻〕（初心用中巻）「竹生島」「経正」「羽衣」「小袖曽我」「猩々」

〔第三巻〕（初心用下巻）「菊慈童」「田村」「東北」「富士太鼓」「紅葉狩」

〔第四巻〕「葵上」「敦盛」「安宅」（原文付）

〔第五巻〕「阿漕」「芦刈」「安達原」（原文対訳）

〔第六巻〕「嵐山」「蟻通」「海士」（原文対訳）

〔第七巻〕「井筒」「岩船」「鵜飼」「歌占」（原文対訳）

〔第八巻〕「善知鳥」「雲林院」「江口」（原文対訳）

〔第九巻〕「班」「老松」「大原御幸」（原文対訳）

〔第十巻〕「女郎花」「杜若」「景清」（原文対訳）

〔第十一巻〕「花月」「葛城」「鉄輪」（原文対訳）

〔第十二巻〕「賀茂」「通小町」「邯鄲」（原文対訳）

◉各巻千円。注文すれば「読謡集」とともに振替用紙が送付される。

観能独語

「西行桜」の面白さ

喜之の持味生きて

二月十五日の観世九皐会で、観世喜之が「西行桜」を舞いました。「西行桜」は面白い能です。夢幻能といっても単式の一場もの。世阿弥作らしい華麗な詞章と豊かな抑揚が凝縮し、全体としてはほのぼのとした桜の風味がただよっています。

老木の桜のウロ（空洞）から出て来る桜の精とあれば、美しい女性を想像しますが、これは男性、しかも神さびた白髪の老体。それがちっとも不自然でなく、なるほど桜の精とうなづけるのが不思議な能の魅力です。

歌舞伎には「関の扉」という舞踊劇の大物があります。ここでは小町桜という老木のウロから、お約束通りなまめかしい女が現れます。墨染という遊女、実は小町桜の精です。関守を相手に廓話を踊ってみせるというしゃれたもの。いかにも江戸歌舞伎の楽しさがいっぱいの名曲です。これが能になると遊女ならぬ白髪の老人、ふざけた廓話ならぬ幽玄な序の舞を舞うという変り方。ともに桜の精の登場する能と歌舞伎の代表作です。聖と俗、といっても、決して能が歌舞伎より高級だとか、芸術的だとかいうのではありません。それぞれに違った日本美の世界です。

ところでこの老人、存外のしゃれもの（皮肉屋ですかな）で、西行が「花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜のトガにはありける」と口ずさんだ歌に、出る早々一矢むくいます。「憂き世とみるも山とみるも、ただその人の心にあり」。桜の精だけに黙っておれない気持はわかりますね。これには西行も参って頭を下げますがこの辺りまでの段どりが大変人間的でほほ笑ませられます。

孤独を愛する西行が「花見禁制」をふれさせながら、花見客の熱意にほだされて庭を開放したものの直ぐ後悔してグチを歌にまぎらわすのが、桜の精を誘い出す動機となっています。このイントロ（導入部）の演出が、もう少し面白ければなあと思いました。一般に能はシテ一人主義に徹する余り、ワキやツレの影が薄くなる、わざと薄くしているきらいがありますがここの場面のような、庶民的、人間的雰囲気のただようくだりを、通り一辺に通り抜けるのは感心しません。屈折した人と自然の交流を、シテの邪魔にならぬよう、一曲の構成を損わぬよう、上手に表現する手はありそうなものでしょう。

これから後は桜の精の一人舞台。序の舞を舞う白髪の老人の姿、動きに桜の花が散りかかるような風情と艶がありました。もっと骨っぽく、もっと枯淡に、もっと冷えた舞台を期待する向きもあろうかと思いますが、これはこれで、喜之の特色を生かして十分楽しめる「西行桜」であったと思います。

余談ですが、「西行桜」に意外のファンがいることを思い出しました。前衛美術家のジャン・ティンゲリーです。「西行桜」を見てひどく感心し、もひとつとねだって「道成寺」を見せてもらったが、やはり「西行桜」の方がはるかに感動的だといったそうです。（観世寿夫報告）。前衛の中でも、特に尖鋭な〝動く彫刻家〟のティンゲリーにこの言あり、日本人以上に能を知るものといえるかも知れません。（M）

名古屋観世会定式能（二回）

四月十二日（日）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

番組

能　田村　梅若紀彰
間　村　高安勝久　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世　茂山あきら
狂言　後見　武田邦弘　片山慶次郎　地謡　高橋忍　加藤保彦　加賀瞭一　今村嘉勇　敏彦　小島一英　井上梅田幸久
青葉煉　茂山あきら　茂山真吾
仕舞　花筐　クセ　片山慶次郎
藤戸　井上嘉久　地謡　梅田邦久　武田和男　本田勲　中村邦弘
能　西行桜　片山九郎右衛門　西村高安勝久　飯冨欽也　杉江雅介　元　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　助川龍夫
間　茂山正義
後見　小島一英　井上嘉久　地謡　須部浩　祖父江修一　清沢一政　松山幸親　梅田信雅　片山慶次郎　武田邦弘　中川雅章　（終了　四時半頃）

附祝言
〔有料〕　主催　名古屋観世会
当日券　七千円（自由席）

青陽会定式能（第三十一期第二回）

四月十八日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞　網之段　今沢美和　田村キリ　生駒里翠　地謡　須部浩　中川信雅　馬場至章　玉木孝男　甫
能　本田勲　清沢一政
養老　杉江高安　飯冨元勝久　雅介　柳原冨司忠　河村真之介　藤田六郎兵衛　助川龍夫
間　佐藤友彦
後見　前野郁子　武田邦弘　地謡　今沢美和　松山幸親　信至　馬場中川　今村祖父江修一　高橋瞭一　加賀敏彦　雅章

附祝言
〔有料〕　主催　青陽会
当日券　三千円（普通席）

熊野

仕舞　賀屋志　島　千手　昭君　地謡　今沢美和　前野郁子　生駒里翠　近藤幸江　加賀敏彦
狂言　後見　梅田邦久　須部浩　久田徹二　地謡　近藤幸江　松山玉木孝男　今村幸親　高橋武島　瞭一邦弘　高橋保彦　一英
清水　井上礼之助　井上松次郎
仕舞　兼平　武田邦弘　隅田川　梅田邦久　地謡　本田清沢一政　久田徹二　祖父江修一　勲
善知鳥　飯冨雅介　後藤孝一郎　河村総一郎　森本重一
間　大野弘之
後見　今沢美和　久田徹二　地謡　近藤幸江　本田清沢　須部小島一英　加藤保彦　梅田邦久　敏彦　子方　鬼頭尚久　前野郁子　中川雅章

附祝言
〔有料〕　主催　青陽会
当日券　三千円（普通席）

中日新聞本社・名古屋市中区三の丸1丁目6番1号　電話052―201―8811
東京本社・東京都港区港南2丁目3番13号　電話03―471―2211
北陸本社・金沢市香林坊2丁目7番15号　電話0762―61―3111
東海本社・浜松市葵新町45番地　電話0534―21―7111

MOA美術館定期演能会

本年度のMOA美術館定期演能会は、四月二日（木）を初回として六回開催、とくに六月十六日には五周年記念能が行われる。

。四月二日（木）狂言「佐渡狐」（野村万作）能「求塚」（観世元正）

。五月十七日（日）狂言「入間川」（山本東次郎）「雷」（金剛巌）

。六月十六日（火）五周年記念能「弓矢立合」（金春信高、金剛巌、喜多節世）能「賀茂」（観世銕之丞）狂言「鍋八撥」（野村万之丞）能「鷺」（宝生英雄）

。九月五日（土）狂言「察化」（茂山千之丞）能「班女」（辰巳孝）

。十月一日（木）狂言「萩大名」（大蔵弥太郎）能「安達原」（藤波重満）

。十一月二日（月）狂言「二人袴」（和泉元秀）能「蝉丸」（大坪十喜雄）

海熱

信玄袋

—本・森田曠平文集ほか（その二）—

「今年の能界（東京）も春を迎えて、次第ににぎやかになります」と二月末に山崎有一郎氏から喜多流継承能のパンフを添えて、いただいたお便りにあった。名古屋にもその様相を感ずる。三月の東京は老女物が三回ある。金春・宝生・観世三流（演能順、観世は素謡）。

× × ×

六二年の大学共通一次試験の国語の第一問。それは藤原定氏の「現代人の形成」からの出題。本文百六十頁（八章）のうち、第二章の〈芸術における人間の形成〉の中から。設問が七つあって、その第七は〝本文に述べられている芸術活動と芸術作品の関係はどのようなものか〟。これは演能にもつながる。

色の変った表紙の本を手にしてなつかしかった。恩師谷川徹三先生の序文がつく。同氏は法政大で谷川教授より哲学を教わる（昭三から）。序文には師が教え子に対するやさしさと興望の広さ・きびしさが温かく胸に伝わる。これは二十三年春の本で文化書院発行。

付。これより先き同書院から谷川先生の「知識人の立場」が刊行されている。なお右に続く二つのことを削ったが、その方が面白かったかも知れない。

× × ×

放送。

学校放送中・高年。古典芸術入門・能。NHKTV（以下同）。一月十六日（金）第一回。講師権藤芳一氏、きき手中江アナ。きっしりつまって次から次へ移って行く資料のなかに権藤氏の寸言がきらりと光る。概要（歴史ほか）・能面・舞台と装束・謡曲と音楽・舞からなる。もう一回能の全体像（一曲中心）がほしかった。

船弁慶・重前後著・早装束・観世元昭・ワキ森茂好・間野村万之介。

ただし撮り方で、後シテ橋掛のはげしい動きを松と勾欄越しに写したが、これはワキ柱（子方）の方から大部分を取り上げた方が一層効果的では。また前シテ（中央）の姿が光りすぎるときあり（下にいるカタチとオモテは佳）二月十一日。これは正月の高砂でもオモテ（前）が黄色がかっていた。私のテレビだけのことか。

そのあと森茂好氏が増田正造氏と対談をかわす。茂好氏曰く「能には座禅の心境（境地）で」。古趣ある佳言と思った。俳句の雅味も感じさせる。別の機会に元昭氏の竹を割ったようなさらりとした感懐が聴きたい。

× × ×

森田曠平文集・森田曠平。大日本絵画。

手ごたえのする本をあけると、まず「為此春酒／以介眉寿」の二行が目に入る（詩経国風一。あとがきに悉し。此ノ春酒ヲ為リテ／以テ眉寿ヲ介ク）。そしてカラー絵の桜川・歌占・阿弥陀堂、雨月物語、月夜の竜神ほかが並ぶ。画の中の人物のあの目の〈黒目〉が魂を動かす。文章（文学〈古典〉と画業と自伝）の方は画想深くかつ美しい。

安田先生入門の頃／花伝書／中世へのあこがれ／一年一作／旅の日々ほか珠玉のエッセイ。制作覚え書きを第五部に据え、収録作品一覧・画暦略年を載せる。あとがき佳。良書。なお同氏は能にくわし。六一・十一月。

謡曲の音楽的特性・小島英幸。音楽の友社。岐阜大（教授）退官記念出版に由る。

紹介は能楽タイムズ・〈本のすすめ〉欄を参照されたし。現在大垣女子短大教授。六一・一月（第二刷）。

付、岐阜県根尾能郷の謡に触れらる。能郷で一緒したことあり。

× × ×

観世・二月号に野村梅子さん（故万蔵夫人、俳句歴長し）が明治三五年七月第一号の「能楽」に載った〈能・狂言と俳句〉について雅文を寄せらる。「楽しむ句謡」。ゆかし。受贈。

金剛・一二六、一二七号ともに佳篇多し。〈父清彦のことなど・塚本秀雄〉ほか。秀雄氏は少年時代金剛右京氏に可愛がられる。金剛流より観世流へうつる（蕗之門、長く名古屋九皐会に属し、現在東京に）。同誌一二五号の「山口光夫少年〈秀雄氏幼友達〉の生涯」関連。貴重な資料。西一祥氏の〈世阿弥とその子らに関する疑問点〉も。受贈。なお、能楽タイムズ三月号の金剛永謹・山崎有一郎両氏対談は永謹能観の広い展望を強く優雅に示して燦銘深し。

× × ×

訂正。信玄袋二月号で、Rとテレビが〈FMと云々、能芸即金春流が能芸師云々、流祖が流の一字になっていました。お詫びして訂正します。

（野村広二）

◆梅見月の舞台から（その二）

「観世会」と「九皐会」

竹尾邦太郎

「白髭」　一昨年夏梅田邦久の上演があったが稀曲であることに変りはない。真ノ次第（六郎兵衛・舞一郎・鉱一）でワキ勅使（欽也）がツレを伴い威風四辺を払って出ると舞台が締まる。初能の清爽は先ず囃子方とワキの好演で極まった。

シテ漁翁（元昭）。淡い褐色の無地に紛う細い縦縞の裂斗目に同色の濃い目の水衣は、やや賤しいとされる笑尉にも郎に稀な品の良さを感じさせる。挙措鷹揚で、勅使に対しても悪びれず、正中で水衣の肩を下し、寛ぐ気分はゆったりとした居ケセにもよく現れた。往古の物語に時折ワキにアシラウあたりは話好きの老人の感じが伸々良かった。特に、話に興が乗り、〈開闢し給へ〉と今にも立上らんばかりに力漲る心持を双肩に現わした勁さは、一漁翁に非ずの感を強く印象づけた。

アイ（友彦）は末社神。立シャベリは上気した興奮が騒がしい程。〈めでたかりける滝とかや〉と三段ノ舞を舞うが、この一種狂躁の騒々しさは先代秀雄が得手としたもので、友彦にその面影を見て懐かしかった。

後は地（元三郎・徳三・邦久・一英ら）の一声を受けて作物の中から後シテが謡い出し、引廻が下されると、鳥兜・鼻猩悪尉・白垂・白地袷狩衣（エモン）・茶半切姿で床几に掛かっている。将に圧倒的な存在感で堂々の貫録。魁偉な容貌の持つ重厚な雰囲気は楽（がく）で存分に発揮され、厳重（げんちょう）の中に精神的な深さも加わって悠然とした風格が見事だった。ツレ天女（芳宏）と竜神（芳伸）の相舞は、その重々しい空気を払拭するかの様な躍動感が好対照。走り込みを見送ったシテは左右の袖を巻き上げて常座へズカと行き、両袖解いて左袖返すと中正奥を見て二つ踏みトメた。沈潜する重い印象とは裏腹に、何か大きなものが胸中を通り抜けていった様な、そんな気分がした。偉丈夫元昭の代表的な舞台の一つであろう（1時間50分）。

「素袍落」　シテ太郎冠者は松次郎。酔態に益々磨きがかかり虚実が知れない。盃事も上戸の機微を実に旨く衝き、軽いは気味が悪い、など身につまされる。くどきに困惑するアドとの絡みも上々（28分）。

「葵上」　鮮やかな赤い出小袖が病臥の葵上であるだけに一際なまめいた感を与える。ツレ巫女（完治）が座着くと同時にワキツレ臣下（広谷和夫）が登場楽なしで出ると名ノリ、巫女に言い付けてアヅサを持ち（ひっそりと思を籠め）、詰めていた巫女と、主命に傍目も振らずやってきた臣下。深いしじまの中に重苦しい緊張があり、シテの登場に対する期待感をいやが上にも高める旨い作劇術である。

アヅサのうちにいつの間にか一ノ松に姿を見せたシテ六条御息所生霊（元正）。白地金箔・黒地丸紋尽シ縫箔・赤地枝垂桜扇面散シ文様唐織霊折姿のシテは、恋の懊悩に窶れてぞっとする美しさである。舞台に入り、次第から上歌まで、沈痛な呪詛めく独吟は上廻の冷たい怖さを窺わせ、感傷に溺れず暗い情熱を燃やすクドキや、枕ノ段で見せた明快な型の凄艶味更に、〈尚も想ひは増鏡〉の胸ザシの切なさなど、宗家元正の端正な持味が充分に発揮された。後場は冥い情念の世界に強烈な憎悪を秘めたシテが、ワキとの闘争に一閃の光芒を放って界華するところなど潔かった。ワキは珍らしく福王流指吸雅之助。時々は遠来のワキ方の出動があると、舞台の雰囲気もまた変ろうというものである。好演（1時間8分・2月8日・観世会）。

「西行桜」　山桜らしく白い桜花を挿した紫の引廻の山が大小前に据えられる。ワキ西行（欽也）がアイ能力（松次郎）を伴って出る。度々言われることだが隠栖の西行に大口は不似合（装束付にはそうあるが）。それかあらぬかワキのサシは遁世出家の西行にしては恰好をつけ過ぎて重々しく厭世の拗ねたところが見られない（習物故か）。さて、花見禁制を申し付けて置き、その舌の根も乾かぬ先に花見客を引き入れるのも理解しかねるが、上京辺りの富裕な風流人とあればまた話も別なのであろう。それにしてもくどいようだが、〈捨人も花には何と隠家の〉であり、「捨てて住む世の友とは」、なのである。

地下歌、〈家路忘れて〉で引廻が取られると、ワキツレ一同は立って切戸へ抜けたが、この場合、作物のシテを見て早々に立ち去るといった印象を与えるのは否めない。引廻が取られる前に立つべきだろう。（1時間34分・2月15日・九皐会）。

× × ×

に白垂・黒風折、茶の単狩衣は枝垂桜文様で露は白・草色大口と如何にも老桜の精らしい気品で端然と床几に掛っている。「花に浮世の科はあらじ」、とワキにアシライ、〈花も少なく枝朽ちて〉と立って作物を出ると、〈御法なるべし〉とワキ正に下居してワキに向かい合掌。クリで立つとワキ正から正中に出て正に直シ、サシを謡う。

以後地との掛合。〈近衛殿の〉とワキにアシライ、一足詰めて一足引き正に直スと地のクセになる。クセ舞・序ノ舞は淡々たる情趣の中に老桜の精の気骨を見せ、力強い足拍子、心を題に残して爪先を出す老足の運ビ具合の巧妙に喜之の細心緻密さが十分窺われた。〈待て暫し〉は立った儘招き、〈白むは花の〉と山に挿した花を、〈影なりけり〉と下を薄く見た。清閑とした境地がそこに在った（1時間34分・2月15日・九皐会）。

× × ×

素謡と仕舞の会

四月十九日(日)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

名古屋猶諷会春の大会

四月二十五日(土)午前九時三十分始

熱田神宮能楽殿

面打教室　於名古屋・栄朝日神社
毎週木曜日及び土曜日（それぞれ月4回）
（教室の見学・能面お求めになりたい方お気軽におこし下さい）
日本能面巧芸会
会長　林龍雲
事務局　名古屋市中区錦1丁目3—31　丸満ビル3F　晃栄化学内　電話(052)211—4451

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1　電話（291）2488—9　振替東京3-3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入　電話（231）1990　振替京都1—113

割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）
電話241—0248

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画
名古屋営業所　名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　TEL（052）571—5816
岐阜市北野町20—2　TEL（0582）63—9869

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1
電話（291）2488—9　振替東京3—3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話（231）1990　振替京都1—113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

宝生流能「経　政」
観世流能「東　北」
6月5日　熱田祭奉納能

能楽協会名古屋支部（内藤泰二支部長）主催の「熱田まつり奉納能」は六月五日（金）熱田神宮能楽殿で能二番、狂言一番が上演される。入場は無料。

宝生流能「経政」（シテ玉井博祐）

観世流能「東北」（シテ清沢一政）

狂言「しびり」（野村又三郎）

大衆能は愛知文化講堂で

6月20日（土）開催

また大衆能は六月二十日（土）愛知文化講堂で行われる。演能は次のとおり。

観世流能「賀茂」（シテ祖父江修一）

観世流能「楊貴妃」（シテ梅田邦久）

宝生流能「殺生石」（シテ佐藤耕司）

狂言「悪太郎」（野村又三郎）

岐阜護国神社奉納
鵜　篝　能

岐阜護国神社大祭奉納「鵜篝能」は、四月九日（木）岐阜県護国神社神苑能舞台で催された。

主催中日新聞本社、桂会、朗声会

午後四時開演で、囃子、「唐船」「松風」「善知鳥」「山姥」仕舞独調、連調など二十数番で火入れ式が行われた。終番近くで降雨となり青嵐会館に会場をうつし、狂言「二九十八」能「羽衣」が上演され、二百人を越える観衆で最後までにぎわった。

九世福井五郎師をしのぶ
三十三回忌追善能
9月23日　熱田神宮能楽殿で

中部地方の能楽界に大きな足跡を残した幸清流小鼓の福井家九世福井五郎氏の三十三回忌追善能が今秋九月二十三日（祭）熱田神宮能楽殿で催される。

主催　福井啓次郎、福井良久、福井良治各氏。

演能は、宝生流能「砧」「天鼓」の二番はじめ狂言、一調一管、囃子、一調、独調など。

予定番組は次のとおり。

囃子「海人」（三川淳雄）

独調「経政」（当山孝道、幸正昭）

囃子「高野物狂」（金井章）

一調一管「江口」（大坪十喜雄笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井良久）

一調「女郎花」（内藤泰二、小鼓・幸義太郎）

能「砧」（シテ近藤乾之助、ツレ水上郷和、ワキ野口敦弘、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・鬼頭喜太郎、間・佐藤友彦、地謡・金井章ほか）

狂言「宗論」（野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助）

能「天鼓」バンシキ（シテ辰巳孝、ワキ野口敦弘、笛・森田光春、小鼓・福井良治、大鼓・吉田定男、間・大野弘之、地謡・大坪十喜雄ほか）

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮楽能殿）

〔4月〕
19日（日）邦謡会・素謡と仕舞の会（来場歓迎）（番組①面）
25日（土）名古屋猶謡会（来場歓迎）（番組①面）
29日（祭）追善会幸友会（来場歓迎）（番組②面）

〔5月〕
3日（日）芳扇会大会（来場歓迎）（番組②面）
5日（祭）巽会大会（来場歓迎）（番組③面）
9日（土）野村四郎名古屋公演（有料）（番組③面）
16日（土）名古屋九皐会定期能（有料）（番組③面）
17日（日）やるまい会公演（有料）（番組④面）
24日（日）名古屋観衛会大会（来場歓迎）
30日（土）萠謡会大会（来場歓迎）
31日（日）下田雄三中部地区連合会大会（来場歓迎）

〔6月〕
5日（金）熱田祭奉納能（来場歓迎）
6日（土）一謡会・叶石会大会（来場歓迎）
7日（日）清韻会能（有料）
14日（日）観世会定式能（有料）
21日（日）宝生会定式能（有料）
28日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕
5日（日）観世九皐会定期能（有料）
11日（土）能を楽しむ会・名古屋第一回公演（有料）
12日（日）朝日狂言会（有料）
19日（日）観世業謡会（有料）
26日（日）青陽会定期能（有料）

〔8月〕
8日（土）名古屋新能（有料）
熱田神宮境内・特設舞台
9日（日）司宝会（来場歓迎）
16日（日）名古屋官庁実業団全国大会（来場歓迎）
23日（日）正風会後援会能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

素謡と仕舞の会

四月十九日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞
放下　僧小歌　今沢美和
蝉丸　本田勲
葵上　清沢一政
鞍馬天狗　須部甫

素謡
実盛　若麻績菊雄　山本泉　三口謙介
西行桜　兼田元次　都築正三郎　磯谷行雄
松風　須田豊子　西川喜代子　木村ひで
景清　佐藤英生　竹内英雄　都築鍵二　橋本正晴
仕舞
菊慈童　二木暉子
羽衣　加藤千晴
班女　徳田文代
山姥　竹中洋子

素謡
砧　松木ひで　小林冨美子　半田智子　須田豊子
仕舞
老梅　高沢寿美子　小田澄子　岡田春江
野宮　水野美代子　坂野嘉子
船弁慶

素謡
鸚鵡小町　西川喜代子　深川寿美子　高沢寿美子　丹羽久子　井上苑枝
仕舞
屋島　柳クセ
遊行玉之段　占クセ
歌鵜

素謡
三山　小林冨美子　小野田正子　半田智子
仕舞
俊成忠度　丸井寿子
源氏供養　加藤井知子
芭蕉　坂野嘉子
殺生石　宮川千尋

素謡
姥捨　西矢義雄　田中純一
仕舞
氷室　山本泉
弱法師　磯谷行雄
土車　妹尾久
女郎花　三口謙介

番外仕舞
静　加藤千晴
立衆　徳田文代
姉和義経　二木暉子
竹中洋子

素謡
正尊　丹羽久子　深川寿美子
起請文

番外仕舞
敦盛クセ　片山清司
笹之段　片山九郎右衛門
嵐山　梅田邦久

（終了予定　六時半頃）

〔御来場歓迎〕
主催　邦謡会　梅田邦久

名古屋猶謡会春の大会

四月二十五日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡
七騎落　川口恵子　木村勁子　三木秀男
松風　安藤節子　井戸和男　菊池重郷
朝長　鈴木八寿　高橋京子　熊沢光俱　菊池敏子
忠度
弱法師　熊沢恵美子　木村実　池内光之助
山姥　井上種子　梅若盛義　岡田晃一
道成寺

間　野村又三郎

仕舞
富士太鼓　木下志げ子
羅太鼓　安藤恭子
大江山　高木玻留　田辺和永
籠　日比野辰巳
笹之段

舞囃子
卒都婆小町　杉田合子　筧鉱一　松久素子　藤田六郎兵衛
砧　後　奥田敏子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
半蔀　高橋京子　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
天鼓　熊沢光俱　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

仕舞
吉野天人　村田有歌子
竹生島　菊池紀子

舞囃子
遊行柳　井上種子　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
山姥　菊池敏子　河村総一郎　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世
熊坂　立廻り入　鈴木八寿　筧鉱一　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世
替之型
番外舞囃子
難波　梅若盛義　筧鉱一　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世

〔御来聴歓迎〕
主催　名古屋猶謡会　梅若盛義

連絡所
〒465　名古屋市名東区平和ケ丘三—七六
日車マンション四〇四
能沢恵美子
電話〈合当〉七八二—六九七三番

春雅日記 ⑦1

花のうたげ

えと文　二井栄逸

昨日の日暮れ時、薄紫にけむっていた桜の梢が、一夜明けると、もののみごとに一度に開花してあたりを明るくさせています。

薄寒い日が四、五日つづき、そして雨模様の日が二、三日つづいた次の日の朝のことです。この桜雨をしとどにうけたつぼみは、手足を思いきりのばし、一度に開花して、春爛漫をうたっています。

爛漫という言葉が、桜の為にあったかとうなづかせる程にたっぷりと、華やいで咲いてくれるのが桜の最上の姿だと思いますが、常盤木の中に交って咲く桜の風情もすてがたいものです。

桜はやはり日本という国土の自然によくあっています。

植物学上では、桜はバラ科サクラ亜科サクラ属に入っている花木で、特定の植物の名ではありませんが、古来より花と言えば、さくらの事をさし、花王と称せられ、我が国花となった以上、特定の花木であっていいような気もします。

桜は日本に一番種類が多く現代では園芸品種も無く程多いのです。

桜はいったいいつの頃から日本に現れたのかは知る由もありませんが、「古事記」に木花開耶姫（このはなさくやひめ）のことが出ていますが、木花はさくらの花を意味し、開耶（さくや）の音がそのままサクラの語源になったという説もあります。

何はともあれ、私は先づ第一に山桜、樺桜（かばざくら）、吉野桜、糸桜、うすずみ桜、彼岸桜、八重桜、さと桜と順に好みます。

ねがわくば　花のもとにて　春死なむ　そのきさらぎの　もちづきの頃
—西行—

さざ浪や　志賀の都は　荒れにしを　昔ながらの　山桜かな
—忠度—

願わくは、花の時に、この花の下で自らの死を死にたいとうたった歌人の心根はまさしく桜に同化してゆく、生死を超えた心の世界であろうと思います。

「源氏物語」の中では、紫式部が、源氏の大事な人であった紫の上を樺桜と言っています。

樺桜は山桜の一種で、葉はひがんざくらに類して青芽です。

吉野桜は、そめいよしのといいますし、糸桜は枝垂桜のことをいいます。

山桜の歌にはあの有名な本居宣長の歌があります。

敷島の　大和心を　人問わば
朝日に匂ふ　山桜花　—宣長—

この歌は、日本における山桜の地位をますます決定的なものにしてしまいました。しかし、この歌を当時の武士の精神に結びつける考え方は、桜の歴史とは関係はありません。

唯、山桜が日本の国民性によく合った花であることはたしかです。

山桜とならんで私の好きな桜はうすずみ桜です。花は白色で一重弁の間から緑色のがく片が見えますが、若芽の色は薄茶がかった緑色なので、色感がどことなく薄墨色をしているのでこの名がついたのだと思います。よく水墨画のお稽古に用いるモチーフです。

又、さと桜は、野生の桜に対し園芸種のさくらを里桜とよばれています。（カットは薄墨桜）

ワシントンで能公演

「石橋」「棒縛」など

金剛流と大蔵流狂言

京都の社団法人・海外と文化を交流する会、京都新聞の主催で、金剛流と大蔵流狂言がアメリカ・ワシントンで四月九、十日の二日間、海外公演を行った。

この企画は、ワシントンで毎年行われる「日本さくらまつり」が今年七十五周年をむかえ、外務省の日本総合紹介週間の企画にそったもので、わが国古典芸能を紹介文化交流を深めるものである。

この公演には、金剛永謹氏を団長として、広田陛一、今井清隆、谷口宗義、福田道一、杉市和、曽和正博、河村大、前川光長、茂山正義、茂山千三郎、川上孝也の諸の能・狂言団で編成。

四月九日、十日の二日間、ワシントン市のジョージ・ワシントン大学リスナー・オーディトリアムで上演、演能は、半能「石橋」狂言「棒縛」素囃子「融・舞返」仕舞「網之段」など。なお一行は四月十二日帰国した。

喜多流宗家継承

襲名披露能

喜多流十五世宗家・喜多実氏は昨年十月二日逝去されたが、長男長世氏が宗家を継承、二月八日東京・国立能楽堂で、喜多流宗家継承ならびに六平太襲名披露能が催され、新宗家は「鷺」「石橋」、弟・節世氏は「草紙洗小町」を上演、各流宗家はじめ代表と喜多流職分の出演で盛大に行われた。

61年度芸術院賞

狂言方　野村万之丞氏受賞

か講　月開　ス

京都新聞社主催の「能楽セミナー」が五月から開講する。こ

講師　金剛流職分・広田陛一師
広田幸稔師
入会金　三千円、受講料月額五千円（別にテキスト代実費）

名古屋

狂言やるまい会

親と子の競演

5月17日　熱田能楽殿

狂言やるまい会（野村又三郎師主宰）は、今回第三十回の公演をむかえ〝親と子の競演〟をテーマに、茂山千之丞父子による「千鳥」野村又三郎父子の「朝比奈」茂山千五郎父子の「貰聟」野村万作父子の「二人袴」の狂言四番を五月十七日、熱田神宮能楽殿で上演する。

午後一時開場。午後一時半開演。（番組④面）

巽会大会

五月五日（祝）九時半始
熱田神宮能楽殿

野村四郎名古屋公演

＝春の曲独演二番能＝

五月九日（土）午後二時開演

九世福井五郎三十三回忌　追善

幸友会

四月二十九日（天皇誕生日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

囃子組
源氏供養　有賀滋子　吉田定男　小井須磨子　森本重一
二人静　吉田定男　川渕泰子　森本重一
吉野天人　清沢一政　河村真之介　手嶋なみ江　鬼頭喜太郎　森本重一
杜若　奈倉早苗　吉田定男　深見しげ　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
安宅　勧進帳　竜流　筧鉱一　波崎宗子
羽衣　幸さゆり　河村総一郎　幸久子　森本重一
梅枝　吉田定男　坂本訓子　藤田六郎兵衛
女郎花　深見一枝　鬼頭英二　後藤孝一郎　森本重一
楊貴妃　吉田定男　須賀黎子　森本重一
（宝）岩船　吉田俊彦　吉田定男　福井博之　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（宝）紘上　林治代　河村真之介　幸正昭　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
遊行柳　鈴木一雄　竹内澄子　筧鉱一　大竹あや　助川龍夫　森本重一
（宝）乱　福井良治　筧鉱一　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（宝）桜川　林佳代子　河村真之介　柳原冨司忠　森本重一
（宝）野宮　筧鉱一　藤田静代　藤田六郎兵衛
砧　前　河村総一郎　大西末野　森本重一
砧　後　山本一　河村総一郎　福井良久　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（宝）当麻　筧鉱一　坪井香容子　助川龍夫　藤田六郎兵衛

番囃子
法　伊藤よし　内寺田鈴子　局松久素子　渡部知江子

大原御幸　山田大野まさ喜子　地謡手嶋なみ江　福井啓次郎　河村総一郎　鹿取希世

野宮　高橋暖一　河村総一郎　高橋千紗　石井鍾子
旅　立松香子　河村大　藤田六郎兵衛　鹿取希世
百万　泉河村久美子　鹿取希世

番外一調（喜）篭太鼓　長田聰　筧鉱一　谷口三代　助川龍夫　鹿取希世　幸義太郎
高砂　中川雅章　鬼頭英二　壬生陸誉　鹿取希世
小鍛冶　河村総一郎　日比一寿　藤田六郎兵衛
（喜）井筒　筧鉱一　千種恵子　鹿取希世
桜川　生駒里翠　筧鉱一　岩崎透　鹿取希世
船弁慶　高木美智子　大島英江子　岩崎鉱一　島崎浩子　泉田法子　鹿取希世

連調（能鉢）士太鼓　大島英江子　島崎浩子　泉田法子

西王母　前野郁子　鬼頭英二　水谷千鶴子　助川龍夫　鹿取希世
老松　祖父江修一　河村智永　上野　助川龍夫　藤田六郎兵衛
道明寺　下田雄三　河村大　水野たづ子　助川龍夫　藤田六郎兵衛
羽衣　岩本あや子　高橋祥子

連調　海士　佐藤伊藤　中村斉藤　悦子君子　飯田金井　節子　高木吉野
須磨源氏　加賀敏彦　筧鉱一　犬塚団美　助川龍夫　藤田六郎兵衛
松風　河村総一郎　寺田鈴子　節子　鹿取希世
融　河村大　松久素子　助川龍夫　藤田六郎兵衛

十三段之舞　福井社中　幸友会

〔御来場歓迎〕主催　幸友会

芳扇会大会

五月三日（日）十時始
熱田神宮能楽殿

発声仕舞　嵐山　奥川恒治　田村　中所宜夫　放下僧小歌　高橋暖一
舞囃子　高砂　日野敦子　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
船弁慶　林幸世　河村大　柳原冨司忠
素謡　定家　岡本照　森田幸子　前　奥川恒治　宮本正彦　加藤保彦　高橋暖一　長山禮三郎
安宅　井上正吾　粉川寿雄
舞囃子　胡蝶　菊地民子　筧鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
松風　黒岩美代　筧鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
素謡　野宮　浅野はる子　五木田三郎
能　羽衣　野田道子　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
和合　青木武弘　宮本正彦　加藤保彦　中所宜夫　高橋暖一　長山禮三郎　佐々木勝輝　駒瀬直也
後見　奥川恒治　観世喜之　地謡　日野八重子　中谷久美生　玉之忠　浦口おき子　粉川寿雄
仕舞班　女　宮士太鼓　殿　度
舞囃子　唐屋　船　羽田ふさ　河村大　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
島　久藤日出　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世
雲林院　野手貴美子　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
海士　北田智恵子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
番外仕舞囃　波　観世喜之　千葉県浦安市東野三丁目十六番地九号　芳扇会

61年度芸術院賞
狂言方 野村万之丞氏受賞

日本芸術院（有光次郎院長）は三月二十七日、六十一年度（第四十三回）の日本芸術院賞に十二氏を選出、四月四日の総会で正式に決定した。

受賞は、第一部（美術）第二部（文芸）第三部（音楽・演劇・舞踊）で各部会から四人ずつで能楽界から狂言方・野村万之丞氏（五七）が受賞した。

野村万之丞氏に「能狂言の優れた演技」に対して。幼年時代から父万蔵氏の厳しい指導を受け、正統な狂言にふさわしい力量を備え演技は円熟の度を増し、後進の指導にも力を尽くした業績を顕彰。

岡崎 葵博で「国栖」上演
4月29日午後6時半から

徳川家康のゆかりの地、岡崎市では、三月二十一日から五月十七日まで「葵博覧会」が開催され、会期中の四月二十九日から夜も開催されることになり、その初日の夜に能が上演される。

とき　四月二十九日（祝）午後六時半始、会場は葵博会場内テント劇場。

仕舞「杜若」（近藤幸江）「船弁慶」（清沢一政）

能「国栖」（シテ泉嘉夫、姥・清沢一政、天女・近藤幸江、子方・八神光栄、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、杉江元、笛・森本重一、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・吉田定男、太鼓・池田茂、間・野村又三郎、野村信行。

後見・小島一英、前野郁子。

地謡・久田徹二、武田邦弘、山本正人、三島憲、須部市、松山幸親、泉雅一郎、八神孝充）

観能独語
着想の素晴らしさ
名曲、名手のローソク能

「文芸春秋」三月号に山本夏彦氏（室内編集長）が「芸人というもの」というコラムで、「宝塚の女優もプロ野球の選手も芸人だ」と書いています。相撲はともかく野球選手を芸人扱いは、ちょっとかわいそうな気がしないでもありませんが、高校野球は別として、プロ野球ともなれば、れっきとした商売です。野球という「芸」でファンを楽しませる選手は、芸人といわれても仕方がないかも知れません。

「芸人」という言葉は昔からなんとなく卑しいニュアンスがつきまといがちですので、いまでは「芸能人」という呼称が好んで使われます。別に芸人が芸能人に出世したわけではなく、言葉の意味や内容はほとんど変りはないのですが、これまたなんとなく、近代的でスマートな感じがするところが味噌です。落語、漫才、浪曲、邦楽から歌謡歌手、クラシック、ポピュラーの洋楽家、新旧俳優までなんでもござれで至極便利です。

ところで能楽界はどうですか。広い意味の芸能人には違いないが舞台一本の能役者といわれる専門家はそう多くありません。素人のお弟子さんをとって、「先生」「先生」と奉られるだけのご仁も意外と多い。こうなると能楽師という呼び名もどうかと思われますし、厳密には芸能人ともいいにくい。能役者から謡の先生までひっくるめて、漠然と「能楽人」とでも呼ぶ方が無難かも知れません。

「芸能人」はポピュラー過ぎる、通俗的過ぎるとあって、「芸術家」と呼んでほしい向きもあるようです。しかし芸能人と芸術家の間に一線を引くことは大変むつかしい。芸術賞をもらったとか、無形文化財の指定をうけたとか、外国のコンクールで上位入賞したとか、そんなことは芸術家の資格になりません。学歴、芸歴、勲章などは単なるアクセサリーに過ぎない。問題は本質です。永遠の生命に生きるのが芸術家だとすれば、現世の人気にしばられがちな芸能人は分が悪い。

梅若万三郎、野口兼資、喜多六平太など不朽の「名人」でも、芸術家とはいいませんね。いっていえないことはないが、なんとなく抵抗を感じます。人気あってこその芸能人のつらいところでしょう。しかし、いいじゃありませんか。名人は芸人の最高峰です。芸人根性に徹した彼らの芸は、翻訳調の残る芸術家より、よっぽど純血で立派です。

3月18、19両日、名古屋芸創センターで、能と狂言に親しむ会のローソク能がありました。大きなローソクをぼんぼり風に紙につつんで舞台の周辺に立て、古風な効果をねらった趣向は面白かった。主催者の話では〝本邦初演〟とか、この着想は素晴らしいと思いました。しかし折角の着想を一〇〇パーセント生かすためには、ローソクだけでなく、背景、天井、両袖の垂れ幕などを含め舞台全体に、もっと神経を使ってほしかった。ありきたりの設備の流用は、ローソクだけと目立たせる結果となり着想負けという感じがしないでもない。これも、いままで試みられて来た照明能の変り種に過ぎない、では残念至極です。いい線をいってるだけに、つい欲が出ました。

悪しからず。

演者（18日「松風」片山九郎右衛門▽19日「砧」観世銕之丞は、東西の一流能役者だけに、なかなかの好演で、満員の観衆を満足させ、舞台構成のチグハグを忘れさせました。やっぱり「役者」ですなあ。並みの能楽師では、こうはいかなかっただろうと思いました。

（M）

か月講開催
5月から
能楽セミナー
京都新聞社主催　教養・実技コース

京都新聞社主催の「能楽セミナー」が五月から開講する。このセミナーは、講義と実技をクロスさせ、楽しく、わかりやすく、また史跡散歩もとり入れたユニークな内容で、会員を募集している。

教養コースと実習コースの要綱は次のとおり。

（教養コース）

（第一講）

期間五月八日（金）～九月末日、五ヵ月間、毎週金曜日・月三回、午後二時～三時三十分。

テーマ五月・平安遷都の謎、六月・羅生門の鬼、七月・平安京の興亡、八月・伝説と加茂、九月・加茂氏と秦氏。

講師　能楽評論家・渡会惠介氏

実技　謡曲　羅生門、加茂

講師　金剛流職分・広田陛一師、広田幸稔師

入会金　三千円、受講料月額五千円（別にテキスト代実費）

なお、教養コース・第二講は、十月二日（金）より開始、五ヵ月間、テーマは平家物語の世界、実技は、経正、紅葉狩

（実技コース）

期間五月八日（金）～昭和六十三年一月末日、九ヵ月間。

毎週金曜日、月三回、午後六時三十分～七時三十分。

内容　謡曲・仕舞の実技講習、グループ指導による気軽でコミュニケーションの楽しいシステム。

講師　広田陛一郎、広田幸稔師

入会金・三千円、受講料・月額八千円（別にテキスト、扇は実費）

会場は、京都市左京区東大路丸太町上ル東側、エミュール3階「いづもホール」

申込み先　大丸京都店プレイガイド、桧書店（京都市中京区二条麩屋町角）京都新聞文化センター（京都市上京区烏丸東川上ル京都新聞社一階）

締切り　四月三十日（木）

巽会大会

五月五日（祝）九時半始

熱田神宮能楽殿

仕舞八島　竹内達子　猩々　戸田和

素謡草紙洗　佐藤古都　石原八重子　加藤千種　貫之　岩田幸子　立衆　山本麻紗子

仕舞鶴亀　加藤美知子　紅葉狩　西村節子

仕舞巻絹キリ　金子恵津　藤クセ　福田左絵

舞囃子松虫キリ　福島弘喜

舞囃子経班女　藤田いく　政　財田時子　草紙洗　石原康子

仕舞枕慈童　温美公美乃　経政クセ　林和恵

半蔀クセ　依田佳子　巻絹クセ　山田紀子

富士太鼓　鶴見奈美子

舞囃子船弁慶　長崎邦子　玉葛　西村梅子

鞍馬天狗　大渓和子

仕舞敦盛キリ　村井司　籠太鼓　沢田美枝子

葵上　藤田光子

素謡蝉丸　青木芳子　杉浦敏二　平子稲美

能岩船　葛原正枝　西村欽也　飯富雅介　杉江元　福井啓次郎　河村総一郎　助川龍夫　森本重一

間　大野弘之

狂言鬼瓦　井上松次郎　井上礼之助　後見　佐藤友彦

仕舞雲林院クセ　別所和子　杜若キリ　河野高子

仕舞雲雀山　山本岬　蝉丸　森ふじ子

仕舞実盛クセ　河野邦男　実盛キリ　高田真六

舞囃子葛城　寺部一威　藤戸　坪井香容子

天鼓　玉井博祐

仕舞難波　富田正代司　采女クセ　織田哲也

仕舞源氏供養クセ　須賀千代子　江口キリ　小柳寿子

一調竜田　倉本雅　平河和子

能羽衣　足立知子　飯富雅介　杉江元　覚鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

仕舞老蓬渉　松鬼頭嘉男　籠　稲川寿一

西行桜クセ　吉田俊彦　玉ノ段　佐藤耕司

舞囃子野宮　藤田静代　桜川　永井喜美

番外舞囃子高砂　辰巳孝　五段

〔御来聴歓迎〕

主催　名古屋巽会

愛知郡東郷町和合ケ丘二―一一―五　戸田和方

電話〈〇五六一三〉九―一四八七

桜川　生駒里翠　覚鉱一　千種恵子　鹿取希世

船弁慶　高木美智子　覚鉱一　岩崎透　鹿取希世

連調「宇鉢」「丁木」　大島美江子　小島初恵　島崎浩子　柴田法子

野村四郎名古屋公演
＝春の曲独演二番能＝

五月九日（土）午後二時開演

熱田神宮能楽殿

能羽衣　野村四郎　西村欽也　飯富雅介　彩色之伝　覚鉱一　福井啓次郎　三島元太郎　藤田六郎兵衛

後見　井上裕久　大槻文蔵　地謡　片山清司　赤松禎友　上野雄三　鵜沢郁雄　大江将董

狂言萩大名　大名　野村又三郎　茶屋太郎冠者　井上礼之助　野村信行

仕舞井筒　郡　鶴世暁夫

鞍馬天狗　観世清和

能藤戸　野村四郎　福王茂十郎　河村総一郎　蹉跎之伝　山本清　塩田重喜　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

間　野村又三郎

後見　鵜沢郁雄　大江将董　地謡　片山清司　赤松禎友　上野雄三　井上裕久　上野朝義　清和　大槻文蔵　観世暁夫

（終了　午後五時頃）

附祝言

主催　中部日本放送　中日新聞社

A席（正面指定席）七千円、B席（一階自由席）五千円

C席（二階自由席）四千円

入場券取扱所　名鉄、丸栄、三越、松坂屋、中日ビル　CBC、各プレイガイド。

名古屋観世九皐会定期能（第二回）

五月十六日（土）午後一時半始

熱田神宮能楽殿

素謡藤戸　小島芳雄　小林喜久　宮本正彦

能楊貴妃　高橋暸一　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

間　井上松次郎

狂言因幡堂　大野弘之　佐藤友彦

舞囃子海士　吉田妙　吉田定男　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世

宛　中所宣夫　観世喜之

能善知鳥　西村欽也　井上礼之助　覚鉱一　後藤孝一郎　森本重一

附祝言

主催　名古屋観世九皐会

事務所　〒457　名古屋市南区元塩町一―一―一七（加藤保彦方）

会員券四回分一万六千円　TEL〇五二（六一一）三六五九

〔御来場歓迎〕

番外仕舞難波　北田智恵子　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

波　観世喜之

千葉県浦安市東野三丁目十六番地九号

芳扇会　芳雄

第30回やるまい会公演

＝親と子の〃競演〃四番＝

五月十七日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

千鳥　太郎冠者　茂山あきら　主　茂山　真吾　酒屋　茂山千之丞

曲　素囃子　遊　笛　藤田六郎兵衛　小鼓　大倉源次郎　大鼓　河村大　太鼓　助川治

朝比奈　朝比奈　野村　信行　閻魔大王　野村又三郎

貰聟　夫　茂山　正義　妻　茂山千五郎　茂山真吾

二人袴　聟　野村　武司　舅　太郎冠者　佐藤　友彦　親　野村　佐藤　融　万作

入場料　A四千円（指定席）B三千円（指定席）C二千円（階上自由席）

申込みは　名鉄、中日ビル、三越プレイガイド、又はやるまい会事務所

狂言・やるまい会事務所
名古屋市中区正木二丁目16―25　野村方
電話〇五二（三三一）七五五三

宇高通成後援会　能を楽しむ会

7月11日「葵上」上演

金剛流・宇高通成後援会主催の「能を楽しむ会」名古屋第一回公演は、七月十一日（土）熱田神宮能楽殿で催される。

当日は午後二時始、宇高通成師のあいさつと解説につづいて、シテ金剛永謹師による「葵上」が上演される。

能「葵上」（シテ金剛永謹、ワキ西村欽也、地頭宇高通成）入場券は三千円（全席自由席）問い合わせは宇高通成後援会名古屋事務局＝名古屋市瑞穂区洲山町三―一七、前組（まえそわ）方、電話〇五二―八五二―二三二四。

なお宇高通成後援会は「エンジョイ能」と題し、本年度第一回のテーマに狂物シリーズとして「蝉丸」をとりあげ、四月十六日(木)名古屋市瑞穂区津賀田町の津賀田神社資館で、宇高通成師を講師に、舞の工夫の実演、能面、能装束の展観などを行った。

会と催し

香風会創立十周年記念大会

香風会（観世流・高田みね子師）は、創立十周年をむかえ四月五日昭和区かすが荘で謡曲大会を開催、素謡、仕舞、連吟、独吟など社中、流友により盛会。

紅韻会創立十周年記念大会

紅韻会（観世流・渡辺節子師）は、創立十周年記念仕舞・謡曲大会四月二十九日、尾西市民会館で開催する。素謡、舞囃子、仕舞、連吟、独調、独吟など三十数番、森秀夫尾西市長のあいさつが予定されている。

鳳声会第10回大会

鳳声会（池田米寿師主宰）は、四月五日、岐阜市司町の岐阜会館で、同会第十回大会「春の素謡会」を開催。素謡「神歌」「隅田川」「求塚」「砧」はじめ連吟、仕舞など二十番で盛会。

岐阜　日本能面巧芸会「新作能面展」

5月19日から博物館で

日本能面巧芸会は、きたる五月十九日から二十四日まで、名古屋市博物館で「新作能面展」を開催する。同会の能面展は今回で五回目。後援・愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、能楽協会名古屋支部。入場無料。

新作展は、二十種以上の能面百点近くが出展される予定。入場無料。開場は毎日午前九時十五分から午後四時四十五分まで。最終日は午後四時までとなっている。

展観期間は六月十四日まで、会期中無休、午前十時から午後五時まで。入場無料。

◆花見月の舞台から◆

「青少年のための芸術劇場・狂言」「能と狂言に親しむ会」「梅猶会」

竹尾邦太郎

三月十四日、芸術創造センターで、「青少年のための芸術劇場」夜の部を見た。「春一番、笑い風でござる」の副題が付く。主催に市文化振興事業団と教育委員会が名を連ねるが、青少年の姿は少なく空席が目立つ。土曜日とは言え小・中・高とも終業式を控え、最高学年では入試や卒業式の慌しい時期、低料金で青少年に古典芸術を鑑賞してもらう意図も報われず出演者は気の毒。さて、会場は敷舞台に金屏風で橋懸に松は無い。照明は固定され、殊更に効果を狙わないのは賢明である。

「三番叟」シテ信行。揉ノ段は掛声を掛け、舞台を巡る一見変哲もないところに重味が不可欠で、三番叟を踏む所以の一でもあるがこの辺りが今後の課題であろうか。鳥跳は上々、鈴ノ段のリズム感も良かった（36分）。

「萩大名」シテ大名・松次郎。外に向かって開放される狂言の芸には客席が暗いホールは得手が悪いか、何時に無く伏目がちなのが訴訟に勝って晴れ晴れと遊山に出掛ける気分に遠かった。茶屋・又三郎との問答にも天真爛漫な表情が乏しかった（27分）。

「蝸牛」山伏を蝸牛と取り違えるのは早合点ではなく無智なのだが、アド太郎冠者・友彦に何処となく賢しらな感じが付き纏い、シテ山伏・礼之助にも積極的に玩弄してやろうという気迫が不足に思えた（22分）。

越えて十八日夜、「能と狂言に親しむ会」第一日が同所であった。和紙を剣先に折った火袋の燭台が松の代りに橋懸に三、地裏・目付柱・正先階相当の左右及び脇柱、の際に各一、都合八基。補助の照明は先の狂言の会同様固定した白色光と黄色光。狂言と異なり内に沈潜してゆく能の芸風は、客席が暗い分、現実世界を遊離し、常ならざわめき最中の調べからはや深い静寂で、揺らめく灯は夢幻境に誘い、ローソク能は想像以上に効果的である。所は須磨浦。蒼いホリゾントに燭の灯は沖の漁火とも見えて雰囲気はいよいよ高まり、絶好の舞台装置となった。

「松風・見留」シテ九郎右衛門。感情の表出が細やかで、そこに絶えず行平の面影がちらついているのが見て取れた。引く波を茫然と見やる右ウケ、飛び立つ田鶴を目で追う面ツカイ、汐汲車を振り返るうつつ心の切なさ、覆い被さるように形見の烏帽子・長絹をひしと抱き締める激情、それら一つ一つの表現表情に含蓄があり、強く惹きつける。

たおやかな中ノ舞。舞上げて松に寄り、愛おしく抱擁する辺りの尽きせぬ恋情。破ノ舞に扇カザシテ沈み、松の前を抜けて一ノ松に往き、遥か松を見込む趣も申分なかった。ツレ潜司も慎ましく、三役それぞれの力演で値千金の春宵であった（1時間50分）。

「鵜法師」シテ惠美子。〈日想観なれば、と正先へ行きかけ、〈須磨明石、とす―っと左から右へ頭を廻らせた先の、そこはかとない明るさが、〈満目青山は心にあり、と扇を軽く胸に当てたところに良く象徴された。型処の〈長柄の橋、以下は、地前から大小前に廻り込み、笛前から小刻みに杖を突き分けて目付柱に進み、〈貴賤の人に行き逢ひの、とハッと正中に退って杖取り落して手探りし拾って立つと拍子を踏むまで、やや顎を上げた盲人特有の姿に少しの弛緩もみせず、その緻密は父子再会劇にも浮つかず泌々した味わいを出した（1時間8分）。

「江口」シテ盛義。後段、屋形舟は一ノ松。網目文様摺箔に紅入唐織は黒地に琴・鼓・笙・笛・琵琶などの楽器を散らし、真紅の模様大口。それは如何にも詩歌管弦に興じて一夕の歓を尽す舟遊びに相応しい。時にツキ過ぎと言われる装束もシテの力量次第、盛義はしっかりと着こなして江口の君の品位を見せた。

眼目のキリ、〈即ち普賢菩薩、と一ノ松に抜け、〈現われ、と勾欄に寄るそれは、一種のクローズアップの手法で、一瞬、遊君を普賢菩薩に変える幻覚に誘い込む様に思わせた（2時間4分）。

「玄象・寵」シテ朗詠。前は杖をつき水桶を持って出た。〈さっと捨て、の型は常座上でかなり大きく扇をなびかせた。

後シテは白直衣・青灰色指貫の気品が暢達な早舞に横溢した。袖振・骨皮）がある。

×　×　×

世阿弥随筆・小辰恭子編集。桧書店、六二・二月。受贈。

小辰さんには観世誌の特集座談会（京都）のときお世話になる。結論から言って良書と言えましょう。昭和三八年が世阿弥生誕六百年に当り、これを記念して、それより先き三五年から四十年までに「観世」へ寄せられた世阿弥随筆（随想）を一書にされた。六九名七四篇。国文学者・能楽研究家・文芸評論家・哲学者・作家・芸能者・外国文学者ほか。執筆範囲は実に広い。高木市之助（名古屋）・久松潜一・安藤常次郎三氏と北岸佑吉・三宅襄（〈のぼる〉。注今年は同氏二三回忌に当り、今冬追善能を催したい由洩れきく）・沼艸雨三氏の文章をまず読む。なつかし。本田安次・野上弥生子・福原麟太郎各氏にも接する。最後の斎藤太郎氏（当時観世主筆）の文と小辰さんの〈あとがき〉は編集趣旨と当時の能界の流れを説明するが、簡にして要を得る。末尾の執筆者の略歴重宝。

それについても右の新著にある一書の紹介をして、世阿弥のことに追懐を寄せたい。それは昭和十七年の「謡曲界」・十一月号（秋季特別号）です。この年を世阿弥没後五百年に当て、五百年祭特輯を編む。安藤常次郎氏の〈世阿弥のこころ〉を始め、錚々たる方々の八編。うち田中允・安藤・沼の三氏はお元気で能界を見守り、他方安藤・沼・守随憲治の三氏は新著と両方に染筆されている。また別の処に小林静雄氏が「五百年祭」は〈敷え（注、十七年）〉と〈満（翌十八年）〉のどちらでやるべきか、同氏は〈満〉を採りたい旨の一文を寄せられている（注、能楽界はその記念式能を〈満〉で十八年に能す由付記）。なおこの年野上能楽全書の刊行が始まり、「謡曲作者の研究」（小林静雄、三冊、同出版社）が世に出る。演能では金剛巌（初代、女院）・梅若万三郎（先代、法皇）両氏の大原御幸が四月にあった（現巌〈当時滋夫〉氏は局を勤める）。

それから五十年に近い歳月がたつ。世阿弥研究も、开牛充棟、岩波の能・狂言講座の世阿弥まで、大いに広がり深まる。私はその年の暮入隊したが、世阿弥の一書と恩師谷川徹三先生の本を一冊あの〃奉公袋〃にしのばせて入隊した。思えばそれから長い年月が流れた。

中村喜彦能面遺作集・中村保雄。淡交社。六二・二月。受贈。

ずっしりと手ごたえのある大きな豪華本。喜彦氏は保雄氏ご尊父、落ち付いた面色と能面作家（面打師）の心のこもった文章数篇。「能面は能楽の生命なり」でそれは書き出される。能面（着色、原寸大）は一四四面。座談会も佳。美しい亡父供養と申せましょう。

取り敢えず、紙幅の都合で寸言の紹介を許されたく、悉しくは別号に。なおご自分の研究書の出版を計画の由とか。お父上の遺文の出版をお勧めしたい。

信玄袋

―本のこと（三）、世阿弥随筆、中村喜彦能面遺作集ほか―

〈熱田〉の周囲の桜は三月末に二・三分咲きであった。伊勢の桜は四月五日の金春奉納能の頃にはどうであろう。

三月の能は、松風（片山九郎右衛門）と砧（観世鉄之丞）をみ、他日小督（梅若盛義〈のりよし〉）・花筐（観世元正）・大江山（観世元昭、五番とも小書付）をみた。前二曲はいわゆる〃ううそく能〃。この見出しは特に見受けなかった。後の三番は中日能（別記）。芸創Cの二曲は、能楽堂の（通常の）の明るさではないので、前の方に席を占める（佳）。両方のツレを勤めた片山清司君は好演、片山氏は六一年度の芸術祭賞をこの松風で受けられた。

四月は観世座で狂言会（和泉元秀・骨皮）がある。

×　×　×

世阿弥随筆・小辰恭子編集。桧書店、六二・二月。受贈。

小辰さんには観世誌の特集座談会（京都）のときお世話になる。結論から言って良書と言えましょう。昭和三八年が世阿弥生誕六百年に当り、これを記念して、それより先き三五年から四十年までに「観世」へ寄せられた世阿弥随筆（随想）を一書にされた。六九名七四篇。国文学者・能楽研究家・文芸評論家・哲学者・作家・芸能者・外国文学者ほか。執筆範囲は実に広い。高木市之助（名古屋）・久松潜一・安藤常次郎三氏と北岸佑吉・三宅襄（〈のぼる〉。注今年は同氏二三回忌に当り、今冬追善能を催したい由洩れきく）・沼艸雨三氏の文章をまず読む。なつかし。本田安次・野上弥生子・福原麟太郎各氏にも接する。最後の斎藤太郎氏（当時観世主筆）の文と小辰さんの〈あとがき〉は編集趣旨と当時の能界の流れを説明するが、簡にして要を得る。末尾の執筆者の略歴重宝。

それについても右の新著にある一書の紹介をして、世阿弥のことに追懐を寄せたい。それは昭和十七年の「謡曲界」・十一月号（秋季特別号）です。この年を世阿弥没後五百年に当て、五百年祭特輯を編む。安藤常次郎氏の〈世阿弥のこころ〉を始め、錚々たる方々の八編。うち田中允・安藤・沼の三氏はお元気で能界を見守り、他方安藤・沼・守随憲治の三氏は新著と両方に染筆されている。また別の処に小林静雄氏が「五百年祭」は〈敷え（注、十七年）〉と〈満（翌十八年）〉のどちらでやるべきか、同氏は〈満〉を採りたい旨の一文を寄せられている（注、能楽界はその記念式能を〈満〉で十八年に能す由付記）。なおこの年野上能楽全書の刊行が始まり、「謡曲作者の研究」（小林静雄、三冊、同出版社）が世に出る。演能では金剛巌（初代、女院）・梅若万三郎（先代、法皇）両氏の大原御幸が四月にあった（現巌〈当時滋夫〉氏は局を勤める）。

それから五十年に近い歳月がたつ。世阿弥研究も、开牛充棟、岩波の能・狂言講座の世阿弥まで、大いに広がり深まる。私はその年の暮入隊したが、世阿弥の一書と恩師谷川徹三先生の本を一冊あの〃奉公袋〃にしのばせて入隊した。思えばそれから長い年月が流れた。

中村喜彦能面遺作集・中村保雄。淡交社。六二・二月。受贈。

ずっしりと手ごたえのある大きな豪華本。喜彦氏は保雄氏ご尊父、落ち付いた面色と能面作家（面打師）の心のこもった文章数篇。「能面は能楽の生命なり」でそれは書き出される。能面（着色、原寸大）は一四四面。座談会も佳。美しい亡父供養と申せましょう。

取り敢えず、紙幅の都合で寸言の紹介を許されたく、悉しくは別号に。なおご自分の研究書の出版を計画の由とか。お父上の遺文の出版をお勧めしたい。

×　×　×

芸術新潮四月号に野村万作氏が「十年ぶりの釣狐」と題する一文を書く。当時の心境―狂言は狐に始まり、太郎冠者に終る―とそれから十年を閲した今年演ずる三回のうち二回をすませた所信を披露する。今一回秋に新境地の釣狐を中尊寺の舞台で奉納上演。期待大。

×　×　×

前後したが、三月の放送（NHK）は、テレビで隅田川（梅若六郎。高校講座国語古文に使わる。佳。冒頭なし）と花子（茂山千五郎・女房同千之丞・太郎冠者同忠三郎。古典芸能鑑賞会上演。後半の中途省く。くわしくは別記。おもしろし）。R第二は「道成寺物」（三月、講師吉川英史氏。能は乱拍子と急ノ舞を）。五回。

×　×　×

訂正。三月信玄袋で、三月の東西が東京、詩経が誌経になっていました。お詫びして訂正します。

（野村広二）

62年4月・5月　放送予定

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

19日（日）喜多流「花筐」喜多六平太
26日（日）観世流「桜川」鵜沢　雅

◎NHK教育テレビ（午前9時）

4月29日（祝）能「高砂」金春流（再放送）
金春信高、鏑木岑男ほか

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

3日（日）観世流「菱老」井上基太郎
「西王母」山崎英太郎
10日（日）観世流「杜若」「木曽」関根祥六
17日（日）宝生流「柏崎」武田喜永
24日（日）金春流「善知鳥」高橋　汎
31日（日）観世流「小塩」「鵜飼」井上嘉久

◎NHK教育テレビ（午前9時）

4日（振・休）宝生流・能「天鼓」金井章・森茂好
5日（祝）和泉流・狂言「空腕」野村万之丞
野村　耕介

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

小浜　世阿弥記念碑完成

観世宗家「羽衣」の記念能

名古屋観衛会春の大会

五月二十四日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

萌謡会（第七回）

五月三十日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

謡曲本専門店
創業75年
株式会社 東文堂書店
名古屋市中区栄三丁目28番16号（〒460）
（松坂屋南一丁）電話（052）241-1059番

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393

購読料　1年　700円
郵送の場合　1年　1200円
一部　70円

小浜 世阿弥記念碑完成

観世宗家「羽衣」の記念能
5月13日 除幕式典を挙行

福井県の小浜に「世阿弥舟出之地」記念碑の建立計画は、既報のとおり若州世阿弥記念碑建立会（事務所＝小浜市堀屋敷七―一、井村誠一方）により進められ、全国愛好者からの募金が寄せられて建碑工事は順調にすすみ、このほど完成、さる五月十三日十一時から、小浜市川崎の台場浜公園の記念碑除幕式が行われた。

この式典には、観世宗家も来浜し、第一部・除幕式典にひきつづいて、第二部・記念能として小浜市文化会館で午後一時から、能「羽衣」が上演され、約千人が観能、記念碑の建立を祝賀した。

「室町時代後期の能」

国立能楽堂の企画展

国立能楽堂（東京・渋谷区千駄ケ谷四―一八）では、これまで企画した世阿弥や禅竹に続く展示として、四月二十九日から六月十四日まで「室町時代後期の能」を展示している。

この展示では、従来能楽史のうえで、比較的簡略に扱われてきた室町時代後期を、謡本・伝書等の文献や写真パネルを中心に、能作者とその作品、能界の諸状況等を紹介し、多角的に見直そうというもので、注目される企画展である。

春の叙勲

宝生流シテ方 辰己孝氏
森田流笛方 森田光春氏

昭和六十二年春の叙勲で、能楽界から宝生流シテ方・辰己孝氏（三）森田流笛方・森田光春氏（七〇）の両氏がそれぞれ勲五等双光旭日章を受章した。

辰己孝氏は、大正四年四月二十三日生れ、石川県出身、重要無形文化財総合指定。日本能楽会理事昭和六十年度大阪文化祭賞受賞。

森田光春氏は、大正五年六月九日生れ、京都市出身。森田流職分会代表、重要無形文化財総合指定、日本能楽会理事、六十一年三月京都市芸術功労賞受賞。

富山能楽堂落成記念能楽大会

6月28日 宝生宗家迎え

富山能楽堂は今春、富山南総合公園内に完成、四月六日落成式と記念能が催されたが、来る六月十八日（日）宝生宗家はじめ職分を招いて地元能楽会総出演で落成記念能楽大会が二部制により催され能「翁」（宝生英雄）「羽衣」（大坪十喜雄）「高砂」（宝生英照）「小袖曽我」（金井章）「張良」（佐野正治）などが上演される。

展観期間は六月十四日まで、会期中無休、午前十時から午後五時まで。入場無料。

62年5月・6月 放送予定

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
24日（日）金春流「善知鳥」高橋汎
31日（日）観世流「小塩」「鵜飼」井上嘉久
〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
7日（日）観世流「頼政」藤波重満
14日（日）喜多流「鵜」粟谷新太郎
21日（日）宝生流「檀風」松本恵雄
28日（日）狂言二題―大蔵流―
「寝音曲」茂山正義「宗論」善竹幸四郎

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮楽能殿）

〔5月〕
24日（日）名古屋観衛会大会（来場歓迎）（番組①面）
30日（土）萌囃会大会（来場歓迎）（番組①面）
31日（日）下田雄三中部地区連合会記念能（来場歓迎）（番組②面）

〔6月〕
5日（金）熱田祭奉納能（来場歓迎）（番組②面）
6日（土）一調会・叶石会大会（来場歓迎）（番組③面）
7日（日）清韻会能（有料）（番組③面）
14日（日）観世会定式能（有料）（番組③面）
21日（日）宝生会定式能（有料）（番組④面）
28日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕
5日（日）観世九皐会定期能（有料）
11日（土）能を楽しむ会・名古屋第一回公演（有料）
12日（日）朝日狂言会（有料）
19日（日）観世楽囃会（有料）
26日（日）青陽会定期能（有料）

〔8月〕
8日（土）名古屋薪能（有料）
熱田神宮境内・特設舞台
9日（日）司宝会（来場歓迎）
16日（日）名古屋官庁実業団全国大会（来場歓迎）
23日（日）正風会後援会能（有料）

〔9月〕
6日（日）名古屋金春会（有料）
12日（土）長田騒後援会（来場歓迎）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）
15日（祝）駿雲会大会（来場歓迎）
19日（土）名古屋観世九皐会能（有料）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祝）福井五郎33回忌追善能（有料）
25日（金）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
27日（土）和泉会大会（来場歓迎）
（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋観衛会春の大会

五月二十四日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞 花月 キリ 山本博通
舞囃子 難波 鈴村とみ 吉田定男 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
西王母 鈴木幸子 吉田定男 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
鶴亀 伊藤秀子 吉田定男 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
仕舞 高砂 加藤鳳来
富士太鼓 水野浩司
松風 久納希秋
舞囃子 雲林院 青柳イツエ 吉田定男 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
現在七面 駒形賀津子 吉田定男 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
鶯 村瀬つね 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
仕舞 敦盛 盛クセ 奥村泰広
巌島 丸 滝川一司
松虫 キリ 田代博
素謡 西行桜 加藤歌子 鈴木きくえ 川瀬やよ子
能 田村 川口志満子 西村欽也 笈鉱一 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
即 野村又三郎
仕舞 大江山 太田和子
籠 藤井敏枝
舞囃子 七騎落 山田伸子 吉田定男 柳原富司忠 鹿取希世
須磨源氏 山中節子 吉田定男 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
舞五段
山姥 豊住雅子 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
仕舞 道明寺 上遠野ひな子
弱法師 川瀬せよ子
梅枝キリ 足立奈々子
舞囃子 養老 吉田琴子 河村総一郎 柳原富司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
水波之伝
紅葉狩 脇田喜美子 河村総一郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
急之舞
船弁慶 伊藤健一郎 河村総一郎 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
素謡 阿漕 三宅重光 川瀬保
独吟 俊寛 神野勝之助
山本万有里
一調 勧進帳 仕舞 玉鬘 小銀 冶クセ 近藤辰男 芥栄雄 笈鉱一
舞囃子 熊野 川久保彰礼 村雨留 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
龍田 中川芳子 河村総一郎 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
番外仕舞 桜川クセ 山本真賀
番外舞囃子 殺生石 山本勝一 笈鉱一 後藤孝一郎 鹿取希世
附祝言
〔御来場歓迎〕
主催 名古屋観衛会
指導 山本勝一

萌囃会（第七回）

五月三十日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

連吟 弱法師 初同 高野千勢子 井上苑枝 宮川千尋 崎紀子 半谷智子 関薫
村中恵美子 小林富美子 今沢美和 田
素謡 加茂 福田やえ子 神谷三千枝 岡田房子 中入マデ
（千謡会）
地謡 芳野貞子 日名地節子 安井秀子 川瀬富士子 井上小林富美子 宮川千尋 半田智子 苑枝
仕舞 高砂 砂 柿木艶子 志水芳子 巻 絹クセ 富永豊子 草子洗小町 鈴木千鶴子
（和謡会）網之段
素謡 清経 黒川典子 中谷さと 織田和子
（鈴謡会）クセ省ク
地謡 橋本由美子 山村たね子 中上一代子 松下真知子 小島アイ 内田貞子 井上苑枝 横山智子 川合延子 日江井俊子
仕舞 西行桜 長屋とみ 籠
（恵謡会）
素謡 小督 トモ神谷富美 ツレ手島なみ江 野村きく 川合光子
（清謡会）
地謡 山口耕造 清沢一政 梅田邦久 須部甫 石原珠恵
仕舞 熊野 細川定美 羽衣キリ
（早謡会）
素謡 芦刈 林愛子 山際静子 川本作二郎
（富謡会）笠之段カラ難波の昔語らんマデ
地謡 井上苑枝 半田智子 小林富美子 宮川千尋 富田初江 高橋武子 関谷薫 古田まち子
連吟 熊野 正村千代子 加藤静子 岡川園枝
（薫謡会）
仕舞 平家 女クセ 三浦房子 桜川クセ 八代高子
（舞紀謡会）放下僧 小歌 大野操
仕舞 遊行柳 キリ 堀口千代 葵上 渡辺善子
（恵謡会）
素謡 野守 白木せつ子 小島おやう
（就謡会）
地謡 青井宮子 山田美江子 島津てる子 峯子 桜川文子 佐藤幸子 市川恭子 若キリ 尾関嘉久子
仕舞 葛城 城キリ 大竹初美
（千謡会）田村クセ 島田照子 丸 橋本由美子 杜 大江山 松下真知子
仕舞 蝋燭 山
（鈴謡会）
連吟 嵐山 栗本富美子 宮島シン子 伊神千年 可児嘉子 長谷川清子
（笑謡会）

（2面につづく）

春雅日記 ⑫

えびね

えと文　二井栄逸

立春からかぞえて八十八日目、もう茶摘みのさかんな八十八夜がめぐってきた。

ものの芽は日毎にのび、一日画室にこもっている間に、周囲は一段と緑がひろがっている。一年中で一番さわやかな季節である。

色々な山草や、花木が一度に咲き、野辺のかたすみの中にも、幾種類かの野草を見つけることが出来る。

まるやかな、茶ばたけの青いうねりも美しいし、分けても柿の若葉等見ているだけでも心が洗われる。

こないだは、岩内の瑞厳寺という山裾の周辺で、水墨画門生達の為、野外写生の集いを催した。おりあしく小雨模様であったが、えびねや、さいはい蘭、つつじ、桑の芽、さんざしの花、春蘭、カマツカの若葉等、そぼふる雨にいきいきと息づいていたし、渓流、雨にぬれた葉、かすむ山々等、かくものはたくさんあった。雨の合間にしっとりとした山の土をふみながら、みんなは楽しくかいていた。

中でもえびねは種類が多く、水墨画の画材には恰好のモチーフとなった。

えびねは、林の木陰や、山裾に自生するラン科の植物で根が海老に似ているとこうからこの名がついた。

霧島えびね、八丈えびね、琉球えびね等、群生地の名をとったもの、七月頃に咲く夏えびねもある。水揚げも水切り二度で萬全であるから、格花や自然花にもよく生ける。

山うばら、鈴ふり草の別名も持っている。三番叟の鈴之段につかう鈴に似ているからこの名もあるのではないかと思う。

昨年の暮から頼まれていた、アメリカメトロポリタン美術館に展示される能画が一月程前に完成したので、大阪のM氏におくった。図柄は第十六世喜多六平太師の湯谷のスケッチをもとにした大作である。その唐織の文様の中に、えびねを造形化して入れて見た。これは、或る旧家で写生させてもらった装束文様にえびねがつかってあったのを思い出したからであった。

私の絵の外に、百号の日本画、陶器等も加えられたので、航空会社や梱包会社で手間取ったようであったがニューヨークや大阪の空港税関長へは、中曽根総理よりの依頼状で、アメリカ総領事の許可を得たので、スムースに発送が出来た、と、ほっとした状態の連絡があった。

えびねは、日本各地に自生する古典園芸植物であるのに何故か萬葉等にはカタカゴ、ヤマブキ、ウツギの名はあってもその記録がない。

ところが、室町時代にえびねがいけ花として使われた記録がある。

園芸百科によると一四九一年五月十日（延徳三年三月二十四日）に、当時の公卿の中に、いけ花に秀でた大沢久守が禁裏（御所）の黒戸（仏間）に参上してえびねをいけ花に用いたことが「山科家礼記」に記されているとのことである。

美術品では、江戸時代の尾形光琳が六曲一双の草花屏風にタカネと思われるえびねをかいている。

観能独語

新人類的「田村」

観世会の梅若紀彰

（6面熱田まつり奉納能番組つづき）

仕舞　浮舟　高木美智子
（観）浮舟　小線　冶クセ　生駒　里翠　地謡　前野郁子　熊沢恵美子　近藤幸江　吉田妙

仕舞　井筒　八代　義雄　（舞紀謡会）西行桜　伊東　亮晃　郭　長江　保　地謡　渡辺克己　近郷登　渡辺義男　西崎明政　堀場一義　吉成照之　内田　鈴木
独吟（千謡会）邯鄲　仕舞　盛風　増田　仁美　羽　衣キリ　有浦　敦子　（和謡会）松風　飯島美津代　放下僧小歌　亟村とし江　素謡　高砂　伴　靖三　浅井　敏　（素謡会）待謡カラ　地謡　久保田要子　鈴木正美　山田貞一　加藤敏　稲山陽太郎　宇野雅悦　本田勲　伊藤広光　堀場吉成　本田勲　清沢一政　須部米寿　池田

（終了　五時半頃）

附祝言

主催　萌会

（御来場歓迎）

補佐　梅若紀彰　田村邦久

番外　仕舞　求塚　梅田　邦久　地謡　堀場吉成　本田勲　清沢一政　須部米寿　池田

下田雄三中部地区連合会
四十周年記念能

五月三十一日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

連吟（和謡）西王母　賀茂　橋本暁子　佐藤道子　橋本富慈
素謡（竹石）田村　不破喜久夫　森恒夫　渡辺義経　松本勝二　林隆二　田中清　後藤寿夫　平田仁史　大島藤公和二
素謡（花謡）通小町　大野良美　村瀬正光　鈴木力　大蔵三郎　深和芳治　竹中　庄村善二郎　江崎　岩佐林三千夫和信　酒向　黒宮義輝　佐野博子　慶一　保　宏
連吟（竹石）小督　森関澄子　森戸弘子　森百合子宏子　舟橋千恵子　森多田佳頌子　森政子　小島司津子　村瀬登美子　鈴木幸子
連吟（花謡）花筐　小西武久　杉山貞夫　出町巽　大塚次喜兄　鷲見正男
仕舞（竹石）小袖曽我　松前利佳　松前佐和　胡蝶　酒井晶代　船井慶クセ　加藤博子　浮舟　加藤美代子　葛城キリ　中島ひろみ
独吟（和謡）天鼓　水野善一
仕舞　駒之段　酒井一江　東北クセ　森宏子
（竹石）小塩キリ　林佳頌子　巻絹クセ　村瀬登美子　蝉丸　鈴木幸子　枕慈童　多田政子
舞囃子（花謡）屋島　黒宮義輝　吉田定男　佐野博子　森本重一
舞囃子（和謡）清経　加藤鉦一　筧鉱一　中島多喜子　森本重一
連吟（下呂）三井寺　山本崩　中川良三　大前　小池悦信　保
仕舞（和謡）野宮　彦坂夏子
舞囃子（竹石）羽衣　松前慶子　吉田武川　定男澪子　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（和謡）龍田　坂野儀子　吉田大前　定男悦信　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
仕舞　道明寺　中川富美子　玉鬘　今井実子
（下呂）三輪　直井冨士子　弱法師　今井ちえ子
（萩原）鵜之段　岡崎怜子　岩船　川井力蔵
舞囃子（和謡）班女　加藤順子　吉田桑山　定男てふ　森本重一
舞囃子（下呂）梅枝　吉田冨士子　定男　藤田六郎兵衛
（萩原）酒尾（黒天）　後藤孝一郎　森本重一
砧　田村前　川瀬裕子　福井啓次郎　森本重一
後　三宅川公香　鬼頭喜太郎

仕舞　葵老　葛谷道子　杜若　岡本たえ子
（高山）藤　クセ武川　器子　雨之段　桑山てふ
（下呂）舞囃子　源氏供養　滝千代子　筧鉱一　後藤孝一郎　森本重一
独鼓　鞍馬天狗　浅田宏　伊藤長八
（和謡）
仕舞　松風　足立義子　笹之段　杉山蒼生子
（俊文之屋）山姥キリ　中坪千代
舞囃子（和謡）砧　柳沼梅子　吉田定男　福井啓次郎　森本重一
舞囃子（高山）夕顔　平野綾子　筧鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
連吟（俊文之屋）忠度　川上　上木昇　重山照夫　上木礼子　杉山久次郎　森賢一　中川義雄
舞囃子（和謡）乱　北村利弥　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
仕舞　遊行柳クセ　瀬戸綾子
（竹石）
（和謡）藤戸　渡辺茂
能　誓願寺　下田雄三　西村欽也　飯留雅介　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
乏佐之翔　杉山元
間　井上松次郎
後見　松田慶二　谷木正鉦　地謡　河合正次　高橋瞭　中川雅章　中村和男　奥善助　加賀敏彦　橋岡慈観　高橋弘
（午後七時頃終演）

附祝言

主催　下田雄三社中
中部地区連合会

（御来場歓迎）

連絡所　名古屋市瑞穂区東栄町二―七　加藤鉦一方

熱田まつり奉納能

六月五日（金）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

（宝）能　経　玉井博祐
政　飯冨雅介　河村真之介　後藤孝一郎　森本重一
後見　戸田和　竹内澄子　地謡　佐藤耕司　稲川寿一　竹腰勝一　内藤泰二　鬼頭喜男　吉田孝　衣笠辰巳　正宜俊彦
仕舞
（春）半蔀　クセ　加藤富貴子　地謡　加藤正嗣　林鉄郎　瑞部広瀬　渡部道三　日比野圭昭　竹市幸司　百々康治
（秋）野守　東田康文
狂言　しびり　野村又三郎　井上礼之助
（6面へつづく）

狂言　佐藤友彦

観能独語

新人類的「田村」
観世会の梅若紀彰

新人類的な奔放さ、新鮮さ、あるいは八方破れ的意外性等々を内に秘めた明るいさわやかな舞台、しかも格調の正しい品の良さ、この四十に近い梅若の御曹子に、六十一年度芸術選奨・新人賞が贈られたことは、ちょっとしたオドロキでした。

なるほど、新人類的な彼の現代感覚からいえば、新人賞は当っているかも知れないが、「大般若」「治親」「葵上・古式」「生贄」などの相継ぐ復曲、新演出等々のたくましい企画力、大胆な実行力は大したものです。これだけの大仕事は、いわゆる新人の出来ることではなく、堂々たる大家の仕事です。大家並みの実力と新人類魂を併せ持つ才能（タレント）の仕事です。この辺はちょっと故観世寿夫に似ていますね。彼も当時の新人類でした。（能の新人類は名門育ちに限るか）

たとえそれが舞台成果の上で、いささか不十分な点があったにしても、新しい仕事に挑戦する際は避けられないことです。それを問題にし出したら、しゆうとめの嫁いびりみたいなもので、いい意味での無鉄砲な新人類魂はしばんでしまいます。古典の定型の中で、完ぺきな演技を追求するのも、もちろん結構ですが、新しい可能性への追求と努力が未完成なるが故に、常に低い評価しか与えられないというのでは大きな不満が残ります。（新人賞の評価が低いというのではありません。）いささか大人気ないと自省しながらも、こんどばかりは、あえて「新人」の二字にこだわりたいのです。

年度賞といっても、同時に過去の業績、将来への展望が顧慮されないはずはないと思います。いや自分勝手な放言、他意はありませんが、「とんだ迷惑」と思われる関係者の方には、前もってお詫び申し上げます。

ところで、冒頭に述べた紀彰の印象は、四月十二日、熱田の「観世会」で見た「田村」です。名古屋では久しぶりの紀彰、一声のハヤシに乗って橋懸をはこぶ足どりの軽さ、明るさに、カラオケでも口ずさんでいるかのような錯角（全くとんでもない錯角）を覚え、この人の心、体の中には、新人類魂が住みついているな、と感じました。

しかし舞台はチ密、恵まれた素質、鍛えた技術がものをいって危な気がありません。何をやっても大丈夫という安心感がもてます。強いていえば、才気過剰から来る勇み足と油断でしょうか。

現にこの「田村」、前シテが香気馥郁とにおうばかりであったのに反し、勇気りんりんと強がるべき後シテが弱かった。スケールが小さかった。謡も型も小ぶりの田村丸はいただけませんな。ソツがないだけではつまらない。「紀彰ほどの〝大家〟が」と不思議に思いました。（「不思議じゃない」などと茶を入れる人がいるから困ります。）

とにかく、もっと紀彰の舞台が見たい。このところトンと名古屋にはご無沙汰です。話題の復曲なども他地方ではやっているらしい。「能・狂言に親しむ会」あたりの音頭とりで、見る機会をつくってもらえませんか。紀彰ファンは名古屋にも多いのですよ。

（M）

太鼓方 鬼頭八郎氏 逝去
5月10日 告別式を執行

観世流太鼓方・鬼頭八郎氏は、五月八日午後二時、老衰のため逝去された。享年八十六。通夜は九日午後七時から愛知県中島郡平和町六輪の城西公民館で、告別式は十日午後一時から同所で行われ、日本能楽会、能楽協会、同名古屋支部はじめ各界の供花がおくられ盛儀であった。喪主は鬼頭喜太郎氏。

故鬼頭八郎氏は明治三十四年二月十九日生れ。観世流太鼓方の重家・鬼頭家の三代目、明治四十五年「熊坂」で初舞台、昭和三十年能楽協会名古屋支部常議員、副支部長、熱田神宮能楽殿運営委員を歴任。昭和四十二年重要無形文化財総合指定、日本能楽会会員、昭和四十九年四月、勲五等瑞宝章を受章。

また地域では平和町議会議員、副議長、選挙管理委員など公職を歴任し、温厚篤実な人柄がひろく敬愛された。

〔写真は故鬼頭八郎氏告別式場〕

〔御来場歓迎〕

附祝言

主催 **朋会**

補佐 梅田謡邦久

（終了 五時半頃）

（6）面へつづく

（6）面熱田まつり奉納能番組つづき

仕舞

（観）浮舟　高木美智子
小鍛冶クセ　生駒里翠

舞囃子

（喜）善界　長田鄉寛鉱一　地謡 前野都子 熊沢恵美子 近藤幸江 吉田妙
福井啓次郎　助川龍夫 藤田六郎兵衛

地謡　二井栄逸 長田衛 和谷市晩

仕舞

高砂　今村嘉勇
（観）班女クセ　中村和男　地謡 松山幸親 中川雅章 久田徹二 稲生芳雄
春日竜神　加賀敏彦

能

清沢一政
（観）東北　杉江元　河村総一郎 柳原冨司忠　鹿取希世
間　井上松次郎

後見 今沢美和 久田徹二　地謡 松山幸親 今村嘉勇 中村和男 田中武　加賀敏彦 武田邦弘 梅田邦久 祖父江修一

附祝言

主催 **能楽協会名古屋支部**

〔入場無料〕

一謡会・叶石会大会

六月六日（土）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

囃子手　利根川靖之 高野瀬恵三　加賀敏彦

囃子 船弁慶　鉛屋順 柳原冨司忠　森本重一
西王母　池ケ谷豊 柳原冨司忠
二人静　鬼頭喜太郎 森本重一

素謡 弱法師　長戸花子　内田睦子　佐野徳司 柳原冨司忠　森本重一

仕舞 桜川　池ケ谷豊　中村多恵子 福井啓次郎　鬼頭喜太郎 鹿取希世

囃子 高砂

舞囃子（和謡）班女　加藤順子　吉田定男 桑山てふ　森本重一

舞囃子 梅枝　西尾薫子　吉田定男 直井冨士子　藤田六郎兵衛

砧前　後藤孝一郎 森本重一

舞返 融　川瀬絹子 福井啓次郎　森本重一

舞囃子 野宮　海田トシ子　河村総一郎 福井啓次郎　藤田六郎兵衛

遊行柳　近藤重治　笠鉛一 後藤孝一郎　鬼頭喜太郎 森本重一

巻絹　小林辰彦　鬼頭英二 柳原冨司忠　鬼頭喜太郎 鹿取希世

一調 玉之段　祖父江修一　海田トシ子

囃子 三番叟　野村又三郎　澄川幸子 福井啓次郎　後藤孝一郎 福井啓次郎　藤田六郎兵衛

高砂　八段ノ舞　内田睦子 柳原冨司忠　助川龍夫 藤田六郎兵衛

放下僧　吉田明 後藤孝一郎　鹿取希世

砧前　長戸花子 柳原冨司忠　鹿取希世

舞囃子 屋島　澄川幸子　河村真之介 福井啓次郎　鹿取希世

盛久　五段　川瀬絹子　吉田定男 福井良久　藤田六郎兵衛

天鼓　内田睦子　河村真之介 福井良久　藤田六郎兵衛

番外 一調一声 玉鬘　泉嘉夫　河村総一郎

囃子 松風　林喜久子 後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

富士太鼓　高木和子 福井啓次郎　鹿取希世

山姥　林博敬 後藤孝一郎　助川龍夫 藤田六郎兵衛

番外 舞囃子 猩々乱　河村真之介 福井啓次郎　助川龍夫 鹿取希世

〔御来場歓迎〕

主催 **一謡会 叶石会**

清韻会能

六月七日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞

善知鳥　今村嘉勇
昭君　三島憲　地謡 泉雅一郎 斉藤信隆 久田徹二 赤松禎友

能

近藤幸江
間 楊貴妃　飯富雅介　吉田定男 後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
井上松次郎

後見 久田徹二 泉嘉夫　地謡 武富康之 松山幸親 赤松禎友 今村嘉勇 阿部信之 山本正人　泉奈孝 上田拓司

舞囃子 松風　大槻秀夫　吉田定男 後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

戯ノ舞

舞囃子（和謡）班女　加藤順子　吉田定男 桑山てふ　森本重一

舞囃子 梅枝　西尾薫子　吉田定男 直井冨士子　藤田六郎兵衛

（和）しびり　野村又三郎　井上礼之助

（6）面へつづく

名古屋観世会定式能（三回）

六月十四日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞

兼平　中川雅章　須部徹二 久田邦弘　甫
籠太鼓　小島一英　地謡 武田邦弘 加賀敏彦

能

観世喜之
杜若　西村欽也　吉田定男 後藤孝一郎　鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛

狂言

薩摩守　井上松次郎　佐藤友彦 井上礼之助

仕舞

笠之段　浦田保利　本田雅章 中川雅章 梅田邦久 祖父江修一

玉之段　片山九郎右衛門　地謡 中川雅章 梅田邦久 祖父江修一

能

河村和貴
久田徹二
片山慶次郎
善知鳥　宝生閑　河村総一郎 福井啓次郎　森本重一

間　大野弘之

後見 小島一英 浦田保利　地謡 今村嘉勇 中村和男 清沢一政 祖父江修一　中川雅章 梅田邦久 片山九郎右衛門 武田邦弘

（終了 四時半頃）

附祝言

〔有料〕要会員券 当日券 七千円

主催 **名古屋観世会**

狂言

伯養　井上礼之助　佐藤友彦 井上松次郎　後見 大野弘之

仕舞

兼平　久田徹二
笹之段　泉泰孝　地謡 松山幸親 阿部信之 水藤元三
藤戸　大槻文蔵

能

泉嘉夫
間 漕　西村欽也　笠鉛一 福井啓次郎　鬼頭喜太郎 森本重一

大野弘之

後見 近藤幸江 泉泰孝　地謡 泉雅一郎 今村嘉勇 高橋憲一　赤松徹二 大槻文蔵 斉藤信隆

（終了 五時半頃）

附祝言

〔有料〕

主催 **大槻清韻会**

名古屋宝生会定式能（第三回）

六月二十一日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

通盛　能　稲川寿一　鬼頭嘉男　谷田宗二朗　高坂康弘　大野弘之　間　堀広司　福井良治　河村総一郎　森本重一　池田茂

経政　仕舞　戸田和　**三山**　竹内澄子　地謡　竹腰勝一　馬場辰巳　佐藤富四夫　**東北**　玉井博祐　宝生英照　西村欽也　後見　倉本雅　竹内澄子　地謡　関口精吾　河野邦男　馬場辰巳　竹腰勝一　後見　戸田和　玉井博祐　地謡　富田正代司　内藤辰巳　吉田俊彦　寺部泰二　平子稲一　内藤辰巳　吉田俊彦　衣斐正宣　沢辺ノ舞　**杜若**　鬼頭喜太郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　鬼頭嘉男　馬場辰巳　佐藤富四夫　竹腰勝一　井上茂兵衛　竹腰勝一　**大江山**　高安勝久　谷田宗二朗　高坂康弘　杉江元　飯富雅介　吉田定男　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛　後見　宝生英照　衣斐正宣　地謡　稲葉義行　外山通夫　久野辰巳　高田真六三　福川寿一　馬場辰巳　佐藤富四夫　耕司　**盆山**　狂言　井上松次郎　大野弘之　倉本雅

予告番組中変更のおしらせ
第三回　船橋　衣斐　正宣を　鉄輪　衣斐　正宣に　変更させていただきます

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二―三四四九

翠謡会・伊勢神宮奉納記念番組

五月二十四日(日)正午始
伊勢神宮舞台

連吟　高砂　篠木只夫
仕舞　鶴亀　伊藤四郎田　村クセ　村下照子
西王母　栗田あき子　葛城　古賀みつ子
屋島　徳植幹夫　花月クセ　加藤弘子
竜田　キリ　浅岡昌放　下僧小歌　籠田以と子
連吟　加茂　ロンギ　萩原石垣高司　後石原国夫俊　栗田あき子　下野ゆかり　古賀宮崎河村幸子　徳植みゆき　成信幹夫　米倉貞次　近藤幸子　吉野生駒里翠　沢田秀子　浅田昌子　中岡幸　水村重子　野村三子　羅田以と子

仕舞　春日竜神　渡辺錠一　花月キリ　鬼頭笑子
網之段　清水久子　鞍馬天狗　日野大順
巻絹クセ　棚橋さかえ　三輪クセ　杉原茂子
邯鄲ノアト　岡崎佐多子　雛波　江口三男
舞囃子　羽衣　岩間ちゑ　鬼頭福井　英二良治　助川龍夫　森本重一
草子洗小町　沢村千恵子　鬼頭福井　英二良治　森本重一
猩々　小野薫　鬼頭福井　英二良治　助川龍夫　森本重一
素謡　弓八幡　宮崎馨　米倉貞次　地謡全員
(外)奉納者…神野文夫、吉村真三、河村藤一、足立東、磯部信義、秋田綾子、伴愛子、松井澄子、成瀬和子、稲上絹、杉原花子、村松よし子、藤沢たか子、塚本嘉代子

中日文化センター
名古屋(栄)・岐阜・四日市

主催　翠生会　地謡　駒理翠

◆花残月の舞台から◆

「観世会」

竹尾邦太郎

「田村」シテ紀彰。へ見渡せば八重一重げに九重の、と右ウケ、ゆっくり頭を廻らせて遥かを見遣るところ、柔らかな声調はゆったりと、痺れるような春の夕暮である。

ワキとの問答になり、滑らかな口舌は知るを答える一種の得意があり、紀彰好調であるが、一方、ワキの瞬きは気になる。生(なま)の表情を払拭したところに自ずから直面も面となるのであろう。へ春宵一刻値千金、の連吟もワキの気後れが感じられてハーモニーが無く、共に桜の種々相の風情を楽しむ気分に乏しい。為に、へげに千金にも替へじとは、今この時かや、が何か取って付けたようにみえた。器量の違いと言えばそれまでだが、どうもしっくりしない。しかし、シテは屈託なく、花に戯れるようにズカと正先に出て扇で花を受け、へ天も花に酔へりや、と頭を取って仰ぎ見ると拍子を踏む。丸味のあるしなやかな身のこなしである。中入は、へ我が行く方を見よやとて、と強くワキを見て立つと、へ月のむら戸を、扇で開ける型をしながらワキ正から常座へゆき、地切に橋懸へ入ると送り笛で飄然と幕に向った。アイ門前の者はあきら。口跡きっぱりと爽やかである。

後は一ノ松で、へ東夷を平らげ悪魔を鎮め、と右左キッと強く面を切って勢威を示し、クセでは、へ瀬田の長橋、と右から左へずーっと眺め渡すと、駒が勇む様に三ッ拍子強々と踏んだ。力強いカケリ、キリの目覚しい活躍、就中、へ一度放せば、の敏速、へ鬼神の勢に乱れ落つれば、と高く跳び上りざま文字通り組ミ落シタあたりの鴎達さは素晴しかった。シテ紀彰の充実とは逆に、ワキには精彩がなかった(1時間18分)。

「青葉煉」シテ都方・真吾、アド鎌倉方・あきら。大蔵流千五郎家にみられる如何にも機智縦横の軽快さに従兄弟の息の合ったところを見せた。アクセントを利かせた科白の応酬の中で醸される奇妙奇天烈な青葉の殿い較べが、それらしく見えてくる面白味は、眼に見えない糸で操られているような、ねじり引きやしゃくり引きの、一種の操芝居の巧妙だった(29分)。

「西行桜」作物の山には実物の桜が挿され、季節感に溢れて盛りである。ワキ西行・飲也。銀灰色水衣に白大口姿で登場楽無く静かに山徑を往く態にワキ座床几に掛る。ここは最も清閑さの現われるところであるが、見所のさざめき鎖まらず落着かないのは残念である。ついで次第の囃子にどことなく浮き浮きとした気分のワキツレ花見三人が花を尋ねてアイ能力・又三郎との問答になる。

ワキのサシは深重で、隠棲の西行が自然の摂理を己が境涯に投影させ、へあら面白や候、と沁々嘆ずるところ、余情捨て難い。飲也好演である。その静寂を乱すように花見人が押し掛けるが、花見禁制を触れたアイは西行の顔色を窺いつつも花を見せたい気持を隠さない。ここら辺り、ワキとアイの心理描写は細かく、西行の人物像を徐々に浮かび上らせる。そして今の今までその美しさを嘆賞していた西行が、花見に大勢の人を惹きつけるのが桜の欠点でもあろうか、と不図口を滑らせたのを耳敏く聞きつけたシテ老桜ノ精・九郎右衛門が忽然と現われる。黒風折烏帽子・白垂・淡い浅黄大口に墨色の単狩衣は鬣が細い白二本。装束全体に暗い印象があり、シテの心象に墨染桜の沈んだ孤影を見る思いがする。

「歌に不審のあるやらん」、と問い返すワキに、「いや、桜の科は何やらん」、と極めてゆっくりワキにアシラウ辺り、問答にも含むところを充分感じさせる。

作物を出てからは、地との掛合に東山の花の名所を型で列挙してゆく中で、へ鷲の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、と扇カザシへ思ひ知られてあはれなり、と胸サシするところ、思い一入であった。序ノ舞は装束の印象から春の朧夜の闇に融け込む墨彩の趣。舞上げ、へ花の影より明け初めて、と上ケ扇で面が隠れるのは将に夜を遮断する効果。キリは、へ外はまだ小倉の、とワキ正からサシ廻シながら常座へ廻り込むと、へ花の枕の、と左袖巻いて膝をつき、へ夢は覚めにけり、と袖を下して立つと扇ツマミ、へ花を踏んで、と二ッ踏み、へ同じく惜しむ少年の、と橋懸からそのまま幕に行き、へ翁さびて、とワキは立って数歩出てシテを見送り、ワキ留となった。春夢とは人生のはかないことの譬、何がなし、しんみりさせられた。

(1時間27分・4月12日)。

信玄袋

―二つの西行桜、本のこと㈣・熊澤物語と名古屋市史の記録―

四月の観世会は田村（梅若紀彰＜としてる＞）と本年二回目の西行桜（片山九郎右衛門）。田村も佳ければ西行桜も佳い。田村は文字どおり田村らしい田村で、父六郎氏と二代の詩情に富む。西行桜は冷え冷えとした＜老＞の美しさを持つ、しかも老女物とはちがう。黒の装束（単狩衣）が印象的。終り「翁さびて」は二ノ松あたり、さらにすすみ幕へ、ワキはシテ常座に。脇留か。オモテのことは省く。二月の喜之・西行桜は老桜の精の淡く明るく匂うふんい気を品よく持っていた。どちらも興趣があった。

同月十六日の熊野（久田徹二、青陽会、この会のつつましさは好感を与える）は厚味があった。

× × ×

家伝・熊澤物語について。

これは観世流シテ方熊澤恵美子さん（盛義門）のご夫君・敦氏の家の伝記である。朝日新聞（名古屋）編集制作Cより出る（編集制作）。六十一年寅九月（同氏寅年）私も恵贈に与って、すぐ紹介と思ったが、この文章の後半のため遅れてしまった。

同書は、解読家譜・同續家譜・熊澤物語の三篇より成る。あわせて系図・過去帳も掲載。熊澤敦氏は同家約二千年の「男の物語」とともに「女の物語」を追懐され、夫の陰に名も遺さず埋れた多くの女性にも思いを寄せることを忘れない。医学博士、恵美子さんと同じく謡曲をたしなまる。

実は續家譜をのこされた景行氏（十四代）の記録のなかに名古屋のお能拝見の記事があった。

それは尾張藩主十四代の中納言徳川茂徳＜もちなが＞卿が安政六年初入部（封をつぎはじめての入国）でお祝いの能が同じ年城内で行われ、景行氏も拝見を許される。いそいそとしかも謹んで、細かい心得書を十分腹に入れ、出かけたことであろう。十二月一日初回＜三日間＞の能のうち二日目の能であった。「中入後お菓子をいただき、夜七時に下城云々」（抜書）と書き留める。能組は別記とあって今はない。

名古屋市史・能楽の部では、右演能の月日が同年十月一日より祝能ありと一行書になり、これで江戸時代の演能史は甚って明治にうつる。能楽から合巻にかけてこのくいちがいを逐左文庫に照会し、十月一日江戸藩邸出立、十一日名古屋、その年十二月一日からお祝い能で同月九日に完演した由載る資料のあることを教えられた。

二日目の能組は次のとおり。

翁・富士山（金春朋之助、三番叟草川幸八）・熊（木下久次郎）熊野（金春数勝）・張良（大野藤五郎・ワキ西村友五郎）に融と祝言弓八幡。狂言は麻生（幸八）に金岡（山脇四郎）・唐人相撲（山脇得平）。なお二日目は翌三日にもあった（わたった）らしいが詳細不明。能の当日は午前五時のお城入りであった。また＜三日間＞とも翁付であるがくわしくは省く（注、初日は翁・高砂＜宝生鉄五郎、三・山脇四郎＞・道成寺＜木下正三郎＞など、狂言は釣狐（幸八）ほか。三日目は翁・嵐山＜正三郎、三・野村又三郎＞・井筒＜野村三次郎＞・船弁慶＜寺田左門治＞など、狂言狸腹鼓＜四郎＞ほか）。

「青窓紀聞」（水野正信）がその資料で、達筆で書かれ、シテの交代（代勤）まで刻明である。そして格別お世話になった同文庫の桐原千文＜ちふみ＞と逐左文庫に心から謝意を表したい。

付、逐左文庫は名古屋市東区徳川町に在る。新装成ってから訪ねたことがない。近年は電話で用をすます。その地続きに徳川美術館が、牡丹園を隔てて、拡張工事中。南西の建中寺―徳源寺―逐左文庫周辺（東北）は名古屋の文化地帯の一つ。聖人と呼んだ漢文の老先生のいた私の中学（明倫）もかっては建中寺西にあり、戦後はよく弁当持ちで散歩し、わが哲学の道であった。美術館でした能の話もなつかし。どちらにも古いユウカリの木があった。近く訪ねたい。

× × ×

追記。二月号に紹介した「北七太夫・夏の陣」（柳沢新治、受贈）の結びに、「十三世から十四世にいたる間に、初代いらいの一子相伝の秘事であった豊臣秀頼とのかかわりの部分が途切れたのであろう云々」とある。追補を。なお現六平太氏は十六世。

次に、四月号で「同出版社」とあるは丸岡出版社（謡曲界ほか）のことです。一寸お断わりを。

また中村直彦・能面遺作集が中村喜彦云々になっておりました。お詫びして訂正いたします。

（野村広二）

割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3―10）
電話241―0248

名古屋宝生会定式能（第三回）
六月二十一日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

エンゲージリング
山田宝石
貴金属・時計・装飾品
名古屋・本山駅
電 762—2434代表

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 0-36393

購読料　1年 700円
郵送の場合　1年 1200円
一部　70円

名古屋城夏まつり
伝統美の薪能10日間
7月31日、8月5日 特別公演

名古屋城の天守閣を夜間に公開するとともに、名古屋城ゆかりのさまざまのイベントで、昨夏はじめて実施された「名古屋城夏まつり」は、市民に大きな共感と話題をよび、とくに名古屋城内で百年ぶりに薪能が上演され、連日きわめて好評であった。

ことしもこの名古屋城夏まつりが七月三十一日（金）から八月九日（日）まで十日間行われ、能楽界からも意欲的な参加で〝伝統美の薪能〟が催される。

能・狂言はこの夏まつりの初日から十日間連日行われ、とくに初日の七月三十一日は、午後七時から「薪能特別公演」として新作能が上演される。

また八月五日は、同じく特別公演として、能と狂言に親しむ会主催で観世流能「紅葉狩」（鬼揃）シテ梅田邦久師で上演される。

また八月一日には、狂言也留舞会、二日は学生能、三日は鶴吟会、四日は狂言のつどい。

六日は能囃子、七日鼓と笛の会九日は邦謡会。とくに八日は、尾張・柳生神陰流一門による演武で〝柳生の剣が百年ぶりに名古屋に帰る〟という画期的な企画で、能笛が活躍する。

能楽関係の企画には、藤田六郎兵衛が当っているが、七月三十一日と八月五日の薪能特別公演はじめ、名古屋城夏まつりの大きな眼目となっている。

会期中のアトラクションとしては、天守閣夜間公開、光のモニュメント・ライティングショー、名勝二の丸庭園を望み陣中茶処、火縄銃の実演、緑日・城下町夜店、野外大ステージ音の祭典など。

前売は一般四百円（当日券五百円）小人八十円（当日券百円）薪能特別公演はこの入場券で観能できる。

名古屋城夏まつり実行委員会事務局は中区本丸一—一、名古屋城内、電話〇五二—二〇一—九四七七。

62年度青少年芸術劇場
福井、高山、名張、富士宮で

青少年の情操をかん養し、能楽鑑賞の機会をつくる目的で、文化庁により毎年夏休みの期間中に行われている青少年芸術劇場は、本年度は、福井、岐阜、三重、静岡で能「黒塚」と狂言「神鳴」が上演される。

出演者は次のとおり。

能「黒塚」シテ高橋汎、金春晃実、ワキ西村欽也、ワキツレ森晴蔵、飯冨雅介、アイ大蔵基嗣、笛・松田弘之、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・内田輝幸、太鼓・助川治。

狂言「鳴神」シテ善竹圭五郎、善竹十郎、アド大蔵基義、後見善竹長徳（シテ・ワキツレは交替）

日程は、七月三十一日（金）福井県・福井市文化会館。

八月一日（土）鼓岐阜県・高山市民会館。

八月二日（日）三重県・名張市青少年センター。

八月四日（火）静岡県・富士宮市文化会館、いずれも午後一時開演。

◈ 寅能カレンダー ◈（熱田神宮楽能殿）

〔6月〕
21日（日）宝生会定式能（有料）（番組①面）
28日（日）也留舞会・信謡会発表会（来場歓迎）（番組①面）

〔7月〕
5日（日）観世九皐会定期能（有料）（番組①面）
11日（土）能を楽しむ会・名古屋第一回公演（有料）（番組②面）
12日（日）朝日狂言会（有料）（番組②面）
19日（日）観世会夏の薪謡会（有料）（番組②面）
26日（日）青陽会定式能（有料）（番組③面）

〔8月〕
8日（土）名古屋薪能（有料）
熱田神宮境内・特設舞台
9日（日）町宝会（来場歓迎）
16日（日）名古屋官庁実業団全国大会（来場歓迎）
23日（日）正風会後援会能（有料）

〔9月〕
6日（日）名古屋金春会（有料）
12日（土）長田駿後援会（来場歓迎）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）
15日（祝）鼓響会大会（来場歓迎）
19日（土）名古屋観世九皐会能（有料）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祝）福井五郎33回忌追善能（有料）
25日（金）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
27日（日）和泉会大会（来場歓迎）

〔10月〕
3日（土）猶恵会（来場歓迎）
4日（日）皐楽会（来場歓迎）
10日（土）幸謡会（来場歓迎）
11日（日）邦謡会（来場歓迎）
14日（水）能と狂言に親しむ会（会員制）
18日（日）武田謡楽会（来場歓迎）
24日（土）淡交会大会（来場歓迎）
25日（日）鳳鳴会大会（来場歓迎）
31日（日）青陽会定式能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋宝生会定式能（第三回）

六月二十一日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

通盛
能
稲川寿一
鬼頭嘉男
間
谷田宗二朗
高坂康弘
大野弘之
後見
戸田和
玉井博祐
地謡
富田正代司
寺部一威
平子稲美
吉田衣斐正宣
内藤泰二孝
俊彦

経政
仕舞
クセ　戸田和
三山
竹内澄子
東北
キリ　玉井博祐
地謡
竹腰勝一
馬場辰巳孝
富田四夫
佐藤耕司

杜若
宝生英照
西村欽也
後見
倉本雅
竹内澄子
地謡
関口精吾
榎並河野邦男
井上文男
茂兵衛
鬼頭嘉男
馬場辰巳孝
竹腰富四夫
勝一

沢辺ノ舞
筧鉱一
後藤孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

盆山
狂言
井上松次郎
大野弘之

大江山
倉本雅
高安飯冨勝久雅介
谷田宗二朗
高坂康弘
杉江元
吉田定男
福井啓次郎
助川龍夫
藤田六郎兵衛

後見
宝生英照
衣斐正宣
地謡
稲葉義行
外山通夫
久野幸三
高田真六
稲川寿一
馬場辰巳孝
富田四夫
佐藤耕司

予告番組中変更のおしらせ
第三回船橋衣斐正宣を鉄輪衣斐正宣に変更させていただきます

主催 名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方 電話八三二—三四四九

也留舞会・信謡会
野村又三郎社中発表会

六月二十八日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組

狂言 **昆布売**　福村とし江　野村信行
しびり　山崎慎也　井上礼之助
素謡 **吉野天人**　日比佐代子　柴田鏡子
附子　庄司武　冨田雅子　野村信行
文蔵　徳田文三　大矢高義
重喜　村手泰　野村又三郎
素謡 **巴**　内田善太郎　平山みよ子
クセヌキ
小舞 **花の袖**　松久恵美子
よしの葉　小山美保
掛川　加藤志津子

名古屋観世九皐会定期能（第三回）

七月五日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
筒井　五木田武計　駒瀬直也
能
高木美智子
女　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
間　佐藤友彦　井上松次郎
狂言
鐘ノ音　佐藤友彦　井上礼之助
仕舞
敦盛クセ　加藤保彦
水無月祓　小林喜久
大江山　佐々木勝輝
独吟
鶏之段　青木武弘
能
観世喜之
天鼓　高安勝久　吉田定男　助川滝夫
弄鼓之舞　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
間　大野弘之
附祝言

主催 名古屋観世九皐会
事務所 457 名古屋市南区元塩町一—一—一七
（加藤保彦方）
TEL〇五二（六一一）三六五九

〔有料〕
会員券四回分一万六千円

暁の明星　我大黒
名取川　白石友子　高橋貞　堀田淑子　三宅千生
魚説法善　各川良三　徳田文三
落合由布子　平山みよ子　安藤美智恵
狂言小舞 **柴垣**　堀田淑子
蛸　種村とし江
海道下り　三宅千生
石河蘇五郎　白石友子
十七八　高橋貞

盆山　長谷川智恵子　野村信行

素謡 **土蜘蛛**　胡蝶　平山みよ子
トモ　柴田鏡子
頼光　田中芳子
林岫加子　山寺章子
不見不聞　日比野明子　大矢高義　長谷川田鶴
賀　伴野俊彦　野村又三郎　野村信行
青葉煉　中山裕司　大矢高義

主催 也留謡舞会
〔御来場歓迎〕　指導 野村又三郎

名古屋市史・能楽の部では、右演能の月日が同年十月一日より祝能ありと一行書になり、これで江戸時代の演能史は終って明治にうつる。昨冬から今春にかけてこの家伝・能澤物語について。これは観世流シテ方能澤恵美子さん（盛義門）のご夫君・致氏の家の伝記である。朝日新聞（名古屋市）心から謝意を表したい。

付、蓬左文庫は名古屋市東区徳川町に在る。新装成ってから訪ねたことがない。近年は電話で用をすます。その地続きに徳川美術館また中村直彦・能面遺作集が中村喜彦云々になっておりました。お詫びして訂正いたします。

（野村広二）

第28回 大衆能

六月二十日(土)午後一時開演
名古屋市東区東桜一―一二（テレビ塔南）
愛知文化講堂
電話（〇五二）九七一―五五一一

能

里女　松山幸親
天女　今沢美和
祖父江修一

（観）賀茂　高安飯冨雅介
杉江勝久　河村総一郎
元　柳原冨司　助川龍夫
鹿取希世

間　佐藤友彦

後見　近藤幸江
中川雅章　地謡　加藤保彦
田中武　小島一英
高橋暖一

舞囃子

（春）初雪　伊藤雄二　鬼頭英二
福井良治　鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

地謡　加藤正嗣
広瀬瑞弘　金春晃実
渡辺道三　林鉄郎

仕舞

（観）笹之段　近藤幸江　地謡　吉田妙　生駒里翠
熊沢恵美子
高木美智子

狂言

（和）悪太郎　野村又三郎　井上礼之助
佐藤友彦

（観）楊貴妃　梅田邦久
台留　西村欽也　福井啓次郎　筧鉱一　藤田六郎兵衛

間　井上松次郎
後見　前野都子
武田邦弘　地謡　松山幸親
本田黙
須部甫　水藤元三
清沢一政　久田徹二
泉嘉夫
稲生芳雄

舞囃子

（観）善知鳥　河井隆子　河村大
後藤孝一郎　鹿取希世

地謡　東田康文
日比野圭昭　竹市幸司
重本昌三
百々康治

一調

（喜）鵜飼　二井栄逸　池田茂

仕舞

（観）鉄輪　泉嘉夫　地謡　本田黙
中川雅章
梅田邦久
祖父江修一

能

佐藤耕司

（宝）殺生石　飯冨雅介　吉田定男
福井良久　鬼頭好信
森本重一

間　大野弘之

後見　竹内澄子
玉井博祐　地謡　平子福美
稲川寿一　衣斐正宣
竹腰勝一　殿巳孝
鬼頭嘉男　内藤泰二
吉田俊彦

（終了　六時頃）

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

前売券　一、五〇〇円（全自由席）
当日券　一、八〇〇円（全自由席）
入場券取扱所　各プレイガイド、能楽殿、出演各楽師宅。

訃

狂言方 善竹忠一郎氏

大蔵流狂言方・善竹忠一郎氏は五月二十三日午前十一時二十三分肝炎のため神戸市東灘区の甲南病院で逝去された。享年七十七歳。

葬儀・告別式は五月二十五日午後二時から神戸・東灘区御影本町六―三の西方寺で行われた。喪主は長男孝夫氏。

故善竹忠一郎氏は六歳で初舞台重要無形文化財総合指定保持者、昭和五十五年兵庫県文化賞受賞。朝日新聞社・狂言共同社主催で熱田神宮能楽殿で毎年催される朝日狂言会にも度々出演、芸を披露大蔵流の重鎮であった。

ワキ方 江崎正左衛門氏

ワキ方福王流・江崎正左衛門氏は、六月五日午後十一時四十五分胃がんのため姫路市の県立姫路循環器病センターで逝去された。享年七十四歳。

葬儀・告別式は八日午後零時半から姫路市本町六八の一〇一、しらさぎ大和会館で執り行われた。喪主は長男直久（なおひさ）氏。

故江崎正左衛門氏は福王流・江崎家十世。大正元年十月八日姫路市生れ。本名茂。九世江崎欽次郎に師事、昭和五年「花筐」で初舞台。昭和四十年重要無形文化財総合指定。日本能楽会会員、五十七年姫路市芸術文化大賞受賞、五十九年正左衛門を襲名。六十一年四月勲五等双光旭日章受章。多年にわたり社団法人能楽協会神戸支部長として能楽界に尽力した功績は大きなものがある。

シテ方 観世清顕氏

観世流シテ方・観世元昭氏子息観世清顕（きよあき）氏は、六月四日午前六時五十二分急性リンパ性白血病のため東京板橋の日大板橋病院で逝去された。享年二十五歳。

通夜は四日午後八時から九時、葬儀・告別式は五日午後一時から東京・豊島区長崎一―九―二〇の観正会館の自宅で行われた。喪主は父元昭氏。

故清顕氏は、観世流の若手注目株として嘱望されており、告別式は会葬の列がつづき、哀悼の意ひとしおでその冥福を祈った。

（写真）故観世清顕氏の告別式

第四回 能を楽しむ会名古屋第一回公演

七月十一日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

能　葵上
シテ　金剛永謹
ワキ　西村欽也
無明之祈　地頭　宇高通成

主催　宇高通成後援会
名古屋事務所　名古屋市瑞穂区川山町三ノ一七
前組（まえそわ）方
電話（〇五二）八五二―二三二四

（入場券　三千円　全席自由席）

第廿九回 朝日狂言会

七月十二日(日)午後一時半始
熱田神宮能楽殿

番組

角水聟　有徳人　井上松次郎
河内ノ国ノ者　井上祐一
和泉元秀　播磨ノ国ノ者　佐藤友彦
太郎冠者　佐藤融
乙　和泉元彌

月見座頭　座頭　茂山忠三郎　道通　善竹幸四郎

縄ない　何某　井上祐一
太郎冠者　井上松次郎　主人　大野弘之

蝸牛　山伏　善竹幸四郎　主人　茂山忠三郎
太郎冠者　安東佃元

千切木　主人　大野弘之
太郎冠者　井上靖浩
女　佐藤友彦
立頭　今枝良治
立衆　今枝郁雄
〃　井上祐一
〃　佐藤融
〃　今枝靖雄
〃　鳥越正夫

（終了予定　五時頃）

主催　朝日新聞社
狂言共同社
後援　名古屋テレビ

会費　指定席　三、〇〇〇円　普通席　二、〇〇〇円
階上席　一、〇〇〇円
取扱所　各出演楽師宅・朝日新聞企画部・松坂屋・三越・名鉄・名プレイガイド
事務所　中区栄五丁目三番地　名古屋市文化事業団内　電話（〇五二）二四三〇

名古屋観世会 夏の素謡会

七月十九日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

連吟　駒之段　本田黙
田中
水藤元三
加藤武
保彦

素謡　盛　観世元昭　浦田保利
久田徹二

地謡　松山幸親
須部甫　梅田邦久
加賀敏彦　関根祥六
久田徹二　観世元昭
浦田保利

仕舞　難波　生駒里翠
放下僧　高木美智子
楊貴妃　熊澤恵美子
天鼓　近藤幸江

地謡　清沢一政
中川雅章
小島一英
高橋暖一

素謡　武田邦弘
片山九郎右衛門　梅田邦久
祖父江修一

仕舞　熊野　松山幸親
地謡　今村嘉勇
本田黙　武田邦弘
清沢一政　上田貴弘
祖父江修一　片山九郎右衛門
梅田邦久

仕舞　嵐山　松山幸親
屋島　加賀敏彦
笹之段　中川雅章
姥キリ　小島一英

地謡　須部甫
久田徹二
武田邦弘
加藤保彦

素謡　砧　上田貴弘
観世元正　関根祥六

地謡　中村和男
高橋暖一
浦田貴弘
保利
小島一英　中川雅章
関根祥六　観世元正

（終了　五時頃）

附祝言

主催　名古屋観世会

入場料　四千円（全館自由席）
入場券申込先　能楽殿及び出演楽師宅

青陽会定式能（第331期 第33回）

七月二十六日(日)午前十一時始

観能独語

笛方 鹿取希世師が受章

名古屋市文化事業団 第三回芸術創造賞

です。名人といわれた故茂山弥五郎のリアリズムは、この辺の機微を心得たものではなかったですか。弥五郎をもち出すまでもありちょっと一言。秀才芸というものは「仏の顔も三度」で、ややもすると見あきがすることもあるということです。繊細巧緻、密度の高

観能独語

狂言のリアリズム

名手揃い「やるまい会」

面白いはずの狂言が、ちっとも面白くないことがあります。面白くもおかしくもない狂言ほどつまらないものはありません。しかし実際には、そういう期待はずれの舞台が案外多い。役者が下手だから、といってしまえばそれまでですが、結構立派な役者でも、味も素っ気もない舞台を見せられて、がっかりすることがあります。

狂言も能同様、古典劇だけに型があります。型の演劇、型の喜劇です。この型をどう生かすかが狂言の見どころでしょう。面白くない舞台は型が死んでいます。型の抜けがらを見せられては、観客も笑いようがありません。

狂言は能（型）を芝居（写実）の中間と行くものともいいますね。この中間の道を、どちらにも片寄らず、よろめかず、上手に通り抜けるのが、狂言役者の腕というわけでしょう。事実面白くない狂言は役者が型に足をとられて、芝居の出来ない場合が多いようです。いや、型に足をとられるという自覚もなく、これで（型通りで）よしとする役者が多いのではないでしょうか。芝居をするなんてとんでもない、邪道だと腸の底から信じている役者も多いのではないでしょうか。現代の狂言役者で、リアリズムを誤解したり、毛ぎらいしたりするのでは困ります。

狂言は古典ではあっても喜劇です。（いくつかの例外は除きます）。喜劇がおかしくなくては悲劇です。テキストはともかく、舞台、演出に古典も現代もないという演劇の専門家もいます。私もある程度賛成です。いくら古典で候のなんのと威張ってみても、やる役者は現代人です。見る観客も現代人。中には新人類もいるかも知れない。この現代人観客が笑わなければ、「古典演劇」ではあっても「喜劇」ではない。観客を笑わすコツは狂言も松竹新喜劇も同じです。名人といわれた故茂山弥五郎のリアリズムは、この辺の機微を心得たものではなかったですか。弥五郎をもち出すまでもありません。今回の「やるまい会」（5月17日熱田）の舞台を見てもわかります。

「やるまい会」は、さすがに東西の一流揃い、甲乙なく狂言の楽しさを満喫させてくれましたが、中でも「貫聟」が傑出していたと思います。千五郎の舅、正義の夫、真吾の妻と、茂山一家水入らず「親と子の競演」のタイトルにふさわしい舞台でした。千五郎の舅の愛情と皮肉のいりまじった微苦笑の妙、真吾の妻が、酔いざめの夫への愛情をとりもどし、叱る舅の袖をひっぱるいじらしさ。狂言の人間描写（演劇性）の素晴らしさを、たっぷり見せてくれました。

◇……◇

能では野村四郎が珍しく「春の曲独演二番能」をやりました。「羽衣」（彩色之伝）「藤戸」（鵜飼之伝）です。さすがに二曲とも水準を抜く出来で、四郎ファンには大ごち走でした。毎年一回四郎の会をもち、その他の能にも出演していずれも好評、名古屋でも〝秀才四郎〟の声が定着して来たようなのはうれしいですが、ここでちょっと一言。秀才芸というものは「仏の顔も三度」で、ややもすると見あきがすることもあるということです。繊細巧緻、密度の高り芸風いよいよ冴え、見所を魅了する一方で、もちょっと気が抜けないものかしら…などと、ぜいたくをいう向きもなきにしも非ず、では残念です。

こんどは二番とも小書つきですが、私は小書をそう珍重する気にはなれません。江戸式楽以後に盛んにつくられるようになったらしく、創造的精神を失った江戸の能役者が、ちょっと目先きを変えることで自己満足を覚えるだけの小手先き趣向の産物、立派な替り演出が、そう沢山あるはずはありません。変り演出といえば、梅若紀彰の課題曲など〝新しい小書〟といってもいいくらいのもので、古い小書よりははるかに意味があります。現代は能も個性豊かな演技演出が許され歓迎される時代です。盲信的に小書にこだわる必要はないように思います。（M）

勲五等双光旭日章受章

森田光春氏の略歴・芸歴

今春四月二十九日、春の叙勲で勲五等双光旭日章を受章された森田光春氏の略歴、芸歴は次のとおりである。

森田光春氏略歴　大正五年六月九日、森田流笛方・森田光風の長男として大阪市東区船越町に生る。本名・実。昭和十五年三月京都帝国大学経済学部卒業、昭和二十三年より現在まで京都能楽会常任理事、昭和三十五年より現在まで能楽協会京都支部副支部長、昭和四十五年より現在まで京都囃子方同明会理事長、昭和四十六年より現在まで日本能楽会理事、京都能楽養成会創立以来より講師、現在森田流職分会代表として職分家子弟の指導に当たる。

芸歴　七才より父光風に師事、大正十五年（十才）能「高砂」にて初舞台、昭和二年（十一才）「乱」開曲、昭和三年（十二才）「翁」開曲、昭和五年（十四才）「鷺」開曲、昭和六年（十五才）「石橋」開曲、昭和十二年（二十一才）「道成寺」開曲、昭和十三年（二十二才）「清経」音取開曲。昭和二十五年（三十三才）での「鵜飼小町」より昭和五十四年（六十一才）での「関寺小町」まで三老女物全て開曲済み。老女物の演奏は五十回を越える。

昭和四十年三月重要無形文化財能楽（総合）指定、昭和六十一年三月京都市芸術功労賞を受賞。昭和六十二年四月春の叙勲に勲五等双光旭日章を受章。

62年6月・7月 放送予定

〔6月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
21日（日）宝生流「檀風」松本恵雄
28日（日）狂言二題―大蔵流―
「寝音曲」茂山正義「宗論」善竹幸四郎

〔7月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
5日（日）観世流「山姥」橋岡久馬
12日（日）観世流「天鼓」観世栄夫
19日（日）宝生流「通盛」三川泉
26日（日）金剛流「班女」広田陛一

翠謡会が伊勢神宮奉納

舞囃子、素謡、仕舞など22番

翠謡会（主宰・生駒里翠師）の研究生、および「精神文化昂揚と国の詩り伝統古典芸能の進展向上を祈願、能楽舞囃子、謡曲、仕舞の伊勢神宮へ奉納」の趣旨に賛同の中日文化センター名古屋（栄）・岐阜・四日市の生駒講座の受講生は、かねて自主的に醵出金を積み立て、この浄財をもって去る五月二十四日、神宮式年遷宮の第二年次・お木曳きの行事の盛大な神事の当日、伊勢神宮舞台において舞囃子「羽衣」「草子洗小町」「猩々」の三番をはじめ素謡、連吟、仕舞など二十二番による奉納記念の会が中日新聞本社後援により催された。

当日は、前夜来の雨もからりと晴れ上がり、絶好の五月晴れとなり、約五十人が日頃の精進の成果を発表、とくに舞囃子は見事な出来栄えで好日和と相まって、参拝の人々も荘重、幽玄な舞台に見入り、意義深い奉納であった。

翠謡会として今回は、昭和六十年につづく第二回目の奉納記念の会で、今後も隔年に催される予定である。

なお、当日の式年遷宮のお木曳きの行事には、ご神木を奉納する全国からの代表者が集い、約四万人の参拝がみられ、終日神楽殿でお神楽が演奏されるなか、翠謡会の奉納はひときわ注目された。

写真！㊤舞囃子「草子洗小町」沢村千恵子さん㊦連吟「賀茂」

笛方 鹿取希世師が受章

名古屋市文化振興事業団 第三回芸術創造賞

財団法人名古屋市文化振興事業団は、「第三回芸術創造賞」として、能楽笛方の鹿取希世さん、舞台美術家の伊藤三朗氏の授賞を決定、六月十八日に中日パレス・クラウンホールで亀山理事長から正賞・副賞が授与される。

この「芸術創造賞」は、名古屋の芸術文化の振興のために、亀山理事長が故小沢喜美子氏の遺志を継いで寄付された三千万円を基金として昭和六十年設置されたもので、名古屋市に在住し、前年度における芸術創造活動が特に顕著で今後の活躍が期待される個人あるいは団体に贈られる賞である。

鹿取希世師の芸歴

笛方藤田流職分、本名柳原清子

昭和十八年生れ。

昭和三十九年九月、藤田流入門

十世藤田六郎兵衛に師事。

昭和四十年四月　初舞台

昭和四十一年二月　内弟子となる

昭和四十四年四月　藤田流職分となる。「乱」披き

昭和四十七年八月　結婚の為引退

昭和五十五年十月　十一世藤田六郎兵衛師事

昭和五十六年四月　舞台復帰

昭和五十七年九月　「道成寺」披き

昭和六十一年一月　鈴（囃子）披き

辰己 孝師の叙勲祝賀会

6月28日　都島の太閤園で

春の叙勲で勲五等双光旭日章を受章された宝生流・辰己孝氏の叙勲祝賀会が六月二十八日午後六時から大阪市都島区網島町九の太閤園迎賓館で行われる。祝賀会世話人は馬場富四夫氏。

青陽会定式能（第31期 第33回）

七月二十六日（日）午前十一時始

熱田神宮能楽殿

仕舞

賀茂　加賀敏彦

通盛　木田勲

蟬丸　中村和男

枕之段　今村嘉勇

融　清沢一政

能

祖父江修一
小島一英

小町　飯富雅介　河村福井啓次郎　大森本重一

後見　生駒梅田里翠邦久　今沢馬場中村松山　美和信至和幸親　清沢高橋中川加賀　近藤前野生駒　今沢美和幸江郁子里翠

地謡　前野郁子　生駒里翠　須玉部久田本田　木田孝男重一　前野郁子　生駒里翠

仕舞

天鼓　前野郁子

半蔀　生駒里翠

能

近藤幸江

三輪　高安勝久　鬼頭柳原英二冨司忠　池田茂　鹿取希世

後見　今沢久田美和徹二　生駒前野里翠郁子　加藤中川梅田保彦雅章邦久

地謡　井上松次郎　生駒本田須部里翠郁子冨勲　加藤中川梅田保彦雅章邦久政一

狂言

磁石　井上礼之助　佐藤井上友彦松次郎

仕舞

生田敦盛　久田徹二

班女アト　中川雅章

女郎花　梅田邦久

地謡　今村祖父江小島中村嘉勇修一一英和男

能

松山幸親

安達原　杉江飯富元雅介　河村後藤真之介孝一郎　鬼頭藤田好信六郎兵衛

後見　前野小島郁子一英　近藤今村玉木加藤孝男嘉勇保彦　高橋久田祖父江徹二修一　加賀敏彦

地謡　大野弘之

間

主催　青陽会

名古屋市熱田区神宮一―一―一
熱田神宮能楽殿内
電話〈〇三〉六八二―一七五一番

当日券　三、〇〇〇円（普通席）
会員申込は関係楽師方及び青陽会事務所

〔第

田神宮能楽殿で毎年催される朝日狂言会にも度々出演、至芸を披露大蔵流の重鎮であった。

合指定。日本能楽会会員、五十七年姫路市芸術文化大賞受賞、五十九年正左衛門を襲名。六十一年四

故清頭氏は、観世流の若手ホー

観正会館の自宅で行われた。喪主は父元昭氏。

観世家

主催　名古屋観世会

入場料　四千円（全館自由席）
入場券申込先　能楽殿及び出演楽師宅
事務所　名古屋市中区橘二丁目七番二十五号　井生方（電〇五二（三四三）〇〇〇〇）

取扱所　各出演楽師宅・朝日新聞企画部
松坂屋・三越・名鉄・各プレイガイド

階上席　一、〇〇〇円

信玄袋

―芸術賞、慶弔、演能―

この前月号に近々蓬左文庫の桐原千文〈ちふみ〉さんを訪ねたいと書いたが、携行の資料がまだ整わないので実現できないでいる。

× × ×

芸術賞のこと。東京では野村万之丞氏が芸術院賞を受ける。お茶の席の短かい時間に、天皇へどんなこと（狂言）を申し上げたであろう。また横道萬里雄氏は河竹賞（最新著「能劇の研究」の業績で、未見）を。

名古屋では芸創賞（第三回）が鹿取希世（笛方・藤田流）さんへ。この六月おくられる。私が以前（昭四五）能楽タイムズの「ふれっしゅ70―名古屋の若い目」で青年楽師群の一人に取り上げて将来を期待したが、今年その実を結んだと言えよう。

名古屋には十指前後の芸術（文化・芸能）賞があると思うが、身近かな三賞に名古屋市芸術賞・芸創賞・CBC文化賞（くちなし賞）がある。大小のちがいとそれぞれの佳さ・特色を持つ。もちろん賞の高下はない。まだ同年に二賞を二年続けて受賞の話はきかない。そして邦楽部門にくらべ、洋楽を含めていわゆる文芸部門の分野（対象）が年々広がるように思われる。これに愛知県教育委員会賞を入れると四つになる。また演劇ペンクラブ賞も忘れてはなるまい。この賞は近年狂言（能）が対象からはずされているのであろうか。とにかく推せん・選考・受賞・受賞後とむつかしい。展覧会賞は除く。

× × ×

五月二十三日善竹忠一郎氏（狂言方大蔵流）逝去。七十七歳。名人善竹〈ぜんちく〉、昭三八年茂山より善竹と改姓〈弥五郎氏の五人の男子の長男。五人とも狂言師。忠一郎氏はやわらかく、品の声がきき、地味な狂言芸。しかもくどくないおかし味をにじませていた。朝日狂言会（昭三四、第一回、狂言共同社・朝日共催）には第五回から数回の出演で、千五郎（当時七五三〈しめ〉）氏と組んで瓜盗人・佐渡狐（十回）を勤め、左近三郎（十八回、五一年）は傑作の小品であった。昨年の同会寝言曲は惜しくも代勤となる。そして右に述べた特徴のなかに父弥五郎が忠一郎風にしのばれた。最晩年は正月の放送（R）で声がきけるのが楽しみであった。私の好きな狂言芸。

付、第一回に弥五郎氏が福ノ神を勤め好評を博した。

名古屋三役の最長老鬼頭八郎氏が五月八日逝去。八十六歳。太鼓方観世流。くわしくは別記。

× × ×

演能。

五月九日野村四郎の会。羽衣と藤戸の二番（独演）。この二曲を結びつけるものは何かと考えた。結局天上のよろこび（人間の舞い）と人間の悲しみ（悔い改め）をもってくれば、きれいに結びつく。羽衣は格調高く美しく、カタチもよい（霊折）。舞込み。後半すなおな運び・味わいに少々理詰めの影が射す。知性的と言えばそれでよいかも知れぬ。とまれなかなかのみもの。藤戸は前半を少しみただけだが母の姿が佳。

三回で四番。さて来年は何の曲か。大きな期待を寄せたい。

十六日は善知鳥・観世喜之。父喜之に似てそうでない。新喜之風のよさをこの曲でみつけるとは思いがけず。西行桜に続く佳演。ただし子方の行儀がよくない。即物教育と言うか、演能時間（時刻）に稽古をつけることも一考であろう。総和のよさを欠く。

翌十七日やるまい会。第三十回の今回は〈親と子の競演〉四番。子（息）がシテで名人上手の親がアドにまわる。もっとも茂山千五郎・正義の千軍万馬の古つわものもおれば、佐藤友彦・融のようなういういしい組（名古屋）もある。

眼目の朝比奈は近頃めきめき上達の野村信行君の朝比奈、そう申せばえんま王は又三郎氏。緊張しすぎたのか、固い舞台からはおかしみ味も少なかった。あとの二番は見所がよく笑った。曲趣・趣味・人気のほかに古典に対する知識の変化・深浅のことも考えさせられた。狂言も動いていることはまちがいない。

千五郎氏の親（貫智）は同氏近来の秀逸。「よいわ。おのれら両人、来年から祭には呼ばぬぞよ」の結びにしみじみと味わいを出す。

付、四月の観世会は茂山真吾・あきら両氏が活躍する。なお父千作（故人）氏の水掛聟の終りもよかった。

× × ×

テレビ能。

四月二九日高砂（金春信高、正月の再放送）。五月四日天鼓（金井章。佳）。五日狂言空腕（野村万之丞・耕作親子。格調あり）。

◆早苗月の舞台から◆

「野村四郎の会」、「九皐会」、「やるまい会」、「雄諷会」

竹尾邦太郎

「羽衣・彩色ノ伝」 シテ四郎。天冠に白蓮を戴せ、面は増。〈春風の空に吹くまで懐かしや、と数歩出て茫然と目付柱奥を見遣り、返シにたらたらと退って正に直シてシオルとこう哀愁の情一入だった。

序ノ舞から徐々に心気は亢進してイロエ。スミでゆっくり正を向き、微かに右上から左下へと見、更に正中から一ノ松に抜けて勾欄につっと詰めて左袖抜き暫時佇みへさる程に時移って、と二ノ松。〈天の羽衣浦風に、と一ノ松に戻り勾欄下へ左右面遣いして亦二ノ松から三ノ松へと小さく廻ること二度、遠近法の理屈で軽やかに浮遊しながらどんどん小さくなる姿が名残り惜し気に後ろ向き幕に入りワキ留となった（63分）。

「萩大名」 何事も他人任せ他人頼りのシテ大名・又三郎。温厚な茶屋・礼之助の怒りを煽り、太郎冠者・信行を居たたまらない気持にさせての横着ぶりがいかにもいけしゃあしゃあとしていて憎めない。三者の調和が良い（26分）。

「藤戸・蹉跎ノ伝」 シテ四郎。躊躇も跎も躓き転ぶ意。〈人目も知らず伏し転び、と膝頭発止と打ちつっとワキ茂十郎に迫り倒れ伏すと双手を差し出し、〈我が子返させ給へや、と安座、双シオリ。白っぽい嫂女に極く地味な紺地段無紅唐織の憔悴し切った老母の、激情に駆られてのこの一連の動作の勁さは感動的。

後は痩男。〈千尋の底に沈みし後の二曲は宝生能楽堂だった（と思うが）天鼓の照明（明暗）はよくない。六月はテレビ能がないが二十八日にカブキ舞踊「船弁慶」（尾上菊五郎）と世阿弥（山崎正和作、松本幸四郎）があるはず。（野村広二）

に、と杖を両手に持ち常座でゆっくりと安座。〈折節引く汐に、で一呼吸の後、寂々とした笛で立つと、一旦正中近く出てから一ノ松に抜け、勾欄に寄ると、〈折節引く汐の、と再び謡い地（文蔵・清和・暁夫ら）が受けて、〈引かれて行く波の、と小さく廻ると、〈浮きぬ沈みぬ、の型になる。更に〈岩の狭間に流れかかって、とシテ柱に背を着けてそのまま柱を巻き、舞台に入って膝を着くと、〈藤戸の水底の、と白洲を深々と見た。前後を通じ、写実に徹して写実を抜く勢いがあり、随所にアクセントを利かせ、陰影に富んだ一曲とした（1時間24分・5月9日・野村四郎春の曲独演二番能）。

「楊貴妃」 にぶく金を沈めた摺箔・黄地唐面散シ紅入唐織・くすんだ緋大口、と全体に落着いた装束のシテ瞑一が端然と床几に居る姿が美しい。床几でワキにアシラウ辺り、足の配りにややこせつく感があるが、作物を出てからの詰める足、引く足には情感が籠もり力がある。地（武計・三郎ら）との掛合もものびのある声量で拮抗し上々。

序ノ舞の後半、囃子の打切りの間隙、常座でふっと佇むこと暫し。想いを下界の玄宗に馳せる気分があった。キリはワキ方士・勝久を見送り、再び作物に入り、下居してシオルと、そのまま、〈伏し沈み、と身を乗り出すように立ち、作物を出てトメた。哀切がキリで俄かに高まった（1時間32分）

「因幡堂」 念願成就、妻を授かると知ったシテ弘之の、舌舐りせんばかりの好色な笑いが秀逸。アド友彦、久し振りのわわしい女が柄に合い、被きの中で忿懲を自棄酒にぶつけてゆくヒステリックな恐さが冴えた（16分）。

「善知鳥」 シテ喜之の呼び掛けを遠くの谺のように聞いて立ち停り、怪訝な面持でやおら題を返すワキ欽也。凝縮された演劇空間の、この時空を越えた一刻の出会いが趣深い。

後は面河津。痩男の、殺生戒を破った苦思に深い疲労の表情が見られるのに反して、河津は殺生への偏執が色濃く、カケリの細かい足遣いにも突き詰めた焦燥感があり一層陰惨な雰囲気だった。しかし、子方は終始落着かず、それが子方の責任では無いだけに、一曲に係わる人々は勿論、見所も舞台に集中出来ないもどかしさを覚え残念だった（1時間10分・5月16日・九皐会）。

「千鳥」 古くは「津島祭」とも。当地尾張名古屋お膝元の祭とあれば興味も殊更。祭行事に託け何とか酒樽入手と知恵を絞る太郎冠者あきらの、失敗すれば臍面もなく更に奇手を繰り出す計算された軽佻が堂に入り、焦らされてうまうまと陥穽に嵌るアド酒屋・千之丞の、一寸気弱な好人物も佳（25分）。

「朝日奈」 「又三郎氏父子の「朝日奈」を見た。信広氏の語り

「二人袴」 シテ武司、アドに万作・融・友彦。「貫智」の破局の一日を受けて、「二人袴」は最上吉日の、文字通りほのぼのとした親子の情愛が感じられ、智・武司、太郎冠者・融の若者らしい潔よさが爽やかだった（42分）。ところで第30回記念やるまい会は「親と子の競演四番」の副題が付く。十代から六十代後半に至る各演者の熱演に、狂言という古典芸術が親から子へ、子から孫へ脈々と伝承されてゆく過程を垣間見て肝銘深かった（5月17日・やるまい会）。

「誓願寺・乏佐ノ翔」 シテ雄三。前は紅白段唐織、後は白蓮の天冠に緋大口・紫長絹（金絲で唐面葛葛文様）。何れも褪めた色がしっとりと上品である。面は増。小書で序ノ舞はイロエ。正中でサシて二足詰め二足退って合掌する辺り真に敬虔で挙措に気品がある。自己主張の勝ったというか、自意識過剰というか、ぎらぎら脂切った能の多い中に、素直で慎み深い舞ぶりが好もしかった。静かなワキ欽也もよかった（1時間38分・5月31日・雄諷会）。

〈住所変更〉

ワキ方・森晴蔵氏　新住所＝六都市中京区西ノ京島ノ内町二一、ネオコーポラス島ノ内B616（〒604）

〈おことわり〉

二井栄逸師「青雅日記」は、今月号は都合により休載いたしました。

MOA開館五周年記念能を開催

熱海

熱海・MOA美術館は開館五周年をむかえ、六月十六日能楽五流の出演による記念能を開催。

演能は「弓矢立合」「賀茂」「鷺」狂言「鍋八挨」の特別番組。

とくに「弓矢立合」は、金春信高師、金剛流宗家・金剛巌師と喜多流の重鎮・喜多節世師が同じ舞台で立合うという秘曲中の秘曲。さらに宝生流宗家・宝生英雄師の「鷺」観世流・観世銕之丞師の「賀茂」を上演。

ワキ方、囃子方では、宝生閑、笛・藤田朝太郎、杉市和、藤田大五郎、小鼓・幸昭弘、宮増純三、幸昭弘、大鼓・安福建雄、大倉正之助、太鼓・金春惣右衛門、助川治の諸師。

またMOA美術館では、八月一日（土）と八月二日（日）の二日間「薪能」をMOA美術館ムア広場で開催する。

八月一日、能「半蔀」（シテ観世元正）狂言「六地蔵」（野村万作）能「土蜘蛛」（観世清和）

八月二日、能「巻絹」（辰己孝）狂言「樋の酒」（野村万之介）能「殺生石」（宝生英照）

料金は無料で、申込み方法は往復はがきに住所、氏名（返信用はがきにも明記、記入のない場合は無効）観賞希望日を明記してMOA美術館「薪能事務局」（熱田市桃山町二六―二）へ申込む。申込み多数の場合は抽せん。開演午後六時、終演午後八時半の予定。雨天決行。

「名古屋薪能」はことし第二十二回を迎え、さらに八月八日（土）熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。午後五時三十分開演。

暑中御伺い申上げます
熱田神宮能楽殿運営委員会

御料理あつた
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8
神宮東門店　熱田区神宮一―一―一　電話（682）5598

大槻清韻会

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1
電話（291）2488—9　振替東京3—3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話（231）1990　振替京都1—113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

名古屋 薪能

能 花月、羽衣、小鍛冶

8月8日(土)熱田神宮で

「名古屋薪能」はことし第二十二回を迎え、きたる八月八日(土)熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。午後五時三十分開演。

主催能楽協会名古屋支部、後援名古屋市、熱田神宮。

今回は、観世流能「花月」同「羽衣」宝生流能「小鍛冶」和泉流狂言「長刀応答」（なぎなたあしらい）、喜多流舞囃子「養老」「金春流仕舞「生田」観世流仕舞「夕顔」「柏崎」金剛流仕舞「船弁慶」。

火入れ式は午後六時半ごろ熱田神宮・長谷晴男権宮司により行われ、西尾名古屋市長のあいさつが予定されている。雨天順延。

当日券二千五百円（前売千八百円）市内各プレイガイド、能楽殿、出演各楽師宅で発売。（番組②面）

大垣城薪能

8月3日

能「羽衣」狂言「二人袴」

きたる八月三日（月）「大垣城薪能」が大垣城西広場で催され、能「羽衣」などが上演される。

大垣は、戸田氏十万石の城下町として知られ、能、狂言の愛好者は多い。今回の薪能は、狂言和泉流宗家・和泉元秀師、観世流シテ方浦田保利師らが来演。午後六時始。入場無料である。演能は次のとおり。

舞囃子「高砂」（シテ浦田保親、笛・杉市和、小鼓・曽和正博、大鼓・井林清一、太鼓・前川光長、地謡・小野朗ほか）

狂言小舞「花の袖」（和泉祥子）

「雷山」（和泉淳子）

狂言「二人袴」（聟・和泉元弥、親・和泉元秀、男・佐藤友美、太郎冠者・鳥越正夫）

能「羽衣」和合之舞（シテ浦田保利、ワキ谷田宗二朗、笛・杉市和、小鼓・曽和正博、大鼓・井林清一、大鼓・前川光長、地謡・大江将董ほか）雨天の場合は大垣文化会館で行われる。

なお当日は、午後三時から謡曲愛好者の集いとして、素謡「通小町」「半蔀」「花筐」「天鼓」「葵上」を上演。

◆演能カレンダー◆（熱田神宮楽能殿）

〔7月〕
19日（日）観世会夏の素謡会（有料）
26日（日）青陽会定式能（有料）
〔8月〕
8日（土）名古屋薪能（有料）（番組②面）
熱田神宮境内・特設舞台
9日（日）司宝会（来場歓迎）
16日（日）名古屋官庁実業団全国大会（来場歓迎）
23日（日）正風会後援会能（有料）
〔9月〕
6日（日）名古屋金春会（有料）
12日（土）長田囃後援会（有料）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）
15日（祝）鼓響会大会（来場歓迎）
19日（土）名古屋観世九皐会能（有料）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祝）福井五郎33回忌追善能（有料）
25日（金）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
27日（日）和泉会大会（来場歓迎）
〔10月〕
3日（土）猶恵会（来場歓迎）
4日（日）皐楽会（来場歓迎）
10日（土）幸謡会（来場歓迎）
11日（日）邦謡会（来場歓迎）
14日（水）能と狂言に親しむ会（会員制）
18日（日）武田謡楽会（来場歓迎）
24日（土）淡交会大会（来場歓迎）
25日（日）鳳鳴会大会（来場歓迎）
31日（土）青陽会定式能（有料）

暑中御伺い申上げます

熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長　熱田神宮権宮司　長谷晴男

大阪城薪能

8月27日

能「高砂」「杜若」「黒塚」

「大阪城薪能」が四年ぶりに復活し、きたる八月二十七日、大阪城西の丸庭園で行われる。

主催は、読売新聞大阪支社、読売テレビ放送、後援大阪府、大阪市、同教委、大阪21世紀協会。

大阪城薪能は五十六年から三回にわたり開催、その後大阪城ホールの落成により同ホールに会場をうつし大阪城能として続けられてきたが、野外能再演を望む愛好者の声が高まり、復活されることになった。

演能は、観世流能「高砂」（前・山本勝一、後・大西智久）宝生流仕舞「実盛」（辰己孝）喜多流「班女」（和島富太郎）

観世流能「杜若」恋之舞（観世元正）大蔵流狂言「口真似」（茂山忠三郎、茂山千五郎、善竹拳四郎）金剛流能「黒塚」白頭（金剛巌）午後五時三十分開演。

入場料一般二千五百円（前売二千円）学生千五百円（前売千円）京阪神プレイガイド、能楽堂で発売。

薪能特別公演など

名古屋城夏まつり多彩

「名古屋城夏まつり」は七月三十一日から十日間行われ、多くの催しが組まれているが、とくに能楽界による本丸広場での〝薪能〟は、特別公演をはじめ連日行われ注目のイベントとなっている。演能日程は次のとおり。（一部本紙前号既報）

主催　名古屋市、名古屋商工会議所、中日新聞本社、東海ラジオ、東海テレビ、名古屋タイムズ、名古屋城振興協会。

七月三十一日、オープニング公演狂言「磁石」（野村又三郎、佐藤友彦、井上礼之助）

新作能「熱田」（熱田に関する一般的な説話を基にした新作）能と狂言に親しむ会演能。シテ梅田邦久、前ツレ清沢一政、後ツレ祖父江修一、ワキ高安勝久、間大矢高義、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・上田悟、後見近藤幸江、今沢美和、地謡味方健、青木道喜、河村和重。

八月一日、狂言也留舞会（野村又三郎師）

八月二日、名古屋学生能楽連盟による学生能、舞囃子、仕舞。

八月三日「能と鼓と笛」龍吟会（藤田六郎兵衛師）・翠謡会（生駒里翠師）桂会（後藤孝一郎師）長生会（鬼頭喜太郎師）の各会が協賛。

八月四日、「薪狂言の夕べ」（名古屋大声会（佐藤友彦師）

八月五日、薪能特別公演、能と狂言に親しむ会主催、狂言「重喜」（小柳保志、井上松次郎）能「紅葉狩」鬼揃、（シテ梅田邦久、ツレ武田邦弘、中川雅章、高橋暲一、須部市松山幸親、ワキ西村欽也、ワキツレ飯冨雅介、杉山元、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川竜夫、間・佐藤友彦大野弘之、後見・小島一英、今沢美和近藤幸江、地謡・久田徹二、古橋正邦、祖父江修一、加賀敏彦、清沢一政、加藤保彦、本田黙、今村嘉勇）

八月六日〈シルクロードマジック〉囃子VSファッションショー。囃子は笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村大、太鼓・上田悟。

八月七日「鼓と笛の会」（柳原冨司忠師）一調「笠ノ段」（シテ泉嘉夫、小鼓・柳原冨司忠）ほか。

八月八日、柳生新陰流兵法演武。

八月九日「仕舞と謡の会」（邦謡会主催）

観世元正
清和
芳宏
芳伸

社団法人　鎮仙会
観世雅雪
観世鎮之丞
観世栄夫
観世暁夫

中日文化センター特別教室
観昭会
昭門会
観世元昭

幽謡会
片山九郎右衛門

井上嘉久
（〒603）京都市北区紫野下鳥田町六

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

梅猶会
猶諷会
梅若盛義

山本観衛会
山本勝一
〒540　大阪市東区徳井町一丁目二〇
電話〇六（九四二）四〇七〇番

名古屋淡交会
橋岡慈観
稲沢市稲島町二ノ宮六　瀬戸方
電話〈〇五八七〉㉜三三八八番

鳳鳴会
武田志房

武田謡楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

第21回 名古屋薪能

八月八日(土)午後五時半開演
（雨天順延）
熱田神宮神楽殿前・特設舞台

（金春流）仕舞　生田　広瀬瑞弘　地謡　林鉄郎　加藤正嗣　渡辺道三
（観世流）仕舞　夕顔　中川雅章　地謡　松山幸親　高橋瞭一　祖父江修一　清沢一政
　　柏崎道行　小島一英
（金剛流）仕舞　船弁慶　竹市幸司　地謡　百々康治　日比野圭昭　東田康文　助川竜夫
（喜多流）舞囃子　養老　長田曉　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　和谷衛市　松井彬郷　長田郷
（観世流）能　花月　武田邦弘　飯冨雅介　鬼頭英二　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
　　間　野村又三郎
　　後見　生駒里翠　今沢美和　地謡　今村嘉勇　中村和男　加藤保彦　小島一英　田中武　梅田邦一　祖父江修一　清沢一政

火入式

熱田神宮権宮司　長谷晴男
名古屋市長　西尾武喜

御挨拶

（観世流）能　羽衣　熊沢恵美子　高安勝久　河村総一郎　福井良久　鬼頭好信　鹿取希世
　　和合之舞　前野郁子　近藤幸江　地謡　松山幸親　本田熙　中川雅章　須部甫一　久田徹二　高橋瞭一　加賀敏彦
（和泉流）狂言　長刀応答　井上松次郎　野村又三郎　佐藤友彦　大矢高義　今枝郁雄　佐藤融
　　後見　井上礼之助
（宝生流）能　小鍛冶　竹内澄子　杉江元　飯冨雅介　筑紫鉱一　福井良治　池田森本重一茂
　　間　大野弘之
　　後見　玉井博祐　戸田和　地謡　平子佐藤　稲美耕司　衣斐辰己　正宜孝　稲川寿一　内藤泰二　竹腰勝一　吉田俊彦

附祝言

（終演八時五十分）

主催　能楽協会名古屋支部

当日券　二千五百円（前売券千八百円）
入場券は市内各プレイガイド、能楽殿、出演者楽師宅

青月雅日記 ⑬

雨の花

えと文　二井栄逸

梅雨の季節を半ば過ぎたが、今年は何かカラッとした日が多く、梅雨らしい雨が降らない。てまりが並んだように咲きつづくあじさいは、爽やかな風にそよいでいる。

しかし、ほんとうに美しく見えるのは、雨にぬれ、薄紫の花が一入あざやかに見える時である。

雨の花。

あじさいは日本の雨の季節に咲く花。

雨音をききながら、ほのぼのとあじさい色の流れる庭面を眺めていると、心の底まで青くすき通ってくるような気がする。

この花は、ユキノシタ科の落葉低木で二十種あまりあるようであるが、もともと日本原産の花で昔神奈川県の海岸地帯には、額あじさいが自生していてこの額あじさいから、色々なあじさいが生れたという。

青味をおびた紫。うす青。桃色がかった紫。紅色。白等、色々あるけれど、やはり、心ひかれるのは紫をおびた薄い青色である。

あじさいは、七変化（しちへんげ）の異名もあるように色が変化してゆく。

日本のあじさいの中には、欧州に渡って、あちら風に改良され、再び日本にもどってきて、ハイトランジャの名で、花屋の店頭にならんでいるのもある。色はピンク色。

私が好むあじさい色は、紫をおびた薄い青色で、よく使う色である。

平家の若武者の著附や長絹（ちようけん）若い母親の縫箔地等、能装束にもよくつかわれる色である。

幕をはなれて、三の松、二の松と、みがき上げられた構がかりをしずしずとはこぶ経政の白大口の上には、あじさい色の長絹が映え一入さわやかさを増す。

あじさいの好きな弟子家に招かれたことがあった。雨のそぼ降る日で、丁度私の体があいた日が重なって絶好の日となった。同行の門生が二人、みんなで雨月を謡い後は雨の音をききながら一酌。そこのお庭には紅額あじさいも交えて丁度見ごろ。お互いどうし多忙な日日、二度とめぐり会えない一期一会のひとときであったのかも知れない。

昨日、いけ花のセミナーで、あじさいをつかった数点をいけて見せた。その日の私の講演は美について、という演題であった。

美意識というものは、人それぞれに違うものであるが大体、優美、華麗、壮美、崇高美、悲壮美、幻想美雅趣美等に分けることが出来る。

以上の美の中に含まれてはいるが、日本特有の美がある。

わび、さび、ほそみ、もののあわれ、幽玄、風雅等のような美は日本人独特の感じ方で、香ぐわしい文化の花を咲かせてきた。

そこで、具象を主体とした作品、露にぬれるあじさい、風にそよぐあじさい、と言った自然調から、色彩を主とした華麗な美を表現する技法、抽象的なサラシグワの幅湊した線の中にアジサイのマッスを使って、抽象と具象を結合させる作品を生けてみせた。作品はそのまま見る人によっては、大洋の真只中にもなるし、風の中の雲の叫びにも見え、幻想美を創り出す一例であった。

植物という具象を主体にするいけ花だからと言って抽象を否定することは出来ない。かと言って、モダニズムのお先棒をかつぐような事を言われるのはいやである。

（62・6・29記）

観能独語

「杜若」の魅力

喜之と英照と

は高子との恋愛事件にありとの説が、有力なようです。従って、東下りの漂泊の途中、名所名所はもとより、見るもの聞くもの、みなたいない気がしないでもありません。しかし一曲の主眼はむしろ舞からキリにかけての後半にあり、長大な東下りもそのイントロダク

名古屋観世九皐会
観世喜之
有賀滋子　加藤保彦　青木武弘　高木美智子　吉田妙　高橋瞭一　宮本正彦

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話八三二一―三一八五
西宮市甲陽園目神山町一の一七八
電話八〇七九八〇（㊐）二四五八

初陽会
武田宗和

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

毎日文化センター
謡曲教室

風韻会
殿島修二

一謡会
叶石会
河村鉦二
河村総一郎
河村大
名古屋市昭和区前山町一丁目二三（〒466）
電話（七六二）四八八二

竹翠会
若松宏守
（〒662）西宮市平松町四―九
電話（〇七九八）二三―〇六〇一

謡交会
奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二―一〇―二三
電話（〇三）四二二―二六三七番

大垣浦声会
稽古場　大垣市竹島町普念寺
住所　京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

名古屋修謡会
梅若修一

名古屋観生会
野村四郎
東京都杉並区永福四―三〇―一〇
電話（〇三）三二一―五一二九
名古屋稽古場
名古屋市千種区日和町四ノ一〇
小嶋方　電話七五一―一八八〇番

上田観正会能楽堂
社団法人観正会
上田観正会
上田貴弘
上田拓司
神戸市長田区大塚町二丁目一ノ一四
電話（〇七八）六九一―五四四九番

笙月会
中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇四二〇）六二〇六三〇番

久田観正会
久田徹二
大倉流小鼓
松月会
久田舜一郎
都謡会
前野郁子
松恥会
松山幸親
〒412 名古屋市北区東水切町四ノ四三
電話（〇五二）九八一―三六四三番

金剛巌

高安会

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三八六）二六四一番

洗心会
奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七一）〇七六七番

松音会
泉泰孝
東京都杉並区宮前四―一九―四
電話〇三（三三二）八二八〇番

猶恵会
熊沢恵美子
名古屋市名東区平和ケ丘3―76
日車マンション四〇四

宝生英雄
宝生英照

名古屋巽会
辰巳孝

雙雲（たいうんかい）会
内藤泰二

佐野正治
〒921 金沢市泉野町四丁目十二―十四

佐野由於
〒141 東京都品川区大崎五丁目一の四
五反田南ハイツ一〇〇三

倉本雅
神戸市東灘区田中町一―13―26
本山マンション一号
電話〇七八（四二）五四六五番

観能独語

「杜若」の魅力

喜之と英照と

杜若のシーズンだからでしょうか、六月の熱田で「杜若」を二度観ました。観世会（14日）の観世喜之と、宝生会（21日）の宝生英照です。別にここで両者の優劣を云うつもりはありません。それぞれに長所があり、美点があって、比較はむつかしい。

この曲は在原業平ものとしては「井筒」と並ぶ名作とされていますが、私にはそう思えません。作者を世阿弥とする説もありますが疑問点が多く、作者不明というのが現学界の定説のようです。「井筒」の方はまがいなく世阿弥の傑作、憂物の代表作という評価はゆるぎませんが、「杜若」は伊勢物語の美文章句、和歌、業平に関する秘事、秘話を寄せ集めた、雑居ビルのような作品で、古来演技、演出の数を重ね、洗練を重ねて、やっと今日の〝名作〟にまで漕ぎつけたもので、磨き上げた玉には違いないが、天然自然に生れた名玉とは格が違います。（「杜若」が雑居ビルなら、「井筒」はインテリジェントビルというというところですか）

第一、杜若の精が業平の冠、二条の后高子の唐衣をとり出し、これを着て舞うという趣向からしてアカ抜けしません。喜之は赤味がかった華やかな長絹を着ましたがまことに絢爛たる唐衣、舞うのは業平ではなく、二条の后かと見まごうばかり、もっとも高子は業平の愛人で、彼の東下りも、実は東国へ追放・流罪の旅で、その原因は高子との恋愛事件にありとの説が、有力なようです。従って、東下りの漂泊の途中、名所名所はもとより、見るもの聞くもの、みな都恋しの歌ばかり。懐郷の情即高子への思慕とすれば、唐衣はその象徴と見るにふさわしく、漂泊するのは業平でなく高子（あるいは両者一体）と見られても不思議はないということにもなります。もちろん私の独り合点で、喜之の演出意図とは関係ありません。

宝生の「沢辺の舞」の小書のときは、クリ、サシ、クセをはぶくこともあるとかで、気にしていましたが、まるごと演ってもらって安心しました。宝生ご自慢の小書と聞きますが、序の舞の途中で橋懸かりへ行き、二の松辺で沢辺の杜若を見渡す型があるだけ、囃子方もこぞとばかり囃し立てましたが、これだけ（失礼）のために東下りをカットするとしたらもったいない気がしないでもありません。しかし一曲の主眼はむしろ舞からキリにかけての後半にあり、長大な東下りもそのイントロダクションに過ぎないともいえます。

「すわや今こそ草木国土悉皆成仏」の喜悦にあふれて、高調した形の数々、囃子のリズムにのったフィナーレの比類なき華麗さ。見所は恍惚境に誘われます。（英照は若さと力で効果を増しました）

曲全体としては、色道、歌道の大天才、絶世の美男子業平讃仰（歌舞の菩薩、陰陽の神）の主調音に「貴種流離、遊行女婦漂泊」の愛慈美をひびかせた、まさに雑居ビル的構成が、却って一種不思議な魅力を感じさせるところが不思議です。決して名作というわけではありませんが、業平の恰好のチャンピオンを見出した民族的庶民的伝承の強みとでもいえましょうか。

（M）

信玄袋

―七月の話題、演能と本―

六二年もはや半年を過ぎた。

桧書店発行のカレンダー九・十月には三笑の写真が飾られる。近年松本惠雄氏（FM、NHK、放送は以下おなじ）が謡われた。九皐会の能でみたことがある。私には好きな曲・大曲ではないが佳かった。三人の登場者がつくり出すあの詩と東洋的な哲学の世界は深高である。謡がうたえる（謡本にみ入る）だけでは不可。舞台から何かをつかまなければ。〈熱田〉で創立（三〇）から五九年までに一回。それをみたことになるが、時折りはみたい。かつてこの曲を短かくして四狂言にし、前後をつけて別の一曲が作れないものか、想像したことがある。妄想か。

× × ×

七月は東京で一噌又六郎氏、大阪では大倉長十郎氏の追善能が催される。一噌氏は五十回忌、大倉氏は三回忌に当る。又六郎氏の方は七月九日、一調盛久（金剛巌）で始まる。長十郎氏の方には同じ巌氏の一調江口に、片山（九、大倉源次郎）の夜討曽我があり、観世栄夫氏の卒都婆小町（笛光春・小照雄・大大倉正之助）が舞われる。狂言一調小原木・茂山千之丞も手向けられる。七月七日。

大倉氏のことはまだ昨日のことのように思われる。又六郎氏のことは「小鼓芸話」に著者田鍋惣太郎氏の思い出が載る。おだやかで上品な笛の由。田鍋氏道成寺披き（大正四年五月）の笛を勧められた。二日続きの能。道成寺は二日目で、又六郎氏は初日正尊（九郎右衛門）と望月（政吉〈後の兼資〉）を、後日は同曲（観世元滋、元滋氏は初日に八島を）と乱（和合、松本長・政吉）を。前後したが初回はもちろん翁付高砂（松本長）で始まる。ワキは下宝生（尾上始〈もと〉太郎・宝生新）に高安流、小鼓に幸悟朗・三須平司、大鼓に石田清吉、太鼓観世元規各氏の名をみ出す。観宝剛三流（シテ方）で金剛謹之助氏が卒都婆小町（初）と殺生石（二日）を。あとの名古屋勢は省く（能は五番、狂言は狂言共同社で三番。なお三番更は野村又三郎氏〈先代〉）。番組面から存命の方は近藤乾三氏お一人。同氏は蟬丸のシテを。又六郎氏は名古屋の大能に出られた（田鍋氏「お能の番組」参照、前述の本関連）。呉服町能楽堂で。

名古屋勢は狂言共同社が国立能楽堂で無布施経（井上松次郎・礼之助）を演ずる。期待したい。他方藤田（六）氏が京都の市民能楽講座で「能の囃子」について話す。また、比国を始め欧州三ヵ国の演能（六―七月）に飯富雅介（ワキ）福井啓次郎（小）筧鉱一（大）鬼頭好信（太）が参加している。あのアテネの円形劇場の演能はよき思い出になるであろう。

× × ×

六月の〈熱田〉は杜若が二回舞われた。観世喜之・宝生英照両氏。前半はそれぞれ風情（ふぜい）を出していた。喜之氏は大層ふくらみがあり、英照氏はすなお（素朴）な味で。舞になると共にカタチの美しさを欠く。後者地謡は味わいもうすい。この曲は何度もみているが余り佳演にあわない。橋岡久太郎（故人）、近藤乾三・金剛巌（現）三氏ぐらいのものであろうか（兼資・弓川・弥左衛門・先代喜之各氏についてはメモがない）。

なお〈熱田〉の演能統計によると（三〇―五九年）杜若は五八回第八位。なお今年の全国では、五月三回（友枝喜久夫ほか、これはよかったであろう）、六月は九回（うち二回名古屋）、七月は一回（一調、能楽タイムズ演能欄に由る）。一・二の出入りはあろう。それにくらべ六月の井筒はさすがに三回と少ない（同、注〈熱田〉の〈統計〉には洩れる）。優美第一の杜若の佳演に余りあわぬのは何とも不思議である。

片山慶次郎氏の普知鳥は佳。子方を最初から舞台へ出さぬ演出も賢明。しかしこの子方なら始めからの登場でも行儀はよかったであろう（花僮・国栖の子方も立派に出来よう）。周到な用心とはこう言うことであろうか。

付、喜之氏は七月初旬天鼓弄鼓之舞を舞ったが、右を打ち消すような本年屈指の好演であった。

× × ×

本。

しごとの周辺・大野晋。朝日文化欄。六・二二―七・三（金―日なし）。

二三日〈発音が変わる〉。「〈前略〉ところが現在、目の前で一つの音韻変化が急速に進行している。それは若者、ことに若い女性がシの音をスに近く、チの音をツに近く発音することである。女子大をゾスダイ、千葉県をツバケンと言う類で云々」と発表される。これを広げて謡曲・狂言に適用すると白髭・代主も楊貴妃のワキ・道士その他（謡曲文）も変わろうし、狂言の名曲千鳥の呼び名も。あの猩々はどうなるのか。また謡うときはこれまで通りか。私も注意したい。学習院大教授・国語学。

（野村広二）

河村大

名古屋市昭和区前山町一丁目二三（〒466）電話（七六一）四八八二

金剛巌
金剛永謹

豊嶋能の会
豊嶋春の会
豊嶋三千春

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

金春信高
金春安明

〒167 東京都杉並区南荻窪3―17―16 電話〇三（三三一）二五七一番

金春欣三

東京都杉並区成田東四丁目35―20 電話〇三（三一五）七三八二番

春敲会
金春晃実
廣瀬瑞弘

〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三―二四 電話〇五二―八四一―四七四五

本田光洋

東京都中野区上高田二ノ二五ノ二 電話〇三（三八六）二六四一番

名古屋金春会
林鉄郎
近藤修彦
渡部道三

伊勢金春会
中村富次

伊勢市宮町一―一四―一七 電話〈五九〉㉘二四五六番

社団法人 能楽協会理事長
喜多流十六世宗家
喜多六平太

大阪喜多会
和調会
和島富太郎

〒665 宝塚市宝梅一丁目12―1 電話（〇七九七）㈦八六三〇

二井栄逸

松阪市殿町1412の3 電話（〇五九八）二三―〇二一六

長田驍後援会

〒514-22 津市高野尾町三三五―四六 電話〈五九三〉㉚〇六九七番

喜多流 山本才

大和郡山市新町一一九 奈良高専矢田宿舎二六 電話〈〇七四三五〉⑤一五九〇番

松月会
都謡会前野郁子
松聚会松山幸親

五反田南ハイツ一〇〇三

倉本雅

神戸市東灘区田中町一―13―26 本山アーバンライフ四〇一号 電話〇七八（四四一）五四六五番

高安会
西村欽也
高安勝久
飯富雅介
杉江元

福王茂十郎

〒662 西宮市名次町六番十二号 電話〇七九八〈三〉〇七七二

宝生閑

〒176 東京都練馬区小竹町一―五〇―五 電話 〇三（九七二）七二三〇 〇三（九五五）四七九五

豊嶋十郎

〒271 松戸市下矢切五五―五 電話（〇四七三）㉜一九八二

京都・高安流
岡次郎右衛門

向日市上植野町地田一ノ五四 電話〈〇三〉九三四―二四〇六

高安流 岡同門会

清水利宣
高坂康弘
森哨三郎
北田野耕三
塩山
村藤湖
中川久蔵
伊水利舟
清谷昭弘
口雅信

◆風待月の舞台から◆
「観世会」「第28回大衆能」「宝生会」

竹尾邦太郎

「杜若」　シテ喜之。小面に紅白段唐織。可憐な里女が八橋を擬した橋懸、杜若の群生の中をワキ旅僧（欽也）に近ずいて来る風情は、早くも後の杜若ノ精となって現われるのを暗示する。初同、へ沢辺の水、とワキ正を見るしみじみとした感懐。物着に初冠・巻纓・老懸、紫長絹の下は褶に流水と杜若文様の水色縫箔を腰巻。常座に立つと杜若の群生の中から忽然と姿を現わす如くである。たおやかなクセ舞。袖あしらいの軽さは花片の風に吹かれる風情。序ノ舞の途中、右袖被きあぐねてリズムを壊したが直ぐ立直り、舞上げてへ蝉の唐衣、と左袖拡げて愛しく右から左へ見詰める恋情は、業平その人への恋情。キリ、へ明くる東雲、と正中左袖返し、扇カザシてワキ柱を見上げた胸中に晴れやかなものが見えた（1時間19分）。

「薩摩守」　茶代も払えぬシテ貧僧（友彦）が無一物の強みの図々しさで剛直なアド船頭（松次郎）の秀句好きに乗ずる口舌の軽躁さが良い。キリの「面目もおりない」は心中で赤い舌をチロッと出しているのかどうか（32分）。

「善知鳥」　シテ慶次郎。笑尉・無地褄斗目と水衣は共に焦茶系で上品。卑賤に遠い。形見の袖は音がする程に強く引き千切り、ワキ旅僧（聞）に託した。別れてシテは二ノ松でワキを振り返り、ワキは羊腸の山径を下る態に正中から正先へ出て見送った。

子方は後シテ一声の前に切戸から出した。別れの後の忘れ形見、が舞台に居ないためツレ（徹二）のサシは空虚に聞え、ワキ旅僧にしても、「妻や子の宿を御訪ね候ひて」、と依頼された手前、子方が居た方が良いのは当然。

後シテは黒頭に癩男。へ千代童が髪を掻き撫で、は左手虚しく空を泳がせ、へあらなつかしや、も亦空を切り、それは涙に曇った目の為とも思えせつない。へうとう、と呼ぶ声はやや擦れて短かく、それだけ断腸の思い深かった。みケ[illegible]

様子。頬から顎にかけて黒ずんだ小面は些か晶が無く、玉藻ノ前の妖艶を窺う縁も無い。それは常座で小さく廻り中入する辺りの元気の良さや、面が少し傾ぐ工合などからも、アイ（弘之）の科白通りの物凄じき女の粗さである。

後シテは赤頭・小飛出。野干の捷と悍とは一ノ松の床几を立って脇正へ出て下居、左袖被ぐ所からキリによく表われた。就中、へ追っつまくっつ、と正中袖を巻上げ跳び上りざま安座するところの躍動感は面目一新。トメは三ノ松で膝を着き左袖被いた（46分・6月20日・愛知文化講堂・第28回大衆能）。

「通盛」　シテは正宣代勤であった。前後を通じ安定していたがツレ蜑女（寿一）の面が前日の「殺生石」前シテと同じなのが解せない。シテ中入の間、ツレは後見座にクツロギ、そのまま後ツレとなるが、黒ずんだ面は小宰相局に合わない。へ振り切り海に、と過去と現在が交錯して局が入水する場面も、郎の女の臨病が先立つ印象だった。

後シテは美々しい装束に面は若々しい今若か。ツレの容貌のため別れの盃を交わすクセは、情緒纏綿とは参らず、これがシテ至上主義の皮肉かとも思われた。カケリからキリへ、だからシテは自棄糞（？）の活発と言えなくもなかった（1時間19分）。

「杜若・沢辺ノ舞」　シテ英照。面は端麗な増。へとりわき眺め給へかし、と言い条、杜若に見とれる我にハッと気付き、含羞の面持に、へあら心なの旅人やな、とワキ旅僧（欽也）を見込む辺りはシテの内面描写濃やかである。

ワキとの掛合から物着は紫長絹に橙地花車雲・藤文様縫箔腰巻。小書で日陰ノ絲を垂らし、心葉に白い藤の花をつけると翁の面は一際美しく表情豊かである。クセ舞の淑やかさ。序ノ舞は所謂沢辺ノ舞。橋懸に抜け、二ノ松勾欄に寄って左袖返シ左から右へしみじみと杜若の群生を見た。更に小さく左右面遣いして舞台に入るのは、業平が契った里女の面影を求める彷徨か、へ植え置きし昔の宿の杜若、は契りし昔の宿の女を恋う姿と見[illegible]

えた。キリ前、へ蝉の唐衣の、と膝を着いて左袖を扇で受けてじっと見入る辺り、ナルシシズムの甘美な印象があえかに美しく、好漢英照好舞台とした（1時間15分）。

「大江山」　シテ雅。一畳台は大小前。ワキ頼光（勝久）独武者（雅介）他三人の鬼退治。強力（礼之助）と囚われの女（友彦）との遭遇がドラマを進める。前シテは黒頭・童子・花菱亀甲繋三巴雲文様厚板唐織を壷折り、深紫大口。へ嬉しし嬉しし一節に、の心の通い合いが問答で醸成されてゆく過程が仲々良く、へ憐み給へ神だにも、のシテ・ワキ連吟が更に気持を打ち解けさせ、酒興の舞もきびきびと酔が感じられない程だった。

後シテは額に瘤のある黒いシカミの面に赤頭、袷法被・半切。組み合いで台上に縋るワキの頸筋を押え込むが、突き出すワキの太刀にシテは台を下りて安座平伏。ワキは常座で太刀を担ぎトメ拍子を踏んだ。前シテの優しい童子の面と後シテ怪異のシカミの面の対照が演技面にも鮮やかに描写され、雅好演だった。ワキ勝久、眉宇凛々しく重習「大江山」を無事に披いた（1時間4分）。

ところで脇能・三番目・切能と地に変化がみられなかったがどうだろうか。ともあれ三番とも地頭は孝。少々酷使では……（6月21日・宝生会）。

能パフォーマンス
能の解説に新企画

7月23日　市民会館大ホール

「能パフォーマンス」のタイトルで、コンサート形式による音楽と謡の面から能を解説する公演が七月二十三日、名古屋市中区・市民会館大ホールで催される。

この企画構成に当っているのは能と狂言に親しむ会とツクスマグループ。主催は東海ラジオで名古屋まつり実行委員会が協賛。

序ノ舞、三番叟の揉ノ段、鈴ノ段などの演奏、笛・藤田六郎兵衛小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村大狂言方・野村又三郎氏らが出演する。全自由席千五百円。入場券などの問い合わせは能と狂言に親しむ会（電話〇五二―五七一―五七六三、藤田方）へ。

暑中お見舞申し上げます

瞳好会
森茂好
森常好
〒151 東京都渋谷区代々木四―三八―二 電話（〇三）370―4609

龍吟会
藤田六郎兵衛
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号 電話（〇五二）五七一―五七六三

森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

幸圓次郎
〒164 東京都中野区中央四―四七―一一 電話（三八一）九四一三番

幸義太郎
〒116 東京都中野区丸山二―二四 都営丸山アパート一号三二〇号 電話（三三七）五六七二番

野中正和
〒174 東京都板橋区宮本町五七―一 第一宮本寮 電話（五五八）八四二七番

幸友会
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原富司忠

飯島佐之六
〒920 金沢市香林坊2―8―8

桂会
後藤孝一郎

谷口正喜
京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

亀井俊一
忠雄
保雄
実

筧鉱一
吉田定男

前川光隆
前川光長
京都市右京区御室芝橋町一の六 名古屋市東区葵一―25―1 ニッシンビル六階六〇二号室 電話九三五―一〇一〇番

名古屋和泉会
大垣狂言の会
和泉元秀

茂山忠三郎
〒606 京都市左京区北白川大堂町47―1 電話〇七五（七〇一）二〇一一番

暑中お見舞申し上げます

名古屋和泉会
狂言共同社

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
基基嗣
義
〒215 川崎市麻生区岡上四三八―一 電話〇四四（九八七）一一八七番

狂言やるまい会
野村又三郎
〒460 名古屋市中区正木二丁目16―25 電話（三三一）七五五三番

能楽講座
能と狂言に親しむ会
梅田邦久
藤田六郎兵衛

（お断り）暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

62年7月・8月 放送予定

〔7月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

19日（日）宝生流「通盛」三川泉
26日（日）金剛流「班女」広田陛一

〔8月〕

2日（日）観世流「仲光」浅見真高
9日（日）宝生流「三井寺」松本忠宏
16日（日）故人をしのんで　喜多実、善竹忠一郎ほか
23日（日）宝生流「女郎花」辰己孝
　　観世流「鉄輪」大西智久
30日（日）喜多流「絃上」喜多節世

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

謡曲名所めぐり旅行

「江口」「弱法師」などゆかりの
関西の謡曲名所を探訪します

11月29日（日）に実施

会費 1万円（予約受付 詳細9月号）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話 （731）7984
振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 700円
郵送の場合 1年 1200円
一部 70円

薪能各地で盛ん
津島、犬山で開催

すでに二十二回を数える「名古屋薪能」（会場熱田神宮）をはじめ、ことしは各地で薪能が自治体や各団体のイベントとして催されている。

愛知県では、昭和五十九年から行われている津島薪能は「津島天王薪能」として、ことし第四回をむかえ、本年はとくに移動式能舞台が完成し、その披きを兼ねて開催（八月九日）、名古屋城夏まつりには、薪能が大きなよびものとして人気をあつめた。（七月三十一日～八月九日）。また犬山城築城四五〇年祭が催されている犬山では記念行事として初の「犬山城薪能」が犬山城薪能実行委員会により八月二十八日、犬山成田山境内で催され、夏の夜をかざる。

津島天王薪能
移動式能舞台が完成

「津島天王薪能」は、八月九日（日）、天王川公演野外ステージ特設舞台で午後五時半から開演。

主催は尾張津島天王薪能鑑友会、後援津島市、津島市教育委員会、中日新聞本社。

協賛・津島市観光協会、津島青年会議所、津島市職員組合、津島市職員互助会、名古屋金春会、能を知る集いで、今回で第四回を数える。

番組は次のとおり。

「神歌」（シテ橋本治雄、千歳坂田延）独吟「駒ノ段」（大野朋子）「屋島」（山田延恒）仕舞、「融」（桑原信夫）「野守」（横江亨子）「田村」キリ（加藤正嗣）「玉葛」（小島芳樹）独調（片岡ナナ子、小島みゆき）連吟「野宮」（三須真佐美、服部八重子）独鼓「船弁慶」（黒宮登美子、鬼頭喜太郎）火入れ式（午後七時）曲目解説（小島広次）

観世流舞囃子「柿屋島」（泉喜夫ほか）

和泉流狂言「附子」（井上松次郎井上礼之助、大野弘之）

金春流能「望月」（シテ本田光洋ツレ林鉄郎、子方鬼頭尚久、ワキ西村欽也、間狂言・佐藤友彦、笛・鹿取希世、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・鬼頭英二、太鼓・鬼頭喜太郎、地謡・瀬尾菊次、塚本恵市、吉場広明、加藤正嗣、渡部道三、小島芳樹、武馬正和、松本武、伏原靖二、堤幸夫後見・金春安明、横山紳一、河村高）（詳細次号）

なお「柿屋島」は尾張津島にちなんだ演目である。

犬山城薪能

犬山城築城四百五十年を記念する行事として「薪能」が企画され、八月二十八日、宝生宗家も来演、能二番が上演される。

大阪薪能
8月11・12日生国魂神社

能楽協会大阪支部・大阪薪能委員会主催の第三十一回「大阪薪能」は八月十一日（火）十二日（水）生国魂神社境内で開催。

演能は次のとおり。

八月十一日　観世流能「鶴亀」（シテ朝山清、亀・佐々木勝輝、鶴・安東一郎）喜多流能「巴」（シテ高林白牛口二）大蔵流狂言「梟」（善竹忠重ほか）観世流能「俊寛」（シテ山本順一、康頼・千藤隆一、成経・山本博通）観世流能「善界」（シテ梅若盛義）

八月十二日　観世流能「敦盛」（シテ木内十三比古）観世流能「羽衣」（シテ山本真賀）大蔵流狂言「金藤左衛門」（善竹長徳ほか）金春流能「放下僧」（シテ金春晃美、ツレ金春穂高）観世流能「一角仙人」（シテ山中義滋、ツレ斉藤信隆斉藤篤、山中雅志）

後援大阪府、大阪市、府・市教育委員会、大阪21世紀協会。

欧亜公演団が帰国
「羽衣」「棒縛」上演　4ヵ国で盛会

日・比親善欧亜公演団は、本間英孝師をはじめ中部能楽界から飯冨雅介、福井啓次郎、筧鉱一、鬼頭喜太郎の諸師が参加してマニラ（六月二十六日）ギリシャのアテネ市（六月二十九、三十日）ベルギーのハッセルト市（七月二日）フランスのナント市（七月四日）で、能「羽衣」狂言「棒縛」を上演、七月十日元気に帰国した。

小鼓方・福井啓次郎氏は、帰国あいさつのなかで「アテネの会場がアテネ大学劇場に変更、ナントはナント国際芸術祭・七月一日より五日、アメリカ、カナダ、ブラジルほか二十数カ国が参加、ブルターニュ大公城の内庭・野外ステージにて、ほぼ二千名の観客の前で上演、他国の動的な演目に対して、静的な能は格別な感銘をもって受け入れられ、シテが幕に舞い込むと同時に万雷の拍手でした」とレポートしている。

司宝会15周年大会

宝生流・佐藤耕司師主宰の「司宝会」はことし結成十五周年を迎え、記念大会を八月九日、熱田神宮能楽殿で開催。

能「加茂」（シテ佐藤耕司、ツレ関谷暁美）ほか素謡、舞囃子、仕舞など。

「道成寺」上演
長田驥師職分30周年記念能

喜多流・長田驥師の職分三十周年記念能がきたる九月十二日（土）熱田神宮能楽殿で催され、「道成寺」が演ぜられる。（番組③面）

野田神社所蔵
能面と能装束展
国立能楽堂展示室

国立能楽堂展示室では、きたる九月十八日から十月十八日まで、秋の特別展示「野田神社所蔵・能面と能装束展」を開催する。

野田神社は、山口市野田にあり毛利家旧蔵の能面、能装束が伝来しており、能面約百点、装束約二百点が所蔵されている。これまで山口博物館で展示されたことがあるが、東京でまとまった形で公開されるのは始めてである。開館は午前十時～午後五時（月曜日休み）入場無料。

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔8月〕
16日（日）名古屋官庁実業団連合大会（来場歓迎）
29日（土）衣斐正宜後援会能（有料）（番組②面）

〔9月〕
6日（日）名古屋金春会能（有料）（番組②面）
12日（土）長田驥職分30周年記念能（有料）（番組③面）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）（番組③面）
15日（祝）鑑賞会大会（来場歓迎）（番組③面）
19日（土）名古屋観世九皐会能（有料）（番組④面）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祝）福井五郎33回忌追善能（有料）
25日（金）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
27日（日）和泉会大会（来場歓迎）

〔10月〕
3日（土）猶恵会（来場歓迎）
4日（日）皐楽会（来場歓迎）
10日（土）幸謡会（来場歓迎）
11日（日）邦謡会（来場歓迎）
14日（水）能と狂言に親しむ会（会員制）
18日（日）武田謡楽会（来場歓迎）
24日（土）淡交会大会（来場歓迎）
25日（日）鳳鳴会大会（来場歓迎）
31日（土）青陽会定式能（有料）

〔11月〕
1日（日）風韻会能（来場歓迎）
3日（祭）幸友会秋の会（来場歓迎）
7日（土）修風会大会（来場歓迎）
8日（日）観世会定式能（有料）
14日（土）清謡会大会（来場歓迎）
15日（日）宝生会定式能（有料）
21日（土）幽花会大会（来場歓迎）
22日（日）観修会大会（来場歓迎）
23日（祭）和泉会（有料）
29日（日）久田観正会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋観世会

財団法人 梅若研能会
橘香会
梅若万三郎

藤井久雄
徳三
楽人
完治
神戸市中央区熊内町二―一―二〇
電話（二二一）五一四四番

幽花会
片山慶次郎
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一
電話 四九二―五三〇二番

邦謡会
梅田邦久
須部甫
清沢一政
今沢美和
本田勲
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五
電話〈〇五二〉（八四一）四六三二番

財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三―五―十三
電話（〇四六七）㉒五五五七

山本眞賀
豊中市本町六丁目一〇―六

大西智久
〒560 豊中市北桜塚2―10―3

春鶯会 梅若善高
豊中市新千里南町三丁目18―12
電話（〇六）八三一―七八五四

下田雄三
大阪市東区高麗橋詰五三

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
萩原雄諷会
高山雄諷会
倭文之屋社中

水雲会
水藤元三

加賀敏彦
名古屋市守山区森孝新田字乙98の44
電話〈〇五二〉（七七一）八九四五番

芳韻会 稲生芳雄
半田市船入町三十一
電話〇五六九㉑〇八一五

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋（栄）岐阜・四日市
翠生謡会
翠駒里
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話〈〇五二〉七〇三―五七一七番

春雅日記 ㉔

槿花一日の栄

えと文　二井栄逸

木槿（むくげ）の花が、垣一根や庭等に点々と咲きつづく頃になると、暑さも一段ときびしくなる。

夏の座敷に涼味をさそう花としてようこばれるが、梅雨明けの頃より、十月頃までの長い花期をもっているので、初秋の頃にもよくつかわれる。

子供の頃には、むくげのことを、もくげ、もくげと、呼んでいたことを覚えているがこの花にもいくつかの異名がつけられている。

しののめぐさ。きはちす。ゆうかげぐさ。あさがを等。

朝に咲いて、夕にしぼむこの花の面影は、私の頭の中から、いつかどこかで、かいま見た忘れ得ぬ美しさとして消えさろうとしない。それは点々と咲きつづく現実の姿ではない。

びんと五弁を張った純白の端正な一輪を、絶妙の手法でいけられた作品を見て、感動した為かも知れない。

槿花一日の栄——

白居易の「松樹千年終に是れ朽ち、槿花一日自ら栄を成す」詩からとった文学的な表現で、栄華のはかないことを、朝開き、夕にしぼむ、むくげにたとえたもので、槿花一朝の夢、ともいわれる。

平家一門の没落をえがく能の中にも、つかわれている言葉である。

むくげには、宗旦むくげ、真精院むくげ、大徳寺白（純白）、祇園守り（ぎおんまもり）等あるが、私は宗旦を好む。

宗旦は、白色底紅花弁で高雅である。真精院むくげは、薄紅で濃紅の底紅花弁で美しいが、宗旦にはかなわない。

祇園祭りの頃、一番花のさかりといわれる祇園守りは、半八重で中の花弁がしでのようになっていて、名の如く、夏祭りの花かざりに見えるから面白い。

（62・7・27記）

演能案内

第三回 衣斐正宜後援会能

八月二十九日（土）午後一時始

熱田神宮能楽殿

対談「能舞台とその効果について」

後援会会長 作曲家 神津善行

能楽評論家 藤城継夫

番組

能 三輪

水上 輝和

工藤 和哉　笛 久田舜一郎　鈎一 一噌隆二　観世 元信

間 茂山あきら

狂言 寝音曲 茂山千之丞　丸石やすし

仕舞 野宮 高橋 章　東川 光夫

後見 辰巳 孝　宝生 英照　辰巳満次郎　地謡 稲川寿一　吉田俊彦　佐野 登　佐藤 耕司　近藤乾之助　寺井良雄　東川 光夫

狂言 昆布売 野村又三郎　野村 信行

後見 大矢 高義

歌占 辰巳 孝　地謡 近藤乾之助　高橋 章　吉田俊彦　水上 輝和

一調 山姥 宝生 英雄　観世 元信

〃 柴田昌宏　〃 瀬野匡史

〃 石坂綾乃　〃 山名達郎

花見 内藤達俊　〃 内藤飛能

子方 高橋 卓　花見 石坂 守

衣斐 正宜

能 鞍馬天狗 西村 欽也　河村総一郎　助川龍夫　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

間 茂山千之丞　茂山あきら　丸石やすし　茂山千三郎

後見 辰巳 孝　内藤 泰二　地謡 佐藤 耕司　稲川寿一　鬼頭嘉男　高橋 章　辰巳満次郎　宝生 英照　東川 光夫

附祝言

主催 衣斐正宜後援会

事務所 〒450 名古屋市中村区名駅三丁目二六番二六　平松昌彦方　電話（〇五二）五八六—一一二〇番

（大場料）一般四千円　学生二千円

名古屋金春流同門会

九月六日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

仕舞 高砂 浅田明子　八島 福本昌浩　田村曲 橋本山美子　杜若切 佐々木敦　経政曲 大野誠　羽衣切 安井明　地謡 愛大能研会

連吟 紅葉狩 中部金春会　独吟 駒之段 赤広一雄　連吟 忠度 愛大能研会

仕舞 熊野曲 渡辺道三　老松 小林嘉行　羽衣曲 木崎三郎　守近藤修彦　地謡 吉本田光洋　赤広 広瀬鉄郎　一雄明

仕舞 熊野 部切 河村高　竹生島 切原松枝　半蔀 生 高橋章　地謡 河村　三輪曲 鈴木寿　熊野 野切 新竹加奈子　宮切 加藤富貴子　地謡 吉場広明　兒玉実高　阿蘇山 清切 伊藤雄二　地謡 広瀬瑞弘　伏原 靖二　松本 武

能 蝉丸 高安勝久　飯富雅介　柳原富司忠　鬼頭英二　森本重一　杉江元　野村又三郎

間 木崎三郎　本田 光洋　武馬正和　河村 高　地謡 渡辺道三　嘉行　吉場広明　小林永田孝司　金春安明　松岡賢二　林赤広一雄　鉄郎

（一時三十分頃終了）

御来場歓迎（入場無料）

主催 名古屋金春会　春鼓会　中部金春会　トヨタ車体謡曲部

名古屋金春会能

九月六日（日）午後二時始

熱田神宮能楽殿

仕舞 雲雀 山曲 広瀬瑞弘　角田川 林鉄郎　地謡 松本武　中村富次　吉場広明　河村高　近藤修彦

子方 加藤佐和子　ツレ 加藤正嗣　金春晃実

能 花筐 西村欽也　高安勝久　飯富雅介　杉江元　後藤孝一郎　笛 藤田六郎兵衛　鈎一

後見 本田光洋　中村富次　地謡 広瀬雅弘　河村高　伊藤雄二　鈴木寿　高橋広瀬　塚本瑞弘　恵市　田切高橋汎　若切 金春信高　地謡 中村鉄郎　広瀬瑞弘　河村高　鼓 金春安明

（中部金春会・東京金春会・③面につづく）

狂言 狐塚 佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎

後見 井上礼之助

仕舞 杜若 山本勝一　中村和男　天宮 鄙アト 武田弘

（②面金春会番組つづき）

仕舞 笠之段 久田徹二　冨田陽二　高林呻二　井上雄人　和谷友枝　衛市松井　地謡 祖父江修一　金子匡一　井上昭世　松枝彬

狂言 狐 野村 功

後見 大矢 高義

松和会　中村和男　各務原市那加桜町2丁目15番地　電話〈〇五八三〉㊷二七九四番

緑名会　田中武　〒488 尾張旭市城山町三ツ池六一九八　電話（〇五六一五）㊸三三〇四番

重陽会　菊池重郷　犬山市犬山字相生五九—一六　電話（〇五六八）㊶四五〇一番

幸謡会　近藤幸江　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㊹二五二九

観修会　祖父江修一　多治見市日ノ出町2丁目　電話〈〇五七二〉㊷三六五六

清諷会　今村嘉勇　岩倉市東新町下境52—401　電話〈〇五六七〉㊲七二三八

正風会　衣斐正宜　〒466 名古屋市昭和区御器所3—23—19　御器所パークマンション802号

衣斐正宜後援会　〒450 名古屋市中村区名駅三丁目二六番二六　平松昌彦方　電話（〇五二）五八六—一一二〇番

宝生流　嘉宝会　鬼頭嘉男　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

吉田俊彦

竹腰勝一

司宝会　佐藤耕司　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅〒一三〇　電話〈〇五二〉七三七二

金剛流　周星会・名古屋　周星会・岐阜　吉川周子　名古屋市千種区西崎町三—六　電話〈〇五二〉七六一—二二五七

谷田宗二朗　〒603 京都市北区衣笠街道町31—7　電話（〇五七五）四八三三　（〇五七五）四八三三

九州高安流同人会　飯富徹　飯富良人　大山要二郎　山崎悛輔　横田富生

笛三男　森本重一

瀬尾乃武　〒171 東京都豊島区西池袋1—30—10—305

大倉正之助　〒161 東京都新宿区下落合二—一四—一五ノC

大倉源次郎　〒564 大阪府吹田市江坂町五—一七—二

中村喜彦　〒602 京都市上京区智恵光院今出川上ル一〇六　電話〇七五（〇五七）七八二一番

楽諷庵舞台

長田驍師職分三十周年記念能

九月十二日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 草紙洗小町　和谷 衡市
舞囃子 岩船　長田 郷　河村真之介 柳原冨司忠　地謡 井上 雄人 金子 匡一 長田 驍 松井 彬 鬼頭喜太郎 鹿取希世

仕舞 糸之段　衣斐 正宜
（宝生流）笹之段　内藤 泰二　地謡 福川 俊寿一 吉田 耕司 佐藤 彬
独吟 鮎之段　二井 栄逸
舞囃子 養老　大島 久見　吉田 定男 柳原冨司忠　地謡 長田 森田 克彦 山本 和男 和谷 衡市 高林 呻二 大島 政允 鹿取喜太郎 希世

仕舞 西田 玉葛 黒塚　王母 村クセ 梅津 忠弘 金子 匡一 高林 白牛口二　地謡 粟谷 明生 粟谷 浩之 高林 呻二 粟谷 幸雄 粟谷 浩之 長島 茂 粟谷 呻二
喜多六平太

能 清経　西村 欽也　後藤孝一郎 森本 重一
後見 和島富太郎 高林 呻二 森林白牛口二 粟谷 明生 長島 茂 粟谷 浩之 井上礼之助 野村 信行
地謡 金子 匡一 香川 靖嗣 友枝 昭世 梅津 忠弘 大島 政允 森田 澄子

狂言 縄綯　野村又三郎
仕舞 八島 香川 靖嗣
半蔀 友枝 昭世
姉丸 粟谷 幸雄
融 和島富太郎
一調 山姥　大島 政允　森田 澄子
舞囃子 阿漕　喜多 節世　吉田 定男 柳原冨司忠　鬼頭喜太郎 鹿取希世

〔会員券四千円〕問い合わせ先
広瀬 瑞弘（〇五二―八四一―四七四五）
前田 茂穂（〇五二―二四一―三一四二）
小林 嘉行（〇五六六―二二―二〇七五）
塚本 恵市（〇五二―九三一―六七九四）
伏原 靖二（〇五二―九三五―二七二一）
（名古屋金春会事務局）

観世会定式能（第四回）

九月十三日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

指定席・一萬円　自由席・八千円
入場券取扱所　能楽殿・出演各流師宅
長田驍後援会（〇五九二―三〇―〇六九七）

能 清経　武田 観世 邦弘 清和　谷田宗二朗 松山 幸親 須部 甫 加賀 敏彦 祖父江修一 小島 一英　河村 久田舜一郎 中川 雅章 梅田 邦久 片山九郎右衛門 大森本 重一
後見 杉浦 関根 豊彦 祥六　地謡 福田 高林 井上 和谷 衡市 呻二 雄人 金子 栄造 井上 匡一 友枝 昭世 松井 彬 粟谷 明生 長島 茂 喜多 節世 大島 政允

附祝言
主催 長田驍後援会
長田驍後援会
協賛 三重喜多会

観能独語

上方系の二番
永謹と忠三郎

関上　久しぶりに金剛永謹の「葵上」が7月11日熱田でありました。随分背が大きくなって、西村欽也のワキ（小聖）と釣り合いがとれぬ感じ（特に後半の格闘の場面）がしないでもないほどでした。しかし、身体同様芸格も大きく、さすが御曹子芸と感心させられました。橋懸りのハコどからしてサラサラと、東京風の緻密な芸を見なれた目には、素っ気ないような感じがしたのは事実です。しかしそこが面白いところで、久しぶりにおおらかな上方系のよさを見て、楽な観能気分になりました。

一切が大まかというわけでもありませんので、「枕の段」の終り「枕に立てる破れ車、打ち乗せかくれいこうよ」と扇を床へ文字通りたたきつけた覇気、小袖（葵上）を尻目にかけるようににらみつけ、唐織をかついで引込む凄味、前半の泥眼が後半の般若に変わる予兆の表現かと面白く思いました。

後シテはワキの小聖との大格闘、小袖を持ち去ろうともち合うところなど「無明の祈り」独特の変った型などありましたが、ここでも、古拙とも未熟ともつかぬ型や芸に一種のゆとりが感じられ、近ごろとしては一抹の清涼剤といってもいい舞台でした。流儀と永謹個人の持味を生かしつつ大成を期待します。関西在住者でも、東京風へとなびきがちな現在、貴重な存在と思います。

月見座頭　茂山忠三郎が7月18日熱田の「朝日狂言会」で「月見座頭」を演じました。「川上」と並ぶ狂言は珍しくペーソスを含んだ佳作という人もいますが、どうでしょうか。この曲は江戸末期に作られ、明治に入って固定したという本狂言としては最も新しいものということです。それだからというわけではありませんが、「川上」などとは比較にならぬ底の浅い狂言だと思います。

忠三郎はさすがに、盲目の月見という皮肉さを感じさせるのでなく、至極普通な月見る人の浮かれ心を巧みに表現し前半の情趣を盛り上げました。それだけに舞台は明るく悲哀感は少く、最後もアッサリとクサメ止めにしたのも賢明でした。問題は善竹幸四郎のアド（上京辺の者）です。盲人と一緒に月見の宴としゃれたまではよかったですが、帰る途中に気が変り、引返して座頭につき当り、つき飛ばし、杖を奪って乱暴三昧はどうしたことですか。人間の心にひそむ善悪両面を表現して妙とほめるのは、少し買いかぶりではありませんか。盲人をかたわ者といい、まともな人間と見ない封建的人間観、かたわ者がいじめられ、からかわれて、狼狽するのを見て笑い喜ぶ当時の観客、そうした観客にこびるだけの趣向ではありませんか。福祉精神の行き届いた現代では、どう演じても後味の悪さが残る曲と思います。（M）

長田驍師職分三十周年記念能

九月十二日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 草紙洗小町　和谷 衡市
舞囃子 岩船　長田 郷　河村真之介 柳原冨司忠　地謡 井上 雄人 金子 匡一 長田 驍 松井 彬 鬼頭喜太郎 鹿取希世

仕舞 糸之段　衣斐 正宜
（宝生流）笹之段　内藤 泰二　地謡 福川 俊寿一 吉田 耕司 佐藤 彬
独吟 鮎之段　二井 栄逸
舞囃子 養老　大島 久見　吉田 定男 柳原冨司忠　地謡 長田 森田 克彦 山本 和男 和谷 衡市 高林 呻二 大島 政允 鹿取喜太郎 希世

仕舞 西田 玉葛 黒塚　王母 村クセ 梅津 忠弘 金子 匡一 高林 白牛口二　地謡 粟谷 明生 粟谷 浩之 高林 呻二 粟谷 幸雄 粟谷 浩之 長島 茂 喜多 節世
喜多六平太

能 清経　西村 欽也　後藤孝一郎 森本 重一
後見 和島富太郎 高林 呻二 森林白牛口二 粟谷 明生 長島 茂 粟谷 浩之 井上礼之助 野村 信行
地謡 金子 匡一 香川 靖嗣 友枝 昭世 梅津 忠弘 大島 政允 森田 澄子

狂言 縄綯　野村又三郎
仕舞 八島 香川 靖嗣
半蔀 友枝 昭世
姉丸 粟谷 幸雄
融 和島富太郎
一調 山姥　大島 政允　森田 澄子
舞囃子 阿漕　喜多 節世　吉田 定男 柳原冨司忠　鬼頭喜太郎 鹿取希世

附祝言
主催 名古屋金春会
名古屋金春円満井会

観世会定式能（第四回）

九月十三日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

指定席・一萬円　自由席・八千円
入場券取扱所　能楽殿・出演各流師宅
長田驍後援会（〇五九二―三〇―〇六九七）

能 清経　武田 観世 邦弘 清和　谷田宗二朗 松山 幸親 須部 甫 加賀 敏彦 祖父江修一 小島 一英　河村 久田舜一郎 中川 雅章 梅田 邦久 片山九郎右衛門 大森本 重一
後見 杉浦 関根 豊彦 祥六　地謡 福田 高林 井上 和谷 衡市 呻二 雄人 金子 栄造 井上 匡一 友枝 昭世 松井 彬 粟谷 明生 長島 茂 喜多 節世 大島 政允

附祝言
主催 長田驍後援会
長田驍後援会
協賛 三重喜多会

上方系の二番
永謹と忠三郎

関上　久しぶりに金剛永謹の「葵上」が7月11日熱田でありました。随分背が大きくなって、西村欽也のワキ（小聖）と釣り合いがとれぬ感じ（特に後半の格闘の場面）がしないでもないほどでした。しかし、身体同様芸格も大きく、さすが御曹子芸と感心させられました。橋懸りのハコどからしてサラサラと、東京風の緻密な芸を見なれた目には、素っ気ないような感じがしたのは事実です。しかしそこが面白いところで、久しぶりにおおらかな上方系のよさを見て、楽な観能気分になりました。

一切が大まかというわけでもありませんので、「枕の段」の終り「枕に立てる破れ車、打ち乗せかくれいこうよ」と扇を床へ文字通りたたきつけた覇気、小袖（葵上）を尻目にかけるようににらみつけ、唐織をかついで引込む凄味、前半の泥眼が後半の般若に変わる予兆の表現かと面白く思いました。

後シテはワキの小聖との大格闘、小袖を持ち去ろうともち合うところなど「無明の祈り」独特の変った型などありましたが、ここでも、古拙とも未熟ともつかぬ型や芸に一種のゆとりが感じられ、近ごろとしては一抹の清涼剤といってもいい舞台でした。流儀と永謹個人の持味を生かしつつ大成を期待します。関西在住者でも、東京風へとなびきがちな現在、貴重な存在と思います。

月見座頭　茂山忠三郎が7月18日熱田の「朝日狂言会」で「月見座頭」を演じました。「川上」と並ぶ狂言は珍しくペーソスを含んだ佳作という人もいますが、どうでしょうか。この曲は江戸末期に作られ、明治に入って固定したという本狂言としては最も新しいものということです。それだからというわけではありませんが、「川上」などとは比較にならぬ底の浅い狂言だと思います。

忠三郎はさすがに、盲目の月見という皮肉さを感じさせるのでなく、至極普通な月見る人の浮かれ心を巧みに表現し前半の情趣を盛り上げました。それだけに舞台は明るく悲哀感は少く、最後もアッサリとクサメ止めにしたのも賢明でした。問題は善竹幸四郎のアド（上京辺の者）です。盲人と一緒に月見の宴としゃれたまではよかったですが、帰る途中に気が変り、引返して座頭につき当り、つき飛ばし、杖を奪って乱暴三昧はどうしたことですか。人間の心にひそむ善悪両面を表現して妙とほめるのは、少し買いかぶりではありませんか。盲人をかたわ者といい、まともな人間と見ない封建的人間観、かたわ者がいじめられ、からかわれて、狼狽するのを見て笑い喜ぶ当時の観客、そうした観客にこびるだけの趣向ではありませんか。福祉精神の行き届いた現代では、どう演じても後味の悪さが残る曲と思います。（M）

名古屋金春会大会

九月十五日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

狂言 狐塚　佐藤 友彦　大野 弘之 井上松次郎
後見 井上礼之助

仕舞 野邯鄲　中村 和男 武田 邦弘 梅田 邦久 武田 邦弘 清沢 一政
松宮　鄂アト 山本 勝一 片山九郎右衛門 地謡 武田 邦弘 梅田 邦久 武田 邦弘 清沢 一政
虫キリ　関根 祥六

能 三輪　西村 欽也　吉田 定男 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
間　井上礼之助　今村 嘉勇 本田 勝一 加藤 保彦 高橋 暖一 中川 雅章 梅田 邦久 関根 祥六 武田 邦弘
後見 小島 一英 山本 勝一
（終了四時半頃）

附祝言
主催 名古屋観世会

〔有料〕（要金員券）
当日券 七千円（自由席）

内藤泰二師古稀記念
雲会大会

九月十五日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

能 鷺　内藤 泰二
（午後一時頃）
トモ 前川 知賢 胡蝶 小林 福子 頓光 鬼頭 純郎 金兒 晶子
西村 欽也　筧 鉱一 鬼頭喜太郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

能 土蜘　西村 欽也
ほかに舞囃子、連吟、仕舞など

主催 鷺雲会
名古屋市昭和区山里町一三五の二
内藤泰二方

長生会
鬼頭喜太郎
好信
大鼓方 鬼頭英二
愛知県中島郡平和町城西
電話（〇五六八）⑥一九六〇番

助川竜夫

茂山千五郎
茂山正義
茂山真吾
茂山千三郎
京都市上京区中筋通り石薬師上ル

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

演能写真
ウシマド写真工房
〒602 京都市上京区北野上七軒
電話〇七五（八四二）一三四一番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―四―一二
電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台
加納保一
名古屋市昭和区滝川町四七―八三
電話（八三二）七〇〇一番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話〇五六一五③二三四六番
能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

ビデオ撮影
西川企画
名古屋営業所 名古屋市西区名駅2―20―3輪の内荘 小椋方
電話（〇五二）五七一―五八一六
〒500 岐阜市北野町20―2
電話〇五八二⑥九八六九番

〔お断り〕暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

能楽の友社
同人一同

62年8月・9月 放送予定

〔8月〕 NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
16日（日）故人をしのんで　喜多実、善竹忠一郎ほか
23日（日）宝生流「女郎花」辰己孝
観世流「鉄輪」大西智久
30日（日）喜多流「絃上」喜多節世
〔9月〕 NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
6日（日）観世流「井筒」㊤㊦山本順之、宝生閑
13日（日）同上　㊤㊦茂山千五郎
（東京能楽鑑賞会公演から）
20日（日）宝生流「野宮」今井泰男
27日（日）観世流「清経」「紅葉狩」片山慶次郎 杉浦元三郎
NHK教育テレビ（午前9時～10時半）
9月15日（祝）能「井筒」（観世流）山本順之 浅見真州

名古屋観世九皐会定期能（納会）

九月十九日（土）午後一時半始
熱田神宮能楽殿

能 **菊慈童**
素謡 通小町　中所宜夫　佐々木勝輝　高橋暸一
狂言 咲嘩　加藤保彦　大野弘之　佐藤友彦　井上松次郎
仕舞
子方 後藤邦泰
能 **船弁慶**　観世喜之
前後ノ替
間　井上礼之助

附祝言

主催 名古屋観世九皐会
事務所 457 名古屋市南区元塩町一一一一七
（加藤保彦方）
TELO五二（六一一）三六五九

〔有料〕
要金員券
当日券 五千円

犬山城薪能

八月二十八日（金）五時三十分始
場所 犬山成田山

ごあいさつ
火入式
番組

能 **羽衣**　辰巳孝　工藤和哉　河村総一郎　観世元信　後藤孝一郎　一噌庸二　バンシキ
後見 内藤泰二　寺井良雄　地謡 安野歩　後藤新治　佐藤耕司　近藤乾之助　高橋章　鬼頭喜男　水上輝和　広島克栄
狂言 **棒縛**　茂山千之丞　茂山千五郎　茂山あきら
後見 丸石やすし
仕舞 三井寺　寺井宝生　寺井英雄　辰巳良雄　広島克栄　孝
能 **土蜘**　飯冨雅介　西村欽也　杉江元　笛鉱一　禅井啓次郎　藤田六郎兵衛　助川龍夫
間　丸石やすし
トモ 衣斐郷志　小蝶佐野登　頓光衣斐正宜　宝生英照
後見 寺井良雄　辰巳満次郎　地謡 浦野正二　平田正文　稲川寿一　吉田俊彦　水上輝和　近藤乾之助　高橋章　広島克栄
台持 鬼頭嘉男　佐藤耕司

附祝言

信玄袋

―新・徳川美術館、金剛能と朝日狂言会、放送―

八月は終戦の月。

熊本の在の爆撃隊に居た私は復員命令ですぐ帰郷（名古屋）することになる。十七日夜半にあの広島の駅に着いた。もやった中に市街の何一つみえなかった。翌十八日ヒル頃の京都の駅は焼けず賑かである。京都を訪ねるとしばらくは同じホームから乗った。

NHKに戻り、邦楽担当の一本槍で三年と少々過ごす。古典芸能愛好者に邦楽の復興を呼びかけた。雨が降っても、あの城内のNHKから帰ってもらう傘もなかった。日本選手権出場（ラグビー）の物分りよい報道課長（故人）に芸能記事の報道を持ちかけたけれど、破顔一笑、当時はまだだめであった。今はニュースのなかに〈芸能〉は花ざかりです。因みにこの頃、その当時清元で活躍してくださった方（CBC、くちなし賞受賞）が高令でなくなられた。なお名古屋の戦後第一回の謡曲の全国放送者（シテ）は橋岡久馬青年で慶応ボーイ。「ハヤシ方は一流をつけて下さい」との見識ある注文がついた。長唄娘道成寺の概要も自分で英訳して検閲官に提出した。

× × ×

七月十三日テレビで、私はNHKとCBCでみたが、増築改装された徳川美術館の新容が紹介される。何と展示室の壁に鏡板と橋掛が設けられている。珍重。松は立派。少しある根方から太い幹が出ていた様子。N能楽師（宝）と電話で用談の折これに触れると、弘化年間の勧進能（宝）の舞台の松に似ている由。当美術館にその絵巻物はあるとのこと。記述に不確実な点なきにしもあらず。十月の開館が楽しみである。

× × ×

近頃、テレビの時代劇（独眼竜政宗ほか、映画にも）に能、狂言に関係する場面がよく出る。中国の「川劇・白蛇伝」では大立廻に〈仏倒れ〉があり、船上では役者の身体が、船渡聟のように、揺れていた。

× × ×

◆七夕月の舞台から◆
「九皐会」と「第29回朝日狂言会」

竹尾邦太郎

「班女」　シテ美智子。幕放れから運びが単調で、アイ松次郎の焦燥を掻き立てる、「あのうじうじとしたなりは」、の詞に合わず後シテも恋慕が昂じて彷徨い出る気分に欠け、いそいそした感じであったが常座に出て、〽この神々に、と下居合掌するところ、ようやくその一途な気持が高揚してカケリは情熱的だった。

クセ後半、〽さるにてもわが夫の、と立ってスミに行き、〽櫂干に立ち尽して、と遠く見るところ、女流らしい繊細な情感がよかった。中ノ舞は扇扱いがやゝ粗。是非はさて置き、初な乙女のひたむきな愛が見えるだけで遊女の濃艶な愛は見えなかった（1時間22分）。

「鐘の音」　主・礼之助に鎌倉へ金（かね）の値を聞きに遣られる際、シテ太郎冠者・友彦の面貌に一瞬横切る怪訝な面持が伏線となる。早合点で無く、問い返した後の啣弄を嫌って自分を無理に納得させた結論であればこそ、シテは慎重に鐘を撞き、その音を聞く。その機微を友彦は丁寧に見せた。

鐘楼の在処は寿福寺が笛柱、円覚ワキ、極楽目付、建長シテ。最高の音色は目付柱の極楽寺に極まる。結果は、「退りおうう」、と叱責され、一ノ松に平伏し、更に追い立てられて幕に逃げた（25分）。

「天鼓・弄鼓ノ舞」　鬼鼓台は正先。ワキ勝久、拾狩衣・白大口。名宣から直ぐ呼び出しになる。シテ王伯・喜之。面は小牛尉か。唐帽子・白垂・法被は緑地桐花唐草文様。地の、〽老の歩みも、とよちよち鼓の前に出ると、〽心も危き、と袍を取り、〽とゝ鼓、鼓と袍を揃え、〽打てば、と老人らしく小幅に数歩退り、〽その声ぞ、とクモラセて耳を傾ける辺りのしんとした緊迫感。又、撥をパタリと落し、たらたらと退って下居すると、〽龍顔に御涙を、と双シオリして感に堪える辺り、的確な写実で喜之の描写非凡。

中入はアイ・弘之に二ノ松まで介添されて送り込み。後見は羯鼓台を少し手前に引く。後シテは黒頭・慈童・厚板・半切・法被右肩脱ぎ。唐団扇を後見に渡すと羯鼓台から撥を抜き取り、地の、〽波は滔々と打つなり打つなり、と強く拍子踏んで左袖さっと巻くと〽手向の舞楽、と鼓に寄って打った。楽になり、途中一ノ松に往き左袖被いて暫時鼓を見込むとまたするすると出て鼓を打ち、正中で猛々乱のようにいやいやと頭を振り流レ足を見せ、更にスミへ行き右から左へずーっと見て台の後ろを通り抜けて常座で二度廻り、ヒラクと一つ踏み、大小前から正中に出て袖アシライ舞上げで大小前で、〽面白や時も実に、となった。キリ地となり、〽秋風楽なれや松の声、と巻をさし、〽楢葉を払って、と左手で頭を取り、〽月に嘯き水に戯れ、と再び流レ足を見せた。軽やかに巡るシテの流麗な躍動感は歓喜に溢れ、喜之の胸のすくような一番だった。後見は武計・美智子。囃子は六郎兵衛・冨司忠・定男・竜夫。地謡は康・勝輝ら。何れも好調だった（1時間15分・7月5日・九皐会）。

「角水聟」　超稀曲、「角水」とも。聟取物で。聟の秘補三人（アド祐一・友彦、シテ元秀）が士烏帽子・段鬼斗・素袍の盛装で有徳人・松次郎を訪ねるところの華やぎは伸々の壮観。主題はカクスイを折り込んで一首作り、それが適えば聟に取る設定。三人は生国に托して、「西の海千尋の網を斯く掬いて」、「摺磨紙いかなる人の斯く漉いて」、「河内なる早稲田を人の斯く鋤いて」、と詠むと悉く意に適うが、被衣の下の麗女にあたふた逃げ出す二人。鼓打方語と、仕舞場の開き直った強かさをメリハリよく演じて老練。しかし前半、主・弘之の科白がいつになくゆっくりと重々しく、忠僕を賭の代に出す程の軽薄さ浅薄さが乏しかった（31分）。

「蝸牛」　シテ幸四郎。大袈裟な所作を精一杯駆使して奮闘する吹けば飛ぶような山伏はそれなりに面白いが、持味だけで理不尽な可笑しさは不足。太郎冠者・伸元主・忠三郎共に無難。ただシテの角の出し方が曖昧で、初めて見る人には合点出来なかったのではなかろうか（27分）。

「千切木」　散漫になりがちな大勢物を上上の一曲にまとめ上げた。忖度を知らず疎まれる太郎を礼之助が熱演。連歌講に押しかける自虐と思われかねない執拗さが皆に打擲され足蹴にされて挫折し妻・友彦に甘えけしかけられて虚勢を張る。礼之助・友彦が快調なテンポで引っぱり、主・弘之以下立衆も整然として爽快だった（34分・7月12日・第29回朝日狂言会）。

演能（七月）。

十一日久々の金剛能で英上・無明ノ祈り。シテは金剛永謹〈ひきのり〉氏、一昨年のテレビ能橋弁慶（付対談あり）。その前年の道成寺古式（国立能楽堂、初冬。いずれも佳。大きな器で、見識も高雅）。秀逸の英上。優美でおおらかさと強さを備える。前半の奥深い動きよく、後の三ノ松で膝を立てた構え（眼光）鋭く、その直前の白小袖をわしづかみに去ろうとする気合い十分。観世流同様満席から万雷の拍手がおこる。英文二種の解説も用意周到、ただし折角の宇高通成氏の話―能の精神性と宗教性は少々長かったのではないか。来年も期待したい。九月には金春能、寄多能（道成寺・長田驍。新六平太氏の清経と節世〈さだよ〉氏のハヤシ・阿漕がある）が催され今年は下掛りは賑やか。うれし。

× × ×

翌十二日朝日狂言会。今年で二九回。もうひとつのやるまい会（野村又三郎）は野村万之丞、茂山千五郎両兄弟の出演。当狂言会はかつては茂山〈のち善竹〉弥五郎・野村万蔵・茂山千作（いずれも故人）・三宅藤九郎各氏に、今は大蔵弥太郎・和泉元秀両氏と善竹兄弟各氏が出演するようになった。一度山本東次郎（現）氏の参加も数えることができる。それが今回は初期の頃俳一で出ていた茂山忠三郎氏が出勤する。厚味の万作・きめ細かい千之丞に比べて、几帳面かつおだやかな忠三郎氏は前二者に対抗するだけの風格と技倆の持ち主である。その狂言芸は名古屋でももっと鑑賞されてよい。第二九回の目玉・月見座頭（忠三郎・茂山幸四郎）は見所の期待にこたえる。人間の心の良否（善悪・表裏）をしずかにみせてよかった。

人間の心の問題と言えば、五番のうち三番に女性が登場。一人はみめうるわしくなくつっこうばされ、一人は散々の悪口を言われ、一人はわわしい女子。悪口散々の大内儀は太郎冠者の語りに出るだけであるが、それを松次郎氏がさらりとたくみに強調して、風格ある芸に仕立てる。期せずしてこう言う狂言組になったのであろうが狂言の人間探究の貪欲さが思わぬ番組立でみられた。第三十回に期待する。

付、上旬の天鼓・喜之は七月号でふれた。なお観世素謡会は行かず。元昭氏の実盛（初番）は能でみたいと思う。また息・清顕氏の急逝にあわれたが、存命ならば、七月の松風（東京）のツレはもちろん清顕氏がとしみじみ考えた。

× × ×

放送（NHK、謡曲、FM）。七・五。山姥・橋岡久馬・野口敦弘・五木田武計ほか。同・二六。班女・広田陛一、融・金剛永謹ほか。

どちらも佳。前者は一念化生と高く強く以下やさしく謡い進み、セの音をシェと発音すること十回をはるかに越す、古風にしてなつかし。後者は乱れず曲趣を出す。本は次号に。（野村広二）

二井栄逸師画抄集

'88 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1988年版。B3（タテ51.5cm×ヨコ38.0cm）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。能画は「若女」（表紙）「羽衣」「小塩」「石橋」「夕顔」「紅葉狩」「葛城」

◉ 予約特価　1部 1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数に拘らず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも3800円）

◉ 予約申込み期限　10月15日（それ以後は1部 1800円、ただし部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉ お申込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

申し込み先　能楽の友社
〒464　名古屋市千種区千種2-18-18　電話(052)731―7984
振替口座　名古屋 0 ― 36393

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

愛知県芸術祭

「船弁慶」「棒縛」

能楽協会名古屋支部公演

10月17日扶桑で

能楽協会名古屋支部（内藤泰二支部長）が参加する愛知県芸術祭は、きたる十月十七日（土）丹羽郡扶桑町の扶桑中学校体育館で行われる。狂言の解説、能の解説があり、番組は能「船弁慶」（前シテ小島一英、後シテ武田邦弘、ワキ西村欽也）狂言「棒縛」（井上松次郎、佐藤友彦、井上礼之助）の上演。

第3回セントラルパーク薪能

名古屋の中心、栄の中心で行われるセントラルパーク薪能は、ことし第三回をむかえ、九月十一日と十三日（雨天のため十二日の予定が順延）の二日間、それぞれ午後七時からセントラル広場で開催され、七千人が観賞した。

構成は能と狂言に親しむ会（梅田邦久師、藤田六郎兵衛師）、セントラルパーク薪能を愛する会が

演目は、（十一日）狂言「昆布売」（井上松次郎、井上礼之助）能「一角仙人」酔中之舞（シテ梅田邦久、ツレ清沢一政、祖父江修一、今沢美和、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、杉江元、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村真之介、太鼓・上田悟、後見・近藤幸江、前野郁子、地謡久田徹二、中川雅章、高橋暸一（須部甫）

（第二日目）狂言「清水」（野村信行、大矢高義）半能「采女」美奈保之伝（シテ梅田邦久、ワキ飯富雅介、笛・鹿取希世、小鼓・大倉源次郎、太鼓・吉田定男後見今沢美和、生駒里翠、地謡小島一英、武田邦弘、祖父江修一、清沢一政）

岩崎狂雲、丸石やすし）

能「小鍛冶」白頭（シテ広田幸稔、ワキ宝生閑、笛・杉市和、小鼓・曽和博朗、大鼓・谷口正喜、太鼓・前川光長、間・丸石やすし）

なお広田後援会能は、来春は七十回公演三十五周年を迎え四月三日（日）行われる。

各地だより

秘曲「狸腹鼓」上演

9月27日　善竹狂言会

善竹狂言会は九月二十七日（日）故善竹弥五郎二十三回忌追善別会を神戸湊川神社神能殿で催す。午後一時半開演。

別会では、大蔵宗家に伝わる秘曲「狸腹鼓」の初公開、狂言の最高曲「花子」の上演が注目される。番組は次のとおり。

「名取川」（善竹幸四郎、善竹長徳）「花子」（善竹忠重、善竹十郎、大蔵基嗣）「狸腹鼓」（大蔵弥太郎、善竹孝夫）「菌」（善竹圭五郎、善竹玄三郎ほか）

小舞「祐善」（茂山忠三郎）「通円」（茂山千之丞）素囃子「海士」など。入場券五千円。

神戸

広田後援会能

10月4日　金剛能楽堂

広田後援会主催の秋季公演は十月四日（日）金剛能楽堂で催される。午後一時半開演。番組は次のとおり。

仕舞「春日龍神」（広田泰能）能「江口」脇留（シテ広田陸一、ツレ梅田道一、広田泰能、ワキ宝生閑、笛・森田光春、小鼓・曽和博朗、大鼓・谷口正喜、間・茂山千之丞）

狂言「鐘ノ音」（茂山千之丞、

京都

松野・宇高二人の会

金剛流松野恭憲、宇高通成両師の「松野・宇高二人の会」の演能は、九月十三日金剛能楽堂で能「頼政」（松野恭憲）「龍田」（宇高通成）を上演。同会は今回で八回を数える。なお次回（第九回）は明年秋九月十一日に開催を予定している。

京都

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔9月〕
19日（土）名古屋観世九皐会能　（有料）
20日（日）名古屋宝生会定式能　（有料）（番組①面）
23日（祝）福井五郎33回忌追善能　（有料）（番組①面）
25日（金）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
27日（日）和泉流狂言大会（来場歓迎）（番組③面）

〔10月〕
3日（土）猶恵会秋の大会（来場歓迎）（番組②面）
4日（日）皐楽会秋季大会（来場歓迎）（番組②面）
10日（土・祝）幸謡会大会（来場歓迎）（番組③面）
11日（日）邦謡会（来場歓迎）（番組③面）
14日（水）能と狂言に親しむ会　（会員制）
18日（日）武田謡楽会秋季大会（来場歓迎）（番組③面）
24日（土）淡交会大会（来場歓迎）
25日（日）鳳鳴会大会（来場歓迎）（番組④面）
31日（土）青陽会定式能　（有料）

〔11月〕
1日（日）風韻会能　（来場歓迎）
3日（祭）幸友会秋の会　（来場歓迎）
8日（日）観世会定式能　（有料）
14日（土）清謡会大会　（来場歓迎）
15日（日）宝生会定式能　（有料）
21日（土）幽花会大会　（来場歓迎）
22日（日）観修会大会　（来場歓迎）
23日（祭）和泉会　（有料）
29日（日）久田観正会　（来場歓迎）

〔12月〕
5日（土）朝日カルチャーセンター能楽会（来場歓迎）
6日（日）歳末助け合い協賛能　（有料）
13日（日）壺泉会能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

62年9月・10月 放送予定

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
20日（日）宝生流「野宮」今井泰男
27日（日）観世流「清経」「紅葉狩」片山慶次郎 杉浦元三郎

〔10月〕
4日（日）観世流「江口」梅若恭行
11日（日）宝生流「玉葛」近藤乾之助
18日（日）金春流「俊寛」金春信高
25日（日）観世流「柏崎」山本真貢

◆NHK教育テレビ（午前9時～10時半）
9月23日（祝）能「弱法師」（宝生流）
高橋進、松本謙三
10月10日（祝）能「竹生島」女体（金剛流）金剛巌ほか、狂言「鬼ケ宿」（井伊大老作）
大蔵流・茂山千五郎ほか
—彦根城博物館能舞台から—

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

第卅一期・第三回 名古屋宝生会定式能

九月二十日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能　松虫
問　寺部一威　佐藤耕司　稲川寿一　吉田俊彦
後見　倉本雅　竹内澄子
地謡　飯富雅介　佐藤友彦　河村大　柳原富司忠　藤田六郎兵衛

仕舞　竜田　馬場富四夫
丸　内藤泰二
地謡　須賀千代子　倉本玉井　小柳博雅　寿子

狂言　六蟬
融　戸田和
浦　髙安勝久　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世　井上松次郎
間　後見　辰巳孝　内藤泰二　山本前田　村瀬幸子　石原郁子　西村康子　梅子　足立付内　倉本澄子　玉井博雅　葛原正枝
地謡　石森智幸　安江良啓　中島真六　鬼頭嘉男　辰巳孝　衣斐正宜　竹腰勝一

能　鉄輪
衣斐正宜
輪　西村欽也　杉江元　大野弘之　筑紫鉱一　福井啓次郎　森本重一　助川龍夫
間　後見　戸田和　玉井博　地謡　加賀山慶治　大川和夫　佐々木輝雄　平子稲美　馬場富四夫　佐藤耕司　稲川寿一　辰巳孝
狂言　雷
井上礼之助　井上松次郎

〔有料〕
臨時会員券　四千円
主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五　内藤泰二方
電話　八三二一—三四四九

追善能

九月二十三日（祭）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

雛子　海人　三川淳雄　後見　河村総一郎　藤孝一郎　地謡　久野幸三　野邦男　河村輝和　広島水上孝道　克栄　鹿取助川　希世　龍夫

独調　経政　当山孝道　幸正昭

雛子　高野物狂　金井章　吉田定男　柳原富司忠　森本重一
地謡　佐々木輝雄　高田真六　馬場富四夫　辰巳孝　衣斐正宜

一調一管　江口　大坪十喜雄　福井啓次郎　良久　藤田六郎兵衛

一調　女郎花　内藤泰二　幸義太郎

能　砧　水上輝和　近藤乾之助
問　野口敦弘　佐藤友彦
後見　辰巳孝　内藤泰二
地謡　筑紫鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　平子稲美　佐藤耕司　稲川寿一　吉田俊彦　当山孝道　金井章　三川淳雄　衣斐正宜

狂言　宗論　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

能　天鼓　辰巳孝
盤渉　野口敦弘　吉田定男　禅井良治　森田光春
間　大野弘之
後見　三川淳雄　水上輝和
地謡　織田哲也　寺部勝一威　竹腰嘉男　大坪十喜雄　鬼頭広島克栄　馬場富四夫　衣斐正宜

追加

会員券　指定席　一万円　自由席　五千円
御取扱所　市内各プレイガイド　出演楽師方
御申込先　〒四六〇　名古屋市中区大須三丁目二の四〇　福井啓次郎

中日文化センター '87 芸能発表会

九月二十五日（金）午前十時始
熱田神宮能楽殿

能「羅々」素謡「草子洗小町」「善知鳥」「弱法師」「熊坂」「鉄輪」「通小町」、舞囃子、仕舞、狂言謡、連吟、小鼓連調など。

〔御来場歓迎〕

主催　幸友会　福井啓次郎　福井良久　福井良治

青雅日記 ⑦⑤

祕められた情感

えと文　二井栄逸

黒髪

ふりほどいた髪の流れるままに
唇は肩に触れ
僅かに身を振らせていた

明けきらぬ しじまの
闇の水仙の香りはまだ消えず
動くとそのたびに匂ってきた

この詩は友人である詩人・丹羽征夫さんの作品で、今度出版される詩集、神々の庭の続篇の中の一つ。若女に寄せる詩をちょっと拝借させてもらった。能面作家である彼の詩の中には、能面に寄せる作品が多いので、面のイラストをかいてくれというのである。

今度、かくのは約二十面であるが、たとえば、小面（乙おもて）をかくにしても、私の場合は曲柄のイメージを祕めこもうとする意識がさきに立つし、彼は詩人であるから、私のイメージとは少々違うかも知れない。とにかく、なるべくスケッチに忠実であるようにかくことにした。

能面のなかでも女面は、一見無表情に見える。ほとんどの人は無表情な顔のことを、「能面のようね」と、説明する。まことに適切ないい方であるが、わずかな起伏や、単一な目鼻は、反対に複雑化し、えもいわれぬ雰囲気をただよわすのである。

名手にかけられて、一旦舞台に出ると、生き生きと精気がよみがえり、面上に感情が去来するのが素晴らしい。

名品といわれる能面の裏には、時代を超えて幾星霜、名手達の汗や油がしみこみ、情念が祕められている。

己れを無にし、自分の頭を捨て、能面というワンクッションの内側にかくれた能役者は、そのシテの人物になりきって能を舞う。

無から有が飛び出すのはこの時である。

私は、能面をかく場合、能楽師である為か、どうしても曲柄を意識してかいてしまう。

同じ小面をかく場合でも、二人静、羽衣、松風、求塚、半蔀等、小面が使用されるが、例えば、求塚の前シテを意識してかく場合、この前シテは、里の女として登場し、春まだ浅い生田の小野に雪間の若菜を摘む女性の、美しく豊かな情趣をただよわせるが、後半の八大地獄へ移行してゆく変化、うないおとめの事を彼の女と客観的に呼びながら、一つのつばさにあたりしかば、と、俄然自分自身のこととして「思いわび」、の歌へ移りゆき、流るる水に夕汐の、刺し進えて」と、あの写実性と象徴性の型どころを意識するのである。

半蔀の場合は、シテは人間というより、花の精として出現する観があるし、何と言っても源氏物語の詩情をたゞよわせるが一番よいと思っている。

そのように同じ小面をかいてもそれぞれに特徴がそこはかとなくあらわれる絵がかきたい。

能面の使用について、附記しておかなければならないことがある。それは流儀によって使用する面が違っていることである。私どもの流儀（喜多流）では、前述の曲柄には小面を使用する。その理由は、小面を幽玄美の中心とした意味あいから伝承されている理で、宝生流では節木増。観世流では若女。金剛流では孫次郎。金春流は喜多流とほぼ同様のようである。

（62・8・25記）

名古屋観衛会秋季大会

十月四日（日）午前十時始
名古屋市中区栄五―四
栄能楽舞台

番外連吟　駒之段　河村栄重　河村信重　山本博通　森本哲郎

素謡　葵上　川口志満子　伊藤秀子　豊住雅子　鈴村とみ
弱法師　義仲　吉田琴子　池田加藤敬子　立衆　鈴木きくゑ　久納希秋　水野浩司
木曽　願書　伊藤健一郎　融　原田一平
独吟　善知鳥　菊慈童　近藤辰男
盛久　滝川一司　田代博　太田和子　鈴木幸子　森本哲郎　奥村泰広
松風　求塚　青柳イツエ　上遠野ひな子　駒形賀津子
輪　岡村イツ子　網之段　伊藤かずゑ
笠クルヒ　杉野伸江
芭蕉　神野勝之助　川久保彰礼　藤井敏枝　山田伸子　加藤鳳来
砧　老　鈴木きくゑ　須磨源氏　山中節子
盛　芥栄雄　鐘之段　川瀬保
独吟　葵通　判官　波多野潤子　同山　鈴木きくゑ　〃　加藤敏子　〃　村瀬つね　吉田琴子
安宅　中川芳子　山本万有里
勧進帳
番外仕舞　井筒　河村禎二
鉄輪　山本勝一
（終了予定　五時半）
附祝言

〔御来聴歓迎〕能楽師会館　主催　名古屋観衛会　地謡　山本勝一

和泉流狂言大会

九月二十七日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

二人大名　二村敏勝　長坂登　富田智之
いろは　小柳悠志　井上松次郎
盆山　藤田茂樹　藤本栄
三人片輪　中西純子　高橋美子　長谷川寿美子　増田昭典
竹生嶋参　前原美紀　佐藤融
重喜　小柳保志　井上松次郎
因幡堂　丹辺文彦　コラ・フォルクマール
腰祈　井上靖浩　井上祐一　井上松次郎
名取川　鷲見政行　藤田茂樹
雁礫　西野彰恵　酒井雅子　伊藤幸子
しびり　市橋愛子　佐藤融
三人片輪　津田律子　恒吉幸子　長谷川寿美子　増田昭典
竹の子　コラ・フォルクマール　藤本栄
雷　佃野芳朗
仁王　伊藤幸子　村松敦子　西野彰恵　高橋美子　長谷川寿美子　恒吉幸子　津田律子　中西純子　酒井雅子
（終演予定　午後五時二十分頃）
主催　狂言共同社

〔御来場歓迎〕

猶恵会秋の大会

十月三日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　羽衣　山下時子　熊沢恵美子
東北　並木明子　岡田晃一
小督　安田きみゑ　池内幸三郎
仕舞　鶴亀　安藤美恵子
羽衣　神谷千津
蝉丸　本村美子
松虫　中嶋玲子
素謡　井筒　辻信子　池内光之助
野宮　熊谷リ江　井戸和男
仕舞　花狂　石川良子
夕顔　河辺あき
舟弁慶　仲瀬範子
天鼓　キリ　彫山啓江
舞囃子　難波　杉浦一枝　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
巻絹　日下すみ子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
富士太鼓　谷節子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
養老　山本康子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
（氷波之伝）

名古屋皐楽会秋季大会

十月四日（日）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

開曲　番外仕舞　実盛　観世喜之
素謡　雲林院　浅井鉄二　山田延恒
舞囃子　高砂　橋本とも　福井啓次郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
八段ノ舞
芭蕉　水野あや子　福井啓次郎　鉱一　藤田六郎兵衛
山姥　松永敬子　福井啓次郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
立廻
素謡　藤戸　田中きんと　五木田武計
舞囃子　遊行柳　芝村栄枝　福井啓次郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
青柳ノ舞
紅葉狩　深見一枝　福井啓次郎　鉱一　藤田六郎兵衛
素謡　求塚　中所宜夫　観世喜正　矢橋浩吉　観世喜之
仕舞　笠ノ段　後藤新蔵
船弁慶　外山圭一
舞囃子　唐船　佐藤千代子　幸　義太郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
乱　深見しげ　福井啓次郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
素謡　砧　外山圭一　諸隈良吉　後藤新蔵
能　杜若　奈倉早苗　西村欽也　幸　鉱一　義太郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
（素謡省略個所アリ）（五時頃終了）
附祝言
主催　名古屋皐楽会　世話人　観世喜之

〔御来場歓迎〕

観能独語

牛若と天狗の恋

衣斐後援会「鞍馬天狗」

幸謡会大会

十月十日（祭）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　弱法師　加藤恵美子　梅若修一
松風　寺岡佑子　外山聖子　梅若善高
実盛　宮崎勝二　岡田朗詠　橋本雅一
舞囃子　玄象　小川美愛　鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　希世
五段
葛城　長谷みつ　鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　希世
融　萩野知津　鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　希世
番外仕舞　殺生石　梅若盛彦
番外舞囃子　松虫　熊沢恵美子　鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
附祝言
主催　猶恵会

〔御来聴歓迎〕　熊沢恵美子

秋の邦謡会

十月十一日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

武田謡楽会秋季大会

十月十八日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

観能独語

牛若と天狗の恋
衣斐後援会「鞍馬天狗」

8月29日熱田能楽殿で、衣斐正宜後援会能がありました。後援会長神津善行氏のあいさつにはじまり、能二番、狂言、仕舞、一調と、宝生英雄家元はじめ、同流の実力派の一流どころが出演、英雄、元信（観世）の一調「山姥」、近藤乾之助の仕舞「船」などの名品もあり、充実した催しでしたが、残暑きびしい昨今、花見の宴の「鞍馬天狗」とはいささか季節はずれの感なきにもあらず。それに五番目物らしくにぎやかなショー的舞台というだけで、いま一つコクのないこの曲、演者の実力を問うには物足りない感じがしないではありませんでした。

前場は山伏（衣斐）と稚児（高橋早）の恋が中心、といっても今の人は、男女の恋はわかっても、男同士の恋はわからない。男色、変態、ゲイ、ホモ、さてはエイズの元兇、「不潔」とばかり吐き捨てるのがオチでしようが、道理越味、美少年愛好の盛んだった当時の世風俗の一端を、大まじめにとりあげているところが面白い。

山伏（実は大天狗）と稚児（牛若丸）が向き合って恋を語る、というより山伏の一方的な恋の告白ですね。「人に一夜を馴れそめて」とか「馴れはまさらで恋のまさらんくやしさよ」とか、謡曲にしては、かなり濃厚な文句が出て来ますが、舞台では地謡がさらりと謡い上げ、二人がちょっと思い入れをするだけ。「能とはこんなものかいな」と、江戸の女なら男の膝をキュッとつねりそうな歯がゆさです。（もっとも他流ではもっと濃厚な演出もする由）しかし牛若の孤独な身の上話を聞いて同情心を募らせた山伏が、慰めごころで花の名所を案内する。「こなたへいらせ給えや」と肩を抱いて押し進め、「ある時は愛宕高雄の初桜、比良や横川の遅桜」と案内顔に指し回すところは、牛若への愛情をほのめかしていい味。ここが一番気に入りました。演者の人間味、誠実な人柄のあらわれでしようか。

後場は山伏が大天狗の正体をあらわして登場。牛若との問答、張良の語り、舞働き、牛若との別れなど、超人的な豪快さの中に、緩急、変化の妙を見せるわけですが、衣斐は小柄なだけでなく、演技全体に大きさが足りず、赤頭、大ベシミの面が十分に生かせなかったのは残念でした。もっと奔放に野心満々であっていい。やや抑制が利き過ぎたような気がしました。

この子方は大事な役ですが、まずまずの出来。近ごろ無作法な子方を見ることが多いだけに上等といっていいかも知れません。無作法も程度問題で、一曲中に首や肩や膝を動かし通しなどはひど過ぎる。子供だからと甘やかしてはいけません。子方も能中の一人物、その出来不出来が一曲全体の効果に影響することというまでもありません。もっときびしく教育することです。

この能は狂言方が大活躍しますが、茂山千之丞以下の面々、なかなか達者。ただ狂言方だけが目立つのはよくありません。誰がいいの悪いのではなく、全体のアンサンブルを考えてほしいものです。稚児揃えも花見に色を添えるどころか、寄せ集めの感じでは興をそぎます。しっかりした演出家がほしい気がしたほどです。（これはちょっと無理）

（M）

「彰諷閣舞台」完成
9月27日　舞台披き

名古屋市の東郊・塩釜口にこのほど「彰諷閣舞台」が完成した。同舞台は、緑区の川久保彰礼氏の建設によるもので、舞台披きは九月二十七日（日）「神歌」素謡「竹生島」「羽衣」「百萬」「猩々」仕舞十数番、山本勝一、山本博道両師の仕舞により行われる。所在地＝名古屋市天白区植田西二―八〇二―二、電話八〇五―三三〇一番。

幸謡会大会
十月十日（祭）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡
神歌　加藤千代子　千歳　山本正人
竹生島　小森辰雄　貫井興治　中野庶子　高取良昌
吉野天人　中野庶子　青木則子
村田　内田詠子　稲葉和エ
杜若　高取良昌　小林俊雄

仕舞
羽衣　中根麗子　屋島　稲葉和エ
班女　三浦美由紀　笹之段　上田千代
鵜飼　石川晴子　敦盛　小林俊雄
小袖曽我　杉浦則行　河村真之助　柳原冨司忠　鹿取希世
草子洗小町　太田静江　河原真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
胡蝶　須賀原淑子　河原真之介　柳原冨司忠　池田茂　鹿取希世

素謡
砧　上田知代　石川晴子　近藤幸江　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世

舞囃子
天鼓　横井敬子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
芦刈　川越糸子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
野守　村井邦子　河村真之介　柳原冨司忠　池田茂　鹿取希世

素謡
求塚　田中米子　竹本百合子　大場はま子　小島照子　塩谷恵子　上田千代　泉泰孝

能
紅葉狩　西村欽也　飯冨雅介　杉江元　福井啓次郎　覚鉱一　池田茂　藤田六郎兵衛
間　野村信行　大矢高義

後見　泉嘉夫　大槻秀夫
地謡　川越糸子　横井敬子　石川晴子　村井邦子　加藤春枝　近藤幸江　塩谷恵子　磯貝勝子　川渕泰子

連吟
笠之段　杉浦ゆき　野村菊代　杉浦総子　前田鈴子　杉浦都子　加藤マサ子　荒川志ヤエ　大見冨美子　本田ハル

舞囃子
養老　小森辰雄　覚鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎
藤戸　磯貝勝子　覚鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
葛城　川渕泰子　覚鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

番外仕舞
枕之段　泉嘉夫
鐘之段　大槻秀夫

舞囃子
融　近藤幸江　覚鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
十三段之舞

（終了予定　午後五時頃）

附祝言

主催　幸謡会
〔御来聴歓迎〕
近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一ノ三
電話（〇五六四）二一―二五二九

秋の邦謡会
十月十一日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

素謡
弱法師　佐藤英生　都築正三郎

仕舞
忠度　磯谷行雄　殺生石　三口謙介
船弁慶　キリ　山本泉

素謡
三井寺　加藤千晴　坂野嘉子　小野田正子　水野美代子

能
井筒　高安勝久　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
妹尾久
間　佐藤友彦

後見　今村嘉男　古橋正邦　小野朗　今沢美和　青木道喜　須部浦　加藤保彦　梅田邦久　中川雅章
地謡　加藤敏彦　加藤正クセ　加藤千晴

仕舞
西王母　成田英生　経
野守　成田裕子　義仲　西沢義雄　立衆　竹内英雄　池田　山本泉　橋本正晴

素謡
木曽　願書

舞囃子
高砂　竹中洋子　鬼頭英二　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
五段
藤戸　深川寿美子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世

素謡
卒都婆小町　半田智子　田中純一　若麻績菊雄
井上苑枝　横山国枝

能
砧　指吸雅之助　吉田定男　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎
後見　今沢美和　松山幸親　本田　清沢　青木道喜　橋保向　祖父江修一　政分林弘一　梅田邦久　久田徹二
地謡

仕舞
雨之段　丸井寿子　花籠クルイ
籠太鼓　加藤井知子　西川喜代子

舞囃子
巻絹　徳田文代　鬼頭英二　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
山姥　小林富美子　鬼頭英二　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
立廻り

素謡
葵上　小田澄子　木村ひで　兼田元次　竹内英雄

仕舞
白楽天　牧野あい子　笠之段　丹羽久子
女郎花　二木晴子

舞囃子
羽衣　宮川千尋　鬼頭英二　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
和合之舞
鼓　高沢寿美子　鬼頭英二　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
天　大野弘之

狂言
しびり　井上礼之助

番外舞囃子
鉄輪　梅田邦久　鬼頭英二　半田智子　助川竜夫　藤田六郎兵衛

（終了七時頃）

附祝言

主催　邦謡会
〔御来場歓迎〕
梅田邦久

武田謡楽会秋季大会
十月十八日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡
神歌　武田欣司　武田邦弘
菊慈童　中島康夫　小林富美代
清経　菅瀬廸子　鈴木利治　吉川三郎
阿漕　坂勉　前田哲生

仕舞
吉野天人　北岡敬子　東　北クセ　熊谷民恵
敦盛クセ　太田ふみ子

舞囃子
西王母　村主美知子　吉田定男　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
半蔀　北田尚子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
猩々　並河益子　吉田定男　柳原冨司忠　助川竜夫　森本重一

仕舞
網之段　鈴木紀子　班女クセ　小林富美代
松風　田中真知子　百万クセ　松陰真澄
敦盛　北条由美子

舞囃子
養老　今村香　吉田定男　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田六郎兵衛
水波之伝
羽衣　川端栗　吉田定男　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田六郎兵衛
和合之舞
歌占　大塚幸二　河村真之介　柳原冨司忠　森本重一

素謡
卒都婆小町　鈴木信男　西村欽也　飯冨雅介

番外仕舞
通小町　田中嶌子　河村総一郎　福井啓次郎　森本重一
三輪　高木宏子　河村真之介　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
善知鳥　小牧大助　河村総一郎　柳原冨司忠　森本重一

番外仕舞
邯鄲　大志
花籠　武田小瀬古喜代子

能
船弁慶　西村欽也　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎

仕舞
屋島　毛利喜久男
笠之段　渡辺一彦　玉之段　長谷川嘉洋

舞囃子
海士　高橋千紗　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
五段
弱法師　後藤とき　河村真之介　福井啓次郎　森本重一
天鼓　上野典子　河村真之介　福井啓次郎　鹿取希世

素謡
遊行柳　栗木茂樹　長谷川嘉洋

番外仕舞
井筒　武田邦弘
岩船　吉井順一

主催　武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

附祝言

主催　名古屋観衛会
〔御来場歓迎〕
山本勝一

附祝言

主催　名古屋皐楽会
〔御来場歓迎〕
世喜之

故武田太加志追善 鳳鳴会大会

十月二十五日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

番組

素謡 西行桜　大坪重遠　木本仁之　笹山忠
花筐　武田孝子　高橋すゑの　松井弘　木下義国
藤戸　竹島猛　加藤武　祖父江修一
隅田川　武田文志　三川松平　武田志房　小川博久

能 清経　武田尚浩　山本一
恋之音取　飯冨雅介　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
後見　観世元正　武田宗和　新井和明　小川博久　清沢一政　小川明宏　地謡　武田志房　岡藤井徳三　郷清和郎太郎　観世元正　武田宗和　久広

狂言 盆山　野村又三郎　三宅右近

素謡 姨捨　一柳正直　武田志房　地藤井完治　観世元正　藤井徳三　武田宗和

仕舞 花月　山崎佐東子
西行桜　石井鉦子

囃子 船弁慶　八賀和彦　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

能 俊寛　西村欽也　柿原崇志　福井啓次郎　森本重一
間　三宅右近
後見　観世元正　武田宗和　祖父江修一　小川博久　清沢一政　地謡　武田志房　小島一英　藤井徳三　松木千冬　大江将董

素謡 道成寺　村上清　長谷川小藪　島義郎　地藤井徳三　郷太郎　小川明宏　武田志房　松木千冬

間　三宅右近
井筒　淳子
吉田　明
箕浦　高子
長谷川京子

能 紅葉狩　西村欽也　柿原崇志　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎　三宅右近
後見　大江将董　久保慎一郎　武田尚浩　藤井完治　観世清和　古橋正士　武田志房　地謡　中川雅章　小島一英　岡久広

素謡 山姥　村上郁子　小藪義郎　伊藤義郎

番外 仕舞 小袖曽我　武田文志　武田友志　地郷　武田宗和　古橋正士　郭　小島一英

追加 井筒　武田志房

（終了予定　五時四十五分）

〔御来場歓迎〕　主催 鳳鳴会　武田志房

信玄袋

―三宅襄氏追善能ほか

三宅襄氏の二十三回忌追善能が年末（十二月十五日）宝生能楽堂で催される。奈良の春日さんのおん祭の直前です。三宅さんは戦前から「謡曲界」の編集（世阿弥生誕六百年前後）、「観世」の主筆をされ、終戦の年創立の能楽協会の書記長となって戦後能界の復活に手腕を振われた。他万多忙な協会の仕事の傍ら「能」に広く文化人・知識人の執筆を求め、ご自分も殆ど毎号「能の演出メモ」を書かれた。貴重な資料。時代が新しくなっても精彩を放つ。「能楽入門」は「能の話」（野上豊一郎）ほか六平太（能心）・巌（初代）両氏の書物と共に大事にしている。なおはじめてお名前を知ったのは野上「能楽全書」（昭和十七）であった。

追善の能組を少しく紹介する。連吟鉢叩（万之丞・万作・以下能シテのほか姓をはぶく）にはじまり、経政（小書烏手八からすで〉友枝喜久夫、狂言柑子（弥太郎・千五郎）、海人（半能・小書八講八はっこう〉、金剛巌）の間に、隅田川（元正）・難波（信高）鵜ノ段（英雄）・巴（六平太）ほか仕舞が手向けられる大能。老女物が出ず、珍しい特別の小書付の能を演ずるのも、三宅さんをしのぶにふさわしい。

追想を求められるまま、「忘れ得ぬ先輩」の題で、率直淡白な口調の三宅さんに公私とも親しくしていただいたことを数々書き綴る。それに先年三宅奥様が金剛誌に「金剛流と私」の一文を寄せられ、お元気なご様子を知ってうれしかった。三宅さんの頃は万三郎（先代）・左近・華雪・喜之（先々代）・久太郎・六郎（のち実）八条・弓川、長八ながし〉兼資、右京・巌（初代）、六平太（先代）に新八しん、以下三役を省く〉の花の舞台・狂言への関心・新運動の時代を生きられた。四十年十二月善竹弥五郎氏と前後して歿す。六十八歳。大半右追想の余録を。

付、連絡先。東京桧書店、わんや書店、能楽書林。

演能。八月は夜外能の月。新作八熱田〉も名古屋城内で（試演か）・私は熱田さんのことでなくこの二字に曲名を藉（か）りてあの悲しくやさしい「裁断橋」の物語を能に仕立てたのではと想像したが、やはり熱田さんゆかりの曲であった。裁断橋のことは別記。

さて二十八日は犬山城薪能。羽衣と土蜘と棒縛（千之丞）。豪華な顔ぶれの宝生流で。よかったであろう。翌二九日の衣斐正宜後援会能は殆どそのままの顔ぶれで行われる。そしてその一部が三十日の福岡の朝日五流能へ。

まず神津善行（会長、作曲家）氏の話ではじまる。音楽と古典と人生と自然の関連について。話は超満員でむし暑い見所にはこれだけで十分。次の対談は次回にまわしてほしかった。演能はその前途を祝する近藤乾之助・高橋章両氏の仕舞（鵜、野宮）と一調山姥（謡宝生英雄、太・観世元信）が佳。乾之助氏は、よくみる大坪十喜雄氏の芸とは別の、八宝生のよさ〉を示し、つくづく感銘をうける。なお催主衣斐氏には初番三輪か二番能を舞う企画は無理か。

付・九月は珍しく観・春・宝・喜（大能）四流の能がある。

× × ×

放送（八月）。二三日の通小町（辰巳孝・内藤泰二ほか大・名の連合）おもしろし。三十日の紅上（喜多節世八さだよ〉）は丁寧に謡ってわかり易く、運びよし。節世氏は父の実氏（先代家元）をしのばせた。ともにNHKFM。

× × ×

三品正保検校、病気養生中の処八月十六日永眠。名古屋の数少ない平曲伝承者三人のうち先きに井野川幸次検校を失い、今また三品検校他界。弟子の養成につとめて一人を得たが、祇園精舎の置頭復曲演奏の功績は大きい（昭五八）。ご冥福を祈る。

× × ×

本。岩波文庫総目録が出た。昭和二年創刊でその出版六十周年を記念して。表紙は分厚く、活字は小だが、まず完璧に近い自負に充ちた目録。花伝書（昭二）・申楽談義（三）・謡曲選集（読む能の本。十）。能狂言（三巻、十七・十八・二十）・わらんべ草（三赤黄三色。薪能を目付柱前と二ノ松手前に吊る。マイクは三ノ松・二ノ松・シテ柱・目付柱・階右・ワキ柱の際に計六本。演者にワイヤレス・マイクは着けない。照明は見所左右の組立櫓にライト各二基、光量は充分と言えないが却って幽玄味を醸し、眼を舞台に集中させる効果があった。実際、子供も混る観客は静粛かつ大変熱心で当地の文化度の高さが知られた。また見所後方のテントには看護婦さんが常駐して居り、場内整理や薪補充の手間などは青年会議所の方々の奉仕と聞いた。更に、三十分余りの休憩にはお茶付千円の弁当を販売する配慮ぶりであった。関係者各位の熱意で、僅か四年目にして舞台披きをするまでになったことを高く評価したい。

さて番組は素人会の後、舞囃子・狂言・能各一番である。

「柿蔓島」　当地に取材した明治末の新作謡曲に手を入れて舞囃子としたもの。マイクでの解説はあったが、何分舞囃子の本旨は舞事。中ノ舞風な作曲だったが曲趣が理解するには至らなかった。謡七）。なお風姿花伝（三三）。

私の「ソクラテスの弁明」（初版昭二）の十一年版には当時修めていたギリシャ語原文の書き込みがしてある。一寸気がついたことを。花伝書と風姿花伝が同じ書であることのしるしがなく、W・ペーターの「文芸復興」には目次の紹介はないが文芸論集（編書）に曲全文を印刷物にして配布したらと思う。シテは観世流界嘉夫。運ビの美しさは流石であった（24分）。

「附子」　筋が分り易く薪能向き。砂糖を舐め尽した後、主にどう応対するのだろうかという素朴な観客の怖れに、機智を利かせたシテの大胆な解決策とアドの追従。松次郎・礼之助両人の持味が出た（24分）。

「望月」　冷静沈着のシテ小沢刑部友勇を光洋が好演。前シテでは旅の母子を泊め、旧主の妻子と気付く心持が厭味にならず滋味を見せた。後シテの獅子は乱序のトメに一ノ松勾欄に足を掛け、ぐっと見込む辺り力漲り、獅子舞も目覚しかった。二ノ松に往き、紅白段厚板を脱いで疾風迅雷さっと舞台に入ってくるところなど胸がすいた。太鼓喜太郎・大鼓英二・子方尚久と鬼頭家三代で勤めた目出度さもあり、殊に尚久君の活躍が華を添えた。ツレ鉄郎・ワキ欽也何れもよかった。地は菊次・広明ら・後見安明他。蛇足ながら、薪能は一般に神事能とされ、平物でも裃着用のことが多いが、重習「望月」に裃を着用しなかったのは腑に落ちない（1時間12分）。

雲の流れ速く空模様が心配されたが雨も無く、陽が落ちてからは涼風心地よく絶好の薪能の夜となった。年々各地で増え続ける薪能ではあるが、熱田老舗の貫録、観客も定着して盛会なのは御同慶の至りである。能三番・狂言一番・舞囃子一番・仕舞四番で当地五流シテ方及び三役総出演、能楽協会名古屋支部の充実である。京都観世会館アナウンス嬢の手慣れた演者紹介でスムーズに進行する。

「花月」　拐された子を求めて出家発願のワキ雅介。花に出盛る清水寺での父子再会。観念的にしか恋を知らぬシテ花月・邦弘が頑てられて恋の小唄を謡わせられ、それにちゃっかりとまつわりついて興じるアイ門前ノ者・又三郎。両者の呼吸がよく合った。再会を果した後、アイに勧められて舞う翔鼓は幸い山行も思い出となって

◆月見月の舞台から◆

「第22回名古屋薪能」と「第4回津島天王薪能」

竹尾邦太郎

ゆく喜びに溢れていた（44分）。

「羽衣・和合ノ舞」　ワキツレを伴わずワキ白竜・勝久は名宣ると直ぐ一ノ松の衣に気付き、持って帰るところにシテ天人・恵美子が呼掛ける。浦の描写が抜けて一気に衣の所有権を争う押問答ということになるが、舞事に絞られた密度の濃い舞台になった。キリで折からの風に長絹を翻し橋懸を小さく廻りながら天の高みに消えてゆく天人の、これは薪能ならではの風情だった（47分）。

「長刀応答」　稀曲。古語辞典に「長刀で相手を投うように、受けつ流しつ程よく相手に応待すること」とある。あまり普遍的な言葉ではなく、大勢物で賑やかとは言え渋すぎる。さて、花見客を持て成す煩を嫌い、長刀応答にと言い残して出た主・又三郎の意を汲み、長刀風を吹かせるシテ太郎冠者・松次郎に花見客はほうほうの態である。逃げ惑う客にサービスのつもりで長刀を振う松次郎の無邪気な錯誤が面白い（19分）

「小鍛冶」　前後を通じてシテ正宜のキレの良いダイナミックな動きが颯爽としていた。就中、草薙の剣の故事を所作に見せる勁捷さが素晴しかった（43分）。

今年度はワイヤレス・マイクの調子もよく、良くまとまった番組立て、何よりも半能が無いのがよかった。今後も総花的に五流総出演ということであれば、番組作成に充分な配慮が願いたい（8月7日・神楽殿前特設舞台）。

翌日は毎年金春流が出勤の津島天王薪能を見た。今年度は尾張津島天王薪能鑑友会の尽力と津島市当局の協力で組立式舞台が完成しその披露を兼ねた。昨年同様天王公園には幔幕が張り廻らされ、川中の島の大楠を鏡板の松に見立て階（きざはし）・勾欄付きの立派な舞台が見所に南面して設けられた。鏡ノ間と楽屋はテント。正面芝生には茣蓙を敷き、その後ろに千百余の椅子を並べる。掲幕は緑

謡曲名所めぐり　11月29日

「江口」「弱法師」の由緒訪ねる

本紙では毎年謡曲めぐりのバス旅行を実施しておりますが、本年は「江口」「弱法師」など関西の謡曲名所を訪ねます。お誘い合わせご参加下さい。

◆日時　十一月二十九日（日）集合名古屋・栄の愛知文化講堂前（NHK名古屋南側）午前八時集合、八時十分出発。帰着午後七時半頃（雨天でも実施）

◆定員　四十五人（申込み多数のときは補助席を利用することがあります）

◆会費　一万円（バス代、昼食代など一切ふくみます）

◆謡曲本　「難波」「芦刈」「弱法師」「江口」「富士太鼓」二番本又は百番集を御持参下さい。

◆お申し込み　現金書留又は振替にて左記へ申し込み下さい。名古屋市千種区千種2―18―18（〒464）能楽の友社、振替口座名古屋0―36393

二井栄逸師画抄集

'88 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1988年版。B3（タテ51.5cm×ヨコ38.0cm）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。能画は「若女」（表紙）「羽衣」「小塩」「石橋」「夕顔」「紅葉狩」「葛城」

◉ 予約特価　1部 1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数に拘らず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも3800円）

◉ 予約申込み期限　10月15日（それ以後は1部 1800円、ただし部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉ お申込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

申し込み先　能楽の友社
〒464　名古屋市千種区千種2-18-18　電話(052)731―7984
振替口座　名古屋 0 ― 36393

10日発行）
社
8-18
8 4
9 3
0円
0円
0円
歳末助け合い運動協賛能
能4番、狂言2番
千円。市内プレイガイドで発売。
故武田太加志追善
鳳鳴会大会
名古屋淡交会秋季大会
十月二十四日(土)午前十時始
熱田神宮能楽殿
故武田太加志追善
鳳鳴会大会
十月二十五日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

二井栄逸師画抄集

'88能面カレンダー

◉ 予約特価　1部 1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数にかかわず送料は一律500円）

◉ お申込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。

申し込み先　能楽の友社

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　(731)　7984
振替口座　名古屋 0-36393

購読料　1年　700円
郵送の場合　1年 1200円
一部　70円

歳末助け合い運動協賛能
能4番、狂言2番
12月6日上演

能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部（内藤栄二支部長）主催による昭和六十二年度の歳末助け合い運動協賛能は、十二月六日（日）熱田神宮能楽殿で能四番、狂言二番、舞囃子、仕舞で開催される。午前十時始。

この歳末助け合い運動は協会名古屋支部の主催で毎年開催され、今回は十九回目。愛知県、名古屋市に義捐金がおくられている。

ベルリン市制七五〇年祝賀
世阿弥座が公演

東ドイツ・ベルリン市の市制七百五十年記念を祝賀して、きたる十一月に同地で世阿弥座により能・狂言が上演される。

公演団は観世銕之丞、観世栄夫、宝生閑、野村万之丞、野村又三郎、野村耕介ほか。一行は十一月九日出発、十一月十一、十二、十三日の三日間公演、十九日帰国の予定。

上演は能・求塚一「鵜清」「安達原」狂言「武悪」「水六駄」「止動方向」が予定されている。

国語教師を特別招待
14日　能と狂言に親しむ会

能と狂言に親しむ会（梅田邦久氏、藤田六郎兵衛氏主宰）は、十月十四日午後六時から熱田神宮能楽殿で特別公演、能「葵上」を上演。とくに装束、面などの解説を加えて古典への理解を深めてもらおうと市内の小、中学校の国語教師らを無料招待、新しい企画として注目される。

また、きたる十一月二日午後六時四十五分から熱田神宮能楽殿で「能舞台との交響」（企画・藤田六郎兵衛氏）のテーマで〝三条万里子幽玄空間に舞う〟舞台を演出「真之音取・花重置鼓」「獅子」が笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎氏らにより上演、入場料三千円。市内プレイガイドで発売。

柴田初太郎氏逝去
中部能楽界の先達

観世流シテ方・柴田初太郎氏は十一月五日午後十時十一分、腎不全のため日進町福友病院で逝去された。享年九十八歳。

葬儀・告別式は七日午後一時から名古屋市千種区本山町一―三一の自宅で執り行われ、能楽関係はじめ各界の会葬で冥福を祈った。喪主長男収氏。

故柴田氏は明治二十二年名古屋市東区生れ。武田宗次郎、橋岡久太郎師に師事、昭和十二年準職分のち職分格として能楽界の興隆に寄与、日本能楽会会員、勲五等瑞宝章受章。「帰童」と号し、能楽の友同人として創刊以来多年にわたり執筆された。

故武田太加志追善
鳳鳴会大会

鳳鳴会（武田志房師主宰）は十月二十五日（日）熱田神宮能楽殿で、故武田太加志師三回忌追善大会を開催、能三番。素謡七番、囃子、仕舞など。観世宗家も来演する。（番組①面）

風韻会創立50年
殿島師米寿記念大会

観世流・風韻会（殿島修二師主宰）は、ことし創立五十年を迎えきたる十一月一日（日）熱田神宮能楽殿で社中大会を開催する。本年はとくに殿島修二師の米寿を記念する大会として、能「菊慈童」（シテ殿島博子）はじめ素謡、舞囃子十二番、一調二番、連吟、仕舞など十数番の上演で祝賀の会を飾る。（番組②面）

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔10月〕
18日（日）武田謡楽会秋季大会　（来場歓迎）
24日（土）淡交会大会（来場歓迎）（番組①面）
25日（日）鳳鳴会大会（来場歓迎）（番組①面）
31日（土）青陽会定式能　（有料）（番組②面）

〔11月〕
1日（日）風韻会　能（来場歓迎）（番組②面）
3日（祭）幸友会秋の会　（来場歓迎）
8日（日）観世会定式能　（有料）（番組③面）
14日（土）清謡会大会（来場歓迎）（番組③面）
15日（日）宝生会定式能　（有料）（番組③面）
21日（土）幽花会大会（来場歓迎）（番組③面）
22日（日）観修会大会　（来場歓迎）
23日（祭）和泉会　（有料）
29日（日）久田観正会　（来場歓迎）

〔12月〕
5日（土）朝日カルチャーセンター能楽会（来場歓迎）
6日（日）歳末助け合い協賛能　（有料）

〔63年1月〕
3日（日）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
9日（土）名古屋能楽学生連盟学生能　（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会能　（来場歓迎）
30日（土）青陽会定式能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋淡交会秋季大会
十月二十四日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞　天鼓　橋岡慈観
連吟　小督　富士太鼓　森清子　戸松花枝　近藤正登　後藤弘次郎　松井健一郎
仕舞　羽衣切　田子　日比野清栄　玄村曲　川島利雄　唐船　西王母　秋田恵美子　象
仕舞　鶴亀　吉野天人　高砂　近藤正登　芦小田久子　胡後藤弘次郎　刈切　松井健一郎　蝶　松島久代
仕舞　草子洗小町　玉鬘　戸松花枝　森清子　杜　川曲　加藤恒子　若切　川島千代子　蝶　中田恵子　川島千代子　秋田恵美子
独吟　紅葉狩　林院　矢沢種子
素謡　紅葉狩　尾立浩隆　川島利雄　日比野清栄
仕舞　龍田　班　仲尾和子　女曲　林美代　玉之段　太鼓　伊藤好子　原田千恵子
連吟　大仏供養　早川久雄　熊谷勝郎
素謡　葵上　林美代　仲尾和子　鈴木多美子　河合正次
隅田川　石原理佳子　中野末子　吉川信得　大川雪子
独鼓　遊行柳　長沢三郎
連吟　熊野　瀬戸照男　瀬戸綾子
仕舞　紅葉狩　通小町　尾立浩隆　瀬戸勝治　松　風　吉川信得
舞囃子　桜川　大川雪子　井筒　野村昌子
玄象　伊藤さち子　竹井喜信　早川良　玉之段　鼓　鈴木多美子　斉藤辰夫　度
独吟　笠卒都婆小町
仕舞　清経　弱法師　朝岡初男　伊藤寛　松女郎　風花　原小夜　松本隆夫
舞囃子　安宅　森正一　野宮　瀬戸綾子　合掌留　西尾三子男
独吟　松風　吉田冨貴松　定家一字題
仕舞　松風　長沢良子　砧　切　古川波奈子
班　女曲　丸山一郎　松本隆夫　伊藤長八
独鼓　山姥　瀬戸三津子
能　猩々乱　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　松田憲二　奥善助　竹井喜信　伊藤長八　寺井栄　下田雄三　橋岡慈観　橋本弘
地謡　加賀敏彦　中村和男　高橋
（終了予定　六時頃）
主催　橋岡慈観　名古屋淡交会
電話（〇五八七）三二―三三八八番
〔御来聴歓迎〕

故武田太加志追善
鳳鳴会大会
十月二十五日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番組

素謡　西行桜　大坪重遠　木本仁之　笹山忠
花筐　武田孝子　高橋すゑの　松井弘　木下義国
藤戸　竹島猛　加藤武　祖父江修一
隅田川　武田文志　三川紘平　武田志房　小川博久
武田尚浩　山本一
能　清経　恋之音取　飯冨雅介　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
後見　観世元正　武田志房　宗和　新井和明　清沢博久　小川明宏　郷世清和　郭太郎　徳三　岡井久広
地謡　武田
狂言　盆山　野村又三郎　三宅右近
素謡　姨捨　一柳正直　武田志房　地　武田宗和　藤井徳三　観世元正　藤井完治
仕舞　花月　山崎佐東子
西行桜　石井鉦子
囃子　船弁慶　八賀和彦　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
康頼二村正　成経山森幸男　浅井一元
能　俊寛　西村欽也　柿原崇志　福井啓次郎　森本重一
間　三宅右近
後見　観世元正　武田宗和　武田志房　祖父江修一　清沢博久　小川博久　小島一英
地謡
素謡　道成寺　村上清　長谷川島　地　小藪義郎　武田　郷　小川　郭　松木　藤井　徳三　大江　将董　松木完治　千冬
間　井筒淳子　吉田明　高子　箕浦　長谷川京子　三宅右近
能　紅葉狩　西村欽也　柿原崇志　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎　三宅右近
後見　観世元正　武田志房　大江将董　久保慎一郎　武田尚浩　中川雅章　小島一英　藤井完治　観世清和　岡久広　古橋正士
地謡
素謡　山姥　村上郁子　小藪義郎　武田文志　武田友志　地　郷　武田　郭　宗和　古橋正士　小島一英
番外仕舞　小袖曽我　伊藤義郎
仕舞　井筒　武田志房
（終了予定　五時四十五分）
主催　鳳鳴会　武田志房
〔御来場歓迎〕

追加
井筒　武田志房
（終了予定　五時四十五分）
主催　鳳鳴会　武田志房
〔御来場歓迎〕

て興じるアイ門前ノ者・又三郎。両者の呼吸がよく合った。再会を果した後、アイに勧められて舞う羯鼓は幸い山行も思い出となって

君え渋すぎる。さて、花見客を持て成す煩を嫌い、長刀応答にと言い残して出た主・又三郎の意を汲み、長刀風を吹かせるシテ太郎冠

な舞台が見所に南面して設けられた。鏡ノ間と楽屋はテント。正面芝生には茣蓙を敷き、その後ろに千百余の椅子を並べる。揚幕は緑

子としたもの。マイクでの解説はあったが、何分舞囃子の本旨は舞事。中ノ舞風な作曲だったが曲趣を理解するには至らなかった。謡

前（NHK名古屋南側）午前八時集合、八時十分出発。帰着午後七時半頃（雨天でも実施）

◈定員　四十五人（申込み多数のときは補助席を利用することが

替にて左記へ申し込み下さい。名古屋市千種区千種2―18―18（〒464）能楽の友社、振替口座名古屋0―36393

青日雅日記 ⑯

紫式部

えと文　二井栄逸

樹々の葉が散る頃になった。

あんなに暑かった夏もいつの間にか過ぎ去って、見上げる樹々の梢にゆきかう雲の姿にも、深みゆく秋の気配をひしひしと感じる此の頃である。

落葉の量も少しずつふえ、家の者の仕事が一つふえたようである。

朝早く、稽古に出るときは、タクシーもそっと落葉をふんで門の前にとまってくれる。

花野が一段と美しくなり、雑木林には、さんきらい、がまずみ等の実が朱（あけ）にそまって、紅葉にさきがけて秋をいろどる。

なかでも紫式部のむらさきの実が美しい。少し黄ばんだ葉の間に紫のつぶらな実がつらなっているのがなんとも美しい。たぐいまれな女流文学者、紫式部の名を頂いたわけは知る由もないが、何か文学的な香りのする姿と、あの取りわけ美しい紫から連想しての名づけであったのだろう。七月頃、薄紫色の花をつけるがとれによく似たヤブムラサキがある。この花には葉やがくにやわらかい毛が多いから見分けはつきやすい。

紫式部を主人公にした能に源氏供養があるが、なかでも曲（クセ）は、美辞麗句をふんだんに使った名文で、初心者にはむつかしいが美しい謡曲文章である。

このクセの謡章は安居院の法院が作った「源氏物語表白」の原文をほとんど採用したものである。

曲のねらいは、紫式部を石山観音の化身にするにあった。三番目能としては、序の舞が入るのが普通であるが、それはなく、クセの部分に通常の型と異るもののあるのも、これによって教化を期したのであろう。

舞入りという小書があるが、その時は、「紫匂うたもとかな」とイロエの代りに中の舞が入る。

位どりがむつかしく、或る先哲は、あまりのりすぎては浅草観音になるし、しめすぎると催眠剤になるおそれがあるといったそうだ。

何はともあれ源氏物語の帖名にかけ言葉を絶妙に折り込んである為、美しく静かに深々と、のりよく謡うときは、森の中の泉のように楽しさは汲めどもつきない。

そのうちに紅葉が見頃になる。桜は南から、紅葉は北から細長い日本列島を上り下りする。

それにあわせて美術の花がさきみだれる。ひまがほしい。ゆきたいところばかりで気ばかりあせる。

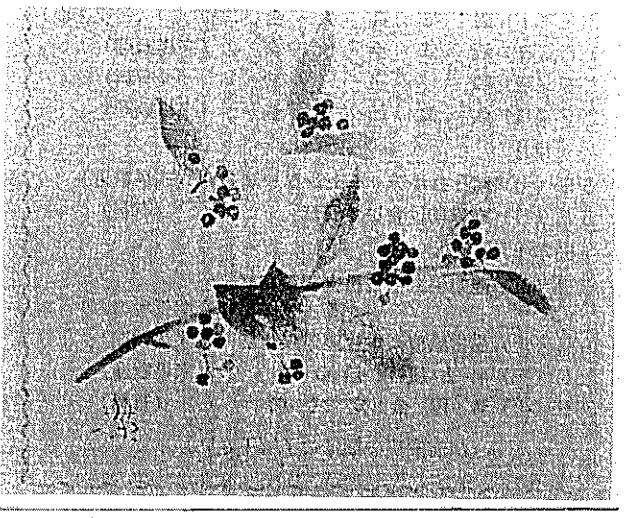
二、三日前も、銀座の美術画廊から、素晴らしい仏陀立像の写真を添えてガンダーラ彫刻展の案内をもらった。

パキスタンの北部、ペシャワールを中心とする地方を、古代ローマ人はガンダーラと呼んでいた。

朝鮮、中国等の仏教美術品は、ほとんどのものが紹介されているが、ガンダーラ仏教美術についてはあまり紹介されていないので、丁度いい機会であるのに、日程表を見ると、とてもゆけそうな日は見当らない。

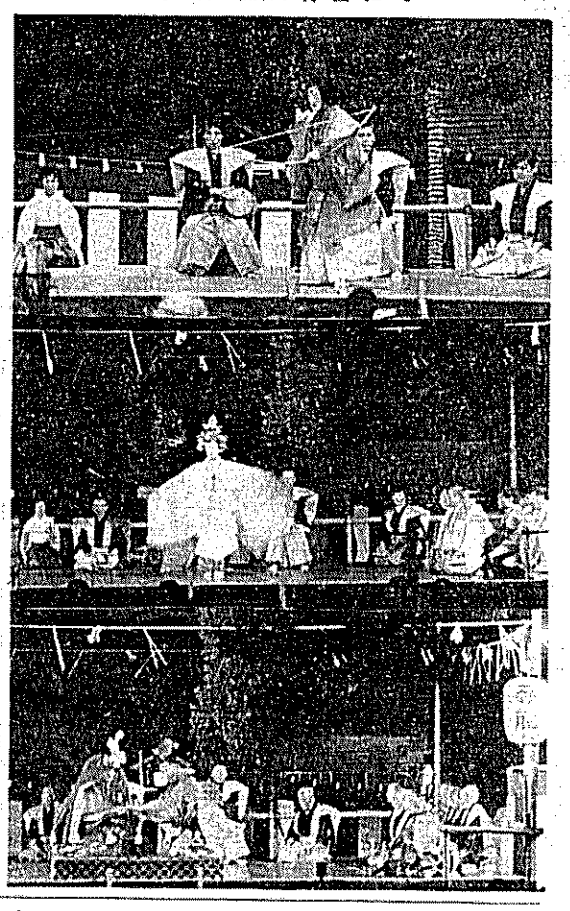
NHKの日曜美術館にでも取り上げてもらえば、と、ひそかに期待しながら、英知に満ちた悠遠な仏陀のおもざしを飽かずながめていた。二千年も前に、ガンダーラの芸術家がつくった仏陀達は、生命を宿すかのように鮮烈な光芒を放っているのである。

（62・10・1記）



第21回 ◆名古屋薪能◆

8月8日　熱田神宮にて



⑦から観世流能「観世清経」の競演

観能独語

「清経」の競演

六平太と観世清和

九月にまたか、の「清経」が出うとしてもきかず、話の進行をさ

梅田　邦久

お知らせ

◇…修誠会大会は十一月七日（土）開催予定のところ、梅若猶一師の病気静養のため休演になりました。

◇…毎年十二月開催の壺泉会能は本年は十二月十三日（日）に予定されていましたが、泉嘉夫師の東京・国立能楽堂での公演（十二月二十九日新作能「女と神」「半獣神の午後」上演）の関係で来春に延期になりました。

本年度の「謡曲名所めぐり」バス旅行は定員に達しましたので締切らせて頂きました。

名古屋観世会定式能

十一月八日（日）十二時半始

熱田神宮能楽殿

青陽会定式能（第三十一期）（第四回）

十月三十一日（土）午前十時半始

熱田神宮能楽殿

能 小督
仕舞 小鍛冶クセ　祖父江修一
葛城　松山幸観
箙太鼓　高橋瞭一　地謡
船弁慶キリ　須部甫
ツレ　加賀敏彦
トモ　加藤保彦
今村嘉勇
督　高安勝久　後藤孝一郎　河村真之介　森本重一
間　佐藤友彦
後見　近藤幸江　武田邦弘　地謡　松山幸親　須部甫　今沢信至　馬場美和　清沢一政　久田徹二　中川雅章　高橋瞭一

能 玉葛
仕舞 柏崎　今沢美和
山　姥キリ　近藤幸江　地謡　梅田邦勲　小島一英
生駒里翠
葛　杉江元　吉田定男　福井啓次郎　鹿取希世
間　井上礼之助
後見　今沢美和　小島一英　地謡　須部甫　松山幸親　近藤幸江　前野都子　中川雅章　加賀敏彦　高橋瞭一　祖父江修一

狂言 鬼瓦
仕舞 夷盛　井上松次郎　佐藤友彦
巻絹　小島一英　久田徹二　中川雅章　地謡　清沢一政　梅田邦勲　今村嘉勇　加賀敏彦
警護　武田邦弘

能 融
クツロギ　飯富雅介　鬼頭英二　柳原富司忠
間　大野弘之
後見　前野都子　梅田邦久　地謡　本田清沢一政　今村嘉勇　生駒里翠　加藤保彦　久田徹二　小島一英　祖父江修一

附祝言〔有料〕
当日券　三千円（普通席）
主催　青陽会

殿島修二師米寿祝賀
風韻会能

十一月一日（日）十時始

熱田神宮能楽殿

素謡 神歌　佐久間美親　千歳　山田欣也

高砂（ワキ待謡より）　佐久間美親　山田欣也　地謡　赤松　殿島修二　藤　斉　今村嘉勇　祖元隆三

素謡 屋島（クリ・サシ・クセ省く）　坪田玉江　木野照子　青山信江　地謡　高木平　岩木　船橋　鈴木　浅野　岩田　今枝　加藤　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛　田中　泰子　橋本美知子　尾原隆子　戸田澄子　松尾敦子　小笠原隆子　緒方芳子　毛利正子　武山菊枝　坪内みつ子　柴田よし子　内藤孝子　なみ江

舞囃子 巻絹　小林美和子

素謡 俊寛（クリ・サシ・クセ省く）　野村きね　神谷富美

名古屋能楽会定式能

十一月八日（日）十二時半始

熱田神宮能楽殿

仕舞 羽衣　榊原富貴子
野宮　渡辺澄子
富士太鼓　奥田薫
竜田キリ　志水志津枝　地謡
山姥キリ　長尾洋子　佐藤アヤ子　殿島修二　近藤幸江　高田みね子
谷口寛子
伊藤るり子

素謡 蟬丸（クリ・サシ・クセ省く）　志方つね子　岩田扶己　地謡　富田初子　服部貞子　島田誠子　水谷よしゑ　山津文子　中村春子　広瀬富美子　阿部久子　此島とし子　水野絹子　森吉田清子　冨士道周明　福間克彦　高田武雄　山田欣也

連吟 駒之段　木村美津子　伊藤吉子

能 菊慈童
仕舞 林院　成経　伊藤晏義
雨之段　康頼　浮貝鋼一
女郎花　日比大吉郎　北原良一郎　地謡　福井啓次郎　吉田定男　後藤嘉津幸　高田武雄　冨士道周明　福間克彦　山田欣也
遊行柳　殿島博子
守クセ　山田欣也
鬼頭貴代子
後見　殿島修二　大槻秀夫　地謡　伊藤晏義　浮貝鋼一　北原良一郎　福間克彦　山田欣也　泉雅一郎　水藤文蔵　大槻秀夫　今村嘉勇　赤松禎友　水田博　殿島修二　斉藤信隆　水藤元三
遊舞之楽　西村欽也　福井啓次郎　筧鉱一　助川竜夫　藤田六郎兵衛

一調 勧進帳　金丸洋子　後藤孝一郎

舞囃子 鶴亀　林喜久子　吉田定男　後藤嘉津幸　助川竜夫　藤田六郎兵衛

舞囃子 班女　山田欣也　殿島博子　吉田定男　福井啓次郎　高田武雄　冨士道周明　福間克彦　森本重一

素謡 俊寛（クドキ・クセの前半を省く）　日比大吉郎　北原良一郎　地謡　福井啓次郎　吉田定男　後藤嘉津幸　冨士道周明　福間克彦　山田欣也

舞囃子 養老　殿島潤里子　後藤嘉津幸　筧鉱一　鬼頭喜太郎　森本重一

舞囃子 熊野　石黒操子　村雨留　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

松風　伊藤敏子　戯之舞　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

一調 船弁慶　冨士道周明　鬼頭喜太郎

仕舞 邯鄲　佐藤アヤ子
井筒　高田みね子　地謡
阿漕　渡辺節子　殿島修二　斉藤信隆　水藤元三　水田博　赤松禎友

舞囃子 砧　古井佐季　吉田定男　福井啓次郎　森本重一

舞囃子 熊坂　福間克彦　吉田定男　小笠原敦子　鬼頭喜太郎　森本重一

番外仕舞 鷺　大槻秀夫　赤松禎友　泉雅一郎　泰孝　地謡　山本正人　水田博　大槻文蔵

附祝言　弓八幡　（終演五時半頃）

名古屋能楽会特別公演

名古屋能楽会秋季大会

十一月二十一日（土）午前九時三十分始

熱田神宮能楽殿

主催　風韻会

殿島修二

第六御来場歓迎会

自後毎日新聞社

観能独語

「清経」の競演

六平太と観世清和

九月にまたか、の「清経」が出ました。それもつづけて二番。一つは長田驍職分二十周年記念会能（12日）の喜多六平太、もう一つは観世会定式能（13日）の観世清和。ともに好演、その対象に興味をそそられました。

六平太は喜多の家元、六平太を襲名してはじめての来名、清和は観世宗家の御曹子、年齢、キャリアーの差とそあれ、いずれ劣らぬ名門のチャキチャキ。一般の世評は清和の方がよかったようですがそれは両派のなじみ、演者への親しみの濃さ薄さがものを言いました。絶対実力の相違ではありません。もっとも私は一般評とはやや違った感想をもっていますが、清和の若さと熱、これはやはり彼の強味です。落ちついた六平太にくらべて、特にそれを感じました。

平家の命運尽きぬと悟り、諦念に徹して入水する六平太の清経に対し、清和は悟りながらもあきらめに徹しきれず、残る迷いを吹っきるために、エイッとばかりに入水するといった印象です。このクライマックスの表現は高揚する情感の余りにや、やや浮き上った感じさえありました。しかしそれが多くの見所に受けたのかも知れません。芸の緻密さにスキがあっても、目をつぶって、わくわくする感動を誘う熱演型を喜ぶ名古屋人気質。それは能のみならず、歌舞伎、新劇、喜劇、悲劇の別を問わず、名古屋の芝居好きに共通したものです。ここでも清和は得をしました。

六平太は平家の公達としての品位、風格にすぐれ、柔弱に流れず、思いきりのいいところ、芸のバランスにも乱れなく見事な清経ですが、そこがもの足りないという人があれば仕方がありません。そうしたことよりも私がいつも疑問に思うのはツレの扱い方です。清経の妻がもらす夫への愛着の情は、一人寝のさびしさを露骨に訴える性的不満そのものであり、それだけに、くどく、しつこく、清経が「いにしえのことども、詳しう語って聞かせ申し候べし。恨みをおん晴らし候え」と話をそらそうとしてもきかず、話の進行をさまたげてまでも恨み言をくり返します。こちらは生身、相手は幽冥、永遠に切れ果てた〝契り〟（肉の恋）の思い出にすがりつく妻の哀れさ、女の業。この遊髪をめぐる恋情と執着のやりとりは、そのまま三島由紀夫の「近代能楽集」を思わせるほど近代劇的緊張感をただよわせます。

しかしこの緊張感、シテとツレとの一種の不条理劇？が舞台の上では味わい尽くせないのが残念です。少くとも現在の定型演出（シテ一人主義）ではどうにもならない。ツレはさし身のツマにされてしまっているのですから。本当はさし身のツマどころか、一曲のドラマとしての核心ここにあり、といっていいと思うのですが、私の見た範囲では、梅田邦久がさし身のツマに甘んじないツレを見せてくれたように記憶します。

◇

「清経」が長くなりましたが、職分二十周年能の「道成寺」（長田驍）についてひと言。大変面白かった。中啓で烏帽子をたたき落す鋭さから、飛び込みざま鐘の落ちる鐘入りのあざやかさ。型がどうかは別として、鐘のふちに両手をかけて足踏みトントンのなまぬるい鐘入りを見なれた目にはハッとするほどのスリル。これとそ「鐘入り」という感じでした。若手のお披きにも負けない気力の充実。職分二十年のタイトルを意地に賭けた演者の力投に拍手を送ります。

〔各地だより〕

阜　誠交会秋季大会

10月25日　萬松館で

岐阜誠交会（奥善助師）は、十月二十五日（日）萬松館で秋季大会を開催する。午前九時始。

素謡「鵜飼小町」（大前貴久枝）「砧」（関谷正一）「求塚」（福田哲朗）ほか六番、舞囃子「乱」（後藤玲子）はじめ七番、仕舞、連吟など十三番、番外仕舞「粽老」（中村和男）「四田川」（橋岡慈観）「難波」（奥善助）

名古屋観世会定式能

十一月八日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能　蝉丸
梅田邦久　梅若盛義
後見　小島一英　加賀保彦　高橋暎一　武田邦弘
片山九郎右衛門　地謡　吉岡省吾　植田隆之　和田英基　柳原冨司忠　鹿取希世　久田徹二　山本順之　井上松次郎

狂言　入間川
野村又三郎
後見　大野弘之　佐藤友彦　井上礼之助

仕舞　高野物狂　山本順之
野宮　片山九郎右衛門
女郎花　藤井徳三　地謡　梅田邦久　小島一英　久田徹二　本田勲

能　国栖
王林　宗一郎
姥　観世晴夫
天女　片山清司
観世銕之丞
飯冨雅介　西村欽也　杉江元　河村総一郎　久田舜一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
天地之声
間　野村又三郎　野村信行
後見　武田邦弘　藤井徳三　地謡　松山幸親　須部雅章　清沢一政　中川順之　祖父江修一　山本九郎右衛門　梅田邦久

（終了　午後五時頃）

附祝言
〔有料〕
当日券　七千円
主催　名古屋観世会

秋の清謡会（第十回）

十一月十四日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番外素謡　鶴亀
清沢一政　本田勲　地謡　今沢美和　須部雅章　清沢一政　本田勲

素謡　敦盛
母　梁谷紀佐子　五郎　加藤洋子
紫垣信行　黒谷秀彦

小袖曽我
水越弥生　地謡　相木幸子　竹内節子　水野典子　伊藤礼子

仕舞　鶴亀
羽衣　奥村小浪
采女キリ　磯村千鶴子
巻絹　高梨千代子
城キリ　吉村春枝
葛　高井真智子

素謡　三井寺
子方　磯村千鶴子
太田朗子　加藤茂代
鬼頭澄

仕舞　清経　金原孝典
半花　神谷直市
小鍛冶　不破峰子
キリ　高橋千晴

舞囃子　高砂　山口耕造　河村真之介　後藤孝一郎　助川龍夫　希世
小塩　金原好江　後藤孝一郎　助川龍夫　希世
融　岩田加代　河村真之介　後藤孝一郎　助川龍夫　希世

名古屋観世会定式能

十一月十五日（日）一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　俊寛
康頼　川谷光子
野村きね　神谷冨美

舞囃子　巻絹
小林美和子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
班女　手島なみ江　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
邯鄲　磯部三枝子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
トモ　山岡米子
ツレ　鬼頭みゆき

素謡　景清
榊山きよ子　鬼頭澄

舞囃子　松虫　三輪藤枝　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取希世
山姥　山本博子　河村真之介　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世

独吟　江口　浅野愛子　福井啓次郎

番外舞囃子　菊慈童　清沢一政　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
養老　梅田邦久　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
水波之伝

（終了　五時半頃）

附祝言
主催　清謡会
〔御来場歓迎〕
補佐　梅田邦久　清沢一政

名古屋宝生会定式能（第三十一期第四回）

十一月十五日（日）一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能　乱
玉井博祐
高安勝久　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　佐藤耕司　地謡　辰巳孝　大松福三郎　後藤長三　大坪十喜雄　鬼頭喜男　藤田六郎兵衛

狂言　雁礫
内侍　倉本雅
局　竹内澄子
法師　内藤泰二
大坪十喜雄
井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

能　大原御幸
西村欽也　高安勝久　飯冨雅介　杉江元　福井啓次郎　河村総一郎　森本重一
井上礼之助
間　後見　佐野崩　吉田俊彦　地謡　富田正代司　織田哲也　寺部威　馬場辰巳　稲田美平子　竹腰冨四夫　勝一夫

仕舞　三井寺　衣斐正宜
殺生石　辰巳孝　地謡　足立知子　倉本雅　戸田和　葛原正枝

能　柏崎
西村欽也　飯冨雅介　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世
佐野崩
内藤達俊
後見　倉本雅　玉井博祐　地謡　水野久仁雄　後藤明　久野幸三　佐々木輝雄　稲川孝一　辰巳孝　佐藤正宜　衣斐耕司

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二三四四九

名古屋幽花会秋季大会

十一月二十一日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

番外舞囃子　高砂　片山伸吾　河村総一郎　曽和正博　大前川光長　杉市和
番外仕舞　女郎花　片山慶次郎

素謡　弱法師　山田徳二　杉浦健之祐
花筐　比江島孝子　富崎昌子　伊藤やす子　村川喜久子

独吟　鞍馬天狗　富崎晃吉
仕舞　田村　村クセ　長谷川宏之
岩船　岡本耕蔵

素謡　藤戸　富田まさ子　野村満子　松久祐子

舞囃子　雲林院　津田頭雄　河村総一郎　曽和正博　前川光長　杉市和
采女　波方晃　河村総一郎　曽和正博　杉市和

隅田川　青木智彦子　蕗野正　三上文夫　長谷川宏之

辛都婆小町　波方晃　片山慶次郎　津田頭雄

恋重荷　村木玲子　松枝寅太郎　大江正照

能　熊坂
村木寛茂
替之型　西村欽也　河村総一郎　曽和正博　前川光長　杉市和
間　大矢高義

連吟　菊上　成小谷敏夫　康宮崎晃吉　小田中島和季　小沢宣子　藤原美哉子　富田フク　石原栄都子　荒川ミチ　浜川加寿栄

素謡　俊寛
仕舞　通盛　東山清和
松虫キリ　斉藤昌平

舞囃子　草子洗小町　村川喜久子　河村曽和正博　大杉市和

葛城　村木玲子　河村総一郎　曽和正博　前川杉市和
胡蝶　比江島孝子　河村曽和正博　大前川杉市和
天鼓　松久祐子　河村曽和正博　大杉市和

仕舞　鐘の段　和田千代
仏原　清水チヅエ
龍太鼓の段　小泉いく子
網之段　石原雅子

番外仕舞　芭蕉　蕉キリ　片山九郎右衛門
山姥　姥キリ　片山清司
（六時頃　終了予定）

附祝言
〔御来場歓迎〕
主催　名古屋幽花会
片山慶次郎

能装束の語るもの——永謹師「葵上」より——

村瀬和子

河内の『泥顔』に魅せられて久しい。初めて出逢った遠い日、六条御息所の生霊は、愛と憎しみの輪廻に鋭く面を切りつつ、やがておそれと恥じらいに、こまやかにうち震えていった。理性のそとがわで嫉妬の鬼とならざるを得なかった高貴の女性を描いて、その日の御息所は慟哭のかたちであり、金泥さした瞳は哀しげに光ってみえた。決して紅をささない灰白色の面は、まぶたから額にかけて幻妖な気配がたちのぼり、背反する女性（にょしょう）のさがを神韻と彫りこんでいる。紛れもない河内の泥顔であった。神と鬼とは同義語だととなえられたのは折口信夫博士である。六条御息所の暗部を抉って、これほどふさわしい面は他に見当らないのではなかろうか。

七月十一日、熱田能楽殿における金剛永謹師の「葵上」を見た。久し振りの〈無明之祈〉であり、河内の泥顔であった。

梓の弓に誘われるともなく、冥界からこの世に姿を現した御息所は、音なく一の松まで運んで、一セイ「三つの車に法の道」と謡い出し長くシオった。指先まで神経を張りつめた長過ぎるほどのシオリのときを、泥顔は、余儀なくこの世へひき出されたものの無念と哀しみに、死相さえ帯びて色を喪った。

舞台最初から見せた凄愴な艶はクドキになって、身じろぎもせず地の底からわき上がるようなどす黒い怨みを述べ、「ただいつとなき」で、俄かに気分をかえ、「かかる恨みを晴らさん」にいたって真情を吐露したさわやかさに澄みわたった。上歌「我人の為つらければ」から、囃子方は、それまで内側へ内側へとひきしめていた調子を、少し華麗で高めに切り替え御息所は、動きをきりつめた省略と集中の厳しい演技のうちに、「枕に立てる」で、扇をはっしと床に叩きつけ、唐織をかづいて、すでに魔性となりつつ、暗黒の幕内へ中入した。哀愁をこめて送る藤田六郎兵衛師の笛が、幕ぎわでぴたりと止む。無気味なしじまは、御息所の決然たる魂の表白であろうか。

しなやかでのびやかに見せかけて、峻烈な永謹師の舞台は、ツレのたたみこむような謡いと照応して、劇的な展開をみせる。枕の段における繊細で大胆な面の切りかた。変幻自在、河内の泥顔はいつのときよりも、己が内部からほのめきいずる魂に懊悩する御息所の複雑に交錯するうちがわを描いて無比の哀怨がこめられていた。

河内の『泥顔』は、一見無雑作にみえて、その実、鋭くこまやかな刀わざ、丹念な筆づかい、重ねに重ねた彩色の卓抜した技法が結晶した面である。凄愴にして枯淡艶にして怨なる清明の気韻。ひとを蠱惑せずにはおかない妖しい美しさは、一夕にして出来上がったものではない。面金剛という、舞金剛という。河内の『泥顔』と「葵上」と、この日のシテの無技巧の技巧とは、重層をなして、御息所の内部を鋭くえぐりこんでいった。

後場、無明之所で、出小袖の衿がみをとって音なくひきぬいた姿には、戦慄するような妖気があり横川の小聖の数珠に打たれ、両足揃えて直立した不動の緊縛のかたちには、逆巻く女の情念を渕の底に沈めた、測りしれぬ澱の重い堆積を思わせた。しなやかな魔性ともいうべきこの日の舞台は、このち幾度でも現れるであろう御息所の生霊を予測させ、心に残った。

御息所を数珠で打つワキの腰帯に、私はあっと声をあげそうになった。白地に黒も鮮やかな三鈷である。密教仏具の呪術的修法に用いる金剛杵が写実的に縫われた文様である。その日のワキ、西村欽也師は、女性の怨念をしずめさますような静謐さと、祈りにおける炎の激しさを併せ持った崇高な横川の小聖であった。不動の緊縛にかけるべく数珠で打つ、シテとワキの烈迫の気合の中で、三鈷は不思議な静けさであった。煩悩をやぶり、仏性をあらわすための法具の三鈷。御息所を打つ烈しい数珠は、戒めの悲愁の魂ではなかったかと。三鈷の腰帯は、欽也師自らの創作によると聞いたのは、ずっとのちのことだった。

七月二十六日、金剛家「能面・能装束」の華麗で重厚な展観の中で、あの日の「厖箔蝶文唐織」はひっそりと眠っていた。朽木静雄氏の白般若のまなこを、ぎらぎらと輝かせてみせた唐織のすさまじさは、何処にもなかった。厖箔ということで、楊貴妃・江口・葵上ときに殺生石の女郎に使われることもあるという。蝶文は、再生・復活の象徴であるが、七月十一日の永謹師の「葵上」に、蝶文の意味を重ね合わせるのは、深読みであろう。

少し離れた場所に、現代感覚の「銀箔蝶文唐織」が、五色の蝶を織り出していた。新能の葵上、また殺生石にも使われたと聞く。

「厖箔と銀箔と、お召しになったとき六条御息所の心情はお変りになるのでしょうか」という私の不躾な質問に対して、永謹師は「装束をつけ終えたとき必ず自分を鏡に映してみますから」

と答えられ、銀は炎に映えて、不気味な雰囲気をかもし出しますと、つけ加えられた。

一襲の唐織が語りかける能に描かれた女人たちのそれぞれの心情。舞台ごとに変容し、多角的に光を放つ。装束とは変幻自在であり、流動的な活用こそが、舞台を生かしも殺しもする。

そういえば、七月十一日、無明之祈の白い出小袖は、柔い線であった。葵上さながら小脇にかかえこんだ小袖を、ワキは布地のしなやかさゆえになかなか取り戻せなくて、見所は女体のなよやかさと葵上の無力を思った。深読みをおそれながら、いつのときも舞台の装束に、異常なまで執着してしまう。面が問いかける言葉、装束が語りかける言葉を聞き洩らすまいと目をこらしてしまう。二ヵ月たった今も、ワキの三鈷の腰帯の印象は強くしみじみと語りかけて来る。（日本現代詩人会会員）

62年10月・11月 放送予定

〔10月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
18日（日）金春流「俊　寛」金春信高
25日（日）観世流「柏　崎」山本真貫
〔11月〕
1日（日）8日（日）FM週間のため休止
15日（日）観世流「鳥追舟」観世喜之
22日（日）金剛流「実　盛」金剛巌
29日（日）宝生流「天　鼓」金井章
〔特集〕11月8日・FM午前7時15分～8時
名手名演一調「勧進帳」友枝喜久夫・安福建雄
一調「獅　子」藤田大五郎ほか
●NHK教育テレビ（午前9時～10時半）
11月3日（祝）観世流「松　風」関根祥六
（NHK能楽鑑賞会から）
11月23日（祝）金春流「葵　上」桜間道雄（再放送）
（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

◆菊咲月の舞台から◆

「金春会」「長田驍職分三十周年記念能」「観世会」「鍵雲会」

竹尾邦太郎

「花筐」　シテ晃実。文から目を離し、一瞬放心したようにぼんやり右の方を見て地の、〈跡に残るぞ悲しき、と扇持つ手でシオル辺りの心持と、大柄な身体を練めんばかりの、如何にも初々しく素朴な姿。眉の濃い小面にそれがよく映った前シテがとても良かった。

後シテは大切な花籠を理不尽に打ち落されたツレを既い、「我々よりもなほ物狂よ」、とぐっと胸を張りワキを睨めつける所に強さが直截に出て迫力があり、心の丈の深さが知れた。なお、子方・ワキの後に紫袍裃のワキツレ二人が続くのは、先立つ同門会に「蟬丸」があり、「一角仙人」にも奥が出るための便法だが珍しかった。（1時間21分）

「昆布売」　又三郎・信行の親子競演。アド信行に余裕が出てきた。口跡きっぱりと堂々シテと渡り合って目覚しく、立場が逆転して大名に昆布を売らせる辺り、「先ず売れ」、の有無を言わさぬ語気の強さなど、役柄とは云え旺盛な闘志に成長振りを見せた。（24分）

「一角仙人」　木の葉を付けた薬屋は大小前、岩屋は出ない。輿に入りツレ旋陀夫人（広明）が出る。天冠・紅地唐織壷折・緋大口の大柄で豊潤な容姿は眉の薄い連面と相俟ち艶冶。引廻を取るとシテ一角仙人（光洋）が附き加減に床几に居る。俗客の来訪に戸惑いぶつぶつ言うような気分の謡が面白い。薬屋を出て下居。時々ワキ官人（雅介）にアシライながらの問答も少々ぶっきらぼう。策通り盃事を進めるワキとツレ。〈面白や盃の、でシテは立つと常座の床几にかかり、ツレの楽になる。伸び伸び舞う旋陀夫人の足拍子に惹かれ思わず二つ踏んだシテは、恐れた様にツレの足元を見て立つと、拍子を踏み相舞になった。グラマーな旋陀夫人の色香の虜になつた相舞はぴたりと揃い、互に位置が入れ替る辺りも美事である。舞上げ、ツレはワキ座に戻り下居。シテは更に舞い続け〈廻るもた

「花筐」　シテ晃実。文から目を離し、一瞬放心したようにぼんやり右の方を見て地の、〈跡に残るぞ悲しき、と扇持つ手でシオル辺りの心持と、大柄な身体を練めんばかりの、如何にも初々しく素朴な姿。眉の濃い小面にそれがよく映った前シテがとても良かった。

後シテは大切な花籠を理不尽に打ち落されたツレを既い、「我々よりもなほ物狂よ」、とぐっと胸を張りワキを睨めつける所に強さが直截に出て迫力があり、心の丈の深さが知れた。なお、子方・ワキの後に紫袍裃のワキツレ二人が続くのは、先立つ同門会に「蟬丸」があり、「一角仙人」にも奥が出るための便法だが珍しかった。（1時間21分）

「昆布売」　又三郎・信行の親子競演。アド信行に余裕が出てきた。口跡きっぱりと堂々シテと渡り合って目覚しく、立場が逆転して大名に昆布を売らせる辺り、「先ず売れ」、の有無を言わさぬ語気の強さなど、役柄とは云え旺盛な闘志に成長振りを見せた。（24分）

「一角仙人」　木の葉を付けた薬屋は大小前、岩屋は出ない。輿に入りツレ旋陀夫人（広明）が出る。天冠・紅地唐織壷折・緋大口の大柄で豊潤な容姿は眉の薄い連面と相俟ち艶冶。引廻を取るとシテ一角仙人（光洋）が附き加減に床几に居る。俗客の来訪に戸惑いぶつぶつ言うような気分の謡が面白い。薬屋を出て下居。時々ワキ官人（雅介）にアシライながらの問答も少々ぶっきらぼう。策通り盃事を進めるワキとツレ。〈面白や盃の、でシテは立つと常座の床几にかかり、ツレの楽になる。伸び伸び舞う旋陀夫人の足拍子に惹かれ思わず二つ踏んだシテは、恐れた様にツレの足元を見て立つと、拍子を踏み相舞になった。グラマーな旋陀夫人の色香の虜になつた相舞はぴたりと揃い、互に位置が入れ替る辺りも美事である。舞上げ、ツレはワキ座に戻り下居。シテは更に舞い続け〈廻るもただよふ、と正中安座枕ノ扇。それを見てツレとワキは幕に消えた。

睡りから呆然と覚めたシテは居立つと幕をサシ、〈人の情の盃にと謡う所に一角仙人を呼ばわる声があり、シテはサシた型のまま幕を見込むと正に直して立ち、薬屋に入って下居。颯爽と出た二龍神は揺懸で欣喜雀躍の働キを見せ、一角仙人を幕に追い、二龍神は一ノ松と常座でトメた。拗ね者一角仙人が手も無く美女に嵌められてゆく辺り、光洋の粘っこい演技が光った。（50分・9月6日・金春会能）

「清経」　ワキ淡津三郎（欽也）とツレ妻（彬）の問答に、ツレは気の強いところを見せ、シオリも口惜し涙の風情である。〈手向け返して、とシテ清経（六平太）が出る。水帆掛船文様萌黄法被右肩脱・波風の模様大口・白地縫箔は楽器尽シで音曲を好んだ清経を象徴する。〈腰より横笛、は畳んだ扇を笛に擬した写実。〈船よりかっぱ、は音無く乗り込ミ拍子が利いた。キリは一ノ松、〈清経が、と小さく廻って合掌、ワキ正奥見てトメた。なお、前場の静かなところで楽屋内がいやに騒々しく落着かなかった。（1時間5分）

「縄なひ」　窓表を衝かれ、あっさり踏の抵当に遣られてこだわる太郎冠者の反発とその奥にある主一途な気持にシテ又三郎の深靡さがよく出た。アド主（信行）は後ろめたい気分の機微を出すには未だ若い。（27分）

「道成寺」　シテ驍、披キである。囃子（六郎兵衛・啓次郎・総一郎・竜夫）・後見（六平太・富太郎・白牛口二）は長裃。地（節世・幸雄ら）・鐘後見（久見・忠弘・匡一ら）は裃である。先ずワキ住僧（欽也）の下知で賑やかに鐘が吊られる。流儀では珍のある写実の鐘と聞いたが唐草文萌黄の鐘。シテは三ノ松でちょっと立ち止まった。面増・襟白赤白地鱗箔・黒丸紋尽縫箔腰巻、面で分る通り唐織は流儀の無紅鳳凰に非ず紅入麻ノ葉地紋枝垂桜文様。その褄色した古びのある唐織壷折のシテには如何にも未だ色香の残るしっとりとした風情があり、その枝垂桜文様は重く澱んだ暮春の空気に融け込まんばかりである。

物着に黒前折烏帽子を着けたシテは、一ノ松でゆっくりと右から左へ身体を廻らしグッと鐘を見込む。所謂執心の目付の凄じさ。沸沸と迸る闘志、胸の鼓動は見所に共鳴して高鳴り、大鼓（総一郎）の急調で鋭く舞台に入ると面をキリ、常座で、〈あれにまします、となった。〈鐘や響くらん、の地取から乱拍子、細かく踏み進みワキ正を小刻みに廻る。小鼓（啓次郎）との踏ん張り合いの一騎討。鐘近く、右に身体を捩って鐘を見込むとき、面にさっと描いた悲痛の表情が見えた。〈道成の卿、から更に舞い進んで急ノ舞。心気昂進して激しく躍動する下肢に殺到する地。〈春の夕暮、と鐘の下に入って跳び上りざま鐘は落ちた。即座にちょっと引き上げられた鐘はそのまま鎮まる。仰天するアイの騒々しさが事の重大さを増幅して責任のなすり合いは留まるところを知らず、又三郎・信行親子の息が合う。結局たたらを踏んでワキの前にとび出した主アイ又三郎の「落ちてござる」は詭弁が無駄と悟った小才が殊勝。ワキはおもむろに立って語り。少少勿体をつけた、そこがまた耳をそばだてさせるのだが慎重である。ノットから、〈すわすわ、と鐘が少し上りやがて、中から鋳鉄が高く激しく五度位鳴ると、〈引かねど、と鐘が上り出し、ぐらぐらと揺れる内にシテは両手の甲で鐘を持ち上げる態にすっくと立った。安座や跨まる型ではなくて珍らしい。鬘を崩し、面は大ぶりな般若。鱗落シは腰に巻いた唐織を両手一杯に拡げ後見前に落した。追われて幕に逃れ、反転逆にワキを追うと、柱巻キは左手柱に打杖振り上げ爪先立ってぎりぎり巻き、天を仰ぐ面に哀しみの色があった。再び舞台に入り、隙をみて鐘に取り付くのと、やらじと引き剝すワキに力が入る。キリの闘争は、叶わじとみたシテが打杖かざして一気に走り込み、幕に入って跳び、ワキが型

通りユウケンしてトメた。前後ともに反射神経の鋭い、運動量の多さを徒らにちらつかせない確りしたシテで上々、各役との強固なアンサンブルも気持がよかった。（1時間47分・9月12日・長田驍職分三十周年記念能）

「清経」　ワキ（宗二朗）・ツレ（邦弘）問答にツレは気弱な面を表に出してシオリは悲嘆そのもの。シテは清和。赤地源氏香文様縫箔・紺地金卍文様法被右肩脱ギ・流水楓散シ模様大口、若々しく匂うような公達である。〈腰より横笛、は開いた扇を唇にもっていくが、面を隠す程の傾斜は盃のようで横笛らしく見えなかった。トメは常座だった。（1時間7分）

「狐塚」　狐に化かされまいと気負えば気負うほど真偽は渾沌。思い込んだら引かない太郎冠者の独り合点をシテ友彦は騒々しいまでの勝手しゃべりで旨く見せた。なお鮮やかな黄色の狂言袴が黄金色に波打つ稲田のイメージで妙。アドは弘之・松次郎。（26分）

「三輪」　シテ四郎。面深井・無紅段唐織は秋草文様。淑やかさの中に一抹の寂しさを漂よわせて秋風身にしむ気配一入の立居が素直。後は面増・金色風折烏帽子・鮮やかな青い長袴と何となく艶っぽく白拍子の印象で、それかあらぬか神楽から神舞へと、神がのりうつる亢奮が感じられなかった。ワキ玄賓は欽也。山居の僧の静かな日常が結構。（1時間34分・9月13日・観世会）

「鷺」　シテ泰二。古稀の舞を自祝して舞った。狂言口開（友彦）に続き、次第の囃子で奥に入った子方（内藤達俊）を先立てワキツレ臣下（勝久）・ワキ（欽也）とゆっくり舞台に入るとこう、跪爾且つきらびやかである。シテは一ノ松に来て正に直す。池畔にふわり下り立つ態である。口真一文字に結び良い直面で精神力の充実を窺わせる。眼目の鷺乱はむしろ淡淡として水墨画の風趣、キリは三ノ松に抜け、扇開いて飛翔を表わすように小さく廻り拍子踏みトメた。清々しい舞台だった。囃子（六郎兵衛・啓次郎・鉱一・喜太郎）・地（孝・満次郎ら）・後見（宗家父子）（35分・9月15日・鍵雲会）

能
催
2番

地域文化功労者
文部大臣表彰

観修会秋の会
十一月二十二日（日）十時始
熱田神宮能楽殿

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通烏丸東入
電　話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一　部　70円

歳末助け合い運動　協賛能

能楽協会名古屋支部主催

12月6日　能4番　狂言2番

能楽協会名古屋支部（内藤泰二支部長）主催の「歳末助け合い運動協賛能」は、本紙前号既報のとおり来る十二月六日（日）熱田神宮能楽殿で協会支部能楽師によるシテ方五流、狂言和泉流の出演で能四番、狂言二番、仕舞三番が催される。

能は観世流「巻絹」（シテ久田徹二）喜多流「頼政」（シテ長田驥）金剛流「雪」（シテ牧野元子）宝生流「是界」（シテ衣斐正宜）狂言「二人大名」（野村信行）「名取川」（佐藤友彦）仕舞金春流「野守」観世流「松風」「船弁慶」

助け合い義捐金は、昨年は愛知県、名古屋市へそれぞれ二十三万八千八百八十円、合計四十七万七千七百六十円が寄贈された。

（番組③面掲載）当日は午前十時始、入場料千五百円。

秋の叙勲

・勲三等瑞宝章
笛方・一噌流
藤田大五郎氏（七一）
・勲五等双光旭日章
シテ方・宝生流
松本　恵雄氏（七二）
シテ方・金春流
桜間金太郎氏（七一）

奈良県新公会堂

10月27日　完成祝賀式典

奈良県百年記念事業として建設が進められていた奈良県新公会堂がこのほど完成、十月二十七日に完成記念式典と祝賀能が上演された。

この新公会堂は、国際会議室や能楽ホールを備えた国際文化観光県奈良の拠点施設であり、能楽ホールは室町様式の能舞台が設置され、能楽関係者の期待はきわめて大きい。

地域文化功労者　文部大臣表彰

熱田神宮能楽殿運営委員会委員長　長谷晴男氏が受賞

多年地域文化の振興に功績のあった個人および団体に対してその功績を讃える昭和六十二年度の「地域文化功労者文部大臣表彰」として、熱田神宮能楽殿運営委員会委員長・熱田神宮桐竹会会長・長谷晴男氏（七〇）が文部大臣表彰（個人表彰）を受彰、十一月二日、東京国立劇場で表彰式が挙行された。

文部大臣表彰の栄典を受けた長谷晴男氏は、大正六年十月二十五日生れ、昭和十四年神宮皇学館本科卒業、昭和二十六年熱田神宮権祢宜、同三十年祢宜、三十九年権宮司に就任、今回の受彰は「永年にわたり古典芸能（能楽・雅楽部門）の保存継承及び振興に顕著な功績」によるもので顕彰理由は次のとおり。

能楽関係では昭和三十年熱田神宮能楽殿建設当初より此の事業に参画、能楽殿の地鎮祭・竣功祭には斎主を奉仕、舞台披きには能奉行役をも勤めた。

昭和三十九年五月、熱田神宮能楽殿運営委員会委員長就任以降は諸施設の改善、建物の増築及び周辺の整備に力を尽くし、中部地域における能楽の殿堂として威容を備えるよう、繁栄の基礎づくりに専念。委員長としての卓越した運営は、能楽協会名古屋支部会員はもとより、広く能楽愛好家より高く評価され、地域文化の興隆に寄与した。

雅楽関係では昭和二十六年熱田神宮桐竹会副会長、同三十九年会長就任以降は、中部地域唯一の古典芸能である熱田神宮舞楽が、過般の戦災のため衰微していたので再興に着手し、高舞台の復元、装束の新調・整備、技能の錬磨に全力を注いだ結果、往時を凌ぐ盛況となり、能楽とともに地域文化の興隆に貢献した。

なお同氏は、昭和十五年十二月賞勲局より紀元二千六百年祝典記念章を授与され、また昭和四十八年皇学館大学長谷奨学金を寄付、感謝状がおくられている。昭和二十三年から現在も神社本庁祭式講師、昭和四十年から現在まで皇学館大学教授として後進の指導に当っている。（能楽関係、雅楽関係の主なる事績の概要は⑤面掲載）。

長谷晴男氏受彰のことば

このたびはからずも地域文化の振興の功績により文部大臣表彰をいただき、感激これに過ぐるものはありません。この表彰はひとり個人の栄誉にとどまらず、当地域の能楽、雅楽関係の方々がその保存、継承、振興に積み重ねられた努力が認められた実証であると思っております。受彰にあたって能楽協会名古屋支部長内藤泰二師をはじめ関係者のみなさんのご推薦を頂き、まことに有難く感謝しております。今後とも微力ながら熱田神宮能楽殿の運営のため努力していく所存です。

茂山忠三郎　狂言の会

福岡、東京、京都、大阪で

「茂山忠三郎・狂言の会」はことし九回目を迎え、恒例のように福岡、東京、京都、大阪の各地で開催、福岡は十月二十一日・大濠公園能楽堂）で大曲「武悪」など東京では十月二十九日・国立能楽堂で「貰聟」「栗焼」「宗論」を上演、京都、大阪の公演は次のとおり。

〔京都〕十一月十二日（木）京都観世会館、開演午後六時三十分。「二人袴」（男・茂山千之丞、太郎冠者・日下部礼蔵、聟の兄・善竹忠重、聟・茂山寛吾）「寝音曲」（主人・茂山正義、太郎冠者・茂山忠三郎）「六地蔵」（田舎者・善竹幸四郎、詐欺師・茂山千五郎、仲間・茂山千之丞、茂山忠三郎）

〔大阪〕十一月十八日（水）大槻能楽堂、開演午後六時三十分「空腕」（主人・善竹幸四郎、太郎冠者・茂山千之丞）「靱猿」替装束（太郎冠者・茂山寛吾、猿引き・茂山忠三郎、猿・茂山良暢）

茂山忠三郎・狂言の会事務局＝豊中市城山町三－四、D－31、柳川方、電話〇六－八六三－八一五〇

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔11月〕
15日（日）宝生会定式能　（有料）
21日（土）幽花会大会　（来場歓迎）
22日（日）観修会大会（来場歓迎）（番組①面）
23日（祭）和泉会別会　（有料）（番組②面）
29日（日）久田観正会大会（来場歓迎）（番組④面）

〔12月〕
5日（土）朝日カルチャーセンター能楽会（来場歓迎）
6日（日）歳末助け合い協賛能　（有料）（番組③面）

〔63年1月〕
3日（日）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
9日（土）名古屋能楽学生連盟学生能　（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会能　（来場歓迎）
30日（土）青陽会定式能　（有料）

〔2月〕
7日（日）宝生会定式能　（有料）
11日（祝）花田清謡会　（来場歓迎）
14日（日）観世会定式能　（有料）
21日（日）九皐会定期能　（有料）
27日（土）壺泉会能　（有料）
28日（日）春蔵会　（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

観修会秋の会

十一月二十二日（日）十時始
熱田神宮能楽殿

番組

素謡
花月　沢田幸　高石梅代
半蔀　池庭とみ子　馬場節
鵜飼　加納富昭　楓健治　高橋千代利

仕舞
葛城　島　高橋千代利　鈴木房子

舞囃子
経　正　有賀欣哉　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
班女　林英子　河村大　後藤孝一郎　鹿取希世
巻絹　加藤裕子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
鞍馬天狗　浅野美穂子　河村大　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世

素謡
通小町　加藤定子　鈴木房子　安藤和歌子

舞囃子
百萬　内田睦子　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　助川龍夫
玉鬘　川瀬絹子　河村大　後藤孝一郎　鹿取希世
船弁慶　澄川幸子　河村真之助　後藤孝一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

番外仕舞
砧　近藤幸江　林喜久子　武田志房

能
清経　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

連吟
桜川　加藤桂子　安田昭子　中村時子

舞囃子
難波　近藤重治　河村大　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　助川龍夫
羽衣　田口久美子　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世
花筐　海田トシ子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
紅葉狩　小林辰彦　河村大　柳原冨司忠　鹿取希世
急ノ舞

素謡
井筒　林博敬　宮川登巳子

舞囃子
草子洗小町　高木敬二　河村真之介　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
海士　安田茂哉　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
菊慈童　高木和子　河村大　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世

附祝言

主催　観修会
祖父江修一

春雅日記 ㊼

木の実づくし

えと文　二井栄逸

木の実の秋。

空は日ごとに青さを深めてゆく。森の樹々達は思い思いに実をつけ、秋風に枝をそよがせている。

一きわ強い風が吹くと樹々の枝々は海草のようにゆれ動き、カラカラと音を立て実を落とす。

そんな自然に出会うと、忘れていた幼な心を呼びさまされしばし木の根っこに腰をすえたくなる。

普通木の実とよばれているのは桃、柿、りんご、梨等の秋果を除いた、どんぐりの仲間達のことでかしわ、くぬぎ、かし、とち、しいなら等の実のことをいう。山の麓や、雑木林の草むらのなかにころころところがり、どれもつややかな顔をしている。

すだじいや、つぶらじいの実は子供の頃よく焙って食べたりした。

八瀬の山里に夏安居（げあんご）をしている僧のもとへ、毎日のように木の実や瓜木（薪のこと）をもってくる女があった。

このうち若い女は、実は、小野小町の霊なのである。

僧は、女の志を謝して後、木の実の数を教えてくれという。そこで、木の実づくしのロンギが始まるのであるが、短かい謡曲文ながら趣きが豊かで好もしい。ここでは秋果も木の実にふくめてある。

若き日の小町に一役をあたえたのも、無名のツレ女と同一視しない作者の配慮であろう。

悲愴きわまる男性恋物語等、すべては後段にゆずって、ひたすらにゆったりと木の実をかぞえ、青春の日々を回想するのであった。

古見馴れし、車に似たるは
風にもろき落椎。――

椎は車を造る木材であると共にその椎の実の四位にかけ、四位の少将が小町のもとへ百夜通いをした時の車を思い出すのである。

人丸の垣ほの柿
山の辺の笹栗。――

文献に「柿本人丸の門前に柿の木ありしかば姓をなせりという」――姓氏録。

「赤人は、上総国山辺郡の人なり。彼所に廟いまにあり。旅客歌かきつくるとなり。此所に笹栗として長さ一尺ばかりあるに栗のなると彼国の人かたりける」――古今栄雅抄。

笹栗は紫栗の古名で形はこぶり小栗と書いてささぐりともいう。

窓の梅。園の桃。

花の名にある桜麻の　宇生の浦
梨猶もあり。

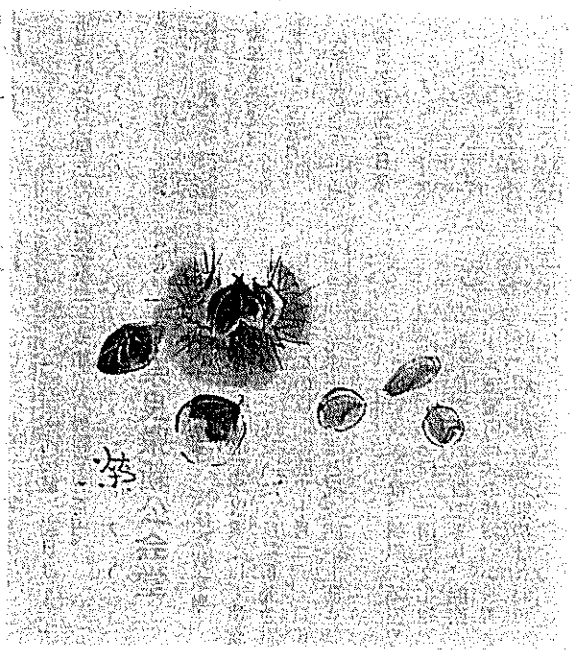
桜麻のをふの流波立ちかえり、見れどもあかず山梨の花。――俊頼朝臣。

桜麻の言葉は、（宇）の枕詞。花の名にある桜麻のは、（宇生）を言うための序。宇生の浦は志摩国の梨の名どころ

いちい（一位科の常緑喬木）
香椎（柏のこと、ブナ科の落葉喬木）
真手葉椎（ブナ科の常緑喬木）
大小柑子（大柑子は橙の類。小柑子はみかんの類）
金柑。
花橘（たちばなの一種）

古今集に、五月待つ花たちばなの香をかげば、むかしの人の袖の香ぞする。とあり、この歌によって、あわれ昔の恋しきは、はなたちばなの一枝、と結んでいる。

（62・10・27記）



壺泉会で新作能上演
「女と影」「半獣神の午後」
11月29日　東京・国立能楽堂

クローデルとマラルメの作品による新作能「女と影」と「半獣神の午後」が壺泉会（泉嘉夫師）の主催で、十一月二十九日（日）東京・千駄谷の国立能楽堂で公演される。

「女と影」は原作ポール・クローデル、「半獣神の午後」はステファヌ・マラルメの原作で、訳・岡色ともに木村太郎氏、作能はいずれも泉嘉夫師。二つの作品ともに単なる在来の謡曲文の模倣ではなく、内容も在来にながったもので注目の上演である。（番組④面）

〈解説〉「女と影」

今世紀最大の劇詩人であるクローデルが、フランス大使として在日中に歌舞伎の作品として書いたものを、クローデルの生誕百年（一九六八年）に際して、まったく新しく原作から能的作品へと翻案してつくられたもの。

これは、女と男の想念を、象徴的な状況と技法によって表現しようとした作品で、その意味では能の演目のなかに類例を見ることのできない全く新しいテーマを扱っているといえる。加えて言葉の力――詩の力（あたかも日本の古典において「和歌の徳」がしばしば説かれるごとく）に対してのクローデルの信念ともいえるものが重層的にのべられている。

〈半獣神の午後〉

象徴主義の大詩人マラルメの「半獣神の午後」は、西洋近代詩の究極点に位置する作品として評価されている。また印象派音楽の傑作とされている〃「牧神の午後」への前奏曲〃は、ドウビュッシーがこの詩劇の前奏曲として作曲したものである。

半獣神（上半身が人間、下半身が山羊で角と蹄を持つ姿と考えられ、ローマ神話、ギリシア神話での農産物の神）は、美しいニンフを相手として、陽光輝やく南欧の野で、情熱のおもむくままに行動したり、沈潜的なひとときを迎えたりする。

社会的な束縛を受けない状態での人間の赤裸々な思いが、厳格な詩的制約をもって表現されていると考えられる。（新作能解説ガイドより）

独語　観能

能舞台の舞踊
利用上の問題点

をひき立たせていたのには感心しました。

全体に三条の能及び能舞台への理解のほどが推量され、〃現代の創作舞踊「さとうきび畑」ではつくりもので後がかくれたので、安心して竹内のコミックな踊りを楽しむことができました。（彼女

和泉元弥舞台十年記念
和泉宗家後援会十周年記念
名古屋　和泉会別会
十一月二十三日（祝）午後一時開演
熱田神宮能楽殿

番組

秀句傘　大名　和泉元秀　太郎冠者　鳥越正夫
水汲　新発意　和泉淳子　坂東方の者　井上祐一
鬼丸　鬼丸　和泉元秀　僧　佐藤友彦　親　井上松次郎
地謡　井上靖浩　井上祐一　吉川秀秋　佐藤融

鐵肩　太郎冠者　井上松次郎　次郎冠者　井上礼之助　主　大野弘之
素囃子
神舞　水波之伝　大鼓　笠鉱一　太鼓　助川竜夫　小鼓　福井啓次郎　笛　藤田六郎兵衛
地謡　井上祐一　屋井雅　和泉祥子　児　大野弘之　身　吉川秀秋　随　身井上靖浩　随　身佐藤融　随　持　今枝郁雄　者　持　和泉元秀　牽　女　和泉淳子
（終演・午後四時頃）

主催　和泉宗家後援会
後援　朝日新聞社
入場料　A・五千円、B・三千円
申込み　和泉宗家後援会本部
東京都板橋区東新町二―五　電（〇三）九七四―〇五〇六

久田観正会大会
十一月二十九日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

連吟　竹生島　平野裕子　山内ふさ　梅村展子　宇野多美栄　近藤とこ代　太田久　吉田寛　井深由美
殺生石　小菅理　杉山静子　中島二郎　戸田光美　加藤木邦夫
仕舞　吉野天人　紅葉狩　熊野　羽衣　胡蝶　舞囃子　吉野天人　蜘蛛　鬼頭喜太郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　鬼頭英二　斉藤利子　前田ハマ子　岡山美恵子　石突和子　臼井澄子　蜂須賀須美子
仕舞　難波　鬼頭英二　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎
紅葉狩　中村萩枝　後藤孝一郎　鬼頭英二　藤田六郎兵衛
玄象　神谷功　鬼頭英二　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
素謡　弱法師　今井隆　丸山幹子
連吟　夕顔　宮原みゑ　光崎フジエ　石井幸子　原田信子　山本はな　小島和代　鈴木きく乃　鈴木みさへ　横井余史子　木野島定子　柴田武
素謡　砧　鬼頭英二　柳原富司忠　鹿取好信　希世
舞囃子　巻絹　露木サチ子
花月　田中雅子　鬼頭英二　柳原富司忠　鹿取好信　希世
芦刈　小木曽幸恵　吉田定男　柳原富司忠　鹿取希世　森本重一
融　石黒直子　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭好信　希世　小田切敏子
独吟　乱曲　近江八景　岡田康子
仕舞　櫻林院クセ　通小町　林あや子　弱法師　広中敬樹
素謡　卒都婆小町　鈴木金子　久田徹二　松山幸親
番外仕舞　船井慶キリ　上田貴弘
ツレ　前野都子　大脇寿美子
能　松風　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　鹿取希世
戯之舞　脇留　野村又三郎
間　子方　山本悦司　ツレ　田中秀明
月　佐野正吉　吉川宇良子
素謡　望郡　鬼頭英二　福井啓次郎　鹿取好信　希世
舞囃子　邯鄲　福垣つね子
羽衣　星野路子　鬼頭英二　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世
和合之舞
三輪　神谷貞子　吉田定男　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世
善知鳥　横井余史子　吉田定男　福井啓次郎　森本重一
子方　渡辺優子　ツレ　服部喜美子
素謡　木賊　岩田春江　久米宏枝
舞囃子　敦盛　早川浄　鬼頭英二　後藤孝一郎　森本重一
忠度　今尾正治　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一
山姥　安藤録郎　吉田定男　後藤孝一郎　助川龍夫　森本重一
立廻り
素謡　花筐　安藤美智子　三島恵那子　若山あや子　今川猛
連吟　通小町　名市観正会
仕舞　難波　堀尾明和
嵐山　山田実
田村クセ　岩田猛
善知鳥　今川猛
番外仕舞　藤戸　辻本正樹
久田徹二
附祝言　（七時過終了予定）
（入場無料・御来場歓迎）
主催　久田観正会
名古屋市北区東水切町四―四三
久田徹二

朝日カルチャーセンター
能楽会
十二月五日（土）午前九時開演

歳末助け合い運動
協賛　能（第十九回）
十二月六日（日）午前十時始

観能独語

能舞台の舞踊

利用上の問題点

十一月二日熱田能楽殿で三条万里子の舞踊を見ました。藤田六郎兵衛氏の新企画「能舞台との交響」の第一回の催しです。藤田さんはプログラムにこう書いています。

「能舞台は能以外に使い道のない舞台と思われているが、能が創造された時代には、あらゆる芸能が使用する多目的舞台だった」と。そしてこの日本人がつくり出した素晴らしい空間に、「時代を生きる創造者を招き、日本人本来の考え方、感じ方を表現していただく」というのだから立派なものです。

しかし「能以外に使い道がない」というのはどうでしょうか。能舞台が能の専門劇場であってもいいではないですか。採算的に考えると、いろんな芸能に利用してもらうのが有難いかも知れませんが、能舞台の現状から見て、多目的劇場などとうてい無理、空いた日を利用してもらうのが精いっぱいのところ。あまり欲張らない方がいいでしょう。理屈と心情は十分わかりますが…。

ところでこんどの新企画、第一回は「三条万里子幽玄空間に舞う」ですが、第一に三条万里子をとりあげた着眼に敬服します。三条はニューヨークに本拠をおく洋舞界の一流ダンサーです。名古屋でも彼女の舞台を見た人は多いと思いますが、洋舞の中に「日本人本来の考え方、感じ方を表現する」ことでは第一人者です。モダンダンサーというより高度の前衛舞踊家といってよく、それだけにこんどの公演でも、洋舞のテクニックを見事に能舞台に生かしました。たとえば、照明を揚幕の奥からの一本にしぼり、鏡板をうす暗くし松の絵を木ではなく緑のマッス（塊）に見せ、前景の光の中に踊る群像をひき立たせていたのには感心しました。

全体に三条の能及び能舞台への理解のほどが推量され、〝現代の幽玄〟ともいえるような好舞台でした。

数日前の十月二十八日には同じ能楽堂で「竹内菊の会」があったばかりです。彼女はここで何度も踊っていたようですが、私はこんどはじめて見ましたが、三条の洋舞台より日本舞踊だけに、はるかに親近感があるかと期待していましたが、さに非ず。照明がフラットでくまなく行き渡り過ぎてニュアンスに欠けました。芸の批評ではありませんから演技にはふれませんが、鏡板の松の絵がひどく目ざわりに感じられました。殊に裸の舞台での日本舞踊のソロはむつかしいように思いました。直線的な能舞台の立体感が強過ぎるせいでしょうか。これは能舞台で能を見なれた私などが、特に強く感じるので、一般の人には、それほどの異和感はないのかも知れません。

創作舞踊「さとうきび畑」ではつくりもので後がかくれたので、安心して竹内のコミックな踊りを楽しむことができました。（彼女はいつも創作舞踊にひらめきを見せます。）

三条の場合、踊り自体が能に似て、抽象的、観念的なものですから、洋舞とはいえ割合スムースに能を見るときのような気持で素直に受けとれるのですが、写実を下敷にして繊細洒脱、情緒本位の日本舞踊ではそうはいかないようです。なんとも不思議なことですが、正直な私の実感です。三間四方の空間で踊るだけのことじゃないか、というような単純安易な考え方は問題外で、能舞台の構造を芸術的に生かすには、一工夫も二工夫も要ることを痛感しました。

「三条万里子幽玄空間に舞う」のチラシに書かれた馬場駿吉氏の言葉「能舞台との安易な調和をむしろ避けること」を邦舞の方々こそ強く強く意識していただきたいと思います。

（M）

熱田神宮能楽殿の建設、維持運営に盡力

文部大臣表彰

長谷晴男氏の地域文化功労

熱田神宮能楽殿運営委員長、熱田神宮桐竹会会長・長谷晴男氏は昭和六十二年度地域文化振興功労者として文部大臣表彰を受彰されたが、その主な事績は次のとおりである。

〔一〕熱田神宮能楽殿の建設

名古屋市東区布池町にあった社団法人名古屋能楽会所有「名古屋能楽堂」は、古来、中京唯一の能楽の殿堂として親しまれてきたが昭和二十年三月十八日戦災により焼失した。戦後この復興については、諸施設を完備した立派な能楽堂を再建する計画が立てられたが敷地の取得と資金造成の面で、困難な事態に直面した。

こうした中で、能楽協会名古屋支部関係者による再建の熱意とともに、名古屋市の戦災復興計画の一環として、文化施設の重要性に鑑み、名古屋市助役田渕弄郎氏の要請により、熱田神宮境内での建設計画が醸成された。氏は、昭和二十六年三月から熱田神宮櫛祢宜儀式課長として、当初より能楽殿再建の要望に深い理解をもって、建設の推進にあたり、昭和三十年十一月十七日に舞台披きを挙行、今日、中部地方の能楽の殿堂としての基礎を築いた。

〔二〕熱田神宮能楽殿の維持運営

能楽殿の維持運営は、熱田神宮と能楽協会名古屋支部の双方より選出した者により、「熱田神宮能楽殿運営委員会」を組織して催能の計画、調整、建造物の保持修理が図られたが、氏はその運営の実務にあたり、特に昭和三十九年能楽殿運営委員長に就任以来、今日まで二十三年間にわたり、その運営に格段の意を注ぎ、増築、拡充と改善、能楽殿周辺の環境整備につとめ、文化施設としての充実をめざし、歴史と伝統ある能楽の振興に尽瘁した。

〔三〕能楽後継者の育成

古典芸能、就中能・狂言は伝承芸能として、後継者の育成には関係者の憂まざる努力が求められるところであり、国においても能楽師について、重要無形文化財指定の制度により保持・振興に意を注がれている。昭和三十年能楽殿の竣功とともに、氏は能楽師後継者育成の急務を強調し、これを緒として能楽協会名古屋支部有志により、能楽師養成会が組織されるやいち早く格段の努力を傾注され、後継者をめざす若手能楽師の為に能楽殿の運営に適切なる施設を講じ、能楽師の修業道場として便宜をはかり、また能楽協会名古屋支部主催の大衆能、薪能、歳末助け合い義捐能等の企画には積極的に参画、楽師育成の成果は、昭和五十三年能楽協会名古屋支部より重要無形文化財総合指定・日本能楽会会員九名の能楽師を輩出、楽師育成会の事業の役割に貢献した。

今日、愛知県教育委員会主催による芸術祭参加、名古屋市・名古屋市教育委員会主催の青少年芸術劇場の能・狂言の公演は、能楽協会名古屋支部所属の能楽師により催されているが、その中心をなす能楽師は、いずれも昭和三十年以来の楽師育成の成果と言って過言ではなく、氏の努力に負うところ極めて多大である。

〔四〕舞楽・神楽舞の振興

雅楽は奈良時代に、支那・朝鮮あるいは印度方面から我が国に渡来した音楽で、それに舞のともなうものを舞楽という。元来外国の音楽・舞踊であったが、皇室の保護のもとで保存継承せられ、わが国最高の古典芸能として尊ばれている。

氏は、昭和十四年三月舞楽の盛んな神社として有名な、宮幣中社嚴島神社に奉職すると同時に雅楽の道に入門、持ち管「篠笛（ひちりき）」、舞「左舞（さまい）」として登録、大阪天王寺「雅亮会」の楽師に師事して、舞の習得に励み、舞人として同社の祭典神事に奉仕した。翌昭和十五年八月紀元二千六百年奉祝会制定にかかる「神前神楽舞浦安の舞」指導者養成講習会に参加、「浦安の舞講師認定書」を取得、爾来、この指導普及につとめ、現に熱田神宮では制定当時の「浦安の舞の原型」が保存されている。

戦後の一時期は、この道も衰微の一途を辿ったのであるが、氏はあらゆる困難を克服し、舞楽十五曲、神楽舞四曲を習得、斯道の振興につとめた。

〔五〕熱田神宮舞楽の再興

熱田神宮には千余年の永い歴史と伝統のある熱田神宮舞楽が、保存継承されている。

しかしながら、過般の戦災により高舞台の焼失、舞楽装束類・大太鼓の一部焼失、技能の衰退などで、熱田神宮舞楽も衰微に向かいつつあった。昭和二十六年三月熱田神宮櫛祢宜儀式課長を拝命した同氏は、之が再興の計画を立て、自らも宮内庁楽師・神宮伶人に師事して舞の習得に専念、特に昭和三十九年雅楽の率仕団体である熱田神宮桐竹会会長に就任以来、二十三年間にわたり毎年宮内庁楽師の指導による雅楽講習会を開催、神宮職員と桐竹会会員の技能の向上をはかりつつ、高舞台の復元、舞楽装束の新調・整備に努力した。

〔六〕舞楽後継者の育成

凡そ舞楽は、雅楽曲に舞を伴うものであるから、舞楽後継者を育成するには、楽曲と舞の講師養成が必要である。そこで氏は、熱田神宮神職中斯道の実力者三名に「愛知県神社庁雅楽講師」の資格を取得せしめ、これら笙・篠笛の講師が各管を担当して指導に当たり、毎月一回舞楽研究会、雅楽教室を開設、また出来るだけ公開演奏の機会をつくり、熱田神宮舞楽の振興を通じ、広く後継者の育成に尽力した。

朝日カルチャーセンター能楽会

12月5日　熱田能楽殿

朝日カルチャーセンターの能楽六教室による能楽会が十二月五日（土）熱田神宮能楽殿で催される。

今回の催しは、昭和五十九年のセンター二十周年記念能楽会以来三年ぶり三回目で素謡、狂言、舞囃子、連吟、連調、独調、仕舞など。

同センター能楽教室は、観世流泉嘉夫、和泉流・井上松次郎、幸清流・後藤孝一郎、宝生流・内藤泰二、観世流・久田徹二、喜多流・二井栄逸（五十音順）の諸師が講師をつとめている。

62年11月・12月 放送予定

〔11月〕

15日（日）観　世　流「鳥　追　舟」観世喜之
22日（日）金　剛　流「実　　盛」金剛　巌
29日（日）宝　生　流「天　　鼓」金井　章

◆NHK教育テレビ（午前9時～10時半）

11月23日（祝）金春流「葵　上」桜間道雄（再放送）

〔12月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

6日（日）喜　多　流「捻　　垣」㊤友枝喜久夫
13日（日）　同　　上　　㊦　同上
20日（日）宝　生　流「女郎花」近藤　礼
27日（日）観　世　流「巻絹」「鶴太鼓」大槻文蔵

〔年始番組〕（テレビの部）

NHK教育テレビ（午前9時～10時）

1月1日（祝）喜多流能「小鍛冶」喜多六平太
1月2日（土）和泉流狂言「鷺」野村万之丞
　　大蔵流狂言「二人大名」茂山千五郎
1月3日（日）宝　生　流「草紙洗」佐野　萌

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

朝日カルチャーセンター能楽会

十二月五日（土）午前九時開演
熱田神宮能楽殿

（観）巻絹
杉江　元　筧　鉱一
福井　良治　助川　竜夫
間　野村又三郎　藤田六郎兵衛
後見　須部梅田　今村　甫　松山　幸親
邦久　地謡　清沢加藤　喜勇　加賀　敏彦
保一彦　武政　中川祖父江　雅章
修一　邦弘

（和）二人大名
狂言　野村　信行　大矢　高義
井上礼之助

（宮）頼政
長田　能　曉
高安　飯冨　雅介
杉江　勝久
井上松次郎　元　河村総一郎　福井啓次郎　森本　重一
間　後見　長田　光子　郷　地謡　駒田　衡市　宏
前田　和谷
山本　和田　勝男
仕舞　吉田　妙　地謡　今沢　美和
船　風　前野　郁子　近藤　高木　美智子
弁　慶　キリ　生駒　幸江　長島　茂
里翠　大島　靖
松井　政彬　允嗣

（春）野守
近藤　修彦　地謡　渡部　林　道三
伊藤　堤　辛夫　鉄郎
雄二

（剛）雪
牧野　能　元子
飯冨　佐藤　雅介　吉田　定男
間　佐藤　友彦　後藤孝一郎　鹿取　希世

（宝）是界
佐藤　能　耕司
衣斐　正宣
西村　飯冨　雅介
高安　欽也
勝久　鬼頭　英二
柳原富司忠　藤田六郎兵衛
間　大野　弘之
後見　竹内　澄子　久野　幸三
玉井　博祐　地謡　稲川　福美　吉田　俊彦
寿一　内藤　泰二
勝一　鬼頭　嘉男
竹腰
（終了予定五時頃）

（和）名取川
狂言　佐藤　友彦　井上松次郎
地謡　野村　信行
大矢　高義　野村又三郎

附祝言

入場料　一、五〇〇円（全館自由席）
前売券　各出演楽師宅
お問合せ　熱田神宮能楽殿　☎（六八二）一七五一

歳末助け合い運動

協賛能（第十九回）

十二月六日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

能　組

（観）巻絹
高橋　暲一
久田　徹二
間　杉江　元　筧　鉱一
福井　良治　助川　竜夫
野村又三郎　藤田六郎兵衛
後見　須部梅田　今村　甫　松山　幸親
邦久　地謡　清沢加藤　喜勇　加賀　敏彦
保一彦　武政　中川祖父江　雅章
修一　邦弘

（和）二人大名
狂言　野村　信行　大矢　高義
井上礼之助

（宮）頼政
長田　能　曉
高安　飯冨　雅介
杉江　勝久
井上松次郎　元　河村総一郎　福井啓次郎　森本　重一
間　後見　長田　光子　郷　地謡　駒田　衡市　宏
前田　和谷
山本　和田　勝男
仕舞　吉田　妙　地謡　今沢　美和
船　風　前野　郁子　近藤　高木　美智子
弁　慶　キリ　生駒　幸江　長島　茂
里翠　大島　靖
松井　政彬　允嗣

（春）野守
近藤　修彦　地謡　渡部　林　道三
伊藤　堤　辛夫　鉄郎
雄二

（剛）雪
牧野　能　元子
飯冨　佐藤　雅介　吉田　定男
間　佐藤　友彦　後藤孝一郎　鹿取　希世

（宝）是界
佐藤　能　耕司
衣斐　正宣
西村　飯冨　雅介
高安　欽也
勝久　鬼頭　英二
柳原富司忠　藤田六郎兵衛
間　大野　弘之
後見　竹内　澄子　久野　幸三
玉井　博祐　地謡　稲川　福美　吉田　俊彦
寿一　内藤　泰二
勝一　鬼頭　嘉男
竹腰
（終了予定五時頃）

（和）名取川
狂言　佐藤　友彦　井上松次郎
地謡　野村　信行
大矢　高義　野村又三郎

附祝言

（七時過終了予定）

主催　久田観正会
名古屋市北区東水切町四―四三
久田　徹二

（入場無料・御来場歓迎）

壺泉会能

東京千駄谷・国立能楽堂
十一月二十九日（日）午後二時開演

「女と影」

女　浅見真州　影　泉嘉夫　武士　鏑木岑男
笛　一噌庸二　小鼓　鵜沢速雄　大鼓　大倉正之助　太鼓　助川治
後見　北浪昭雄　観世銕之丞
地謡　佐久間晋男　観世暁夫　金子　阿部信之　泉雅一郎　山本順之　鶴克彦　浅井文義

仕舞「花筐」　観世銕之丞
狂言「飛越」　善竹十郎　石原康志

「半獣神の午後」

ニンフ・泉雅一郎　笛　藤田六郎兵衛
ニンフ・山本正人　小鼓　大倉源次郎
半獣神・梅若猶彦　大鼓　大倉正之助
後見　観世暁夫　北浪昭雄　地謡　鶴克彦　泉泰孝　泉成佳　泉嘉夫
（終了予定・午後五時）

主催　壺泉会

入場券　正面指定席五千円、自由席三千五百円　学生二千五百円。
問い合わせ先　壺泉会　西宮市甲陽園目神山一―一七八　電話〇七九八（73）二四五八　名古屋市昭和区山里町一〇三　電話〇五二―八三二―三一八五

市民芸術劇場'87
若き能楽師狂言師たち

"芸の道を歩き始めた若者たち"のサブタイトルで"若き能楽師狂言師による「市民芸術劇場'87」が十一月五日（木）午後六時半から名古屋・東区の名古屋芸術創造センターで催された。

主催・若き能楽師たち実行委員会、名古屋市文化振興事業団、名古屋市教育委員会。

演目は次のとおり。

舞囃子「東方朔」（梅田邦久、武田欣司、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・上田慎也）

仕舞「岩船」（衣斐繁志）「田村」（長田郷）

狂言「成上り」（野村武司、野村信行、大矢真義）

能「小袖曽我」（十郎・梅田敦史、五郎・武田大志、母・武田衛、笛・竹市学、小鼓・幸正昭、大鼓・河村真之介、間・野村信行　後見・武田欣司、今沢美和、地謡・梅田邦久、久田徹二、祖父江修一、清沢一政）

「現にいま修業を積みつつある若い人たちと、それぞれの師がともに一つの舞台で演ずるよう構成、続けられてきた技を、現代の感覚を採り入れ、さらに二十一世紀へと伝えていく若者たち」（演能ガイドより）の新しい企画である。

【訂正】本紙10月号①面、柴田初太郎氏逝去の記事中「十一月五日」とあるのは「十月五日」、②面壺泉会の国立能楽堂上演十二月二十九日とあるのは「十一月二十九日」の誤りにつきお詫びして訂正します。

〔各地だより〕

京都

豊春会秋の能
創立二十五周年記念　11月15日　金剛能楽堂

豊春会（豊嶋三千春師）は発足以来二十五周年を迎え、十一月十五日（日）金剛能楽堂で「豊春会秋の能」を開催する。

演能は、金剛流の家の能としての重曲「絃上」を三千春師が所演、狂言「居杭」が上演される。

番組は「仕舞、鮎之段」（種田恭三）「松虫」（今村慶子）「雪」（牧野元子）「笠之段」（豊嶋訓三）「熊坂」（竹市幸司）

狂言「居杭」（茂山千之丞、茂山千三郎、丸石やすし）

能「絃上」（シテ豊嶋三千春、姥・中尾六三郎、師長・重本昌三、竜神・鈴木昌美、ワキ・岡次郎右衛門、笛・藤田次郎、小鼓・幸昭弘、大鼓・筧鉱一、太鼓・小寺俊三　後見・金剛巌ほか、地謡・豊嶋訓三、宇髙通成ほか）。

大阪

梅猶会定期能

梅猶会（梅若盛義師主宰）の六十二年度定期能第四回（六十二年度最終回）は、十二月六日（日）大槻能楽堂で催される。

能「菊慈童」（森勝子）狂言「茶壷」（善竹幸四郎）能「葛城・大和舞」（井上生香）能「小鍛冶・黒頭」（前・池内光之助、後・井戸和男）

入場料一般券（自由券）三千五百円。

大阪

能「俊寛」上演
舜一郎と徹二の会

小鼓方・久田舜一郎師と観世流シテ方・久田徹二師による「舜一郎と徹二の会」は昨年の初公演につづき十一月七日、大槻清韻会能楽堂で大阪文化祭参加として第二回公演が催された。

演能は、能「俊寛」（シテ久田徹二、康頼・山田義高、成経・上田拓司、ワキ・西村欽也、間・木村正雄、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村総一郎　後見・泉嘉夫、笠田稔、藤谷政二、下川宜長、斉藤信隆、笠田昭雄、赤松禎友、藤谷音弥）

一調「三井寺」（小鼓・久田舜一郎、謡・浦田保利）仕舞「頼政」（藤谷政二）「通小町」（笠田稔）「船弁慶」（下川宜長）「砧」（泉嘉夫）「船橋」（上田貴弘）

岐阜

故池上梢師追善
岐阜淡交会大会

岐阜淡交会は十一月十五日、岐阜公園・萬松館で故池上梢師追善秋季淡交会大会を開催。素謡「弱法師」「盛久」「松風」「大原御幸」「景清」「鉢木」「玄象」はじめ舞囃子、独吟、連吟、仕舞など十数番を上演。

岐阜淡交会連絡所は、岐阜市瑞雲町一―一三、野口清子方。

土岐

叶石会秋の大会
11月28日　土岐市で開催

叶石会（大鼓方・河村総一郎師主宰）は、十一月二十八日（土）岐阜県土岐市泉神栄町四丁目、和敬会館で能一番、一調、囃子、連吟など二十数番で秋の大会を開催する。

能「菊慈童」（シテ髙木和子、ワキ西村欽也、笛・鹿取希世、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・高木敬二、太鼓・鬼頭喜太郎、後見・小島一英、祖父江修一、地謡・梅田邦久、中川雅章、清沢一政、高橋郎一、須部甫、鍋居順、髙野瀬惠三、利根川朔之）

一調「竹生島」（シテ・長田驍、大鼓・川瀬絹子）

午前十時半始、来場歓迎、和敬会館TEL〇五七二―五一―五三二九番。

源氏物語絵巻展
徳川美術館で特別展示

今秋十月三日新装開館した徳川美術館では、新館完成記念特別展として「源氏物語絵巻と王朝人の美意識」を十月三十一日から十一月二十三日まで開館している。主催・徳川美術館、中日新聞社。

【訂正】本紙10月号④面、「能装束の語るもの」の文中「三鈷」とあるのは「五鈷」の誤りにつきお詫びして訂正します。

◆菊咲月の舞台から◆（その二）
「九皐会」「宝生会」「九世福井五郎三十三回忌追善能」

竹尾邦太郎

「菊慈童」　シテ保彦。金をふんだんに用いた装束は豪奢だが楽屋と一畳台の菊は真物で素朴な季節感に溢れる。シテの舞いぶりも朴訥で、楽の終り頃太鼓のキザミで正中小さく廻る辺りの無心の境地が好ましい。ただ拍子の踏みようは今一歩。頭を取って月を眺めたり、ようようと酔歩を見せたり巻いた袖を枕に酔い伏す様を見せたりなど小品ながら見どころ多い舞台だった。（39分）

「咲嘩」　科白の間合度のせいか前半の問答がもたつきのりきれなかった。伯父のつもりの見請ひの咲嘩（松次郎）なるスッパにしてからが好々爺の印象で、主（友彦）の怖れも説明的。シテ太郎冠者（弘之）だけが、物を伝達する過程での誤解を熱演し、スッパをスッパとも思わぬ所業に及んで後半引きつけたが一曲の調和に欠けた。キリで独り取り残された松次郎の慨嘆、「呆れもせぬ奴じゃ」が利いたが。（30分）

「船弁慶・前後の替」　シテ喜之。舞の途中一ノ松に抜け子方を見込み、背を向け下居してさめざめとシオル。酒宴の余興に乞われて舞い出したはよいが、居たたまれずに座を立った風情である。中入は烏帽子を落とし、シオリながら立って常座で一旦立ち止まり心持を残して入った。

後シテは黒頭鍬形・面淡男・紺萌黄段厚板・白地金立涌文様狩衣の袖を折り込み、紺地金波濤文様半切。妖怪味より気品が勝り、五代の後胤に相応しい。子方はもう少し声をはった方がよいのでは。毎度ながら船頭の怒気にワキツレは度胆を抜かれるのではと思い気の毒。（1時間20分・9月19日・九皐会）

「松虫」　褐の松皮菱文様中に松葉と松毬を散した黒掛直垂・紺白段熨斗目・白大口・男笠のシテ俊彦。前場、語りに哀傷があり出色。就中、中入前、地との掛合に入り[illegible]正中へと大きく廻ってワキにアシライ、再びスミへ行くと千鳥掛けに常座へ行き小さく廻るところ、その足跡は屈託した胸中の心理描写とも、阿倍野の原の茫漠とした広がりを表わすとも思われて面白く、送り笛で常座に入るまで、友を思う幽愁を直面の翳りに見せて好演。後シテは腰高、疲れが見え保ちきれなかった。（1時間11分）

「六浦」　シテ和に女性十人の地謡（雅ら）を配した女流能。前シテ里女の鄙に稀れな美しい顔ばせ（面増）が純朴な挙措にやさしさを見せ、後シテも終始慎ましい楓ノ精であったが、序ノ舞の途中常座で袖を返しワキ正奥を見たのはあくまで便法。やはり被く方が風情があろうというものである。（1時間16分）

「雷」　この夏、雷が多かった。名残の雷と言えようか。地上に落ちて腰を痛めた雷（礼之助）が、折から通りかかる藪医者（松次郎）に針を打ってもらうという童話の世界。癒えて帰るキリ。一ノ松・二ノ松と立ち止まり、破れ鐘のような大音声の、「ピーッカリ、ピーッカリ、ガラガラガラ」、はけだし礼之助の面目躍如。（22分）

「鉄輪」　シテ正宣。装束全体が濃い紫色系で暗い印象を与える上に深井の面が深刻な情緒を醸し通い慣れた道を運ぶ重い足取が象徴的である。後シテは赤地金稲妻文様摺箔・黒丸紋尽縫箔腰巻の装着胴。一ノ松しばしの佇立は胸の忿怒を一刻押し鎮めるためと思わせた。へ我は貴船、と打杖サシ廻して拍子一つ踏み舞台に入って台に上る。生成の面に凄まじい憎悪を見せながら、キリはへ足弱車のと打杖首に担って小さく廻り力萎えて、へ言う声ばかり、と、どんどん橋懸を抜け、三ノ松でトメたが怨みの深さの割には呆気ない気がした。（57分・9月20日・宝生会）

「砧」　シテ乾之助。前は面深井・無紅段唐織は秋草文様。都から夫の便りをもたらすツレ（輝和）との掛合のうちに、冷え冷えと凝固してゆく胸の内や、へ恐かなりける頼みかな、と少々の自虐も交じる辺りの内面描写に優れた感性を見せた。

物着後は、へ薄き契りは忌はしや、と地団駄のように、しかし力弱く踏む拍子に脱力感のようなものがありシテの心情が思われた。「砧ノ段」の寂寥感も章・淳雄・孝道らの地謡陣に支えられて申分なかった。後シテは浅黄大口に白地灰色の段違無紅秋草文様の薄い袷の打掛ふうのもの（註）を壺折に着けて面は痩女。如何にも淋し気な装束付ばかりでもあるまいがクドキも沈痛。杖捨て扇に替えてサシて進み、へ焔に咽べば、と扇で面を蔽い、へ叫べど、と扇を外しながら小さく廻って正中。へ砧も音無く、と小さく廻って正に直シ、面を伏せて呵責の声を聞き、へ恐ろしや、と二三歩退ってシオル。観世では下居して耳を蔽うところだが、それぞれ流儀の主張が面白く、乾之助の内に沈潜してゆく芸風に合った。トメは常座。閨怨は感じられず、ひたすら淋しかった。ワキ数弘。アイ友彦。後見孝・泰二、囃子は六郎兵衛・啓次郎・鉱一・喜太郎。なお一調一管「江口」同様、重習「砧」に梓を着なかったのは不審。（1時間39分）

「宗論」　法華僧松次郎・浄土僧又三郎。互いに珠数を戴かせる意気込みが少々不足している様に思われた。キリで念仏と題目を取り違える辺りの狂燥も今一つしっくりしなかった。なお事情はあろうが囃子の登場楽はある方が良いこと言うまでもない。（38分）

「天鼓・盤渉」　シテ孝。茶唐帽子・面笑尉・白垂・小格子目引・褐色水衣。一声から上歌まで省略。ちんまりと居る居クセの巧まざる孤愁や、後シテ、楽の途中大小前で撥を唐扇と替えて気分もかわる遊楽の趣など芸劫を窺わせた。キリ、へ柳葉を、と頭を取って見上げ、へ夜半楽、とさっと袖を巻いて直ぐ返し、へ月にうそぶき、と上を見、へ水に、と下居して下を見て扇打ち合わせる一連の型など[illegible]好演。（1時間7分・9月23日・九世福井五郎33回忌追善能）

（註）大正七年十月、松本長が「砧」を勤めた折の雷鳥の能評に次の一文がある。『前略、後シテの坪折に着た衣裳は頗る珍らしいもので、白地に薄い鼠色の段が見え、小菊を一殺づつ描いたもので、上品に渋いものであった。見た所箔でなく綾でなし、何だらうと尋ねたら、是は九郎翁の賀に際して会員から贈ったもので、絵絹を湯熨斗して礬水をせずに描かせたのださうだ。而もそれは翁の生前に到頭出来上らず、お通夜に辛っと出来て来たから、柩に被せて切めての念を晴らしたといふ事であった。其後用ひる機会も無かったが、今度始めて着ることになったので、数多き遺品の中でも演者に取っては特に恩師を偲ばせる涙の種であったであらう。』一領の能装束の歴史に思いを馳せる時、感慨も新たに、改めて記録の重要性を痛感した次第である。

割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）
電話 241—0248

10日発行）
友社
63年度　観世会定式能　予定番組
第五回　十一月十三日（日）　葛城　観世銕之丞　大和舞　山　片山九郎右衛門
羽衣　本田勲　殺生石　武田邦弘
・第四回　十一月二十六日（土）　花月　須野甫
各回とも当日券三千円。会員券申込みは関係楽師方、および青陽会事務所（熱田神宮能楽
俊成忠度　奥村久枝　野守　東　美智子
寛　福井啓次郎　鉱一　寛　柳原冨司忠　鉱一
藤田六郎兵衛　助川竜夫　森本重一

エンゲージリング
山田宝石
貴金属・時計・装飾品
名古屋・本山駅
電 762—2434代表

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料 1年 700円
郵送の場合 1年 1200円
一部 70円

63年度 観世会定式能 予定番組

2月14日初回、5回公演

昭和六十三年度の名古屋観世会定式能は二月十四日を初回として五回公演が行われる。開演は毎回十二時半始め。

昭和六十三年度予定番組

第一回　二月十四日（日）
大班　杜　観世元昭
　　女　観世元正
第二回　四月十日（日）
雲林院　梅若紀彰
鉄輪　山本勝一
第三回　六月十二日（日）
百萬　大槻文蔵
天鼓　観世喜之
第四回　九月十一日（日）
龍田　武田志房
阿漕　関根祥六
第五回　十一月十三日（日）
葛城　観世銕之丞
大和舞
山姥　片山九郎右衛門

毎回能のほかに狂言、仕舞を予定。指定席（年五回分）三万五千円自由席（年五回分）二万円。第二回目より当日券七千円。

63年度 青陽会予定番組

青陽会定式能の昭和六十三年度（第三十二期）の演能は一月三十日を初回として四回行われる。

・第一回　一月三十日（土）
屋島　松山幸親
　　小島一英
葛城　久田徹二
　　子方　祖父江智子
船弁慶　祖父江修一
・第二回　四月十六日（土）
竹生島　玉木孝男
　　松山幸親
杜若　近藤幸江
藤戸　梅田邦久
・第三回　七月三十一日（日）
賀茂　前ツレ　高橋暸一
　　天女　今村嘉勇
　　加賀敏彦

観世寿夫記念法政大学能楽賞

大倉流小鼓方 北村治氏
銕仙会事務長 荻原達子氏 受賞

法政大学は、昭和五十四年六月に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに八回の授賞が行われたが、本年度も各方面の識者に推薦された候補者について選考委員（増島宏・広末保・吉越立雄・観世栄夫・麦章の諸氏）により慎重に選考され、第九回の受賞者として、大倉流小鼓方・北村治氏、銕仙会事務長・荻原達子氏を決定した。なお、授賞式は明年一月十二日午後六時より赤坂プリンスホテルで行われる。（受賞者の経歴③面掲載）

○〔受賞者〕北村　治（きたむら・おさむ）氏

〔授賞理由〕能の小鼓の演奏において、常に高い水準を保持する堅実な芸風に定評があったが、近年はとくに曲趣を的確に把握した演奏によって観客を魅了し、一番の能の成功に大きく寄与している。

○〔受賞者〕荻原達子（おぎはら・たつこ）氏

〔授賞理由〕多年、能界を代表する意欲的活動で知られる銕仙会の企画・運営に携わるのみならず高質の能の提供をめざす他の企画へも積極的に参加・協力し、能楽プロデュースの仕事を開拓してきた功績は甚大である。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔63年1月〕
3日（日）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
9日（土）名古屋能楽学生連盟学生能　（来場歓迎）
15日（祝）名古屋清韻会能　（来場歓迎）
30日（土）青陽会定式能　（有料）

〔2月〕
7日（日）宝生会定式能　（有料）
11日（祝）花田清謡会　（来場歓迎）
14日（日）観世会定式能　（有料）
21日（日）九皐会定期能　（有料）
27日（土）霊泉会能　（有料）
28日（日）春鼓会　（来場歓迎）

〔3月〕
6日（日）大蔵狂言会　（来場歓迎）
21日（振休）正風会　（来場歓迎）
27日（日）壺泉会　（来場歓迎）

〔4月〕
3（日）名古屋梅猫会追善会　（有料）
10（日）観世会定式能　（有料）
16（土）青陽会定式能　（有料）
17（日）邦陽会　（来場歓迎）
23（土）初陽会　（来場歓迎）
24（日）久田観正会　（有料）
29日（祭）幸友会春の会　（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

名古屋清韻会能

昭和六十三年一月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

能組

楽謡

葛城　平岩昌子　高木あき子　地謡　岩田正子　今枝みつ子　浅野芳子　船橋澄子　横田秦子　松尾美知子　本木圭子　宵山武子　木野山古井牧子　御堂中と子　田内よし子　坪内照子　柴田信江子　なみ孝子　文紀子　佐代季子

仕舞

杜　若キリ　藪寿津
玉之段　国立幸子
葵上　馬場英子
遊行柳　榊原富貴子
鉄輪　木村美津子

弱法師（グリ・サシ・クセを省く）
石黒操子　山田富美　地謡　水野部野　服部文子　富田真子　毛利菊子　岩田誠子　緒方己子　阿部陽子　森田扶子　渡辺中子　佐藤広子　藤島吉子　近藤瀬子　殿島津子　高田藤喜子　みね幸久子　江二修春子　ヤ子文子　アヤ子嘉子　節子こう

連吟

阿漕　平岩明　石崎博一

鉢木　佐久間英親　北原良一郎　高田武雄　浮貝冨士道　伊藤冨士道　山田欣也　福間克彦　加藤千夫　増谷和一　高橋宗二郎　小川宗司　松野貞三

玉鬘　鈴木明　原博彦

舞囃子

高砂　冨士道周明　笠鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

羽衣　本田黙　牧生武田邦弘　石月須野甫　筒井中川雅章　生駒里翠　今沢美和　紅葉狩　近藤幸江　前野郁子

・第四回　十一月二十六日（土）

各回とも当日券三千円。会員券申込みは関係楽師方、および青陽会事務所（熱田神宮能楽殿内）電話〇五二—六八二—一七五一番。

（初回番組②面掲載）

能

羽衣　守部啓子　和合之舞　西村欽也　後見　吉田定男　後藤孝一郎　地謡　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

俊成忠度　奥村久枝　後見　殿島修二　大槻秀夫　地謡　伊藤貴敏子　御牧紀代子　鬼頭代子　古井島殿　佐季博子　泉松　大斉藤　槻文蔵　赤松　泰祐友孝　山本正人　信隆

野守　東美智子　後見　笠鉱一　柳原冨司忠　地謡　助川竜夫　森本重一

巻絹　小川記句子　後見　笠鉱一　福井啓次郎　地謡　助川竜夫　森本重一

小袖曽我　長島みつ子　五段　後見　吉田定男　後藤孝一郎　地謡　森本重一

富士太鼓　御牧紀代　後見　吉田定男　後藤孝一郎　地謡　藤田六郎兵衛

百萬　伊藤敏子　後見　吉田定男　後藤孝一郎　地謡　助川竜夫　森本重一

仕舞

田村　佐久間英親
笠之段　福間克彦
東北　古井佐季
鐘之段　高田みね子
通小町　殿島満里子
善知鳥　渡辺節子

難波　山田欣也　後見　笠鉱一　柳原冨司忠　地謡　鬼頭喜太郎　森本重一

野宮　合掌留　鬼頭貴代子　後見　吉田定男　福井啓次郎　地謡　藤田六郎兵衛

松虫　桑原信夫　後見　笠鉱一　柳原冨司忠　地謡　藤田六郎兵衛

藤戸　殿島博子　後見　吉田定男　後藤孝一郎　地謡　森本重一

天鼓　池田忠三　後見　笠鉱一　福井啓次郎　地謡　藤田六郎兵衛

砧　前　佐藤アヤ子　後見　吉田定男　福井啓次郎　地謡　森本重一

番外仕舞

梅　大槻秀夫
附祝言　地謡　山本正人　斉藤信隆　泉泰　赤松祐孝　氷室　大槻文蔵

（終演　五時半頃の予定）

〔御来場歓迎〕

主催　名古屋清韻会
補導　大槻秀夫

青雅日記 ㊼

冬の花

えと文　二井栄逸

晩秋の気配がひしひしと身に迫る或る朝、ぽっかりとさざんかの花が咲いた。

紅葉も散りはてた枯葉色のあたりに灯をともしたように咲くこの初花に、私は言いしれぬ感動を覚えた。

薄紅の花は、呼吸でもしているように生き生きとして冬枯れのあたりを明るくする。自然のしくみの素晴らしさはたとえようもない。

さざんかは多花性の花木であるから、冬の終りまで次々と咲きつづいてくれる。

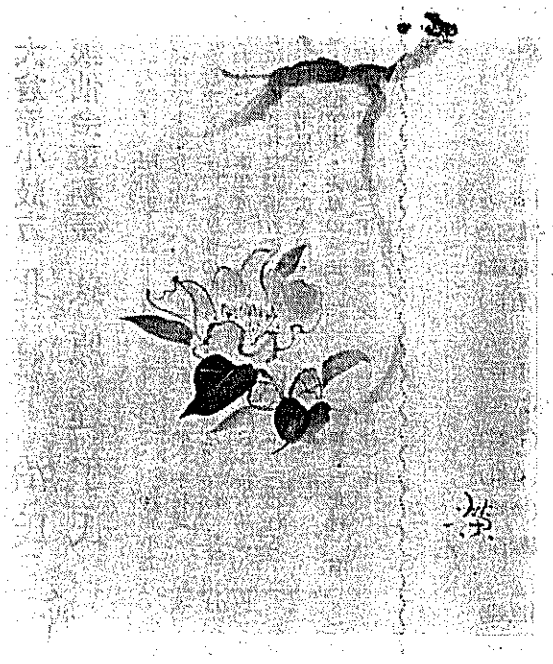
しかし、花のいのちは短かく、やっと開ききったと思う間もなくハラハラと散る。

いづれの花か
散らで残るべき
散るゆえによりて
咲く頃あれば
めづらしきなり

世阿弥は、どの花でも散らないで咲き残る花はない。けれど散る花なればこそ季節が到来すれば美しい花を咲かせるのであると言った。世阿弥の花と言うのは芸の奥義をさしていうのである。

魂の燃焼を死ぬまで保ちつづけ一きわ映える落日の終焉のように生涯を終るということは素晴らしいことである。

心より心へ伝わる花は、必ず次代によって新しい生命線のあふれる感動の花を咲かせることであろう。



つばきもさざんかも同じつばき科つばき属なのでよく似ている。このいとこ同士の関係にある両者のちがいは、雄しべや花弁の下部が合生して筒状になるが、さざんかは雄しべや花弁の下部はかるく合生するだけである。

つばきは、頭からすぽっと抜けて落ちるが、さざんかは一ひら一ひら散ってゆく。

河上のつらつら椿つらつらに見れどもあかず
巨勢の春野は——

これは、椿を詠んだ万葉の歌であるが、この歌を口ずさむと、飛鳥の近くの巨勢（こせ）という里は、どんなに美しかったのだろうと憧憬を感じたりする。

野生のさざんかは白花で、花弁も六—七弁の一重咲きで、一つ一つの花は必ずしも園芸品種のように華やかではないけれど、他の花がほとんどない時季なので、枝一ぱいに咲いているのを遠くから見ると、白々としてよく目につく。

椿と同じようにさざんかにもすこぶる種類が多い。

現在栽ばいされているさざんかの品種は、偶然の実生から生じたものが多いというし、東海地方の旧家や寺院、城下町等には、まだまだ見もせぬ美しい花があるだろうという。現に毎年新種が発見されているのも事実なのである。

（六二、一二、四記）

各地だより

神戸

神戸新春能

1月15日　文化ホールで

昭和六十三年の年頭を飾る「神戸新春能」は一月十五日、神戸文化ホール〈中〉特設能舞台で観世宗家を迎えて行われる。

能　高砂　シテ　吉井順一
八段之舞　ツレ　藤井完治
能　草子洗小町　シテ　観世元正
書裝束　王　藤井丈雄
男　上田拓司
女　勝部延和
男　笠田昭雄
女　田中章文
貫　上田貴弘
狂言　貫　茂山千五郎
半能　石　橋　シテ　藤井徳三
師資十二段之式　赤　下川宜長
赤　山田義高
赤　橋保向

入場料（全席当日指定）前売一階席五千五百円（当日六千五百円）二階席三千五百円（当日四千円）

主催神戸市、神戸市民文化振興財団神戸文化ホール

後援　能楽協会神戸支部

問い合わせは、神戸文化ホール事業部（電話〇七八—三五一—三五三五）

梅猶会定期能

1月17日　大阪能楽会館

大阪梅猶会定期能の初回は、一月十七日、大阪能楽会館で催される。

午後一時始。

能「弱法師」（池内光之助）
素謡「藤戸」（熊沢恵美子、菊池重郷）
能「東北」（井戸和男）
能「鞍馬天狗」（梅若善英）

大阪

長生会大鼓打初め

観世流太鼓・長生会（鬼頭喜太郎師）の新年打初めは、一月十日、冨士道舞台で行われる。

◆63年新春放送
＝年始特集＝

◎NHK教育テレビ
（午前九時～十時）

・一月一日（金）能・喜多流「小鍛冶」喜多六平太
・一月二日（土）狂言・大蔵流「二人大名」茂山千五郎ほか、和泉流「釣針」野村万之丞ほか。
・一月三日（日）能・宝生流「草紙洗」佐野萌

◎NHKラジオ第二放送
・一月一日（金）午前五時四十五分、番囃子「葛城」宝生流
宝生英雄。
（午前六時四十五分）狂言「薩摩守」（大蔵流）善竹孝夫、「節分」（和泉流）野村万作。
午後一時、能楽名手名演
一管「獅子」藤田大五郎
一調「勧進帳」友枝喜久夫、安福建雄
独吟「勧進帳」梅若六郎
番囃子「鞍馬天狗」喜多六平太（十四世）
乱曲「四季」武田太加志
一調「羽衣」観世寿夫、観世元信
一調「放下僧」近藤乾三、幸祥光
一調「珠の段」桜間道雄、幸祥光
「三番叟」北村一郎、亀井俊雄
・一月二日（土）午後一時
番囃子「葛城」宝生英雄（再放送）
・一月三日　狂言「薩摩守」「節分」（再放送）午前十三時（日）

観世寿夫記念法政大学能楽賞

受賞者の経歴

○北村　治氏……大倉流小鼓方。日本能楽会会員。昭和十一年生れ、東京都出身。早稲田大学文学部仏文科卒業。故北村一郎の長男で父に師事。小・中・高校と暁星学園に学び、フランス語に熱中して仏文科に進む。幼少の頃から小鼓の稽古を始め、初舞台は昭和二二年の「吉野天人」（シテ観世静夫）。その後、「翁」「獅子」「乱」を披き、三二年に「道成寺」を披いた。五〇年に日本能楽会会員に指定される。五五年に秘曲「関寺小町」（シテ武田太加志）、六〇年に「桧垣」（シテ観世銕之丞）、六二年にも「桧垣」（シテ友枝喜久夫）を勤めるなど近年の秘曲の多くは氏が小鼓を打ち期待に違わぬ好演が多い。目立つことを嫌う性分であるが、高い水準を保つ芸でおのずと注目を浴びている。能界でも屈指の謡曹家。

○荻原達子氏……社団法人鎮仙会事務長。昭和九年生れ。長野県岡谷市出身。東京女子大学短期大学部国語科卒業。昭和二九年から三五年まで能楽書林に勤務。観世寿夫の懇望により、三七年から鎮仙会の事務所を担当し、以後、同会の公演活動の企画・制作に携わり、質の高い能を上演することが能の普及・啓蒙につながるとの信念のもとに、清新な企画によるすぐれた成果を挙げて、能楽におけるプロデュースの必要性を広く認識させた。謡能パンフレット『鎮仙』の発行編集人として、曲目解説の他に研究者の論考や演劇人の意見を掲載する多彩な紙面を作り能界のパンフレットをバックナンバー保存の必要を感じさせるほど質的に向上させた功績も大きい。横道萬里雄・観世栄夫氏と共編の「観世寿夫著作集」全四巻（平凡社、五六年）古川久、小林責氏と共編の『狂言辞典・事項編』（東京堂出版、五一年）など、著述や論考も多い。

和泉元弥舞台十年
和泉宗家後援会十周年

和泉会公演と祝賀

和泉流宗家元秀氏の嫡男・元弥君が昭和五十四年初舞台をふんでから十年、和泉宗家後援会十周年を記念して、名古屋和泉会別会が十一月二十三日、熱田神宮能楽殿で開催され、「業平餅」（和泉元彌）「秀句傘」（和泉元秀）「水汲」（和泉淳子）「鍾馗」（井上松次郎）などが上演された。

終演後、熱田神宮会館で記念祝賀会が催され、和泉宗家後援会名古屋支部長・本多静雄氏は「和泉流発祥の地である名古屋で和泉流宗家を継ぐ元弥君が舞台十年の記念公演で、初舞台からたゆまぬ努力と精進により成長している舞台をみせてくれた」とあいさつ。本山前最高裁判事の祝辞、花束贈呈があり、元弥君から「さらに努力して実のある十年、二十年にしたい」とあいさつ。演劇ペンクラブ・原理事長の乾杯で祝賀、歓談した。

62年12月・63年1月放送予定

〔12月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
20日（日）宝生流「女郎花」近藤礼
27日（日）観世流「巻絹」「鞍太鼓」大槻文蔵
〔新春番組③面掲載〕
〔1月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
10日（日）金春流「高砂」「猩々」桜間金太郎
17日（日）宝生流「海人」大坪十喜雄
24日（日）観世流「求塚」片山九郎右衛門
31日（日）金剛流「田村」「鞍馬天狗」豊嶋訓三

◎NHK教育テレビ（午前9時～10時）
1月15日（祝）狂言「彦市ばなし」（作・木下順二）
茂山千之丞、茂山千五郎、山本東次郎

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

観能独語

高貴薄命の美女
久しぶりの「大原御幸」

の成功不成功には見所も責任がありましょう。「珍しい曲だから」「めったに出ない大物だから」などと、もの珍らしさにひかれた見うでしょう。平家物語灌頂巻によって原文でつづられ、耳をすまして聴くに値する名曲に違いありませんが、それだけなら能を見るよに平然と去って行く法皇を見送る建礼門院ら三人の女性の、別れを惜しんで泣く姿が哀切で身にしみました。感傷派の私など？ではじ

訃

佐野正治氏

塚本秀雄氏

観世流シテ方・塚本秀雄氏は、かねて入院療養中のところ十一月十一日午後八時二十五分、じん不全のため津島市民病院で逝去された。八十二歳。

葬儀・告別式は十四日午後一時

青陽会定式能（第132期 第132回）

昭和六十三年一月三十日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞

難波　加賀敏彦
胡蝶　玉木孝男　地謡　今沢前野郁子　美和幸江　生駒里翠

能

清沢一政
小島一英
島　飯富高安勝久　杉江雅介元　河村真之介　柳原冨司忠　森本重一
間　佐藤友彦
後見　今沢美和　中川雅章　地謡　前野郁子　玉木孝男　今村喜勇　生駒里翠　須部祖父江修一　梅田邦久　加賀敏彦

仕舞

高砂　今沢美和
二人静　近藤幸江　前野郁子　地謡　今村喜勇　祖父江修一　高橋暁一　加藤保彦
車僧　生駒里翠

能

久田徹二
葛城　高安勝久　飯富雅介　鬼頭英二　後藤孝一郎　池田茂　鹿取希世
間　井上松次郎
後見　前野郁子　梅田邦久　地謡　近藤幸江　玉木孝男　馬場信至　山幸親　須部清一　高橋暁一　中川雅章　沢田一政

狂言

因幡堂　井上礼之助　佐藤友彦

仕舞

老松　梅田邦久
巴　中川雅章　地謡　本田黙一　小島英二　久田徹二　加藤保彦

能

子方　祖父江智子　祖父江修一
船弁慶　杉江元　高安勝久　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭好信　藤田六郎兵衛
間　大野弘之
後見　近藤幸江　梅田邦久　地謡　今沢美和　馬場信至　山幸親　清沢一政　本田黙　小島久田徹二　加賀敏彦　小島英二

附祝言

主催　青陽会
事務所　名古屋市熱田区神宮一—一—一
熱田神宮能楽殿内
電話〈〇五二〉六八二—一七五一番

〔当日券三千円〕

観能独語

高貴薄命の美女
久しぶりの「大原御幸」

名古屋では久しぶりの「大原御幸」が11月15日熱田能楽殿の「宝生会定式能」に出ました。シテは大坪十喜雄、昨年9月に同じ熱田で「藤戸」を好演したあの老匠です。それがこんどの「大原御幸」では、昨年の鋭鋒がかげをひそめひどく元気のないものでした。足どりもなんとなく危っかしい感じ。曲そのものが、静かな動きの少い曲ですから、元気がなくていいとは限りません。静かな動きの少ない曲であればあるほど、力が要るのではありませんか。外に現れない内にこもった力ですね。昨年の「藤戸」は素晴らしかった。元気いっぱいでした。八十近いとはいえ、あれから一年たつかたたぬに咲きほこった〝老いの花〟が、もうしぼみかけたのかと思うとガッカリですが、そんなことはありますまい。疲労か、何かの故障か、いづれにしても、一時的な体調の不備からかと思います。早く元気をとりもどして、いま一度〝老いの花〟咲く舞台を見せてほしいものです。

建礼門院は、うら若い身空で生きながら六道の輪廻、地獄の苦しみを体験した哀れさ、悲しさ、一途に仏にすがっても晴れやらぬ運命の苛酷さに泣く高貴薄命の美女です。その深刻な人間像を閑寂な寂光院のたたずまいの中に静かにしめやかに描出することは、並み大ていの腕でこなせるものではありません。心技ともに老熟の域に達した大坪でこそと期待したのですが、やはりもの足りないものが残りました。

こうした曲では舞台だけでなく会場全体の雰囲気が大切です。曲の成功不成功には見所も責任がありましょう。「珍しい曲だから」「めったに出ない大物だから」などと、もの珍らしさにひかれた見所では、曲にふさわしい雰囲気の造成は望めません。大坪一人を責めるのではなく、我々も見所の一人として反省しなければならぬと思いました。能はいうまでもなく写実でなく抽象の世界です。それだからこそ八十近い老人が若い美女にもなれるのです。ただそのあたりの微妙なリアリティの表現、把握は、演者見所一体となった理解と感性の一致点においてこそ可能なのだと思います。能一般について云えることですが、「大原御幸」では特にそれを痛感します。舞もなく型に動きも少なく、普通の能を観るつもりで観ては、正直いって面白くありません。あまり出ないのはそんなこともあるかも知れませんね。

「大原御幸」は見る能でなく聴く能だという人がありますが、どうでしょう。平家物語灌頂巻によって原文でつづられ、耳をすまして聴くに値する名曲に違いありませんが、それだけなら能を見るより素謡を聴いておればいいではありませんか。能はまづ見るものです。「大原御幸」もまづ舞台を観て、ワキ座に法皇（内藤泰二）を据え、中央辺に女院、内侍、局の花帽子、僧衣姿を並べた人物の配置配色にひかれねば観る価値はありません。謡はいわば伴奏みたいなものです。かすかな人物の動きや出入りに遠く近く、聞えて来る謡、囃子、それらがかもし出すわびしい雰囲気。極端に云えば、謡の意味がわからなくても鑑賞は出来ると思います。（わかるに越したことはありませんが）

法皇（内藤泰二）、ワキ（西村欽也）のほか、二人の侍女、倉本雅の内侍、竹内澄子の局がよかったです。じっと座った姿にも元気があり、ツヤがありました。情景としては最後の別れ。冷淡なまでに平然と去って行く法皇を見送る建礼門院ら三人の女性の、別れを惜しんで泣く姿が哀切で身にしみました。感傷派の私など？ではじめて「人間」を発見し「大原御幸」の楽しさを実感しホッとしました。（ちょっと運過ぎましたか）。実のところ私ども庶民は、雲上人たちの世界をそれらしく無表情に描いた「大原御幸」のような能はよそごとじみて同感できません。無表情の中に表情を感じとる感性を誇る気にもなりません。人間性を否定する超貴族気分の一端をのぞかせる現在物とすれば、これが本当と云えるかも知れませんがね。

観世寿夫は「能には演どころ、観どころはない」と云い切っていますが至言だと思います。「大原御幸」などいい例で、面白くないと云うのは、我々が興味本位に、演どころ、観どころを期待し過ぎるからかも知れませんね。

（M）

信玄袋
―病状日記、新徳川美術館（一）―

私事で書き始めるのは恐縮ですが、どうかお許しを。実は九月中旬狭心症を起こし、用心のため、C病院へしばらく入院しました。能・狂言のお好きな主治医・M博士のおすすめからです。C病院の医師とそのグループの方々はとても親切であったし、夜中の注射を処置の看護婦さんのやさしさは忘れがたい。彼岸の中日のおはぎの味も同じ。朝のあわただしさは私になぜか源氏物語で光源氏が夕顔と楽しい出会いの朝方の騒しさを思い起させた。能半部のことも。夜更けて略歴をどうまとめるか考えてもみた。「W・ペイター（英）の文芸評論を好む」「能・狂言を愛す」と「辱知の先輩友人を持つ」ことはぜひ入れねばなるまい。これはよく思い浮べていた四海波、高砂の尾上の松、鐘の声、蟬娟〈せんけん〉たりし両鬢〈びん〉人間愛いの花盛りや三瀬川などの謡の文句の中の〈松風〉の三瀬川がそうさせたかも知れぬ。七十まで生きながらえさせてくれた心臓の動きもみたし、坂道完走テストも出来た。心臓はバラの花のように開いたり閉じたりする。やがて退院した。そして十月十日のテレビ能・竹生島（金剛巌、彦根城内、佳）を明るい野外の光の中の舞台でみて楽しさを取り戻す（狂言鬼が宿・茂山千五郎）。

× × ×

十月下旬小雨の日新徳川美術館をたずねる。風のように行き、風のように観て、風のように帰る。今迄西側にあった武家門が正門（これまでが南から進んだ）。堂々として佳景。門の内側広場もよい。蓬左文庫はその右に見える。しかし目玉（自慢）のはずの展示の部屋は薄暗く、展示物に光が当るだけ。武家式楽の間も寒々としていた。能舞台（二の丸のもの復元）の鏡板の松は下で大小に岐れていた（八月信玄袋関連）が、道成寺の鐘を吊る二つの環はみえず。盛況で、図録を買うとこうも人だまりでなかなか買えなかった。図録の末尾に載る歴代藩主名（振りがな付き）の一覧表は役に立つ。貴重。

付、

一、右復元は部分的か。

二、岩波、能・狂言講座の第一巻（歴史篇）に尾張藩主三代綱誠〈つなのぶ〉とあるが、図録の末尾・「尾張徳川家歴代」その他（蓬左文庫調）では〈つななり〉とある。別称か誤りか。二九六頁。

三、芸術新潮十二月号の展覧会紹介欄で展示好評とある。

× × ×

十一月八日、熱田へ行く。観世会（納め）・国栖（観世鉄之丞）が佳。前の運びと後の神体の偉容も見事。初番の蟬丸はみず。

しばらく行かないで席に坐ると何かふんい気がこれまでとちがう。周囲を見廻すと、揚幕の五色の色が今迄とは反対になっていた。今度は向って右から紫白赤黄緑である。三十年余みなれた五色の順序が反対になっていたのである。東京の観世会館と同じになっている。なにかわけがあるのであろうか。先年私も五色のことを調べかけてそのままになっている。

× × ×

演能。先述の観世会で仕舞野宮（片山九郎右衛門）も印象に残る。同月十五日の宝生会・大原御幸（大坪十喜雄）は期待した冴えがなかった。法皇（内藤泰二）の風格は、狂言雁礫の大名（井上松次郎）が矢を射そこねてつっくりと立つ姿の味わいとともに佳。

× × ×

放送（NHK）・十一月三日松風・関根祥六。全景の中でシテとツレを一緒に写していたのが効果的。随所に好場面をみせる。テレビ能のうちでも写し方のよい放送（演能もよかった）。

付、十一月初旬江戸邦楽「秘曲・稀曲をきく」放送（FM）があった。五回。その初日の箏曲、生田流の〈鑑（かがみ）の曲〉を聴く。阿部桂子さん。冷えに冷えた曲。老女物に匹敵。名古屋から八橋流の〈古曲四季源氏〉を佐藤君子さん（国風音楽会）が演奏する。ともに弾き唄い。また「名古屋の技」と題する放送（NHK名古屋）のなかに平曲と二絃琴・義太夫・香道が採り上げられた。平曲は朝日（十月）文化欄にその伝承の現状が演者の写真入りで大きく紹介される（以上、付）。

なお十一月下旬実盛（金剛巌・FM）。古風な量感とブツリ・ブツリと糸が切れるよう謡い方に久方振りに出あう。岩船との組み合せもよい。

× × ×

六三年の元旦のテレビ能は小鍛冶・喜多六平太である。

佳い年を迎えたい。

（野村広二）

国際文化交流
観世流能楽団インドで公演

観世流初のインド公演が十月十三日から十五日までニューデリーで行われ、日本とインドの文化交流に大きな役割りを果たした。

この訪印観世流能楽公演は、インドでの「日本月間」、来年日本で行われる「インド月間」のイベントの皮切りとして外務省の要請で催されたもので、名誉団長・観世元正、団長・観世元昭はじめ野村四郎、藤波重満、観世芳伸、ワキ方福王茂十郎、囃子方・増田二大倉源次郎、亀井忠雄、三島元太郎氏ら総勢三十一人。

演能は「羽衣」「石橋」「清経」「井筒」「土蜘蛛」「猩々乱」狂言「巣山伏」「雷」「水掛聟」。

訃

佐野正治氏

宝生流シテ方・佐野正治氏は十一月八日、心不全のため金沢大付属病院で逝去された。六十五歳。葬儀は十一日金沢西別院で執り行われた。喪主は長男・由於氏。住所、金沢市泉野町四―一二―一四。日本能楽会会員、重要無形文化財総合指定。

塚本秀雄氏

観世流シテ方・塚本秀雄氏は、かねて入院療養中のところ十一月二十二日逝去された。八十一歳。葬儀は十一月二十四日執り行われた。喪主長男塚本康彦氏。住所、埼玉県和光市諏訪原団地一―七―二〇二。

鬼頭季信氏

藤田流笛方・鬼頭季信氏は十二月十一日午後八時二十五分、心不全のため津島市民病院で逝去された。八十二歳。

葬儀・告別式は十四日午後一時から愛知県中島郡平和町六輪須ケ脇七四九の恩行寺で執り行われた。喪主は長男雅信氏。自宅、中島郡平和町六輪須ケ脇五五〇。

故鬼頭季信氏は、今年五月逝去された観世流太鼓方・鬼頭八郎氏の実弟。

医療衛生用品総合商社
八神商事株式会社
取締役社長　八神幸一
本社　〒460 名古屋市中区丸の内三丁目11ノ4
電話〈052〉971―8671番（代表）
営業所　西・熱田・名東・関東・静岡
沼津・浜松・岡崎・岐阜・津

■生きた設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。
■ビス一本にも全神経を集中する日進堂
メガネ店の技術をささえるもの――それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。
■徹底した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。
定休日　毎週木曜日

正しいメガネで しあわせを……
NISSIN OPTICAL
メガネの日進堂
◉駐車場完備
名古屋市西区那古野2-20-23（円頓寺本町）
〒451　TEL（571）6181―3

御料理あつた
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686―8
神宮東門店　熱田区神宮一-一-一　電話（682）5598

◆雪見月の舞台から◆
「観世会」「宝生会」「名古屋和泉会別会」

竹尾邦太郎

「蟬丸」　己が運命を達観している冷静な蟬丸・邦久と、その身を案じるワキ清貫・隆之亮の対照が鮮やか。しかし物着で僧形となるといかにもはかなげで、〽捨てられて、に心細さ極まり、居たたまれず平伏するワキの胸中も思われ前場が盛り上った。アイ博雅三位・松次郎はすらすら出た。洞烏帽子・無地熨斗目・下袴・黒縫水衣で気取らない。何かと蟬丸の世話をやく暖か味は、別れ際の詞にも感情移入し、声涙下る趣で松次郎旨い。

後場、シテ逆髪・盛義。面十寸髪・唐織着流。〽手にも分けられず、と左の下ゲ髪狂おしく取って扇面を櫛に擬し、梳る態に常座からスミ近く出るところ、女心に羞恥を、また、〽水を鏡と夕波の、と波を避けるようにハッと抜キ足で廻る辺り、いつしか水鏡に夢中の女心のいとしさを垣間見せて哀れ深く、ふと琵琶の音を聞き咎めて小腰を屈める挙措には瑞々しい女性の色香をほの見せた。

弟宮との避逅の細やかな情緒を地（順之・徳三ら）が支えて二人の心象風景をしんみりと描き、別離の哀愁をシテとツレの掛合に具現して悲嘆だけに終らせず、趣深い一曲とした（1時間34分）

「入間川」　太刀・素袍裃まで下げ渡す物にこだわらない大名が入間様だけには執着する。その我儘ぶりをシテ又三郎は持前の小気味よい口舌でポンポン運び、アド所ノ者・礼之助の、茫洋とした中に強かさのある個性によく絡み面白い。就中、手打ちにせんと気負う又三郎が、入間様はその逆と高を括る礼之助に虚を衝かれる辺り佳。（25分）

「田栖・天地ノ声」　シテ鈴之丞。前は雄勁な鮎ノ段が素晴しい。〽岩切る水に放せば、と、さっと放ちざまツマミ扇は激しく振れて、さながら鮎が尾鰭ピンピン撥ね翻えす文字通り、〽早瀬の流絡に浅黄の指貫姿の法皇・泰二の瀟とした気品も好ましい。〽池水に水際の桜散り敷きて波の花こそ盛りなりけれ、の辺りしっとりと泰二好調。内侍・雅の細やかな心遣も的確だった。キリで法皇一行を見送るシテ十喜雄の哀感が恻々と迫る好舞台だった。地は孝・富四夫ら。（1時間40分）

「柏崎」　シテ花若ノ母・萌子の健気を思い、文は淡々と静か。しかし、地の、〽亡からん父が名残には子ほどの形見あるべきか、に至り俄然母を顧みない子の所行を恨む悲嘆のシオリが切ない。

後は、〽我が狂乱はさて措きぬと正先近く出て狂イ笹を置くところ、詞意に則り説明以上の含蓄があった。物着後、クセで、〽月の御影や明らけき、と正中で目付柱を、更に正先近く、〽生死の海深し、と下を見る風情の淡々とした滋味に萌実力を示した。蛇足ながら、頑是無い童が父の菩提を弔う出家遁世の殊勝はここでは舞台の辛抱。キリの招キ扇にも子方は余りにも素気無く、それが子方の貴でないだけにむなしい。（1時間25分・11月15日・宝生会）

「秀句傘」　巷に流行する秀句。知らぬは恥と宗匠を抱えるシテ大名・元秀の性急。これはまた大様に構えて知ったか振りもしたいの魂胆。この二律背友を元秀は豊かな表情で演じ切るが、割を食つた太郎冠者・正夫の周章は、傘屋・祐一との問答にも急かれ追い立てられているような科白運びが息苦しく、生硬。滑稽味を欠いた。（32分）

「水汲」　女流狂言。素人会では当り前でも些か戸惑う。ビナンヅルにしてからが男が女に扮する卓抜な便法。その様式美が因って来るところを思えば事の是非はともかく女に不利なことは否めない。その第一は声質と体型の相違であろうか。しかしシテ新発意・淳子仲々達者。声量もあり、これはと思わせる。アドの狂言舞「地主の桜」に興がり、こっそり忍ぶ態に橋懸で小さく抜き足に二度廻るところなど諧謔味も父譲り。いちや・祥子の初初しさと相俟ち微笑ましい小品とした。（18分）

◎「鬼丸」前稀曲・鈴鹿峠の祖父・松次郎に宿を借りた旅僧・友彦。暇乞も遠慮して早立つが山賊鬼丸・元秀に身ぐるみ剝がされる。因果は親即ち祖父にも及ぶと諭され、また親にも叱責されて悄然する鬼丸。観世音・友彦が彫向して法を説く。説教臭の強い因果を広報譚が嫌われたのか当地百年振りの上演とか。しかし三者の調和が良く、お伽噺の味わいが捨て難い。キリに彫向した観世音が橋懸で舞い、後ろ向きに幕に入るのも珍らしかった。

因に装束付は、鬼丸（燕尾頭布・大髭・着付小格子・括袴・段厚板童折・腰帯・長刀）、旅僧（角頭巾・無地熨斗目・黒長衣・笈・錫杖、なお下袴を着込む）、祖父（角頭巾・面具杓子・厚板小格子・腰帯・撞木杖）、観世音（天冠・黒垂・面乙・唐織童折・下袴）。（37分）

「薮屑」　ヒクズとは茶を箕でふるって残った屑。それを更に飲用に供そうとする吝嗇な主・弘之。ヒクズを挽きながら愚痴るシテ・太郎冠者・松次郎も石臼の単調なリズムについ睡魔に襲われ、戻った次郎冠者・礼之助の眠気覚しの「七ツ子」にも足拍子に一瞬我に返るだけ。遂には眠りこける太郎冠者の、勤労感謝どころか（偶々その日）仕事の明け暮れ。草臥れ果てた姿がいっそ憐れでペーソスが漂い松次郎出色。後は「抜殻」同様面を外すタイミングだけ。無難にまとめた。（31分）

「業平餅」　シテ業平・元弥。随身引き具しての玉津島詣が大勢物らしく華やか。一旦解散で独り残された業平は餅が食いたいが世俗に疎く銭の使用も不案内。餅屋・祐一に代金を求められ、一瞬キョトンとするところなど衒わぬ表情が素直。しかし娘・淳子に引き合わされて被衣を取るまでの、舌弛りせんばかりの好色をこなすには少年貴公子に荷が重いか。全体にさらっとしていた。なお傘を抱き、アイ座に安座の傘持・元秀の眠り込む前は何だか後見のような接配。つい眼がきつくなる。（38分・11月23日・名古屋和泉会別会）

四天王寺・住吉大社
江口の君堂など

能楽の友社主催

初の難波路
謡曲名所めぐり

能楽の友社では、恒例の謡曲名所めぐりバス旅行を晩秋の十一月二十九日、難波の名所、史蹟めぐりとして実施しました。当日は五十三名が参加。午前八時愛知文化講堂前を出発、名神高速道路を一路西へ。車中で、謡曲「難波」「弱法師」「高砂」を役々により謡いながら、養老、桜井SAに少憩、吹田ICから近畿自動車道を経て阪神高速道路で大阪市内に入り、大阪城、難波宮趾を望見しながら夕陽ケ丘ランプから松屋町筋「広田家」に到着。名代の豆御飯で昼食をとりました。

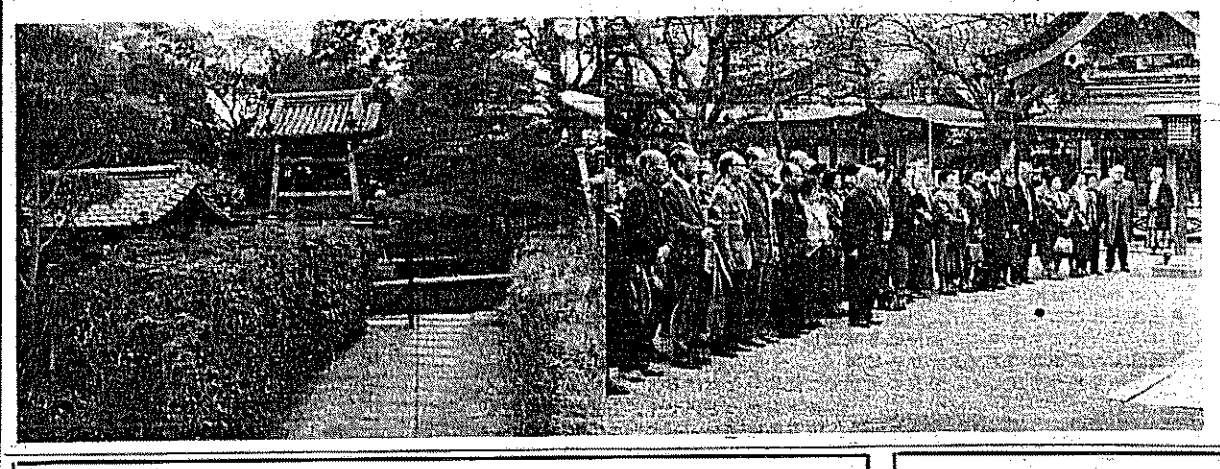
十二時二十分同所を出発。四天王寺の西門に集合、記念撮影ののち、金堂、宝物殿などを参観、〃仏法最初の天王寺〃のゆかりをしのびました。午後二時同所を出発さらに南に向かい、住吉大社に参拝、とくに同大社の厚意により夷野権宮司の丁重なあいさつと説明を拝聴、副野正祢宜らの案内で幽玄の神苑を巡観しました。

午後三時半再び車中の人となり阪神高速道を経て摂津北ICから東淀川区・宝林山普賢院寂光寺（江口の君堂）に到着、西行法師、江口の君の歌碑を拝し、本堂で妙（江口の君）の座像を拝観、山尾住職の丁重な説明を承り、秋の落陽せまるなか、掃き清められた境内で記念撮影など行い、午後四時半同寺を出発。

再び吹田ICから名神高速道路を経て車中で「江口」「富士太鼓」「声刈」などを同吟、午後八時名古屋に帰着しました。

今回は、昨年の北陸路につづく長距離コースでしたが、交通渋滞にもまきこまれず、予定どおり名所めぐりができました。これもご参加皆様のご協力のおかげでありまた訪問地にて温かい接待を賜りつつがなく実施できましたことを感謝します。

（加野記）



〔写真〕㊤四天王寺の西門・石の鳥居前にて記念撮影㊦㊨住吉大社参拝㊦㊧江口の君堂の境内

割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）
電話 241—0248

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画
名古屋営業所　名古屋市西区名駅2-20-3輪の内壮　小椋方　TEL（052）571—5816
岐阜市北野町20—2　TEL（0582）63—9869